

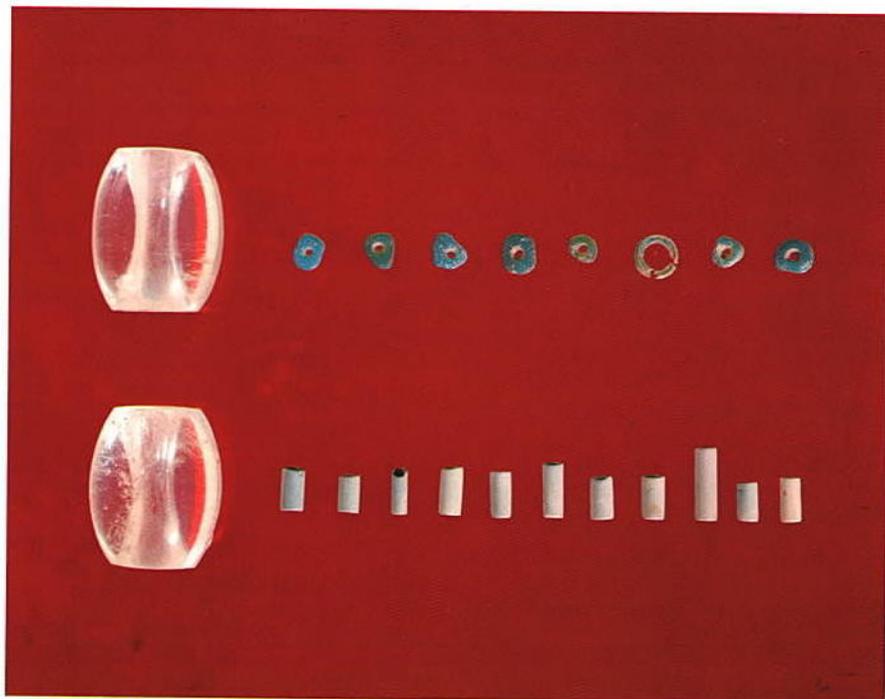
九州縦貫自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

— XIII —

福岡県鞍手郡鞍手町所在高木遺跡の調査

1 9 7 7

福岡県教育委員会



D-7号 土塚墓出土玉類 (1/2)

水晶玉の光反射のため
むらができている。

水晶玉	
	ガラス玉
1	1 2 3 4 5 6 7 8
	管玉
2	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11

九州縦貫自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

— XIII —

福岡県鞍手郡鞍手町所在高木遺跡の調査

1 9 7 7

福岡県教育委員会

九州縦貫自動車道XIII 正誤表

頁	行	誤	正
挿図目次			
8	7	Fig. 38	Fig. 39
8	10	石田茂氏	石田武氏
8	15	川辺公紀	川述公紀
11	23	3400遺構が	遺構が
22	23		棺の型については3つに分類できる。 A型は、□平面形がを呈し、棺内法巾が 等しい場合 B型は、平面形が0を呈し、棺内法巾が 相違する場合 C型はA・B型の範疇にはいらぬもの。
27	1	胸部のに	胸部に
31		D-7号土坟墓 (Fig. 27)	D-7号土坟墓 (Fig. 28)
35	表4 D-7	9-両	9-片
"	"	10-両	10-片
42		Fig. 40、D-17号	Fig. 40、D-19号
43		D-17号土坟墓 (Fig. 42)	D-19号土坟墓 (Fig. 40)
77		Fig. 81 A群地形測量図	割愛
81	12	尾根寄を	尾根寄りを
120	4	中尾遺跡	中田遺跡
	17	中尾遺跡	中田遺跡

序

九州縦貫自動車道の建設に伴う埋蔵文化財の調査は、昭和44年度に始まり、昭和51年度で、ほぼ大牟田市から鞍手郡鞍手町までの埋蔵文化財関係の発掘調査を終了しました。

本報告書は、鞍手郡鞍手町所在の遺跡群のうち、昭和50年度から翌年の51年度にかけて実施しました調査のうちの一部であります。

鞍手郡内は若宮町・宮田町・鞍手町の三町にかけて、弥生時代から歴史時代にいたる各時代の重要な遺跡が、縦貫道建設にともなって消滅しています。

鞍手町だけでも路線内に13箇所遺跡があがり、その内の6箇所が長家、高木丘陵上に存在していました。今回この6箇所を高木遺跡として報告することといたします。

しかしながら、調査の期間が十分でなく、その成果は意を尽しえておりませんが、この状況を御理解のうえ、本書を御活用いただければ幸甚に存じます。

昭和52年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 森 田 實

例 言

1. この報告書は九州縦貫高速自動車道建設によって破壊される予定の遺跡について行なった事前調査のうち、昭和50年度から昭和51年度にかけて発掘した鞍手郡鞍手町所在遺跡群のうち、高木遺跡（弥生時代墓地と古墳群）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、日本道路公団の委託事業として、福岡県教育委員会が実施したものである。
3. 本書の執筆はつぎのとおり。

I	副島 邦弘
II	副島 邦弘
III	石山 勲・副島 邦弘・佐土原逸男 平ノ内幸治・日高 正幸
IV	江本 義理・石山 勲・副島 邦弘
付	石山 勲・児玉 真一・宇野 慎敏
4. 昭和50年度、昭和51年度に行なった九州縦貫道関係の調査は、主として、山本文和主事と、栗原和彦技術主査・石山 勲・酒井仁夫・副島邦弘・上野精志・児玉真一・中間研志・池辺元明の各技師があたった。
5. 遺物写真について、石丸洋氏（九州歴史資料館）の援助を受けた。遺構写真については副島邦弘・佐土原逸男が主にあたった。また遺物整理については、岩瀬正信・中島倫子・二神和子・富永直樹諸君等の協力を得た。
6. 玉類の分析について東京国立文化財研究所江本義理氏に分析をお願いした。
7. 本書の編集は、副島邦弘が担当した。
8. 付録として八尋旭古墳群を掲載した。

本文目次

	頁
I はじめに	1
II 鞍手町所在遺跡群とその位置	4
(1) 鞍手町所在遺跡とその位置	4
(2) 調査の経過と調査地区	8
III 遺構と遺物	14
(1) 概 要	14
(2) 弥生時代の生活遺構と墓地	15
a) 生活遺構（住居跡）	15
b) 墓 地（土塚墓と石棺墓・甕棺墓）	22
(3) 古墳時代の生活遺構と古墳群	66
a) 生活遺構（住居跡とその他遺構）	66
b) 古墳群	76
A-1号墳	76
A-2号墳	81
B-1号墳	84
B-2号墳	91
(4) その他の遺構と遺物	98
IV 考 察	102
(1) 弥生時代墓地の方向性と地形との関係	102
(2) 弥生時代の穿孔技術について	113
(3) 副葬品について	117
(4) 土塚墓出土のガラス玉の材質について	124
(5) 高木古墳群の石室について	125
(6) 発掘調査の結果	126
付 周辺の遺跡 八尋旭古墳群	127

図 版 目 次

		本文对照頁
P L. 1	高木遺跡 全景 航空写真……………	8
P L. 2	高木遺跡 全景 航空写真……………	8
P L. 3	高木遺跡 周辺遠景 航空写真……………	8
P L. 4	高木遺跡 遠景 航空写真……………	8
P L. 5	高木遺跡 全区 航空写真……………	8
P L. 6	高木遺跡 A区 全景 航空写真……………	9
	高木遺跡 B・C区 全景 航空写真……………	9
P L. 7	高木遺跡 D区 全景 航空写真……………	9
P L. 8	高木遺跡 C区 全景 航空写真……………	9
P L. 9	高木遺跡 C区 全景……………	10
	高木遺跡 Y-1号住居跡 全景……………	15
P L. 10	Y-1号住居跡遺物出土状態……………	15
	Y-1号住居跡遺物出土状態……………	15
P L. 11	高木遺跡 D区 全景……………	17
	高木遺跡 Y-2号住居跡……………	17
P L. 12	高木遺跡 B-II区 出土弥生時代墓地全景……………	22
P L. 13	D-1・D-2号土塚墓出土状態……………	26
P L. 14	D-1号土塚墓……………	26
	D-1号土塚墓(発掘後)……………	26
P L. 15	D-2号土塚墓……………	26
P L. 16	D-2号土塚墓……………	27
	D-2号土塚墓遺物出土状態……………	27
P L. 17	D-3号土塚墓……………	30
	D-4号土塚墓……………	30
P L. 18	D-5号土塚墓……………	30
	D-6号土塚墓……………	31
P L. 19	D-7号土塚墓……………	31
	D-7号土塚墓(玉類出土状態)……………	32
P L. 20	D-8号土塚墓……………	35
	D-9号土塚墓……………	35
P L. 21	D-10号土塚墓……………	36
	D-11号土塚墓……………	36

P L. 22	D—12号土塚墓	36
	D—13号土塚墓	38
P L. 23	D—14号土塚墓	38
	人骨出土状態	38
P L. 24	D—14・D—15・D—16号土塚墓遺物出土状態（東から）	39
P L. 25	D—15号土塚墓（南から）	39
	石剣出土状態（北から）	39
P L. 26	D—16号土塚墓（北から）	41
	磨製石鏃出土状態（北から）	42
P L. 27	D—17号土塚墓（西から）	43
	D—18号土塚墓（東から）	43
P L. 28	D—19号土塚墓	44
	D—20号土塚墓	46
P L. 29	D—21号土塚墓	47
	D—22号土塚墓	47
P L. 30	D—23号土塚墓	47
	D—23号土塚墓断面	47
P L. 31	D—24号土塚墓	47
	D—22・D—24号土塚墓関係	47
P L. 32	D—25号土塚墓	50
	D—26号土塚墓	51
P L. 33	D—24号土塚墓主体部検出状態	47
	D—27号土塚墓主体部検出状態	51
P L. 34	D—27号土塚墓	51
	小口部分の状態	52
P L. 35	D—28号土塚墓	53
	D—28号土塚墓 1段掘り	54
P L. 36	D—29・D—30・D—31号土塚墓関係	54
	D—29号土塚墓	54
P L. 37	D—30号土塚墓	55
	D—31号土塚墓	55
P L. 38	D—32号土塚墓	55
	D—32号土塚墓 断面	55
P L. 39	D—33号土塚墓	57
	玉類出土状態	57
P L. 40	K—1号甕棺墓	59
	K—1号甕棺墓 差し合わせ状態	59
P L. 41	K—1号甕棺	59

P L. 42	K-2号甕棺墓 差し合わせ状態……………60
	K-2号甕棺墓 掘り方の状態……………61
P L. 43	2号石棺墓 (蓋石被覆状態)……………65
	2号石棺墓 (蓋石除去状態)……………65
P L. 44	2号石棺墓 (人骨出土状態)……………65
P L. 45	高木遺跡B-Ⅱ区 (発掘後)……………65
P L. 46	出土遺物石製品……………66
P L. 47	副葬品玉類 (D-7号土坑墓)……………34
	副葬品玉類 (D-31号・D-33号土坑墓)……………55
P L. 48	副葬品 (石器)……………30
P L. 49	古墳時代1号住居跡 C・D区全景……………66
	古墳時代1号住居跡近景 (東から)……………66
P L. 50	古墳時代2号住居跡 D区全景……………68
	古墳時代2号住居跡近景……………68
P L. 51	1号住居跡遺物出土状態……………68
	2号住居跡遺物出土状態……………68
P L. 52	C区出土土坑状態……………70
	C区遺物出土状態……………71
P L. 53	A-1号墳全景……………76
P L. 54	A-1号墳 裏込め状態……………77
	A-1号墳 石室正面……………77
P L. 55	A-1号墳 石室全景……………77
	A-1号墳 腰石全景……………77
P L. 56	A-2号墳 墳丘全景……………81
	A-2号墳 石室全景……………81
P L. 57	A-2号墳 石室全景……………81
	A-2号墳 腰石全景……………81
P L. 58	掘り方の工具痕跡……………81
P L. 59	A-2号墳 周溝横土器溜 (上部)……………83
	A-2号墳 周溝横土器溜 (下部)……………83
P L. 60	高木遺跡 B群遠景……………84
	高木遺跡 B-1号墳全景……………84
P L. 61	B-1号墳 石室全景……………84
P L. 62	B-1号墳 閉塞状態 (正面から)……………87
	B-1号墳 閉塞状態 (石室内から)……………87
P L. 63	B-1号墳 石室 (正面から)……………88
	B-1号墳 奥壁……………88
P L. 64	B-1号墳 石室側面 (北から)……………88

	B-1号墳 石室側面(南から)	88
P L. 65	B-1号墳遺物出土状態	89
P L. 66	B群1・2号墳 全景	91
	B-2号墳 全景	91
P L. 67	B群1・2号墳 航空写真	91
	B-2号墳 航空写真	91
P L. 68	B-2号墳 石室全景	92
P L. 69	B-2号墳 石室(正面から)	92
	B-2号墳 石室(後部裏込め)	92
P L. 70	B-2号墳 石室北壁	92
	B-2号墳 石室から羨道部	92
P L. 71	B-2号墳 天井石の状態	92
	B-2号墳 奥壁	92
P L. 72	B-2号墳 石室南壁	92
	直刀出土状態	92
P L. 73	玉類出土状態	95
	鉄斧・鉄鏃出土状態	95
P L. 74	B-2号墳 墳丘出土遺物	97
	B-2号墳 発掘後現状復旧	97
P L. 75	C区出土遺物	99
P L. 76	D区土器溜出土遺物	99
P L. 77	A-2号墳 周溝横出土遺物	99
P L. 78	B-1号墳 出土遺物	92
P L. 79	出土遺物(玉類・鉄鏃)	96
P L. 80	B-2号墳 出土遺物(鉄製品)	96
P L. 81	B-2号墳 出土遺物(鉄製品)	96
P L. 82	炉跡出土状態	99
	炉跡付近出土遺物	100
P L. 83	その他遺物(手捏土器)	101
P L. 84	旭古墳群発掘後状況	102
P L. 85	旭1号・2号墳 遠景	129
	旭1号墳 全景	129
P L. 86	旭1号墳 遠景	129
	旭2号墳 全景	129
P L. 87	旭1号墳 石室入口	131
	旭1号墳 石室(東から)	131
P L. 88	旭1号墳 後室	131

PL. 89	旭1号墳	遺物出土状況	133
	旭1号墳	遺物出土状況	133
PL. 90	旭2号墳	前室入口(後室から)	140
	旭2号墳	石室入口	140
PL. 91	旭2号墳	奥壁	140
	旭2号墳	後室入口	140
PL. 92	旭1号墳	出土鉄器	138
PL. 93	旭2号墳	出土鉄器	143
	旭2号墳	出土鉄器・装身具	143
PL. 94	旭1号墳	出土装身具	138
	旭1号墳	出土鉄器	138
PL. 95	旭1・2号墳	出土須恵器	144
巻頭写真	D-7号土塚墓	出土遺物	

挿 図 目 次

		頁
Fig. 1	昭和50～51年度調査遺跡分布図(縮尺 1/650,000) (平ノ内幸治作成) ……………	3
Fig. 2	遺跡群の位置 (縮尺 1/50,000) (平ノ内作成) ……………	折り込み
Fig. 3	鞍手町内主要古墳石室実測図 (原図鞍手町誌) ……………	7
Fig. 4	高木遺跡地形図 (縮尺 1/1,000原図道路公団作製) (二神和子製図) ……………	折り込み
Fig. 5	発掘風景 (副島邦弘撮影) ……………	9
Fig. 6	発掘風景 (") ……………	10
Fig. 7	1号石棺墓 (") ……………	11
Fig. 8	発掘風景 (") ……………	12
Fig. 9	高木遺跡発掘地区 (縮尺 1/1,000) (中島倫子製図) ……………	13
Fig. 10	高木遺跡航空写真……………	13
Fig. 11	高木遺跡遺構配置図 (縮尺 1/1,000) (中島製図) ……………	14
Fig. 12	弥生時代遺構配置図 (縮尺 1/1,500) (中島製図) ……………	15
Fig. 13	Y-1号住居跡 (C区) (縮尺 1/40) (副島実測, 中島製図) ……………	16
Fig. 14	Y-2号住居跡 (D区) (縮尺 1/40) (副島実測, 平ノ内製図) ……………	18
Fig. 15	出土遺物実測図 (土器) (縮尺 1/3) (副島実測, 製図) ……………	19
Fig. 16	出土遺物実測図 (石器) (縮尺 1/1) (平ノ内実測, 平ノ内製図) ……………	20
Fig. 17	B-II区地形図 (縮尺 1/200) (日高正幸実測, 製図) ……………	21
Fig. 18	B-II区発掘後地形図 (縮尺 1/200) (平ノ内・副島・日高実測, 日高製図) ……	24
Fig. 19	弥生時代墓地群配置図 (縮尺 1/200) (日高実測, 製図) ……………	25
Fig. 20	B-II区土層図 (縮尺 1/60) (平ノ内実測, 製図) ……………	26
Fig. 21	D-1号土壇墓 (縮尺 1/30) (平ノ内・川述公紀実測, 中島製図) ……	27
Fig. 22	D-2号土壇墓 (") (副島実測, 製図) ……………	折り込み
Fig. 23	副葬石器実測図 (縮尺 1/1) (平ノ内実測, 製図) ……………	28
Fig. 24	D-3号土壇墓 (縮尺 1/30) (佐藤秀利実測, 日高製図) ……………	29
Fig. 25	D-4号土壇墓 (") (栗原和彦実測, 中島製図) ……………	折り込み
Fig. 26	D-5号土壇墓 (") (佐土原逸男実測, 平ノ内製図) ……………	31
Fig. 27	D-6号土壇墓 (") (佐藤実測, 中島製図) ……………	32
Fig. 28	D-7号土壇墓 (") (副島実測, 中島製図) ……………	33
Fig. 29	玉類出土状態 (副島実測, 平ノ内製図) ……………	34
Fig. 30	玉類実測図 (縮尺 1/1) (副島・平ノ内実測, 中島製図) ……	折り込み
Fig. 31	D-8号土壇墓 (縮尺 1/20) (佐土原実測, 中島製図) ……………	折り込み
Fig. 32	D-9号土壇墓 (縮尺 1/30) (栗原実測, 中島製図) ……………	折り込み

Fig. 33	D—10号土坟墓 (縮尺 1/30)	(副島実測, 中島製図) ……………	36
Fig. 34	D—11号土坟墓 (")	(副島実測, 中島製図) ……………	37
Fig. 35	D—12号土坟墓 (")	(副島実測, 中島製図) ……………	37
Fig. 36	D—13号土坟墓 (")	(佐土原実測, 中島製図) ……………	38
Fig. 37	D—14号土坟墓 (")	(副島実測, 中島製図) ……………	39
Fig. 38	D—15号土坟墓 (")	(佐土原実測, 中島製図) ……………	40
Fig. 38	D—16号土坟墓 (")	(佐土原実測, 中島製図) ……………	41
Fig. 40	D—17号土坟墓 (")	(栗原実測, 平ノ内製図) ……………	42
Fig. 41	D—18号土坟墓 (")	(佐藤実測, 平ノ内製図) ……………	43
Fig. 42	D—19号土坟墓 (")	(栗原実測, 中島製図) ……………	44
Fig. 43	D—20号土坟墓 (")	(栗原実測, 中島製図) ……………	45
Fig. 44	D—21号土坟墓 (")	(副島実測, 中島製図) ……………	46
Fig. 45	D—22号土坟墓 (")	(栗原実測, 日高製図) ……………	折り込み
Fig. 46	D—23号土坟墓土層実測図 (縮尺 1/30)	(日高実測, 平ノ内製図) ……………	47
Fig. 47	D—23号土坟墓 (縮尺 1/30)	(日高実測, 製図) ……………	48
Fig. 48	D—24号土坟墓 (")	(佐藤実測, 中島製図) ……………	49
Fig. 49	D—25号土坟墓 (")	(栗原実測, 中島製図) ……………	50
Fig. 50	D—26号土坟墓土層実測図 (縮尺 1/30)	(日高実測, 平ノ内製図) ……………	50
Fig. 51	土坟墓出土遺物 (縮尺 1/3)	(副島実測, 平ノ内製図) ……………	51
Fig. 52	D—26号土坟墓 (縮尺 1/30)	(栗原実測, 平ノ内製図) ……………	52
Fig. 53	D—28号土坟墓土層実測図 (縮尺 1/30)	(日高・佐藤実測, 平ノ内製図) ……………	52
Fig. 54	D—27号土坟墓 (縮尺 1/30)	(佐土原・日高実測, 平ノ内製図) 折り込み	
Fig. 55	D—28号土坟墓 (")	(佐藤・栗原実測, 平ノ内製図) ……………	53
Fig. 56	D—29号土坟墓 (")	(日高実測, 中島製図) ……………	54
Fig. 57	D—30号土坟墓 (")	(佐土原実測, 中島製図) ……………	折り込み
Fig. 58	D—31号土坟墓 (")	(栗原実測, 平ノ内製図) ……………	56
Fig. 59	D—32号土坟墓 (")	(平ノ内実測, 製図) ……………	折り込み
Fig. 60	D—32号土坟墓土層実測図 (縮尺 1/30)	(平ノ内実測, 製図) ……………	57
Fig. 61	D—32号出土遺物 (石器) (縮尺 2/3)	(平ノ内実測, 製図) ……………	57
Fig. 62	D—33号土坟墓土層実測図 (縮尺 1/30)	(平ノ内実測, 製図) ……………	58
Fig. 63	D—33号土坟墓 (縮尺 1/30)	(日高・平ノ内実測, 中島製図) ……………	折り込み
Fig. 64	K—1号甕棺墓 (縮尺 1/20)	(平ノ内実測, 製図) ……………	60
Fig. 65	1号甕棺実測図 (縮尺 1/3)	(平ノ内実測, 製図) ……………	61
Fig. 66	K—2号甕棺墓 (縮尺 1/20)	(佐土原実測, 平ノ内製図) ……………	62
Fig. 67	2号甕棺実測図 (縮尺 1/3)	(平ノ内実測, 製図) ……………	63

Fig. 68	1号石棺墓(縮尺 1/30)	(平ノ内実測, 製図) ……………	64
Fig. 69	2号石棺墓(“)	(平ノ内実測, 製図) ……………	折り込み
Fig. 70	古墳時代遺構配置図(縮尺 1/1500)	(中島製図) ……………	66
Fig. 71	1号住居跡(C区)(縮尺 1/40)	(副島実測, 中島製図) ……………	67
Fig. 72	出土遺物実測図(縮尺 1/2)	(副島実測, 中島製図) ……………	68
Fig. 73	2号住居跡(D区)(縮尺 1/40)	(平ノ内実測, 製図) ……………	69
Fig. 74	C区竪穴土坑遺構(縮尺 1/20)	(副島実測, 中島製図) ……………	70
Fig. 75	出土遺物実測図(縮尺 1/3)	(平ノ内実測, 製図) ……………	71
Fig. 76	土坑周辺出土遺物実測図(“)	(副島実測, 中島製図) ……………	72
Fig. 77	土器溜実測図(縮尺 1/20)	(平ノ内実測, 製図) ……………	73
Fig. 78	出土遺物実測図(土器)(縮尺 1/3)	(平ノ内実測, 製図) ……………	74
Fig. 79	出土遺物実測図(鉄器)(“)	(平ノ内実測, 製図) ……………	74
Fig. 80	出土遺物実測図(“)	(平ノ内実測, 製図) ……………	75
Fig. 81	A群地形測量図(縮尺 1/300)	(石山勲製図) ……………	77
Fig. 82	A群地形測量図(発掘前)(縮尺 1/600)	(石山製図) ……………	78
Fig. 83	A群地形測量図(発掘後)(“)	(石山製図) ……………	78
Fig. 84	A-1号墳丘土層図(縮尺 1/60)	(平ノ内実測製図) ……………	79
Fig. 85	A-1号石室実測図(“)	(平ノ内実測, 製図) ……………	80
Fig. 86	A-2号墳丘土層図(縮尺 1/100)	(平ノ内実測, 石山製図) ……………	82
Fig. 87	A-2号石室実測図(“)	(川述・平ノ内実測, 石山製図) …	折り込み
Fig. 88	周溝土器溜遺構実測図(縮尺 1/20)	(平ノ内実測, 製図) ……………	83
Fig. 89	出土遺物実測図(縮尺 1/3)	(平ノ内実測, 製図) ……………	折り込み
Fig. 90	B群地形測量図(縮尺 1/300)	(副島・平ノ内実測, 日高製図) …	85
Fig. 91	B群地形測量図(“)	(副島・平ノ内実測, 石山製図) …	86
Fig. 92	B-1号墳丘土層図(縮尺 1/60)	(平ノ内・石山実測, 石山製図) …	87
Fig. 93	B-1号墳丘土層図(“)	(石山実測, 製図) ……………	87
Fig. 94	B-1号石室実測図(“)	(石山実測, 製図) ……………	折り込み
Fig. 95	B-1号墳丘遺物出土状態(縮尺 1/15)	(石山実測, 製図) ……………	88
Fig. 96	出土遺物実測図(縮尺 1/3)	(石山実測, 製図) ……………	89
Fig. 97	装飾具実測図(耳環)(縮尺 2/3)	(石山実測, 平ノ内製図) ……………	89
Fig. 98	鉄製品実測図(縮尺 1/2)	(石山実測, 製図) ……………	90
Fig. 99	B-2号墳丘土層図(縮尺 1/60)	(平ノ内実測, 製図) ……………	折り込み
Fig. 100	B-2号石室実測図(“)	(副島・平ノ内実測, 平ノ内製図) …	折り込み
Fig. 101	出土遺物実測図(鉄鏃)(縮尺 1/2)	(平ノ内実測, 製図) ……………	93
Fig. 102	耳環実測図(縮尺 2/3)	(平ノ内実測, 製図) ……………	94

Fig. 103	出土遺物実測図(直刀) (縮尺 1/8)	(宇野慎敏実測, 中島製図) ……………	95
Fig. 104	出土遺物実測図(刀子・鉄斧) (縮尺 1/2)	(平ノ内実測, 製図) ……………	96
Fig. 105	出土玉類実測図 (縮尺 2/3)	(副島実測, 中島製図) ……………	96
Fig. 106	墳丘出土土器実測図 (縮尺 1/3)	(副島実測, 中島製図) ……………	97
Fig. 107	Pit-1 (縮尺 1/30)	(日高実測, 製図) ……………	98
Fig. 108	Pit-2 (“)	(日高実測, 製図) ……………	99
Fig. 109	Pit-3 (“)	(日高実測, 製図) ……………	99
Fig. 110	炉跡実測図 (縮尺 1/20)	(副島実測, 中島製図) ……………	99
Fig. 111	出土遺物実測図 (縮尺 1/2)	(副島実測図, 中島製図) ……………	100
Fig. 112	C・D区出土遺物実測図(手づくね)	(副島・平ノ内実測, 中島製図) ……………	101
Fig. 113	弥生時代遺構配置図 (Fig. 12と同じ)	(中島製図) ……………	102
Fig. 114	古墳時代遺構配置図 (Fig. 70と同じ)	(中島製図) ……………	102
Fig. 115	高木遺跡土塚墓主軸方向一覧表	(日高作成) ……………	103
Fig. 116	弥生時代墓地主軸方向一覧表 その1	(“) ……………	105
Fig. 117	“ その2	(“) ……………	106
Fig. 118	“ その3	(“) ……………	108
Fig. 119	“ その4	(“) ……………	109
Fig. 120	“ その5	(“) ……………	110
Fig. 121	真福寺貝塚出土の勾玉 (縮尺 1/1)	(富永直樹製図) ……………	114
Fig. 122	山鹿貝塚出土の大珠 (縮尺 1/2)	(富永製図) ……………	114
Fig. 123	玉類穿孔部断面図	(富永製図) ……………	115
Fig. 124	高木遺跡弥生時代墓地群配置図 (副葬品) 配置図	(日高作成) ……………	118
Fig. 125	水晶製玉集成 (縮尺 1/2)	(副島作成) ……………	120
Fig. 126	旭1・2号墳地形測量図 (縮尺 1/200)	(石山・宇野実測, 宇野製図) ……………	132
Fig. 127	旭1号墳石室実測図 (縮尺 1/40)	(平ノ内・宇野実測, 二神製図) …折り込み	
Fig. 128	1号墳遺物出土状態 (縮尺 1/20)	(平ノ内・宇野実測, 宇野製図) ……………	133
Fig. 129	出土遺物実測図(装身具) (縮尺 1/1)	(宇野実測, 製図) ……………	135
Fig. 130	出土遺物実測図(鉄製品) (縮尺 1/2)	(宇野実測, 製図) ……………	136
Fig. 131	出土遺物実測図(鉄製品) (“)	(宇野実測, 製図) ……………	137
Fig. 132	出土遺物実測図(須恵器) (縮尺 1/3)	(宇野実測, 製図) ……………	139
Fig. 133	旭2号墳石室実測図 (縮尺 1/40)	(児玉真一・宇野実測, 二神製図) …折り込み	
Fig. 134	出土遺物実測図(装身具) (縮尺 1/1)	(宇野実測, 製図) ……………	142
Fig. 135	出土遺物実測図(鉄器) (縮尺 1/2)	(宇野実測, 製図) ……………	143
Fig. 136	出土遺物実測図(須恵器) (縮尺 1/3)	(児玉実測, 製図) ……………	144

表 目 次

	頁
表1. 昭和50・51年度発掘調査及び期間一覧表	2
表2. 高木遺跡発掘調査行程表	12
表3. 弥生時代土塚墓一覧表	23
表4. 玉類計測表	35
表5. 弥生時代甕棺墓一覧表	59
表6. 弥生時代石棺墓一覧表	64
表7. 古墳石室内計測値一覧表	76
表8. 土玉・ガラス玉類計測表	95
表9. 弥生時代墓地遺跡の方向性比較表	111
表10. 管玉比較表（巾径と孔径との関係）	122
表11. 旭1号墳出土装身具計測表	134
表12. 旭2号墳出土装身具計測表	142

I はじめに

九州縦貫自動車道建設に伴う発掘調査は、すでに8年を経過し、南は大牟田市年の神遺跡から北は鞍手郡鞍手町後牟田遺跡までの196ヶ所遺跡が発掘調査地と上げられ、160ヶ所の遺跡が発掘調査されました。

昭和50年度については、粕屋郡古賀町の残り部分と、鞍手郡若宮町宮田町を中心に、夏から新しく鞍手郡鞍手町が調査にはいりました。

昭和51年度は発掘調査の最終年度として、若宮町残り部分と鞍手町が中心に調査がおこなわれました。

本報告書は鞍手町関係遺跡の発掘調査について詳細に述べてみましょう。

鞍手町関係の発掘調査に先だって、予備調査が昭和49年度に行なわれ、13ヶ所がその調査地点に上げられました。昭和50年7月1日から11月末日まで、本格的な発掘調査が2班編成で、行なわれました。

そして昭和51年3月1日から3月31日までの6ヶ月間と年度があらたまり4月1日から9月15日までの約6ヶ月間の計12ヶ月の調査期間をあてられた。無事発掘調査をできたことは、鞍手町・鞍手町教育委員会当局の協力と発掘作業員として参加されました鞍手町民各位の絶大なる協力があつたことにより鞍手町関係の遺跡は昭和50年と昭和51年度で13ヶ所をすべて調査することができた。

調査主体は福岡県教育委員会として、同文化課技師が携わることとなった。

鞍手町関係の発掘調査関係者はつぎのとおりである。

総 括

教 育 長	森 田 實	管 理 部 長	西 村 太 郎
文 化 課 長	藤 井 功	文 化 課 長 補 佐 (前任)	野 上 保
文 化 課 長 補 佐	武 久 耕 作	文 化 課 調 査 係 長 兼 参 事 補 佐	松 岡 史
文 化 課 技 術 主 査	栗 原 和 彦	文 化 課 技 術 主 査	宮 小 路 賀 宏

庶 務 会 計

文 化 課 課 長 補 佐 兼 庶 務 係 長 (前任)	野 上 保	文 化 課 庶 務 係 長	大 淵 幸 夫
文 化 課 庶 務 主 事	山 本 文 和	文 化 課 嘱 託	因 将 太

発掘調査員

九州歴史資料館	倉住靖彦	文化課技術主査	栗原和彦
文化課技師	石山勲	文化課技師	副島邦弘
文化課技師	上野精志	文化課技師	中間研志

発掘調査補助員

佐土原逸男	平ノ内幸治	日高正幸(測量士)	川述公紀
宇野慎敏	稲富裕和	別府大学学生	山口大学学生
早稲田大学学生		鹿児島大学学生	大正大学学生

遺物整理(総括)

文化課嘱託 岩瀬正信

日本道路公団福岡建設局

局 長 早生隆彦 次 長 長谷川康敏

日本道路公団直方工事事務所

所 長	稲垣勇	工事長(前任)	星達雄
工事長	成島秀郎	庶務課長	石橋喜衛門
所 員	田中晃剛	所 員	黒田勝良

鞍手町教育委員会

教育長	安増忠明	社会教育課長(前任)	香月次郎
社会教育課長	遠藤茂雄		

本報告書は鞍手町関係発掘調査報告書の第2冊目である。(副島)

表1 昭和50年度・昭和51年度調査一覧表

昭和50年度

番号	地点	遺跡名	発掘期間	備考	
1	古賀第17地点	古野古墳群	柏屋郡古賀町延内字古賀	自昭和50年4月2日 至昭和50年6月30日	備 考
2	直方第3地点	小原遺跡	鞍手郡若宮町大字山口字小原	自昭和50年9月1日 至昭和50年12月26日	
3	直方第7地点	咲花遺跡	鞍手郡若宮町大字沼口字咲花	自昭和50年7月28日 至昭和50年8月1日	
4	直方第8地点	都地遺跡	鞍手郡若宮町大字沼口字都地原	自昭和50年11月22日 至昭和51年1月15日	
5	直方第13地点	段ノ上遺跡	鞍手郡鞍手町大字室木字段ノ上	自昭和50年11月4日 至昭和50年11月15日	
6	直方第15地点	高木A-1号墳	鞍手郡鞍手町大字新北字高木858	自昭和50年7月1日 至昭和50年8月31日	
7	直方第16地点	高木A-2号墳	鞍手郡鞍手町大字新北字高木858	自昭和50年7月1日 至昭和50年8月31日	
8	直方第17地点	高木遺跡	鞍手郡鞍手町大字新北字高木	自昭和50年8月20日 至昭和50年9月10日	
9	直方第18地点	高木遺跡	鞍手郡鞍手町大字新北字長家	自昭和50年9月25日 至昭和50年11月10日	
10	直方第19地点	高木B-1号墳	鞍手郡鞍手町大字新北字長家	自昭和50年9月1日 至昭和50年9月25日	
11	直方第20地点	高木B-2号墳	鞍手郡鞍手町大字新北字長家	自昭和50年9月1日 至昭和50年10月20日	
12	直方第21地点	向山遺跡	鞍手郡鞍手町大字新北字向山	自昭和50年10月1日 至昭和50年11月26日	
13	直方第22地点	中屋敷遺跡	鞍手郡鞍手町大字中山字中屋敷	自昭和50年7月1日 至昭和50年10月30日	
14	直方第1都地原	第3地点	鞍手郡若宮町大字水原	自昭和50年11月4日 至昭和50年11月20日	
15	直方第3地点	沙井掛遺跡	鞍手郡若宮町大字沼口字沙井掛	自昭和50年4月7日 至昭和51年3月31日	
16	直方第4地点	小原古墳群	鞍手郡若宮町大字山口字小原	自昭和50年7月14日 至昭和50年9月5日	
17	直方第5地点	茶臼山城跡	鞍手郡若宮町大字山口	自昭和50年8月29日 至昭和50年8月30日	
18	直方第6地点	末森遺跡	鞍手郡鞍手町大字八尋字末森	自昭和50年10月3日 至昭和50年10月3日	
19	直方第7地点	音丸城遺跡	鞍手郡鞍手町大字新北字音丸	自昭和50年8月25日 至昭和50年9月5日 自昭和51年3月1日 至昭和51年3月31日	
20	直方第8地点	力石遺跡	鞍手郡鞍手町大字新北字力石	自昭和50年10月1日 至昭和50年10月2日	
21	直方第9地点	後牟田遺跡	鞍手郡鞍手町大字中山字後牟田948	自昭和50年10月20日 至昭和50年10月27日	

昭和51年度

1	直方追加第3地点	汐井掛遺跡	鞍手郡若宮町大字沼口字汐井掛	自昭和51年4月7日	至昭和51年5月6日	備 考
2	直方追加第7地点	音丸城遺跡	鞍手郡鞍手町大字新北字音丸	自昭和51年4月5日	至昭和51年5月31日	
3	直方第22地点	中屋敷遺跡	鞍手郡鞍手町大字中山字中屋敷	自昭和51年4月5日	至昭和51年6月14日	
4	直方第13地点	段ノ上遺跡	鞍手郡鞍手町大字室木字段ノ上	自昭和51年6月1日	至昭和51年6月29日	
5	直方第21地点	向山遺跡	鞍手郡鞍手町大字室木字向山	自昭和51年6月15日	至昭和51年8月28日	
6	直方第18地点	高木遺跡	鞍手郡鞍手町大字新北字長家	自昭和51年6月30日	至昭和51年9月8日	
7	直方追加第9地点	後牟田遺跡	鞍手郡鞍手町大字中山字後牟田	自昭和51年7月5日	至昭和51年7月15日	

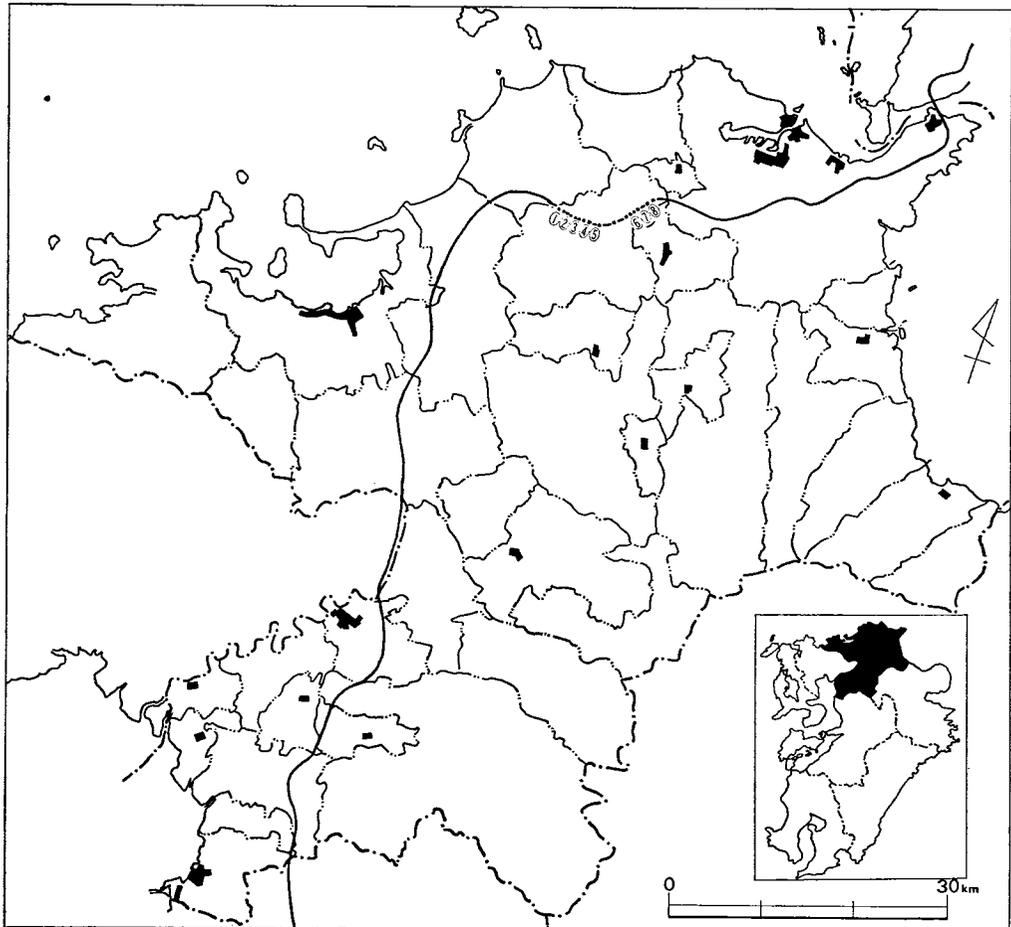


Fig. 1 昭和50～51年度調査遺跡分布図（縮尺 約1/650,000）

- | | |
|----------------|--------------|
| ① 茶臼城遺跡 | ⑤ 都地原遺跡 |
| ② 小原古墳群・小原遺跡 | ⑥ 高木古墳群・高木遺跡 |
| ③ 汐井掛古墳群・汐井掛遺跡 | ⑦ 向山古墳群・向山遺跡 |
| ④ 都地遺跡 | ⑧ 中屋敷遺跡 |

Ⅱ 鞍手町所在遺跡群と位置

(1) 鞍手町所在遺跡群と位置

鞍手町の地形は、中央をいわゆる金国山系が南北に貫通している。南に中生層の鞍手花崗岩である六ヶ岳が聳え、傾斜は南西に急で北東に緩やかである。北は長谷及び直方市神崎の段丘を形成し、再び剣岳として崛起している。剣岳山系はさらに北に伸びて立林、山ヶ崎の段丘を作っている。山ヶ崎で一時地中に没するが再び神崎、道中、松隈、掛津、虫生津と断絶しながら遠賀郡へぬけている。

しかしこの山系は低い段丘であるから、ここでは剣岳段丘と呼ぶこととする。剣岳段丘の東は六田川の流域の田圃を隔てて十念山段丘があり、その中間に中山平野がある。

十念山段丘の東は遠賀川平野の一部で、かなりの田んぼが開け、その一部は遠賀川に沿っている。

剣岳段丘の西は長谷及び新北の谷をへだてて低い高木段丘があり、その西に南北に長い西川平野がある。西川平野は北に下る程勾配がゆるく、一部では低く落ちこんでいる。だから排水が悪く湿地が多い。

次に西を限る山系は俗に西山山系といい、孔大寺山系に属し、宮田、若宮を経て嘉穂郡へぬけている。

これらが鞍手町の地形である。この地形に対して、弥生古墳時代の遺跡はどう存在するのかである。

それぞれの段丘状に古墳群が存在する。六ヶ岳から北東の傾斜は緩やかであるため長谷から直方市・神崎にかけては証抛山古墳群・向山古墳群、剣岳段丘にかけて殿原古墳群・圃守古墳・山ヶ崎真鍋古墳、十念小段丘に藤郷古墳群・猪倉古墳群。

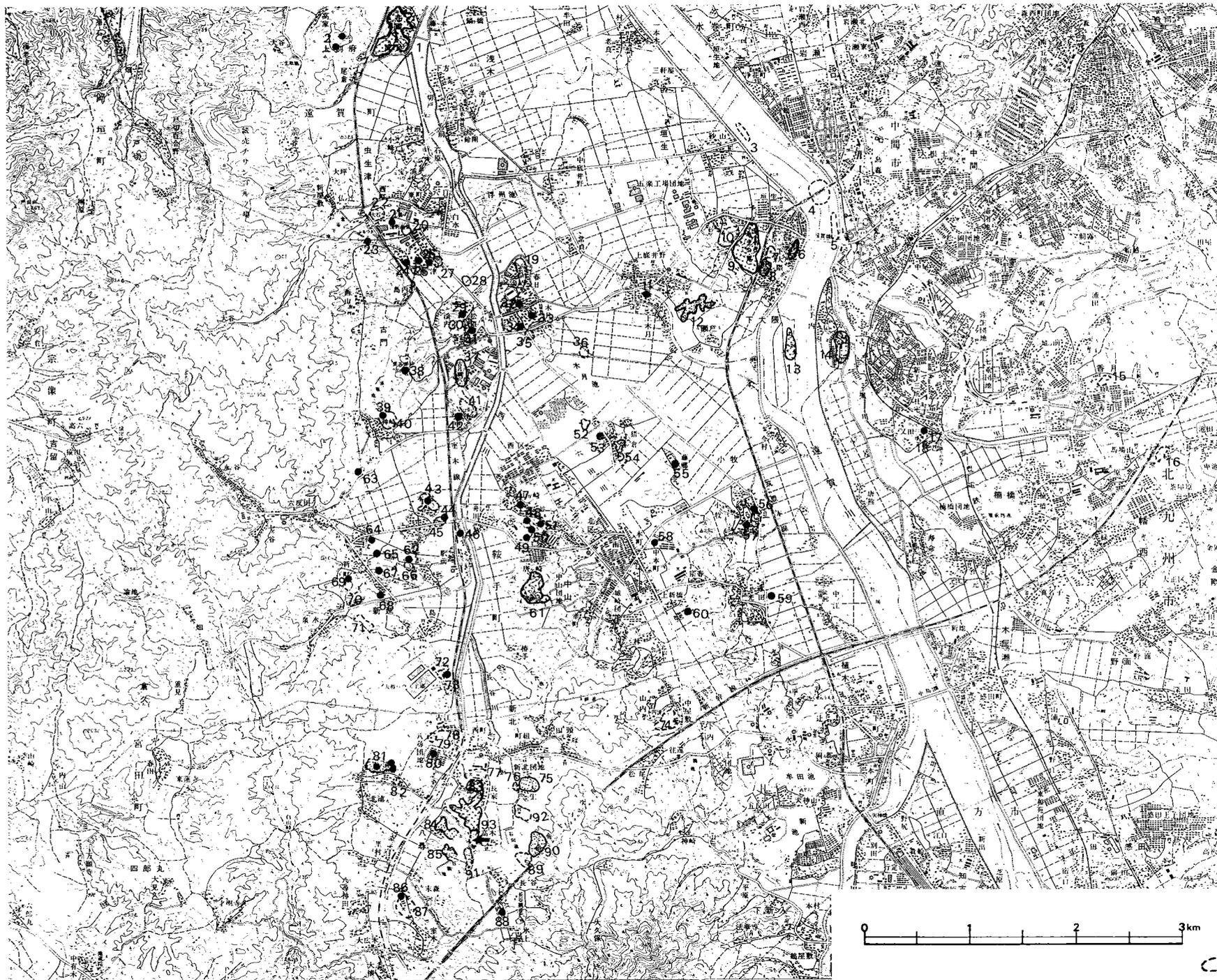
高木段丘にある長目崎古墳群、高木・長家古墳群。西川を狭んだ対岸は西山山系というがその裾野に八尋古墳群・安城古墳群・百立古墳群・旭古墳群、新延とにかけて、乙ヶ谷古墳群・大塚古墳・乙ヶ谷古墳群・鎧塚古墳群・火ノ尾古墳群・京場山古墳群等が立地する。

これらの古墳を築いた人々はそれぞれの段丘に沿って古墳をつくり、西川、長谷川の沖積平野を基盤として人々が生活していたと思われる。

重要な古墳群を若干の説明を加え、今回発掘調査を行なった高木古墳群と比較対照の資料として上げてみたい。

銀冠塚（鞍手町八尋字大谷）

昭和37年5月県営住宅の敷地造成に伴って行なわれた緊急調査である。石室は複式の横



周辺遺跡地名表
(弥生時代・古墳時代)

1. 花園古墳群
2. 露前坊古墳群
3. 砂山遺跡
4. 垣生遺跡
5. 中間市役所前遠賀川川底遺跡
6. 下大隈遺跡
7. 中間中学校横穴群
8. 露美古穴群
9. 羅漢古墳群
10. 上り立遺跡
11. 上屋敷古墳
12. 瀬戸横穴群
13. 中島古墳群
14. 土手の内横穴群
15. 大塚遺跡
16. 馬場山遺跡
17. 又田古墳
18. 又田遺跡
19. 木月遺跡
20. 夜田遺跡
21. 長浦古墳群
22. 春日遺跡
23. 鎌倉古墳
24. 藤野古墳
25. 湯澤古墳
26. 立花屋敷古墳
27. 横ヶ崎遺跡
28. 大塚遺跡
29. 松隈古墳
30. 吉月丘陵周辺遺跡
31. 天神山遺跡
32. 吉月小学校古墳
33. 木月神社古墳
34. 木月宮の下古墳
35. 湯澤遺跡
36. 羅川遺跡
37. 吉月横穴
38. 荒五郎山古墳
39. 神崎古墳群
40. 神崎薮並園遺跡
41. 長門遺跡
42. 遠中遺跡
43. 赤場山遺跡、京場山古墳群
44. 乙孫古墳
45. 前田浜遺跡
46. 鞍手塚古墳
47. 山ヶ崎薮並園古墳
48. 水殿古墳
49. 後場敷地古墳
50. 園守古墳
51. 田部古墳
52. 瑞雲遺跡
53. 瑞雲古墳群
54. 丸山遺跡
55. 藤野古墳群
56. 地行古墳
57. 小牧古墳
58. 旧前中学校古墳群
59. 海田古墳
60. 旧中山村役場古墳
61. 殿原古墳群
62. 鎌塚古墳群
63. 宮ノ浦古墳
64. 新延小学校古墳
65. 火の尾古墳群
66. 宮ノ谷遺跡
67. 宮ノ原古墳
68. 大塚古墳
69. 乙ヶ谷古墳群
70. 乙ヶ谷遺跡
71. 泉水薮並園遺跡
72. 島崎遺跡
73. 西川診療所古墳
74. 中屋敷遺跡
75. 向山古墳群
76. 向山遺跡
77. 長家遺跡
78. 古江遺跡
79. 八尋遺跡
80. 銀冠塚古墳
81. 旭古墳群
82. 北浦遺跡
83. 長家古墳群
84. 丹波寺古墳群
85. 薄井古墳群
86. 長目崎古墳群
87. 長目崎遺跡
88. 八幡古墳
89. 石田堤遺跡
90. 証徳山古墳群
91. 長谷高木遺跡
92. 人生遺跡
93. 高木遺跡、高木古墳群

○ 弥生時代の遺跡 ● 古墳群 ● 古墳

Fig. 2 遺跡群の位置(縮尺 1/50,000)

穴式石室である。多量の遺物を前室の中にもっていた。その中でも、銀製の天冠で厚さ1mm位の薄い銀の延板から切り出したものである。幅2cm、長さ32cm位の透彫結紐文の冠台部中央に宝珠と花文をいただき、内部は忍冬唐草文の透彫のある三角形の前立を、蠟着したものである。総高15.7cmで前額を飾る様式である。

この銀冠に由来して銀冠塚と名付けられている。耳環8、刀1、鉄鏃22本、工具2点、馬具類、須恵器類が出土している。

2号墳

2号墳は銀冠を出土した1号墳の周濠の直ぐ東にある。石室の北半分が削り取られていたため、詳細は不明であるが、築造年代の判定は容易ではないが立地の状態や構造と、また主軸が南北をとること等から古墳時代中期以前、前期にわたるものと考えられる。

3号墳

石室は、西北に主軸を置く、単室の横穴式石室を有する古墳で、大部分は破壊されており玄室の奥壁部付近が残っており、不規則な形の平石を敷いてある。銀冠塚よりも一段階前にくる。

火ノ尾古墳群（鞍手町新延字火尾）

1号墳

新延字火尾、新延小学校から剣神社へぬける小道にある。石室は複室の横穴式石室である。石室全長約12m、幅2m前室の床には小礫をひいてあり、後室は敷石がはがされていたのは、古くから開口されていたためである。清掃の折に若干の遺物がでている。

2号墳

一号墳の東側にあって、破壊が甚しいが、竪穴式の小石室であった。

新延小学校古墳（鞍手町新延）

新延小学校敷地の東北の一隅にある。大正年間校地を拡張の時、発見されている。石室は複式の横穴式石室である。前室と後室の規模はほとんど同じであることが特長である。

古墳時代後期で6世紀後半で出土品は新延小学校に保管されている。

鎧塚古墳群（鞍手町新延）

剣神社の境内林の中に1号墳から5号墳まであり群集している。

鎧塚の名称は、日本武尊が熊襲征伐の帰途にここに鎧を収めたという伝説からきている。

鎧塚（1号墳）

高さ約4m、径38mの二段築成の円墳で幅6mの空濠の周溝をもつ、周溝の外堤の幅は約4mで、径60mに及ぶ円墳である。

石室は竪穴系横穴式石室で、古墳時代中頃に位置付けられるであろう。

この円墳をとりまくように小形小円墳4基がある。

新延大塚古墳 県指定（鞍手町新延字大塚）

新延字大塚にあって、西鉄泉水停留所北西約100mの位置にあり、新延字大塚の台地の南端の丘の上部を占め、丘全体が一つの独立した、大きい墳形を形づくっている。

石室は横穴式複式石室で、石室の全長約13m、玄室の高さ4mの大古墳である。羨道部は、前室に接した部分が更に一室を構成して一見三室に見える。

時期的には6世紀後半と思われ、馬具類の一部が清掃した折出土している。県指定は昭和47年11月16日に指定史跡となった。鞍手町に現存する古墳では最大規模である。

京場山古墳群（鞍手町新延字本村）

新延字本村の東北・京場山の木立の中に、前方後円墳を含む大小7基をもって古墳群が存在する。

神崎古墳群（鞍手町新延字神崎）

荒五郎山の南にのびた裾の末端近く、神崎ぶどう園の東南斜面に2基存在した。ぶどう園拡張工事の際に発見され破壊された。

1号墳

長方形単室墳で、壁面持ち送りの顕著な高い天井を形成し、横口式石室で、須恵器の副葬が始まった頃、あるいはそれ以前の公算が大である。すなわち5世紀後半から6世紀初頭と見るべきである。

2号墳

構造は簡単な横穴刳抜である、横穴墳では古い時代にはいると思われる。

古月横穴 国指定史跡（鞍手町古門）

鞍手町古門字兵丹3080番地の山林にある。ここは道中部落の北北西400mの所にある。道中の横穴ともいう。山林の連丘は西北から東南に向かってのびている。これを取り巻くようにして17基の横穴が連なっている。昭和7年10月に文部省の指定となった。時代は古墳時代後期6世紀後半頃と思われる。

殿原古墳群（鞍手町中山）

鞍手町役場の南方おおよそ600mの所に、西川田圃に延び出ている一画の殿原の丘陵帯がある。この丘陵の稜線辺りから、西方または南方面への傾斜面に11基の古墳が点在していた。鉾害復旧工事の採土のためほとんどが消滅した古墳群である。

石室はほとんど横穴式単式石室である。時期的には古墳時代後半の所産である。

八尋旭古墳群（鞍手町八尋字旭）

八尋の銀冠塚を中心とする群集墳が存在した丘陵の奥に、旭古墳群が存在する。採土工事のため昭和50年と51年にかけて2基の古墳を緊急に調査を行なった。この古墳は、高木古墳群の位置を把握するためにも重要な古墳であるため、付録として報告書の最後に掲載する。（副島）

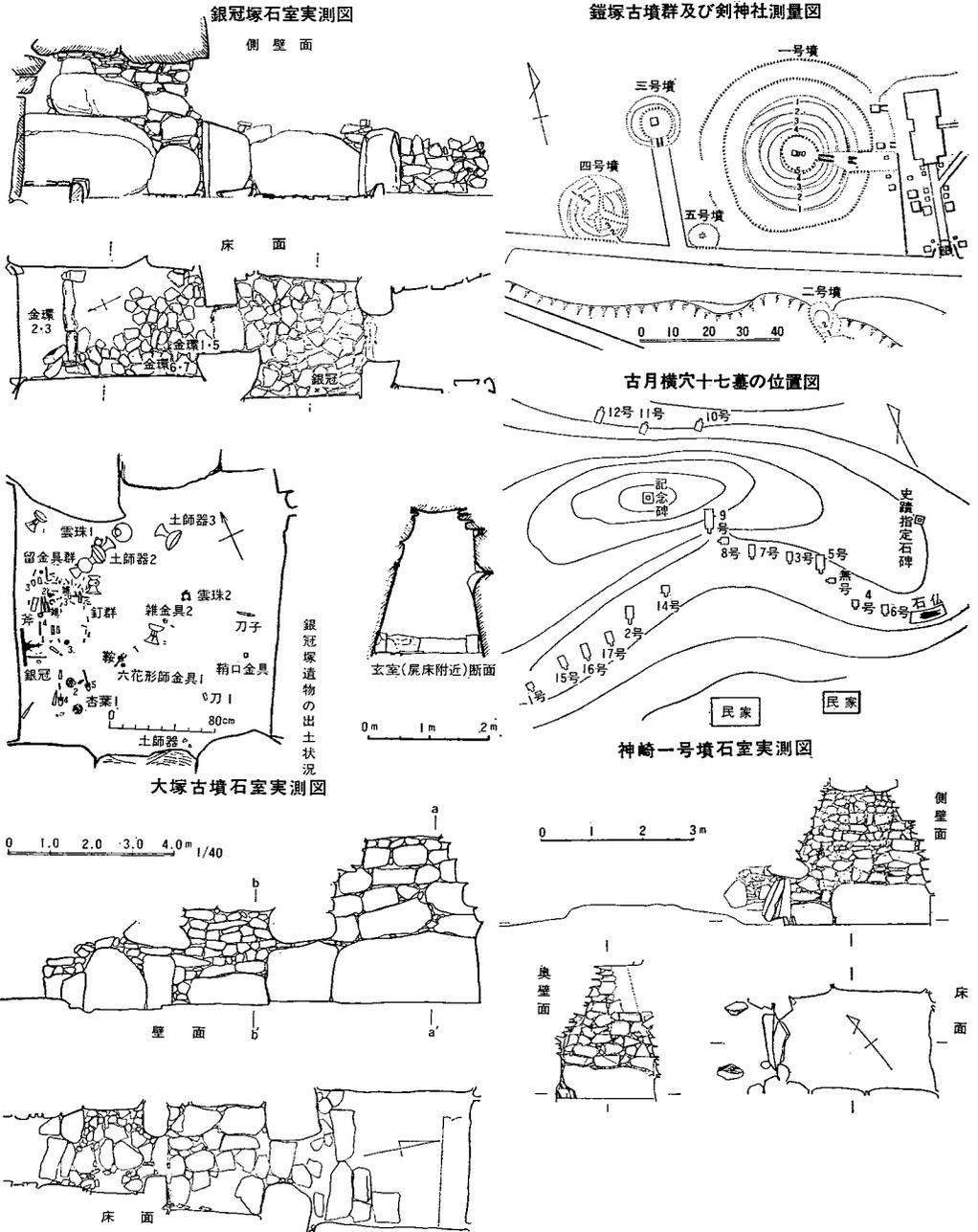


Fig. 3 鞍手町主要古墳実測図

(2) 調査の経過と調査地区

高木古墳群及び高木遺跡は九州縦貫自動車道埋蔵文化財リスト直方地区15・16・17・18・19・20地点とリストアップされている。

高木古墳群は地番で字高木をA群と称し、字長家をB群と称した。A群とB群とに狭まれた地区が高木遺跡である。一般的には高木・長家古墳群とよばれている。(註1)

調査は昭和50年度と51年度の両年度をもって行なわれた。調査は昭和50年7月1日から11月11日まで、のべ130日間で、直方15・16・17・18・19・20地点の大部分を終ったが、直19地点B-1号墳丘の下から弥生時代の土塚墓及び石棺墓が出土したため、その重要性和墓地の広がりを見い出すため補足調査の必要が生まれ、翌年度にまわした。

昭和51年7月1日から9月8日まで、B-II区と称し残り部分180m²と地主石田茂氏からその隣接地帯280m²を借上げて、弥生時代の墓地の広がりを確認し、ひいては鞍手地方の弥生時代墓地について説明をはかることとなった。

昭和50年度 高木遺跡調査関係者 (1975年7月1日～11月11日)

調査員	石山 勲	福岡県教育委員会文化課技師
	副島 邦弘	”
調査補助員	川辺 公紀	
	日高 正幸	(測量士)
	平ノ内 幸治	

他に発掘に関連して 山口大学・別府大学・早稲田大学学生の協力があつた。

昭和51年度 調査関係者 (1976年7月1日～9月8日)

調査員	栗原 和彦	福岡県教育委員会文化課技術主査
	副島 邦弘	” 技師
調査補助員	佐土原 逸男	
	日高 正幸	(測量士)
	平ノ内 幸治	

他に発掘に関連して、佐藤秀利(大正大学学生)の協力があつた。九州産業大学教授森貞次郎氏の指導を受けた。

調査期間中、それぞれの年度に現場説明会を行なった。現場説明会は鞍手町教育委員会と福岡県教育委員会の二者の主催で鞍手町立南中学校を会場として行ない、説明会のパンフとして『くらでのむかし—その2—』(昭和50年11月15日)・『くらでのむかし—その4—』(昭和51年9月4日)を説明会場でくばり、文化財の愛護思想の普及活動を行なった。

では日誌をもって、調査過程をふりかえってみよう。

註1 鞍手町誌では、長家古墳群と記載されているが、ここでは高木・長家古墳群と称する。

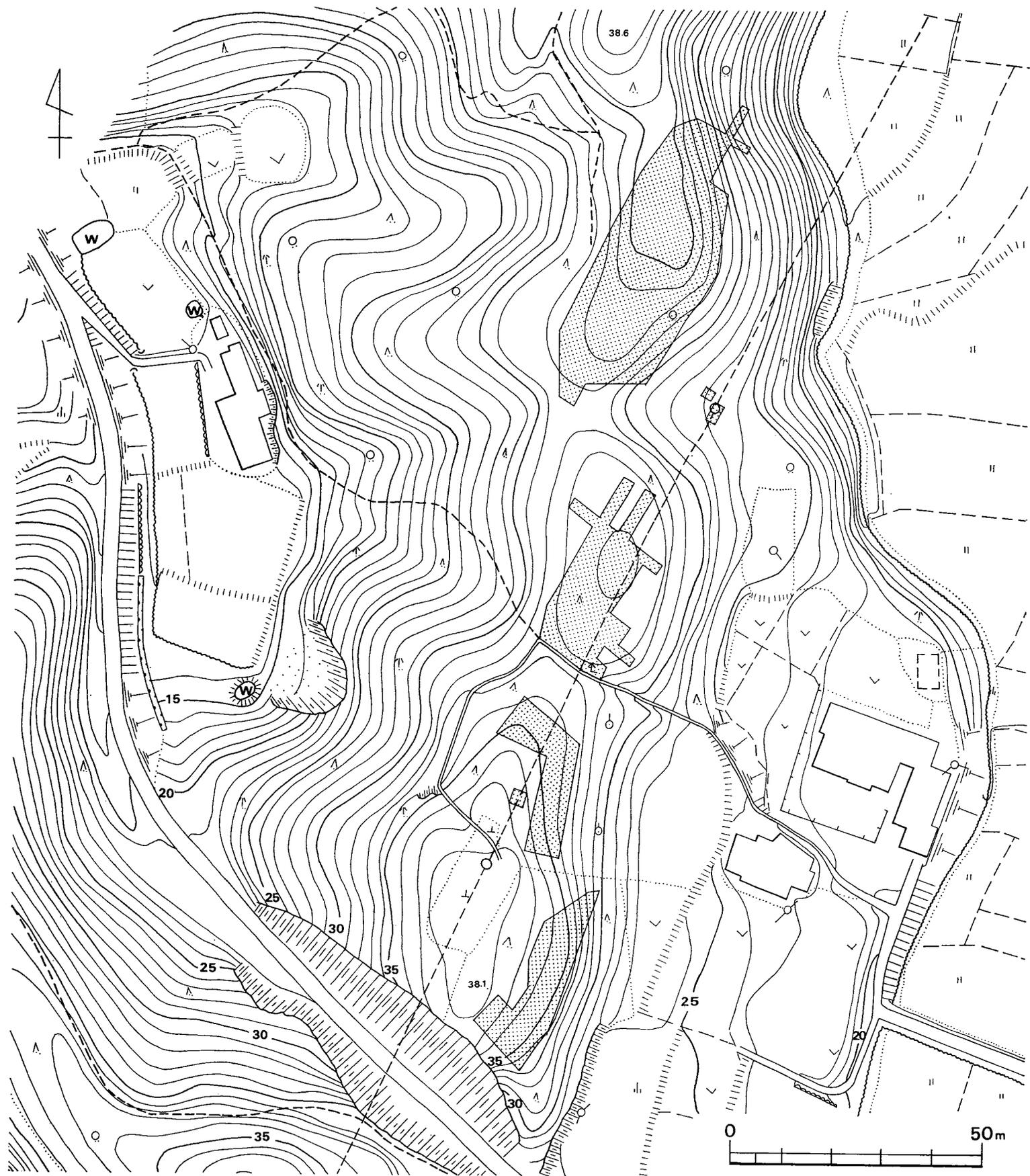


Fig. 4 高木遺跡地形図(縮尺 1/1000)

昭和50年度（7月1日～11月5日）

A 区

- 7月1日 機材運搬。直方15・16地点を高木A-1号墳・A-2号墳と名付ける調査を開始する。
- 7月2日 伐採。
- 7月4日 測量用のB・M（37.064m）移す、伐採作業続行する。
- 7月5日 地形測量をはじめめる。伐採続行して行なう。
- 7月8日 A-1号・A-2号墳発掘区を設定する。伐採後近影撮影する。
- 7月9日 盗掘坑より調査をはじめめる。発掘開始である。
- 7月16日 A-1号・A-2号墳の主体部を確認、開口方向略東し、丘陵の裾部に位置す。
- 7月18日 実測開始（縦断面）。
- 7月29日 A-1・A-2号墳割付を開始及び石室実測。
- 8月5日 補足作業と実測続行、石室をこわし、腰石だけとする。
- 8月14日 実測終了 A-1号・A-2号墳終了する。

B 区

- 8月6日 B区にはいる。古墳を中心に伐採を開始する。
- 8月8日 B-1号墳・B-2号墳に割付の杭打及びB・M移し。
- 8月9日 地形測量始める。
- 8月14日 伐採はC区・D区まで行なう。
- 8月14日 伐採はC区・D区まで行なう。
- 8月18日 発掘調査開始B-1・B-2号墳からかかる。
- 8月27日 B-1号の主体部判明する。単室の横穴式石室で羨道は短筒にして切り通し状の墓道である。略東に開口する。
B-2号の開口方向に逆方向すると思われる。
- 8月29日 墳丘写真撮影。
- 8月31日 B-2号墳を複室の横穴式石室で開口方向略西をむく。
- 9月1日 B-1号墳実測なる。
- 9月10日 B-1号墳実測及び写真となる。
- 9月30日 B-2号墳中心に実測及び



Fig. 5 発掘風景

写真撮影。

- 10月13日 B-2号うめ戻し開始する。
 10月15日 うめ戻し終了。B-2号墳は約 $\frac{1}{3}$ をカットされるが石室は残る。

C 区

- 8月10日 B-1号の周辺部の調査として、C区を設定。
 8月20日 住居跡2軒確認する。弥生・古墳時代もの各1軒。
 8月25日 土壇を確認検出する。
 8月27日 写真撮影・実測・割付・杭打を行なう。
 8月31日 実測を後にまわす。9月下旬にD区と併行して行なう。

D 区

- 9月25日 発掘開始する。
 9月30日 表土剥ぎを終了する。
 10月1日 遺構の検出をはかる。
 10月9日 住居跡2軒検出する。
 10月13日 部分写真撮影 補足作業。
 10月15日 補足終了。
 10月16日 全影撮影及び部分撮影。
 10月17日 実測及び補足作業をする。
 10月24日 写真撮影。D区を終了する。

B-Ⅱ区

- 10月22日 B-1号墳の墳丘西側を除去し、だめ押しをはかる。
 10月23日 土壇墓2基出土する。
 10月24日 尾根線状に周辺部にだめ押しのトレンチを入れる。
 10月27日 土壇墓より副葬品が出土する。



Fig. 6 発掘風景

- 10月28日 副葬品は磨製石鏃・人骨が若干のこっていた。
 10月29日 実測と周辺部の調査。
 10月30日 石棺墓出土する。
 10月31日 石棺墓2基めを検出、2号石棺墓とする。
 11月1日 2号石棺墓は蓋石もあり完全なものである。写真撮影を行なう。
 11月4日 実測後蓋石をあける。副葬品な

- し。
- 11月5日 清掃後写真撮影及び補足実測、
午後より機材撤去する。
B-Ⅱ区については弥生時代の
墓地群の可能性があり、来年度
に調査を行なうこととする。



Fig. 7 1号石棺墓

- その後
- 11月15日 鞍手現場全体の説明会を行なう。参加者 180名。
- 11月17日 公団と文化課との会議がもたれる。
その結果B-Ⅱ区について追加調査必要ありと認められる。
- 12月1日 公団と工事担当者と三者で立会し、51年度調査予定地について縄張りし、図面に線引きし、確認する。

昭和51年度（6月30日～9月6日）

B-Ⅱ区

- 6月30日 機材搬入し、テント設営する。
- 7月1日 表土剥ぎ及び写真撮影。
- 7月2日 周辺部の250m²を借上げる。地主石田茂氏の了解得る。
- 7月3日 伐採を行ない。450m²の全面を剥ぐ。
- 7月7日 甕棺らしきもの検出（弥生時代中期後半？）する。
- 7月8日 土塚墓らしきもの20基以上確認する。
- 7月9日 遺構検出をはかる平面でプランを押さえる。
- 7月10日 実測に関する打合わせを行なう。
- 7月12日 1/100遺構が確認されたものについてプランを押え実測する。
- 7月13日 D-27号土塚は木棺墓であることが確認された。
- 7月14日 D-27号土塚の写真撮影を行なう。
- 7月16日 平面で押さえられたもの30基を数える。
- 7月19日 台風接近する。
- 7月20日 遺構内部を掘る。
- 7月26日 全体をほぼ確認する。
- 7月27日 D-15号土塚墓から人骨頭頂骨の一部を発見する。
- 7月29日 D-15号土塚墓から磨製石剣を検出する。
- 8月2日 D-16号土塚墓から磨製石鏃を副葬する。
- 8月9日 D-7号土塚墓から水晶玉2、管玉11、ガラス玉8検出、水晶玉は非常に珍

- らしい。
- 8月10日 実測図及び個々写真とりを始める。
- 8月16日 実測に馬力を入れる。
- 8月18日 実測作業及び写真撮影。
- 8月23日 借上げた部分についてうめ戻しを開始する。
D-33号土塚より管玉4点出土する。
- 8月24日 森貞次郎先生の指導をおおぐ。
- 8月25日 D-30号土塚より管玉1点出土する。
- 8月31日 借上げた土地のうめ戻しほぼ終了。
- 9月1日 補足作業をのこす、実測作業と写真撮影。
- 9月2日 平板の補足及び実測。
- 9月3日 テントを撤去する。
- 9月4日 現場説明会 180名参加する。
- 9月6日 機材の運搬、本日をもって終了する。



Fig. 8 発掘風景

約6ヶ月の調査であった。これを表にしてあらわすと、表2となる。

表2 調査行程表

遺跡地点名	発掘調査年月日	昭和50年度					昭和51年度								
		7月	8月	9月	10月	11月	7月	8月	9月						
直 15 高木古墳 A-1	期間	←→													
	伐採	←→													
	地形測量	←→													
	発掘	←→	←→												
	遺構検出 実測(写真)	←→	←→	←→											
直 16 高木古墳 A-2	期間	←→													
	伐採	←→													
	地形測量	←→													
	発掘	←→	←→	←→	←→										
	遺構検出 実測(写真)	←→	←→	←→	←→										
直 17 高木遺跡 C区	期間		←→												
	伐採		←→												
	地形測量		←→												
	発掘		←→												
	遺構検出 実測(写真)		←→												
直 18 高木遺跡 D区	期間			←→											
	伐採			←→											
	地形測量			←→											
	発掘			←→											
	遺構検出 実測(写真)			←→											
直 19 高木古墳 B-1	期間		←→				←→								
	伐採		←→				←→								
	地形測量		←→				←→								
	発掘		←→				←→								
	遺構検出 実測(写真)		←→				←→								
直 20 高木古墳 B-2	期間		←→												
	伐採		←→												
	地形測量		←→												
	発掘		←→												
	遺構検出 実測(写真)		←→												
		7月1日					11月10日			6月29日			9月8日		

調査地区 (Fig. 9)

高木遺跡全体としては約3000㎡ある。公団の図面にリストとして上げられている直方15・16・17・18・19・20地点を、それぞれA区・B区・C区・D区に分けた。

A区は直方15・16地点。(高木A-1号墳・A-2号墳とその周辺)。

B区は直方19・20地点。(高木B-1号墳・B-2号墳)。

C区は直方17地点。(高木B-1号墳周辺部)。

D区は直方18地点。(A区とB区・C区に挟まれた部分)。

B-II区は直方19地点(50年度の残った部分と51年度土地を借上げた部分)。

ほぼ5区に分けて、調査を行ない50年度にA～D区まで終了し、51年度弥生時代墓地群をB-II区として称した。(副島)



Fig. 10 高木遺跡航空写真

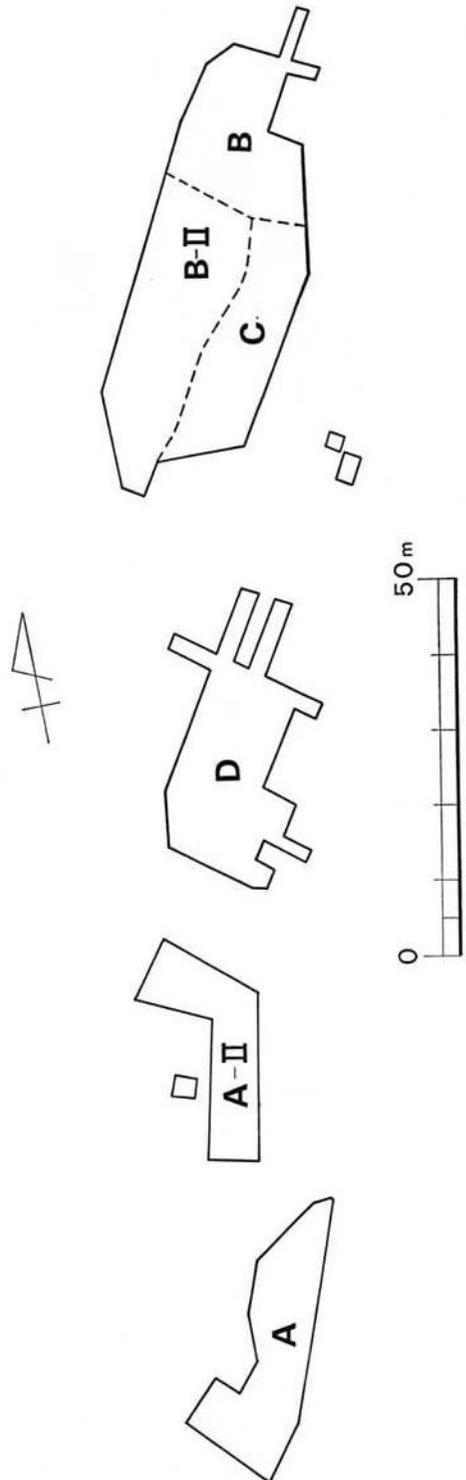


Fig. 9 高木遺跡発掘地区 (縮尺1/1,000)

Ⅲ 遺構と遺物

(1) 概要 (Fig.11)

高木遺跡は、弥生時代2期と古墳時代2期すなわち4期にわたる複合遺跡である。さらに歴史時代のもも加えるとそれ以上になる。

まず、B区に弥生時代前期末から中期中葉にかけての土壇墓33基（木棺墓も含む）・中期中葉にかけての石棺墓2基、小形甕棺墓2基それとほぼ同時期の円形住居跡がC区とD区にみられる。

これらの遺構が埋没した後にB-1号墳がつくられるその築造過程に石棺が、その周溝にひつかかり破壊されている。そしてC区の弥生時代円形住居跡を切って方形の住居跡がC区につくられ、そして南のD区にもつくられた。

A区の子墳群A-1・A-2号墳が築造される。時期は古墳時代後期の所産である。A-1号・A-2号・B-1号墳は尾根線より一段下がった部分につくられ、B-2号墳は尾根線上につくられている。前者の開口方向は東で、後者は西をむいている。

次節以下で各項について報告を行ないたい。

(副島)

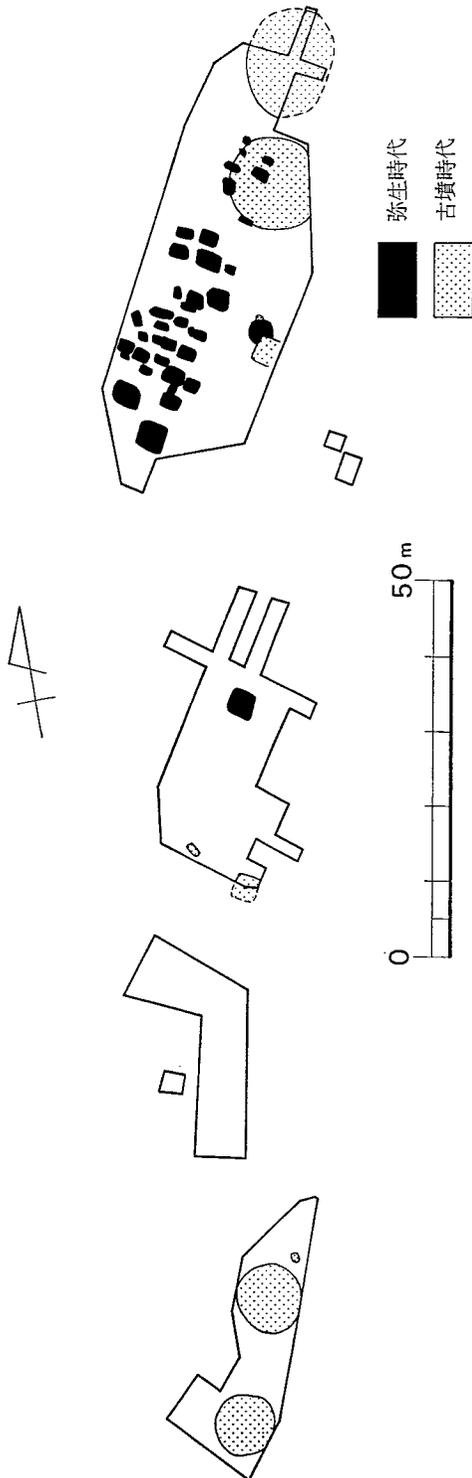


Fig. 11 高木遺跡遺構配置図 (縮尺1/1,000)

(2) 弥生時代の生活遺構と墓地

a) 生活遺構（住居跡）

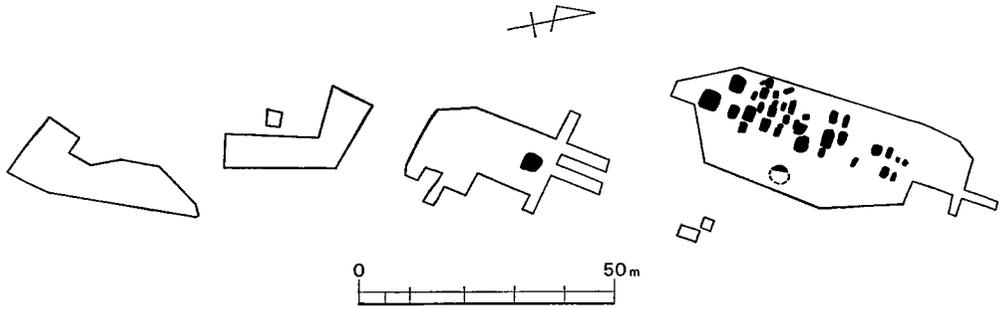


Fig. 12 弥生時代遺構配置図（縮尺1/1,500）

この時代の住居跡はC区とD区に存在する。前者は平面形が円形をなし、後者は隅丸方形を呈している。

C区をY-1号住居跡とし、D区をY-2号住居跡とする。

Y-1住居跡 (Fig. 13)

C区にあって平面形は円形を呈し、東側は古墳時代の住居跡によって切られている。

壁高は30cmで平坦の床面を持ち、2本の柱穴が確認できた。東北側は古墳時代の土壇に切られていることと、その上古墳時代住居跡に切られることによって、全体を把握することはむずかしいが、おおよそ径6mの円形住居跡であったらしい。

床面に密着した状態で、弥生時代中期後半の甕形土器・壺形土器の破片が検出された。住居跡の時期はほぼ弥生時代後半に比定できるであろう。

遺物 (Fig. 15)

遺物は床面に密着して出土したものである。高杯の破片や壺・甕の口縁部破片とがあったが、取上げの折、ぼろぼろになり実測不可能となった、かろうじて底部についてのみ取り上げられた。

底部 (Fig. 15-⑦) 平底を呈し、若干上がりきみである。色調は前者が黄褐色と後者が灰褐色を呈し、胎土に小砂を含む、焼成軟弱である。器面の調整はハケを使用している。弥生式土器の甕の底部である。(副島)

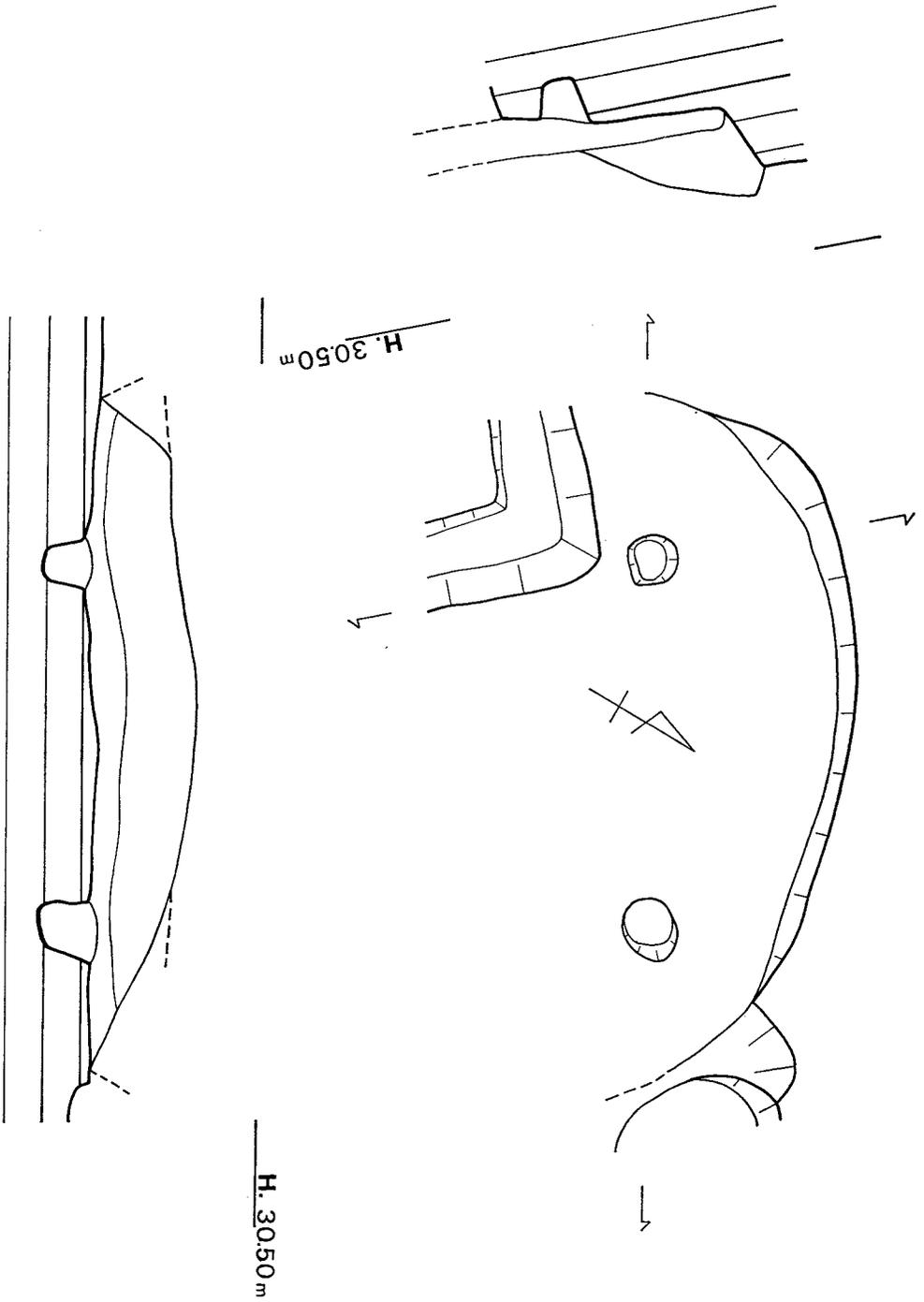


Fig. 13 Y-1号住居跡 (C区) (縮尺 1/40)

Y-2号住居跡 (Fig.14)

D区中央部に位置し、ほぼ隅丸方形を呈し、東西4.3m、南北約4.0mを測り、たちあがり約10cm程で柱穴は各隅に1本ずつあり、床面中央部には2段掘りの大きな柱穴があり、これは主柱と思われ計5本柱の住居跡である。4本の柱穴は各径が20cm。深さ25cm程で主柱穴は最大径90cmを測る。床面はほぼ水平である。床面に炉跡は確認できなかった。

当住居跡は1度の増築もしくは建て直しを行ったと考えられ、初めの柱穴より北側に若干づれている。大きさは初めとほとんど変っていないが、この時柱は4本柱の住居になっている。

北側壁付近から土器片が床に密着した状態で検出された。住居跡床面の土器は風化が進んでおり、取り上げる事ができなかった。

時期は、床面の土器片及び住居跡付近から検出したものから考えて弥生時代中期中葉に比定される。

住居跡上面から油質頁岩製の磨製の片刃石斧が検出されている。

遺物 (Fig.15)

甕形土器 (Fig.15—①②③④⑤⑥) ① 口径は約36.3cmを測り、口縁部は逆「L」字状を呈する。口縁部直下に三角突帯を有する。表面はハケ目調整を施している。色調は茶褐色、胎土に小石を含み焼成は良好である。

② 口縁径約30.5cmを測り、口縁部は逆「L」字状を呈する。口縁部直下に三角突帯を有する。胴部はゆるやかに張り出す、表面は縦方向にハケ調整を行なっている。色調は黒褐色、胎土小石を含み焼成は良好である。

③ 口縁径約29.5cmを測り、内側に張り出す口縁内端を有する。色調黄褐色、胎土細砂を含み焼成は良好である。

④ 口縁部片、口縁部径29.4cmを測り、口縁は水平で、内側に鋭角に張り出す内端を有する。

⑤ 底部径7cm、厚さ1.7cm若干上げ底ぎみである。

⑥ 底部径7cm、厚さ1.4cmを測り、⑤の様上げ底であるが途中段を有する。

扁平片刃石斧 (Fig.16—②) ② 長6.8cm、刃部幅3.4cm、厚さ0.9cmを測る。油質頁岩を素材として使用している。(平ノ内)

その他の遺物

C、D区周辺部から出土したものである。

石庖丁 (Fig.16—③④) ③ 頁岩を石材として使用し、半月形を呈し、中央部に孔を両面から穿孔している。④ 硬質砂岩を石材として使用し、厚でのものである、断面形クサビ形を呈する。

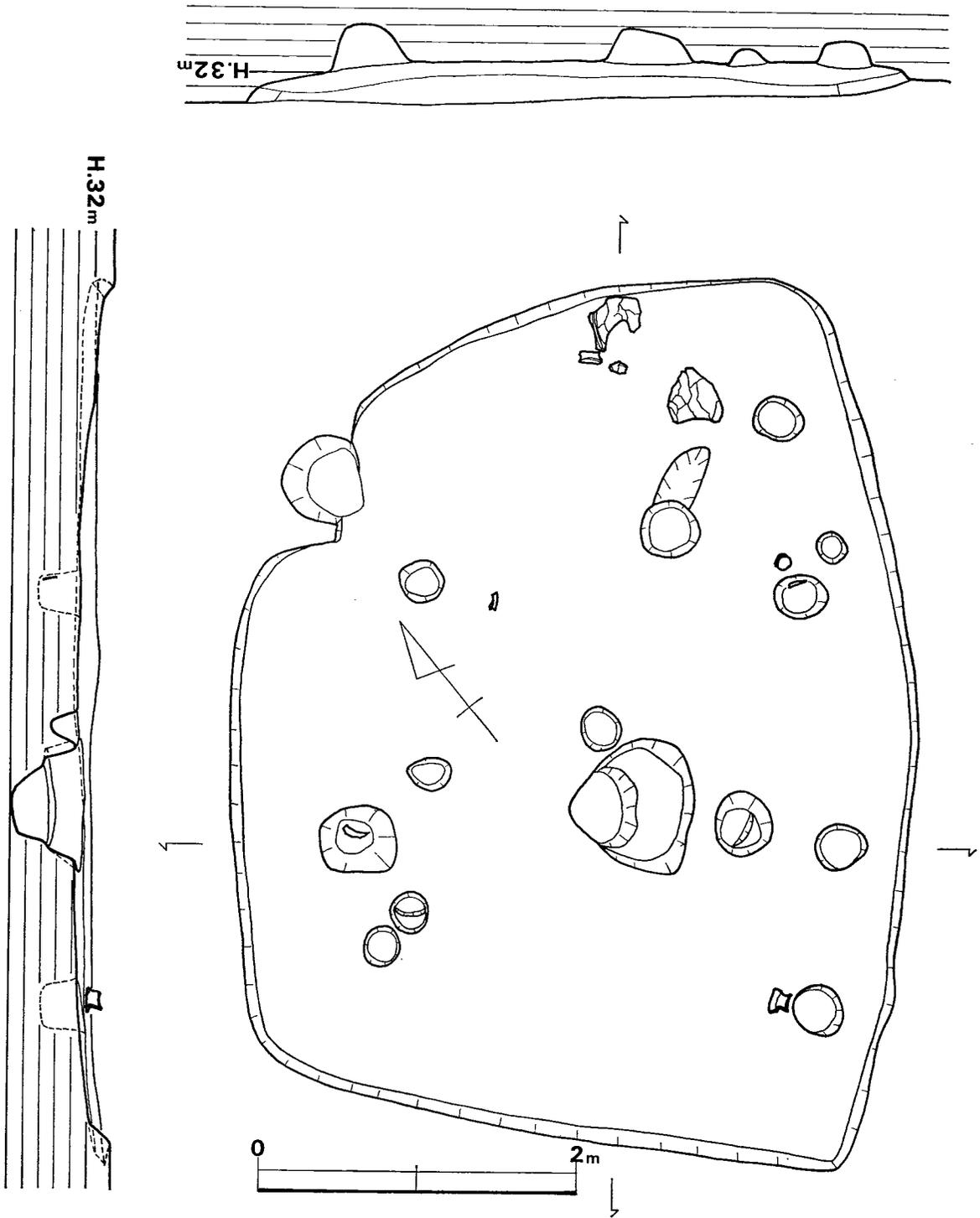


Fig. 14 Y-2号住居跡 (D区) (縮尺 1/40)

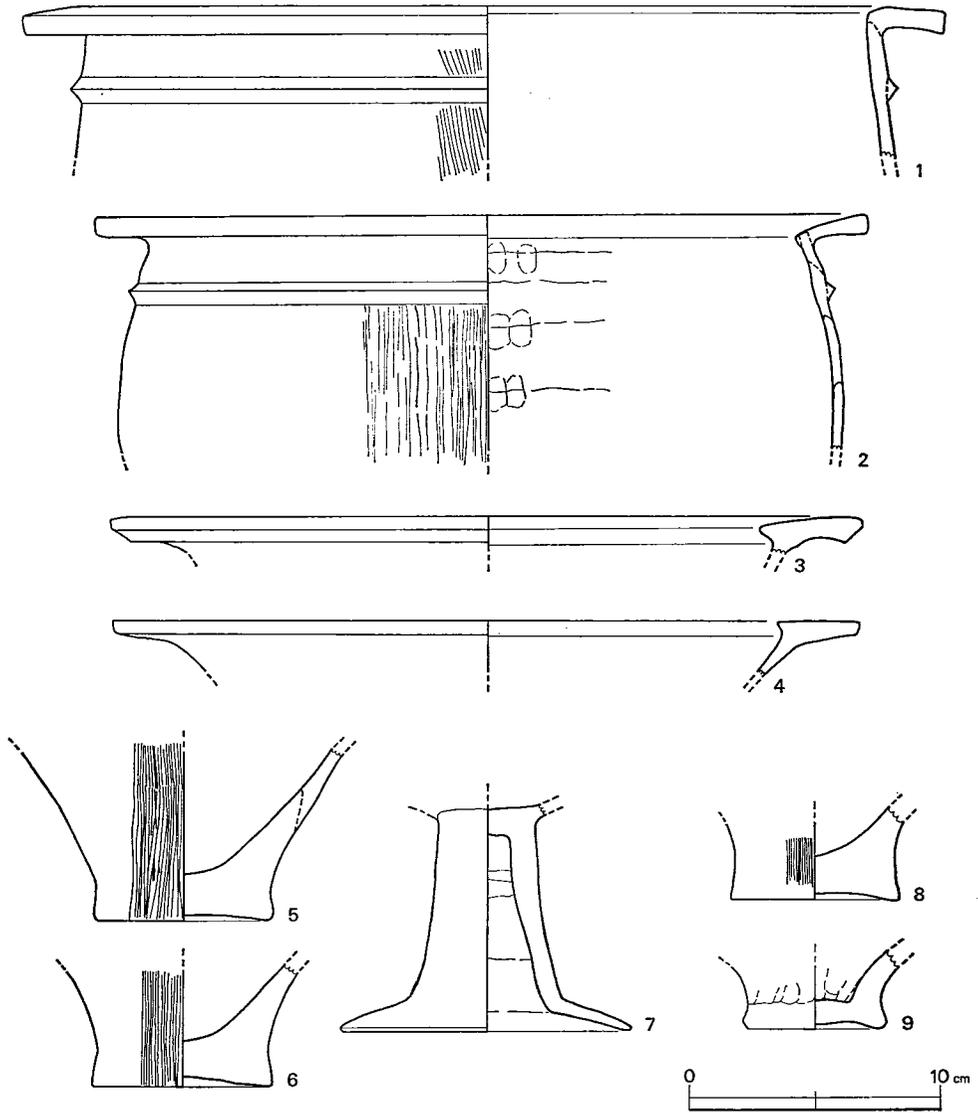


Fig. 15 出土遺物実測図（土器）（縮尺 1/3）

石 戈 (Fig. 16—⑤) 頁岩を石材として使用し、基部付近のみ一部残存している。

石 鏃 (Fig. 16—⑥) 姫島産黒曜石を石材として用い、プレッシャー加工により入念に仕上げている。

この周辺では姫島産黒曜石は量的にあまり多く検出されていない。（平ノ内）

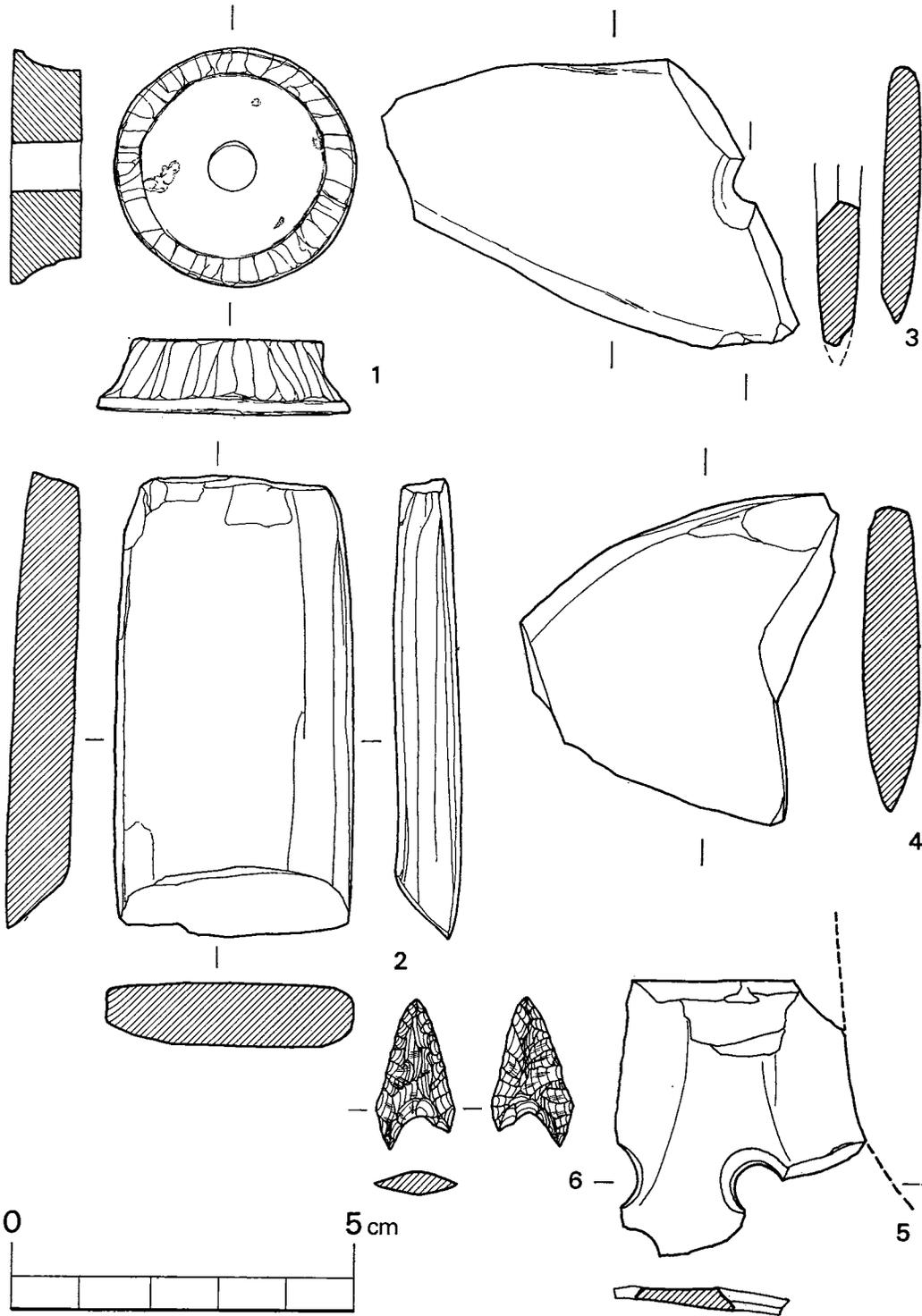


Fig. 16 出土遺物実測図（石器）（縮尺 1/1）

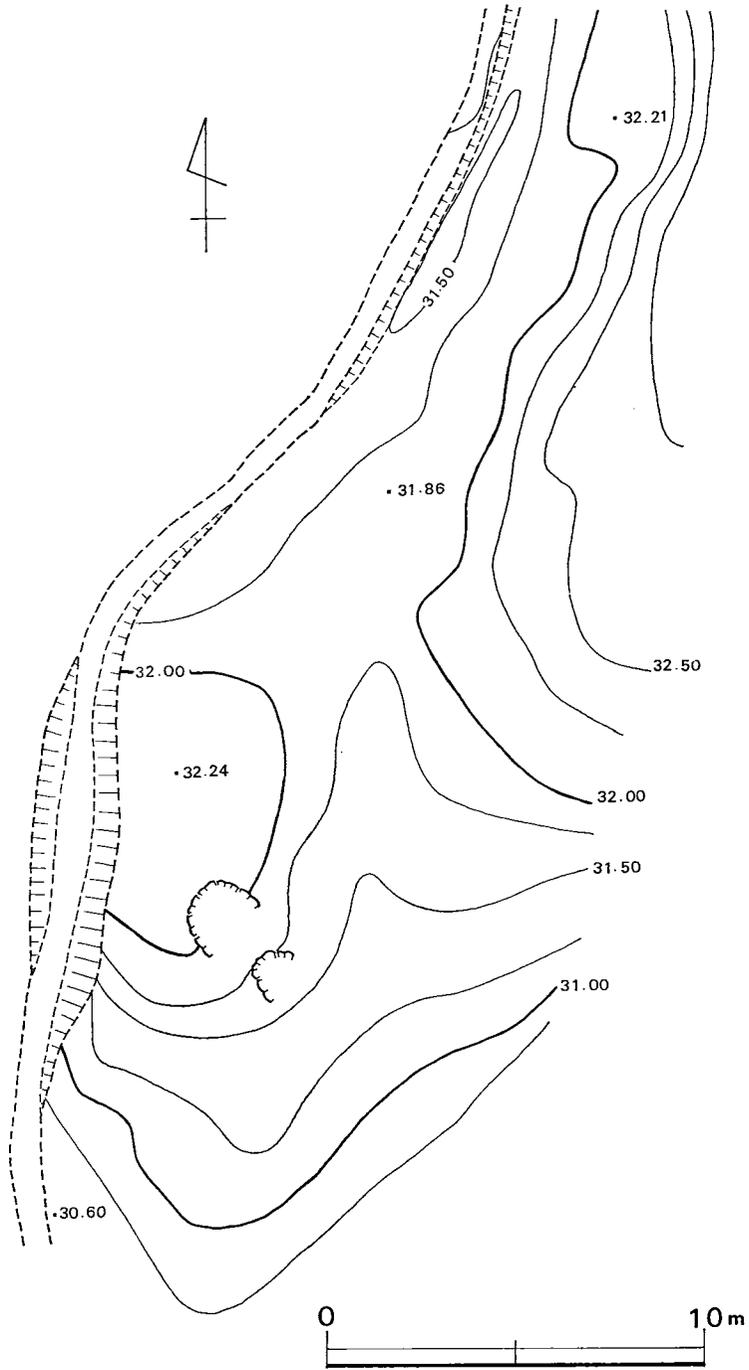


Fig. 17 B-II 区地形図 (縮尺1/200)

b) 墓 地 (土塚墓と石棺墓と甕棺墓)

土 塚 墓

墓地はC区の、弥生時代円形住居跡の存在したほぼ同時期を前後するころ、この住居跡の上の尾根線上に直交する様に墓地群として、土塚墓(木棺墓)33基・石棺墓2基・甕棺墓2基をもって一群をなす。時期的には土塚墓が古く、そして石棺と甕棺墓は、ほぼ同時期に存在した。土塚墓は弥生時代前期末から弥生時代中期中葉ぐらいまで存在したたものと思われる。

すなわち、D-30号土塚墓とK-2号甕棺墓関係によって理解できる。D-30号土塚墓が築かれた後にその上に弥生時代中期後半の小形甕形土器をさし合わせた甕棺墓がつくられたことによって下限の時期をおさえることができる。

上限の時期は、土塚墓に副葬された磨製石剣・磨製石鏃によってである。一般的にこの地方では磨製石剣・磨製石鏃は弥生時代前期末から中期中葉といわれていることからである。そして土塚内に埋土の中から出土した土器の破片からおさえることができる。

これによって土塚墓(木棺墓)は上限を弥生時代前期末、下限を弥生時代中期後半とみてよいであろう。土塚墓中に木棺埋設の痕跡を認められるものがある。

石棺墓の時期は2号石棺墓の蓋石のめばりに弥生時代中期後半の甕形土器の破片が使用されていたことからほぼ同時期が妥当であろう。

土塚墓・石棺墓は人骨が残っているものから推定してほぼ頭を東方向に位置させている。主軸は尾根に直交することである。

土塚墓一覧表(表3)を上げ全体を示す。(副島)

※ この表3の見方はつぎの様である

- 墓塚の規模は上端の長軸、幅
 - 墓塚の深さは断面図より見透しの地山面から棺底まで
 - 棺寸法は内法下端小口幅の最大、最小
 - 棺の深さは断面図より見透しの内法上端から棺底まで
- 以上の部分を測定した。

表3 弥生時代土塚墓一覽表

新 遺構番号	旧 遺構番号	土塚 種類	主軸 方位	墓壇寸法 (cm)			棺寸法 (cm)					木棺			土塚墓 断面	副葬品	切合	備考
				長さ	幅	深さ	小口 最小	口幅 最大	長軸	深さ	型	木口の 彫込	側切 板込	地盤 山込				
D-1	1D-1	土	S58°E	230	168	49	29	38	142	31	B							
D-2	1M-1	土	S50°E	291	204	84	24	50	190	48	B					石製1 鉄製石製1		人骨
D-3	D-27	土	S58°E	約270	約158	65	14	46	192	47	B							人骨
D-4	D-26	土	S41°E	261	281	125	25	39	178	54	B							人骨
D-5	D-1	土	S59°E	215	175	75	18	28	161	35	B							
D-6	D-25	土	S54°E	約180	138	59	15	21	105	35	C							
D-7	D-24	土	S57°E	225	195	75	17	37	164	41	B				○		水垢正2 第11 カラス土	
D-8	D-2	土	S42°E	150	124	70	15	25	99	36	B							
D-9	D-3	土	S36°E	360	252	117	23	34	230	51	C							
D-10	D-4	土	S28°E	239	158	71	28	28	110	56	C						D-12が 切る	D-10→D-12 (新)
D-11	D-5	土	S63°E	122	78	60	19	19	45	29	C							
D-12	D-6	土	S50°E	175	71	41	18	21	89	7+Q	A				○			
D-13	D-7	土	S52°E	186	116	114	17	20	98	45	B						D-14が 切る	D-13→D-14 (新)
D-14	D-8	土	S8°E	113	86	49	28	30	94	49	A				○			人骨
D-15	D-9	土	S43°E	212	140	79	18	34	160	49	B					石製1		
D-16	D-10	土	S61°E	265	100	72	19	30	165	42	B					鉄製石製2		
D-17	D-11	土	S49°E	187	119	91	11	33	74	33	B							
D-18	D-13	土	S58°E	約230	133	70	19	20	158	38	B						D-19に 関係切 れる	
D-19	D-30	土	S54°E	188	113	86	20	27	113	40	B							
D-20	D-15	土	S64°E	131	131	69	17	24	70	15	B				○			
D-21	D-16	土	S20°W	180	97	100	15	24	139	約40	B				○			
D-22	D-17	土	S70°E	262	約162	103	15	39	152	63	B				○		D-24が 切る	D-22→D-24 (新)
D-23	D-21	土	S39°E	約296	212	79	26	36	190	65	B							
D-24	D-18	土	S64°E	170	113	98	10	21	76	43	B							
D-25	D-20	土	S49°E	107	85	60	18	22	69	33	C							
D-26	D-23	土	S60°E	約175	97	46	16	31	135	30	B							
D-27	D-14	木	S63°E	314	233	107	33	42	179	約53	A	○			○		D-26が 切る	D-27→D-26 (新)
D-28	D-12	土	S51°E	273	173	78	49	49	200	36	A				○			
D-29	D-32	土	S82°E	156	約128	64	29	29	91	20	C						土層D-27 南側D-30 D-29→D-30 92°E	D-29→D-27 D-29→D-30 D-27 D-27→D-30 (新)
D-30	D-31	土	S45°E	377	278	135	33	45	180	42	C					菅玉1	D-31を 切る	
D-31	D-33	土	S46°E	265	約180	83	20	25	160	52	B						D-27が 切る	D-31→D-27 (新)
D-32	D-19	土	S49°E	約430	約355	97	30	30	240	43	C							
D-33	D-22	土	S61°E	395	420	126	32	37	200	36	A				○		菅玉4	
S-1	1S-1	石	S37°E				26	48	44									
S-2	1S-2	石	S44°E	380	262	104	27	40	200	43								人骨
P-1	D-29																	
P-2	D-28																	
P-3	P-1																	
K-1	K-1	甕	S47°E															
K-2	K-2	甕	S56°E															

※旧遺構番号は「くらのてのむかし-4-」,「教育福岡」で発表してある番号である。

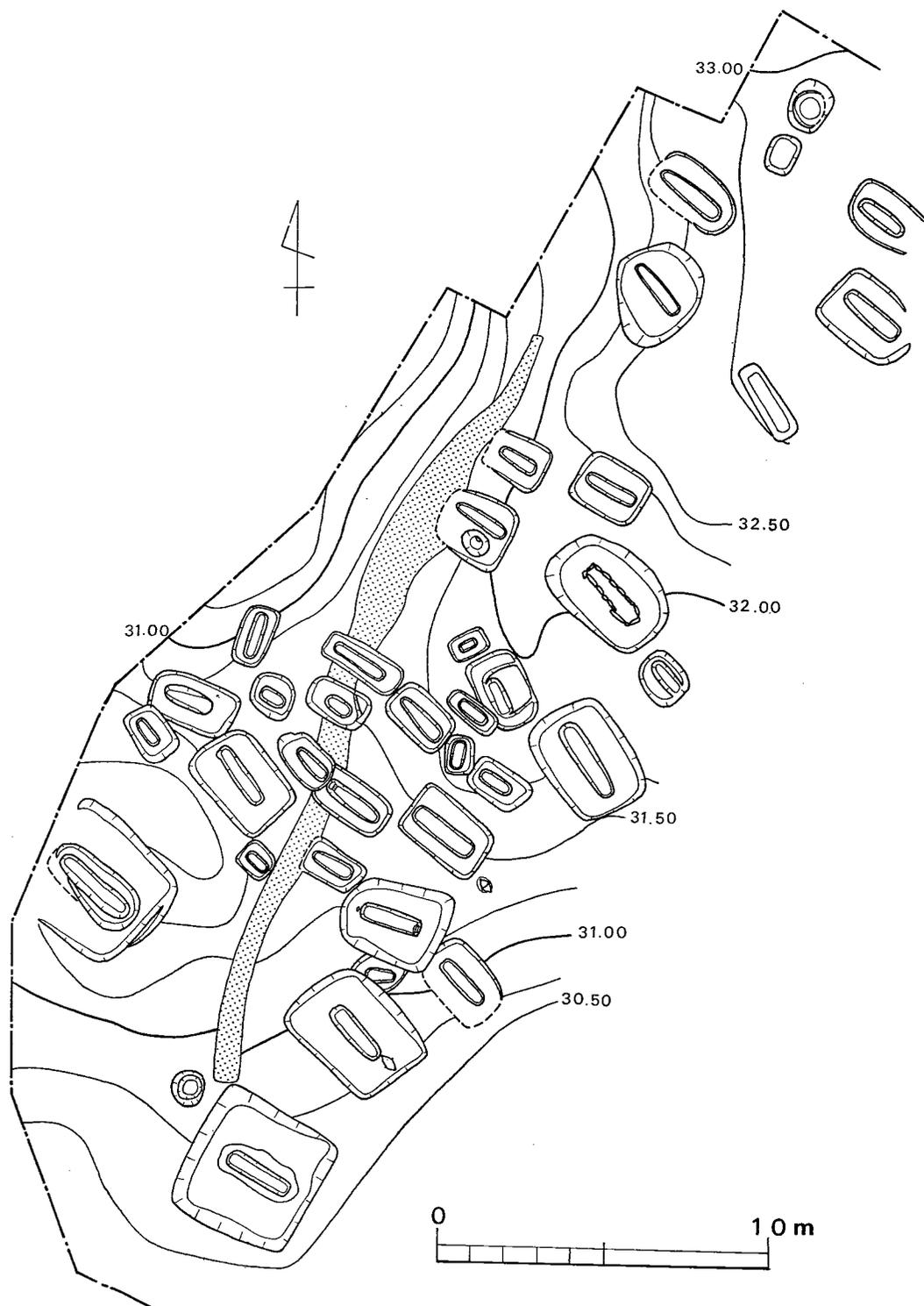


Fig. 18 B—II区発掘後地形図 (縮尺1/200)

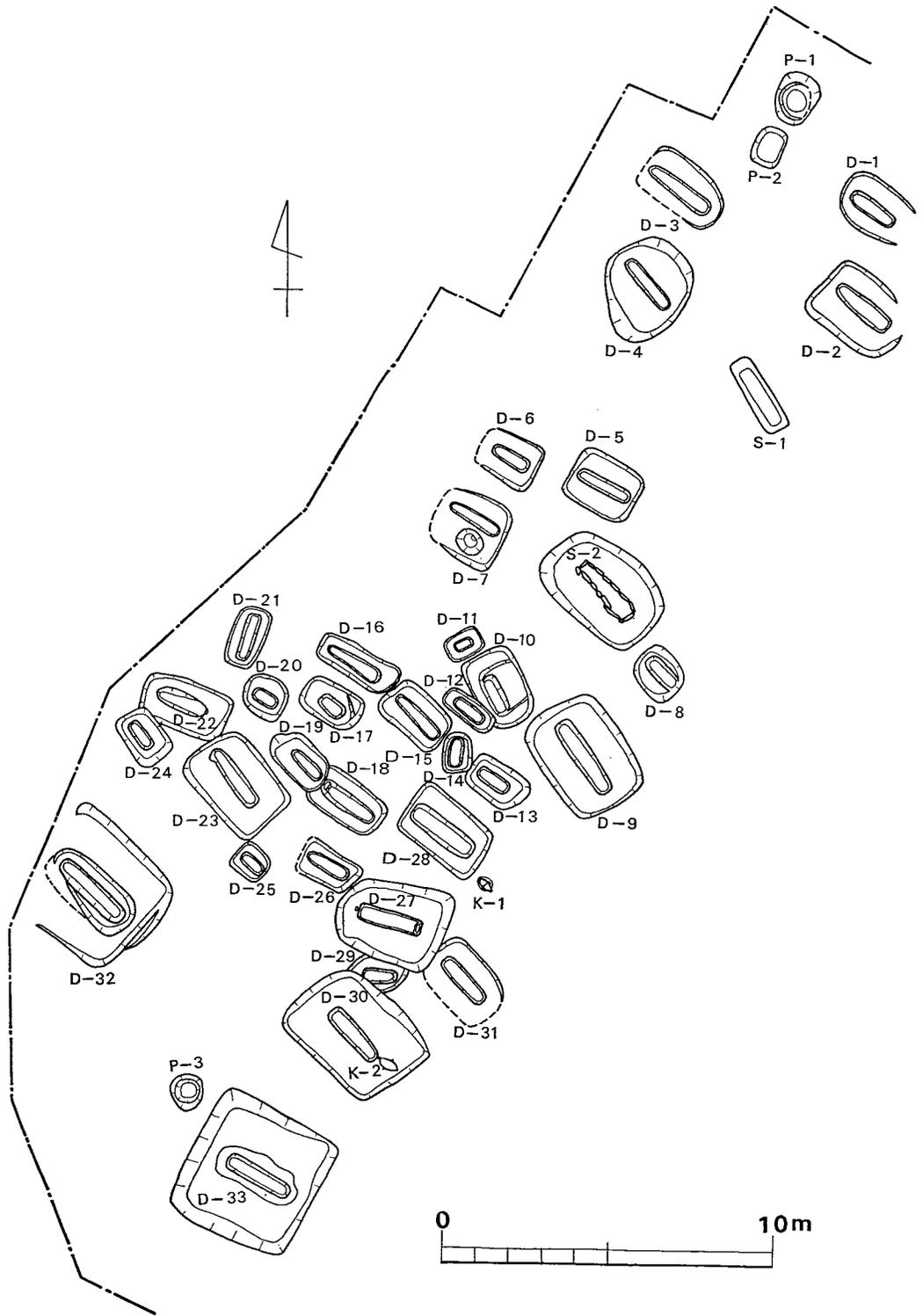
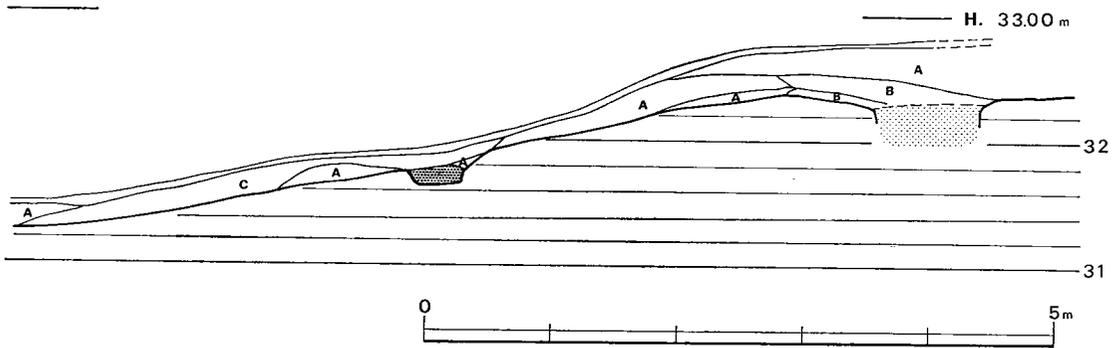


Fig. 19 弥生時代墓地群配置図 (縮尺1/200)

層位

土塚墓が形成されたのは地山を切り込んでつくられている。まず、若干、層位の説明を加えてみる。



アミ部分は 右 古墳時代
左 弥生時代 土塚

Fig. 20 B-II 区 土層図 (1/60)

Aは、赤色粘質土、若干の雲母の含む。

Bは、赤黄色粘質土、Aに比べてかたい。

Cは、A、Bの混じったもの。

当遺跡における弥生時代の遺構はB層から掘り込んでいる。A層はB層と前後、または同レベルで存在する事からも両層共地山の漸移層と考えられる。

このことから、弥生時代の単独の層は確認できなかった。(平ノ内)

以下各土塚墓の説明にはいる。

D-1号土塚墓 (Fig. 21)

墓塚の平面形は隅丸方形を呈し、B-1号古墳の掘り方に東側を切られているため正確を記せないが、大きさは長さ230cm、巾168cm、深さ49cmで二段掘りである。棺の主軸S-58°Eで型はB型式、頭を東方向にむけていたと思われる。壁は垂直に棺の底面にとおたつしている。副葬品はなく、木棺形式であったかどうかは不明である。(副島)

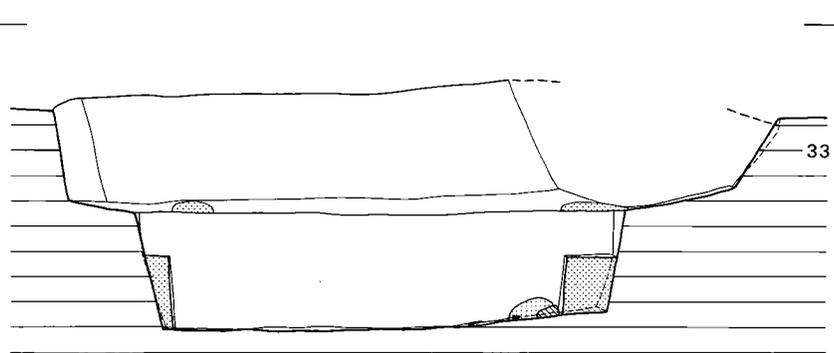
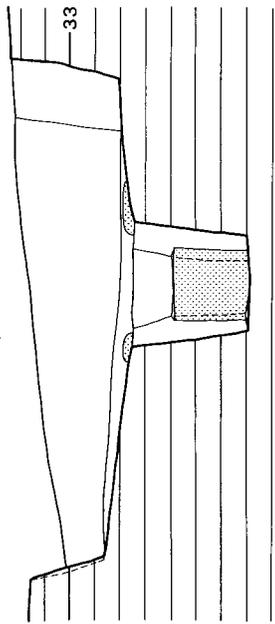
D-2号土塚墓 (Fig. 22)

土塚の平面形は隅丸方形を呈し、北東部をB-1号墳に切られているが、寸法は長さ290cm、巾204cm、深さ84cmで二段掘である。

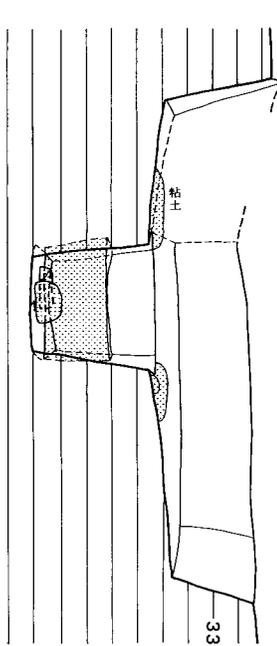
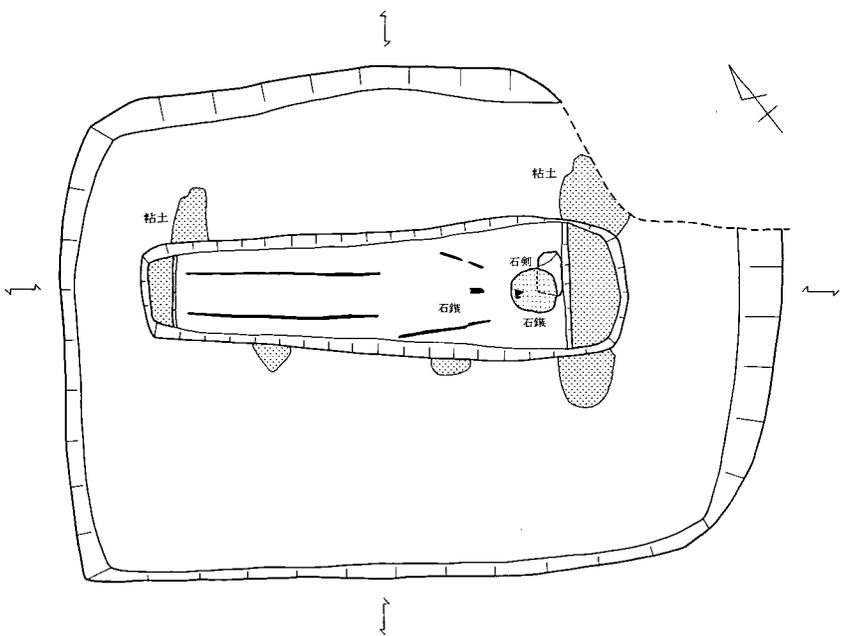
棺は、主軸をS-50°-Eで平面形はB型式である。棺は壁から垂直に切り込まれ棺底面までとおたつする。

一段面の平坦面には蓋木を固定するためのめばりの粘土が带状に4端で検出された。このめばりの状態から、棺の底面には、いまにも土にかえる一歩手前の人骨が残っていた。性別は不明であるが成人であったと推定される。

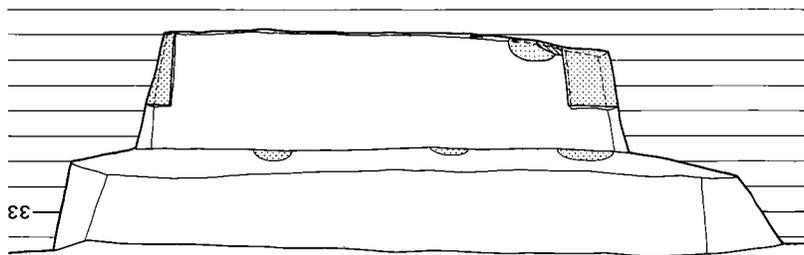
H. 33.50 m



H. 33.50 m



H. 33.50 m



H. 33.50 m

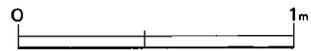


Fig. 22 D-2 号土塚墓 (縮尺1/30)

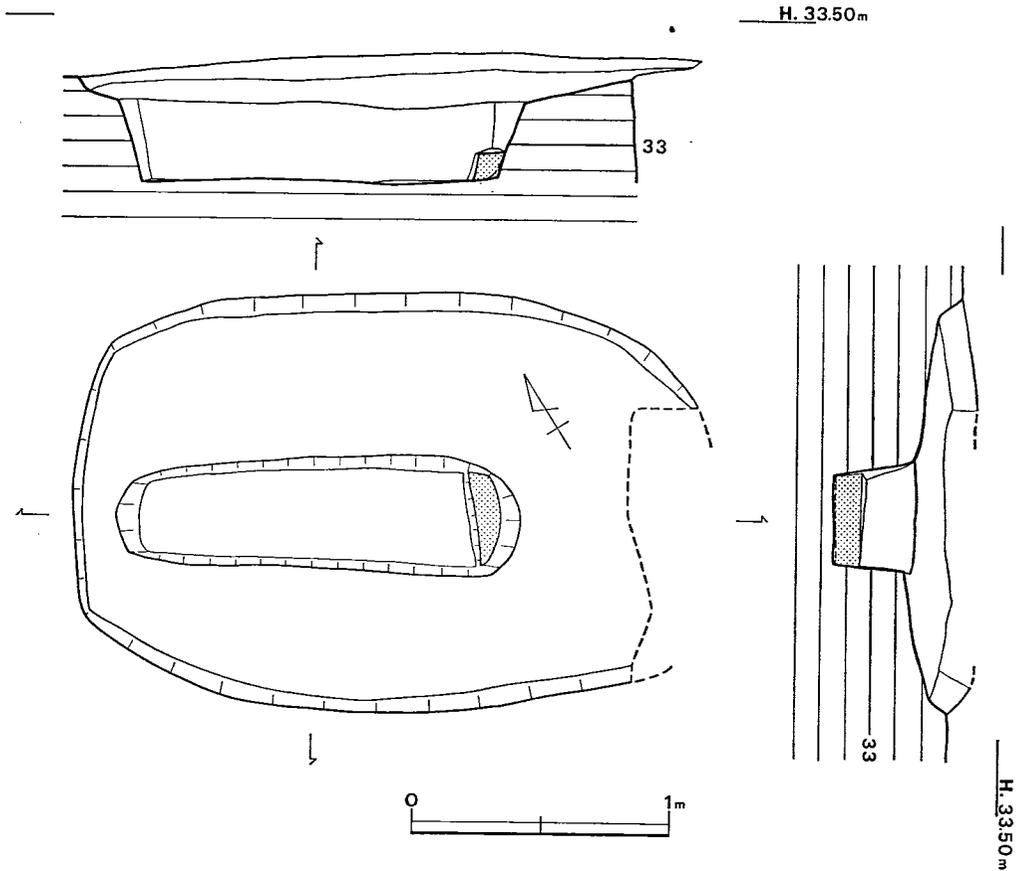


Fig. 21 D-1号土坑墓 (縮尺 1/30)

副葬品として胸部のに磨製石鏃をもち、頭骨下部に磨製石剣の破片と打製石鏃がいっしょに検出された。棺は、人骨の頭頂骨より 5 cm ぐらい上で、粘土をふくんだかたい層にぶつかり 40 cm ぐらい垂直にあがり、そして東側の小口の壁にいたる、中央部の埋土とは相違している。木棺形式の可能性を秘めているが立証することができない。

副葬品の石鏃の出土状態について若干の問題がある。

この石鏃が上部胸椎付近に刺っていたとすれば被葬者の軟部腐蝕後、胸部の下になる可能性があり鏃を射込んだあと剣にてとどめをさした場合が考えられないだろうか、これは推定であるが、すなわち殺されたということである。

頭部の下に花崗岩の石枕があった。(副島)

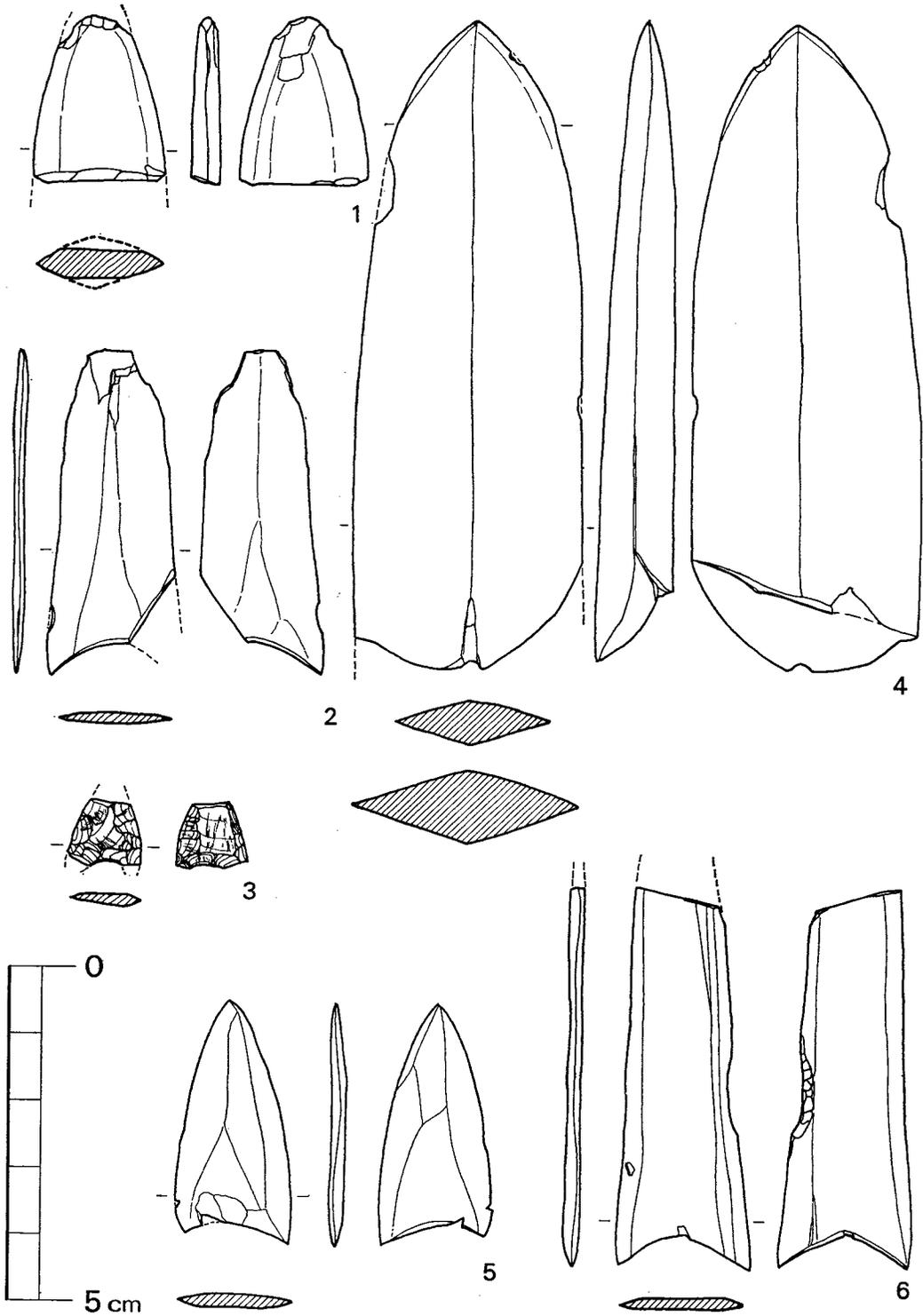


Fig. 23 副葬石器実測図 (縮尺 1/1)

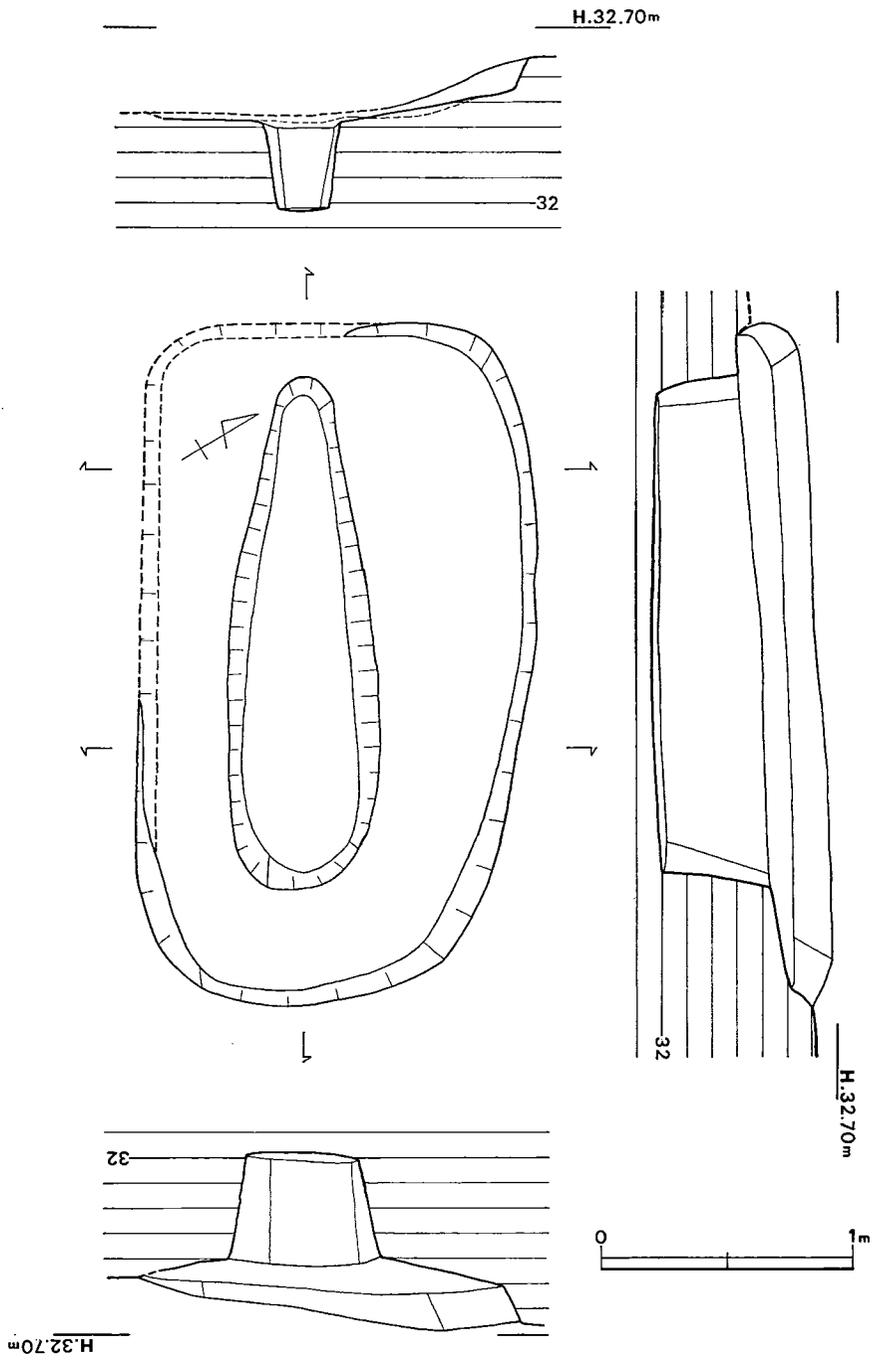


Fig. 24 D—3号土塚墓 (縮尺 1/30)

遺物 (Fig. 23)

磨製石鏃 (Fig. 23—①) 胸部の位置にあり、石質は油質頁岩で先端部が欠損している。もし射込まれていたとするならば刺さった瞬間に欠損した可能性があると思われる。しかしながら脚の部分は片側欠損しているのが問題である。

磨製石剣 (Fig. 23—②) 石質は頁岩製で、頭部下部から打製石鏃とともに出土した。断面は鎗の稜線は退化し、レンズ状の断面となっている。

打製石鏃 (Fig. 23—③) 安山岩製で、先端部と脚部が欠損している。断面はレンズ状を呈しているが、これらの副葬品が殺傷具と使用されたかは推定のいきを脱し得ない。(副島)

D—3号土塚墓 (Fig. 24)

調査区の北端近くD—4号の南にあり、墓塚の平面形は不整形の長方形を呈し、長さ約270cm、幅約158cm、深さ65cmである。

地山が北西に傾斜しているので、西側の掘り方は浅く確認出来なかった。二段掘りで、棺の内法は長軸192cm小口(大)幅46cm、小口(小)幅14cmと顕著に細くなるB型をなす。棺の深さは47cmで棺底は平坦であり四壁ともほぼ垂直に立ちあがる。木棺の形跡は認められない。

主軸方向はS-58°-Eで尾根稜線に対して直交し、頭位は尾根側の東南にとったと考えられる。副葬品はなかった。(日高)

D—4号土塚墓 (Fig. 25)

D—3号の南にあって、墓塚の平面形は不整形長方形を呈する。二段掘りで、棺の平面はB型をなし、主軸をS-41°-Eにとり、棺底まで54cmである。棺底は水平をなし、東側に土にかえる一歩手前の人骨の頭部が残っていた。歯から成人であったことは推定される。木棺の形跡は認められない。副葬品はなかった。(副島)

D—5号土塚墓 (Fig. 26)

墓塚平面形は長方形に仕上げ、主軸215cm、幅175cm、深さ75cmを測る二段掘りの土塚である。

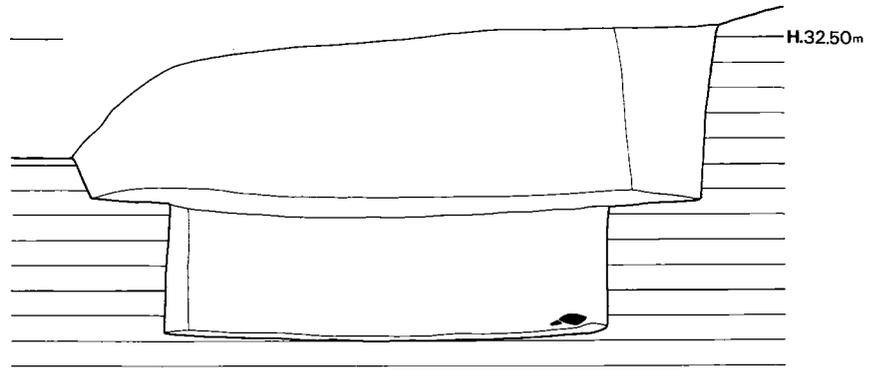
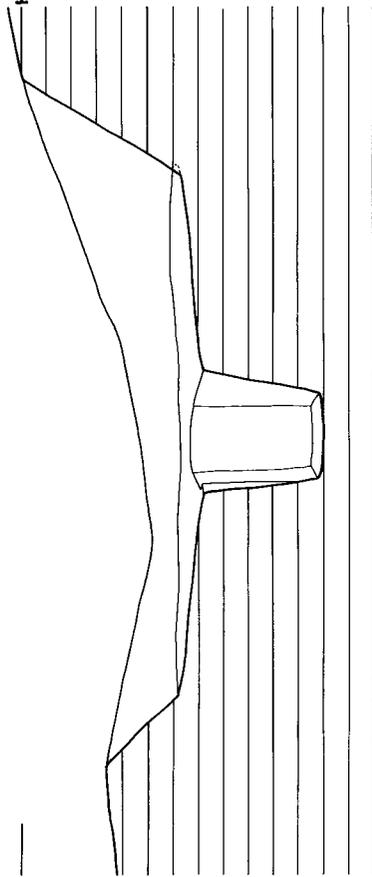
墓塚一段目の立ち上りは、北壁で40cmを測り、他の壁は削平されているので不明である。

棺の平面形はB型に属するもので、長軸160cm小口最大幅28cm、小口最小幅18cm、深さ32cmを測り、床面は水平で西側に細くなる隅丸方形である。

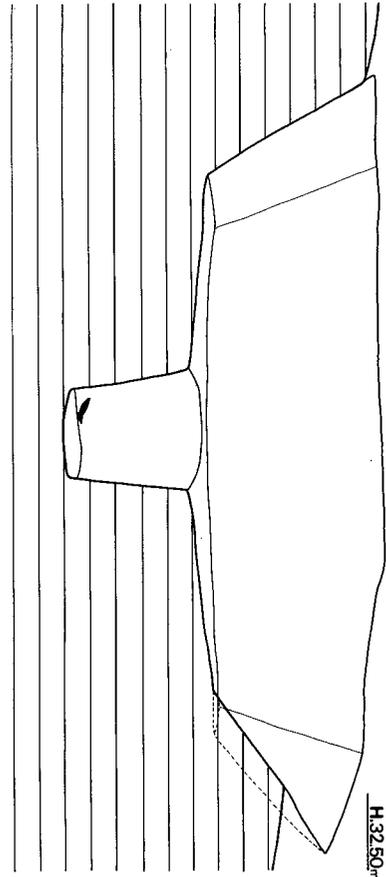
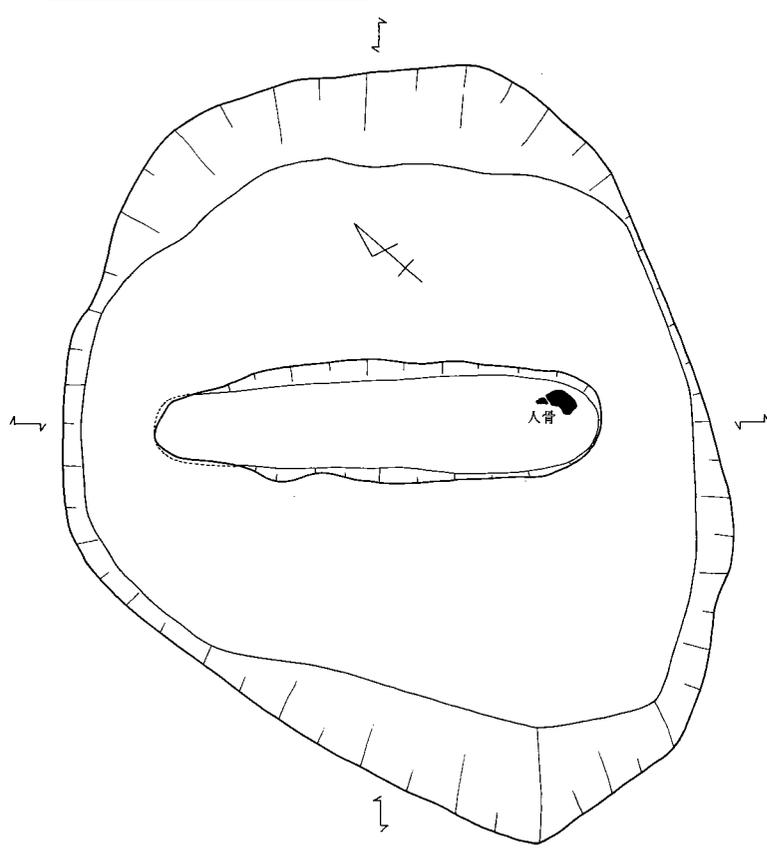
頭部位置は、小口最大幅に置いたものと考えられ、尾根線に対してほぼ直行し主軸をS-59°-Eを示す。

棺内壁には裏込めの痕跡は残っておらず、また西側小口が細くなる事などから考えて、土塚形式であったものと思われる。(平ノ内)

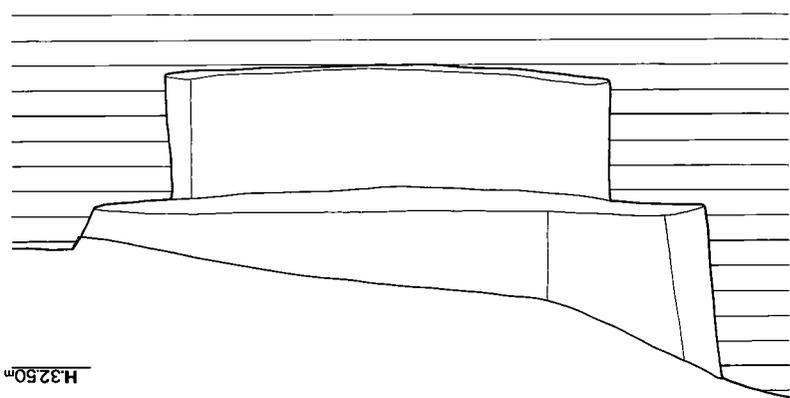
H.32.50m



H.32.50m



H.32.50m



H.32.50m



Fig. 25 D-4 号土塚墓 (縮尺1/30)

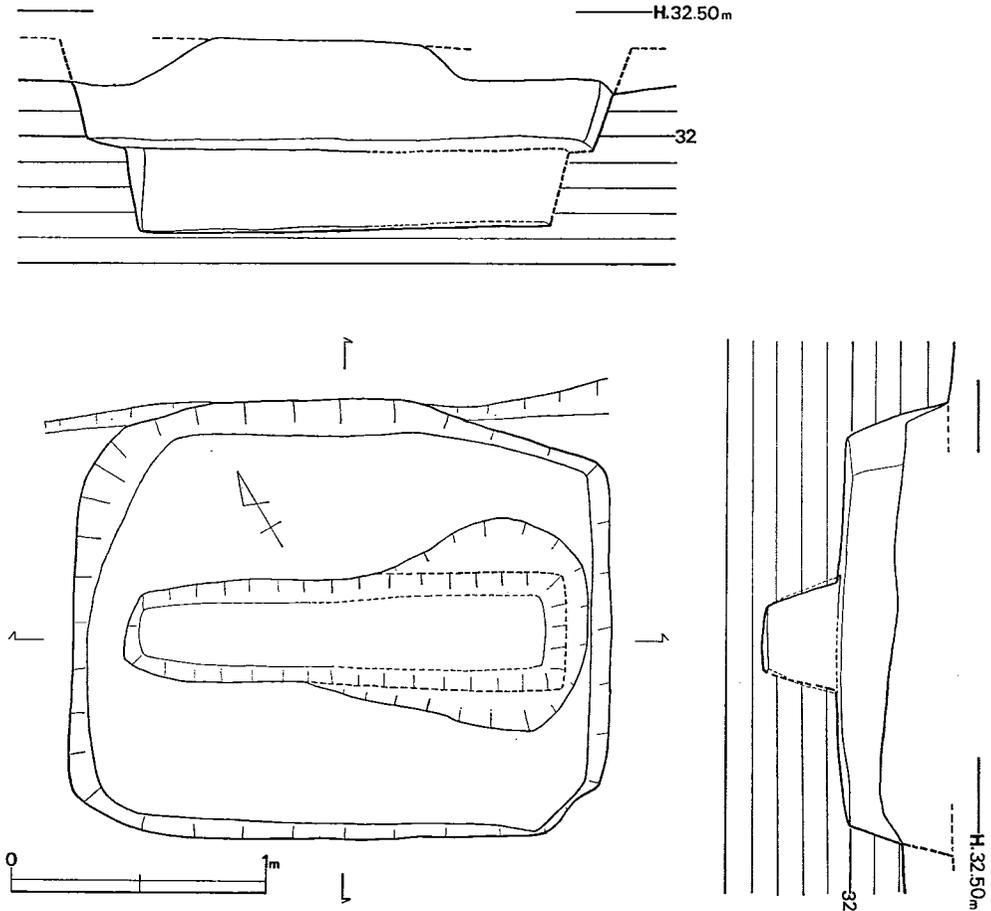


Fig. 26 D-5号土塚墓 (縮尺 1/30)

D-6号土塚墓 (Fig. 27)

墓塚の平面形は長方形を呈し、二段掘で棺の平面形はC型をなし、主軸をS-54°-Eにとり、棺底まで35cmである。

棺底は水平をなし、副葬品はなし。(副島)

D-7号土塚墓 (Fig. 27)

墓塚の平面はほぼ正方形をなし、二段掘りであるが、横に円形の pit をもつ、円形の pit からは遺物は何も出土していない。断面は摺鉢状に落ちる。壁部分に人頭大の石が密着していた。

棺の平面形はB型を呈し、副葬品として玉類が出土している。水晶玉2・管玉(細身)11・ガラス玉8で、東の小口から約30cmで、玉類の検出した場所からは丹が若干検出された。小口の形を調整するため粘土をもって裏側を補強している。

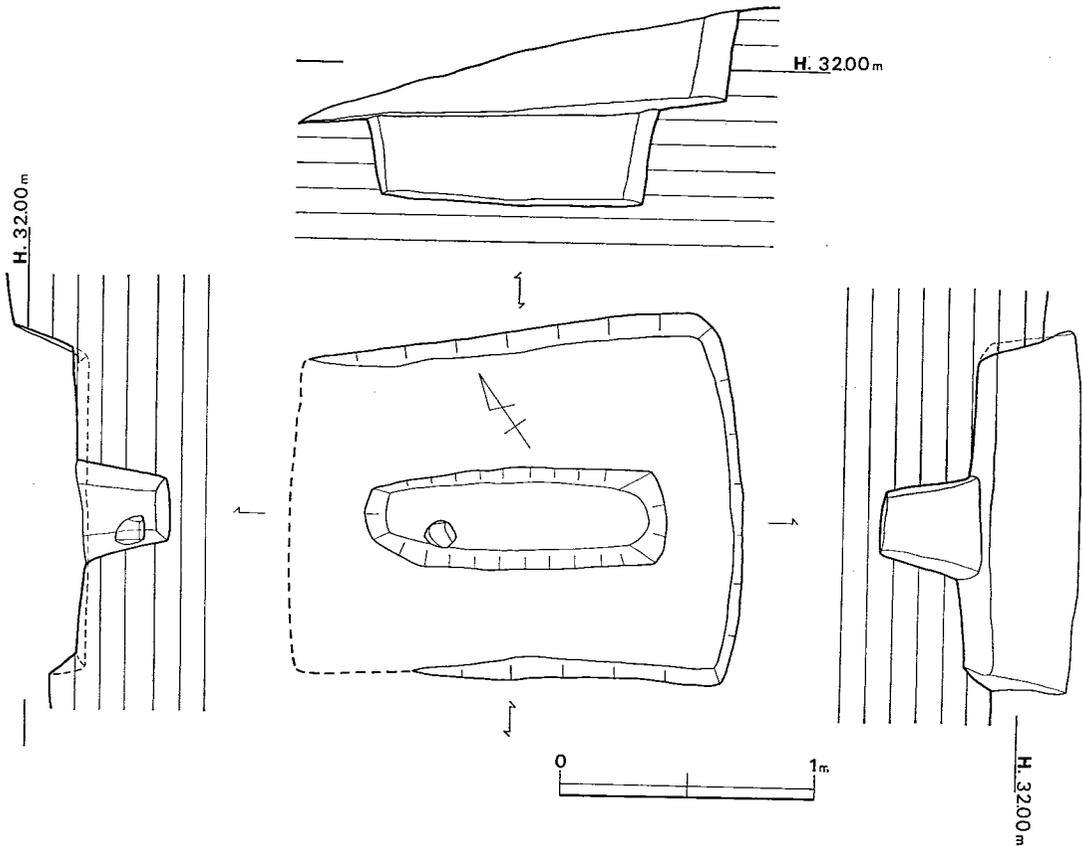


Fig. 27 D-6号土塚墓 (縮尺 1/30)

遺物 (Fig. 30)

副葬品としてはほぼ東を頭にした場合、頸部に位置している。玉類の内分は水晶玉2、管玉11、ガラス玉8の計21点である。

水晶玉 (Fig. 30-①②) 2点 形からは棗玉の形をとるが中央の稜線がない。穿孔技術は幼稚で両面から孔をあけて中央で接合している。しかし、水晶を磨く技術は非常に丁寧である。玉の先端部に若干の六角形の稜線が残っている。大粒の水晶玉である。

管玉 (Fig. 30-③~⑬) 11点 石質は軟玉で穿孔技術は稚拙であり、両面から穿孔をおこなっており、仕上げは上手ではない。管玉は細身で古い形態を呈している。

ガラス小玉 (Fig. 30-⑭~⑳) 8点 ライトブルーの淡い色を呈して、両面から穿孔である。中央部が両端よりも径が小さい。重量は100mg以下である。

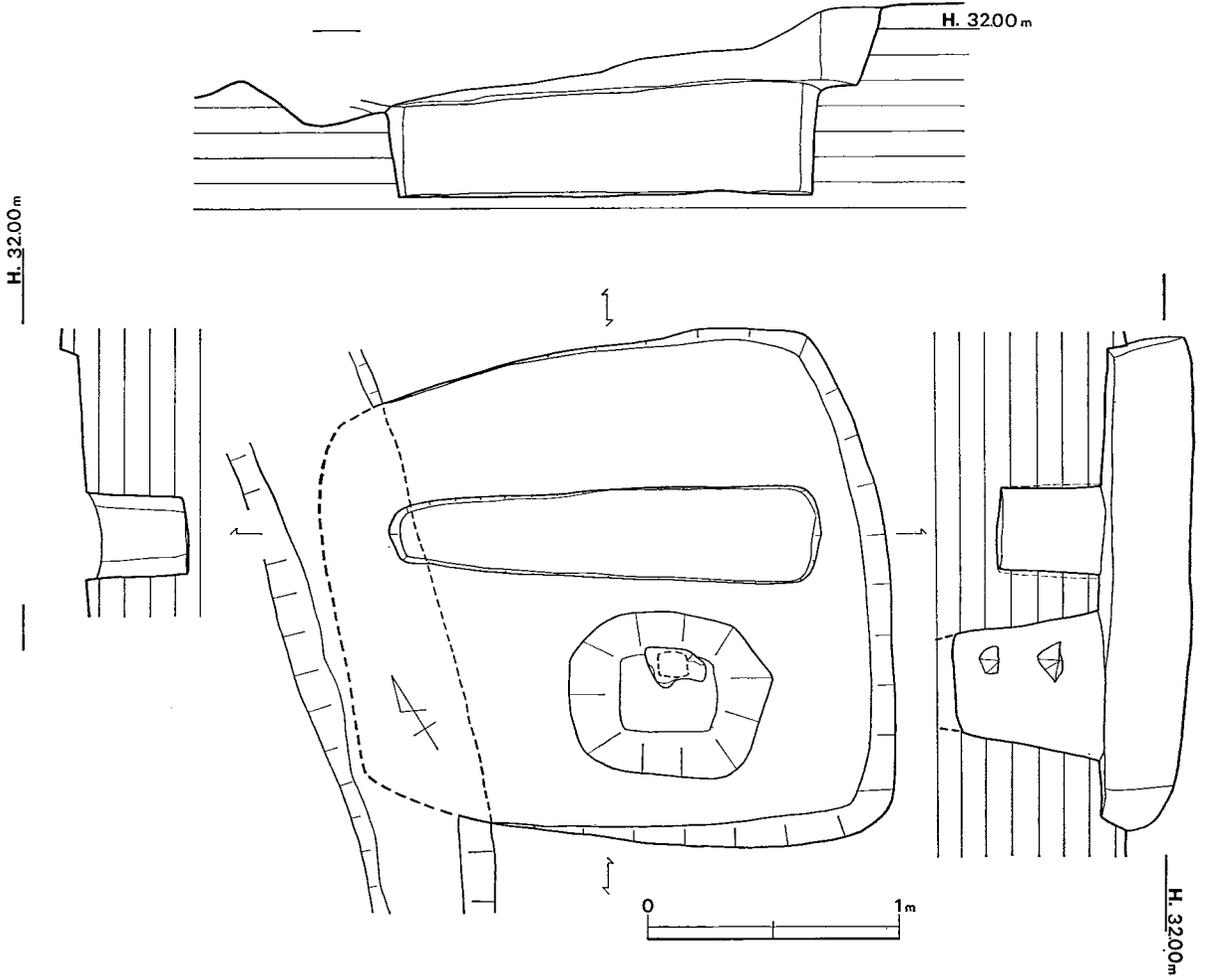


Fig. 28 D-7号土塚墓 (縮尺 1/30)

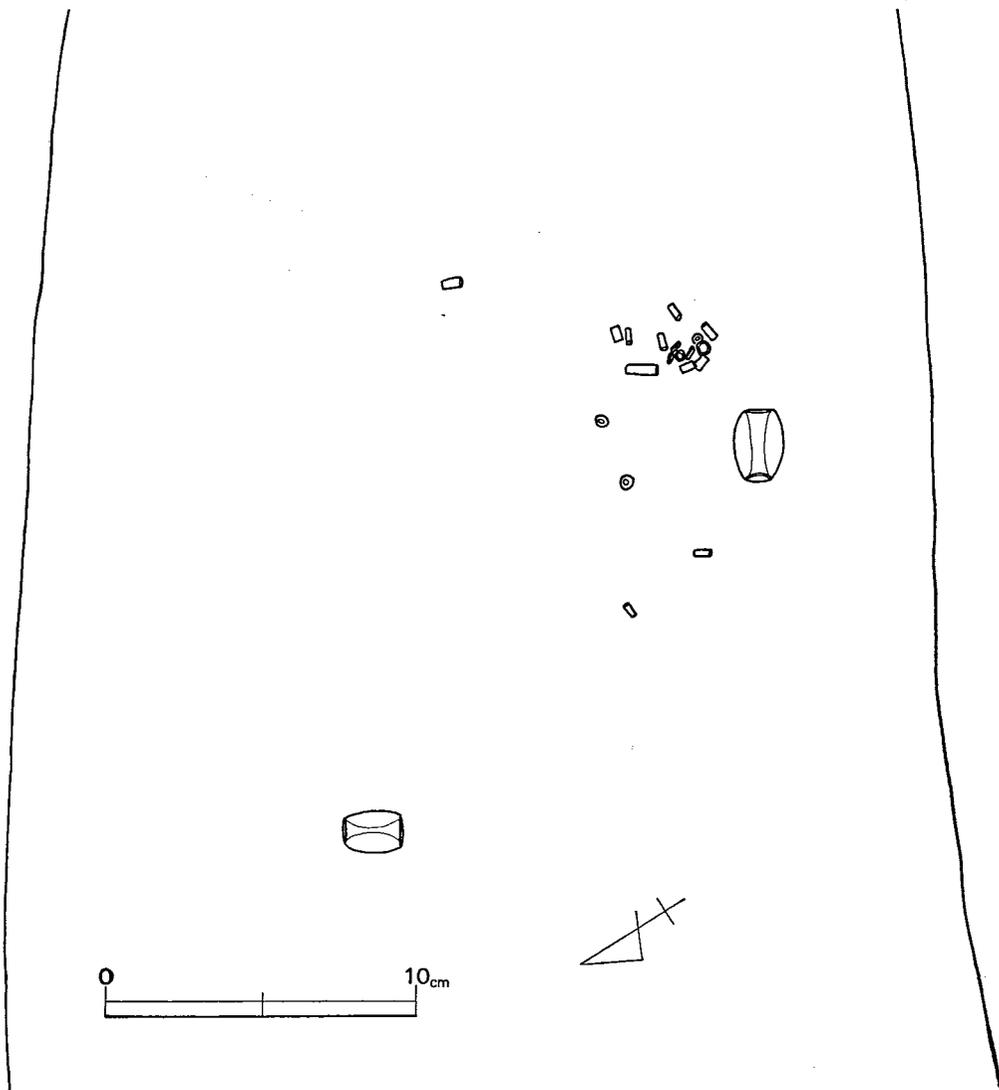


Fig. 29 玉類出土状態

時期的には、管玉及びガラス小玉は古い形をのこしている、問題は水晶玉である。土塚墓の出土状態から弥生時代中期の始め頃に存在したと思われる。

計測値については表4を参照されたい。(副島)

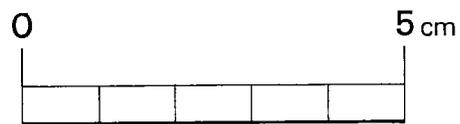
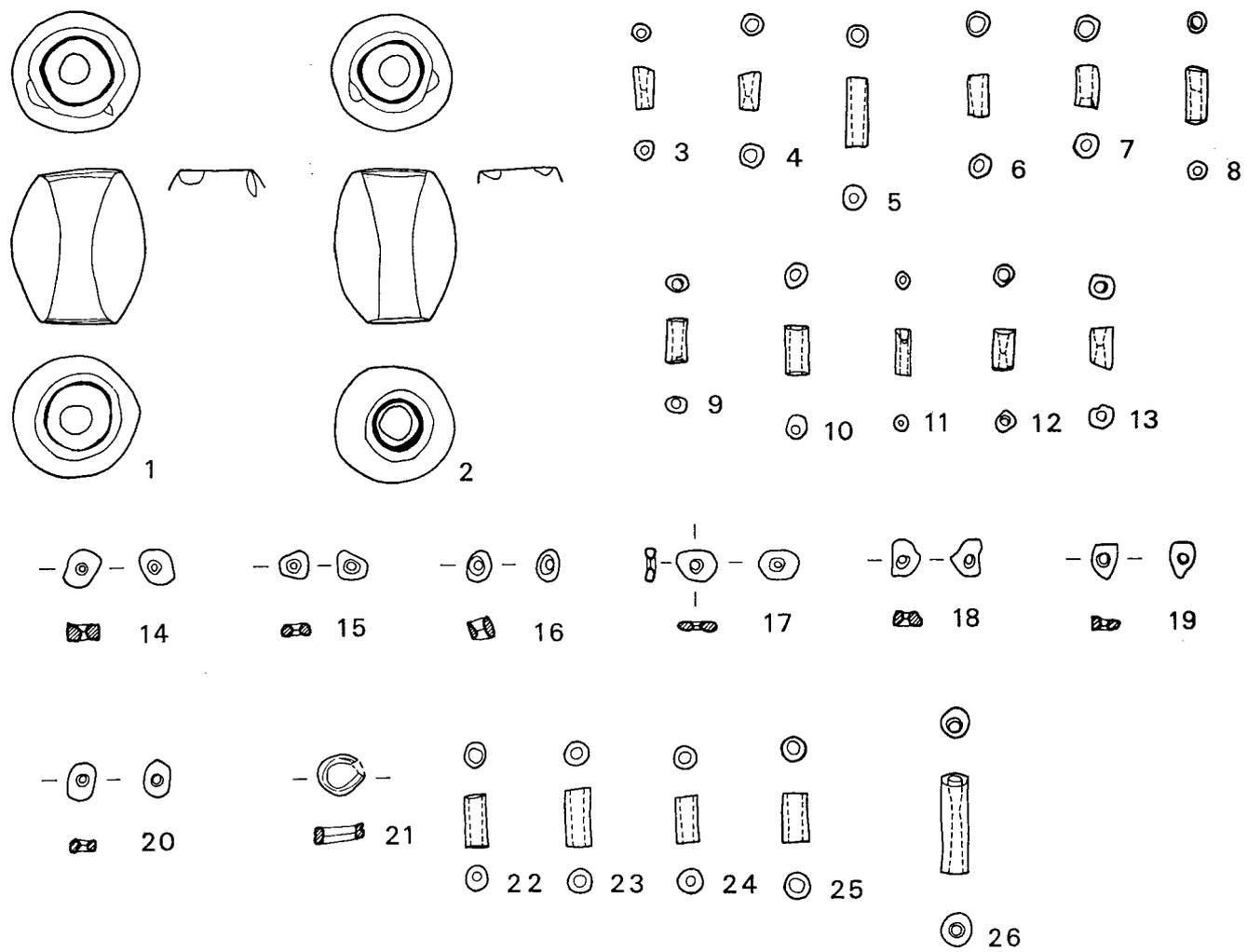
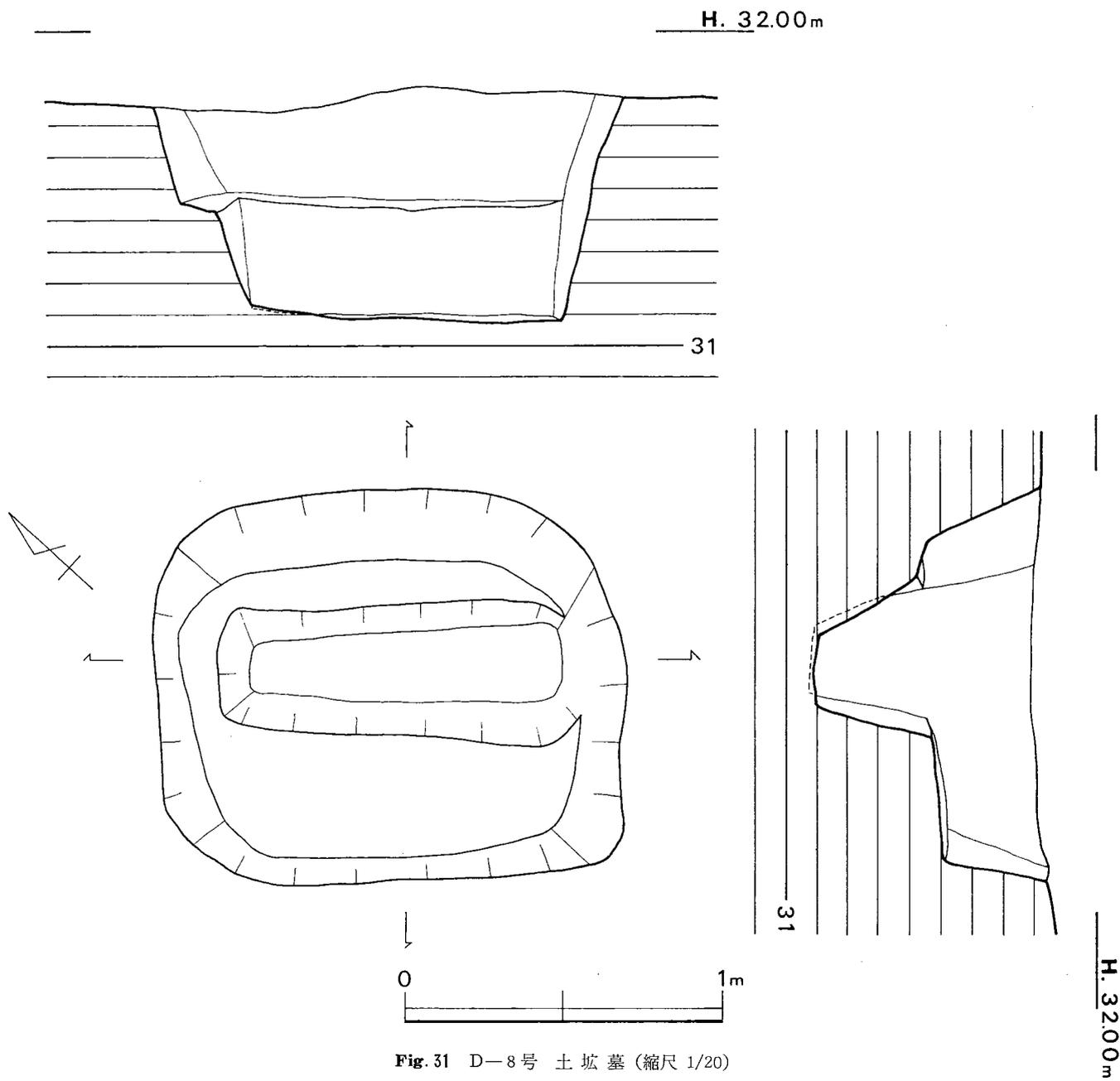


Fig. 30 出土玉類実測図(縮尺 1/1)

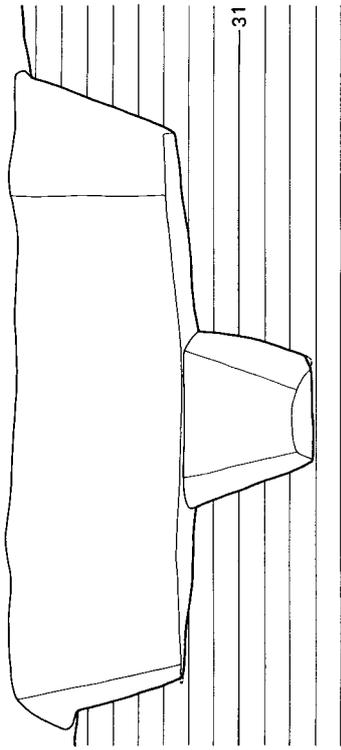
1~21 D-7号土坑墓

22~25 D-33号土坑墓

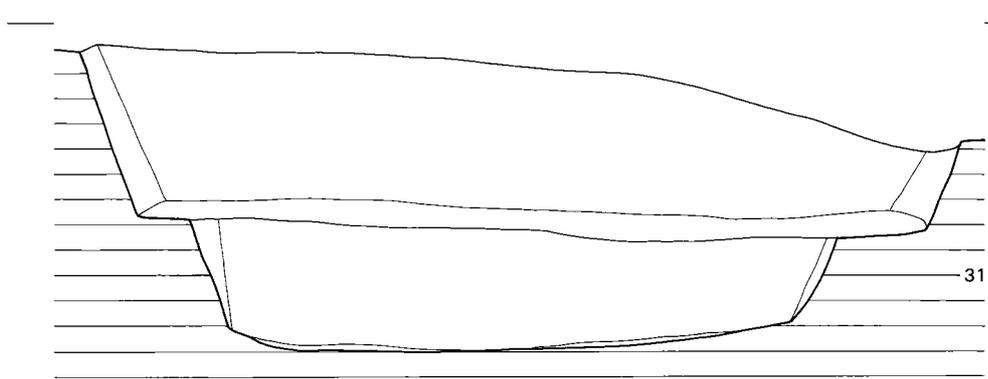
26 D-30号土坑墓



H. 32.00m

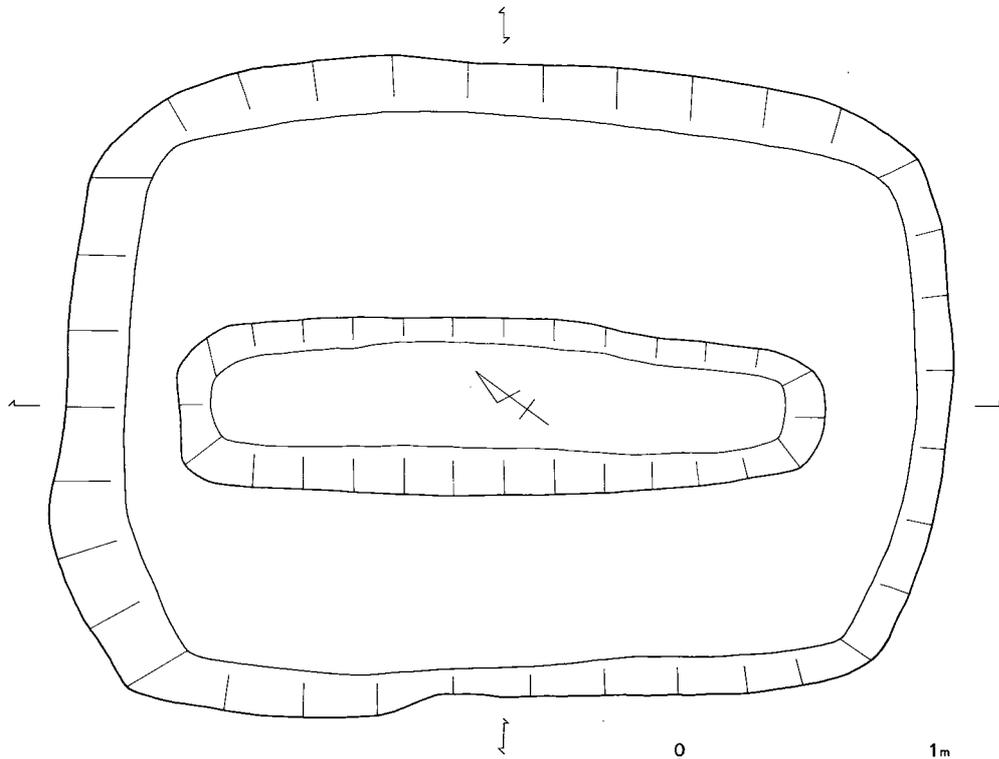


31



H. 32.00m

31



31

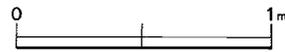


Fig. 32 D-9 号土 塚 墓 (縮尺1/30)

H. 32.00m

表4 玉類計測表(単位mm:重さg)

土塚墓番号	D - 7												
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
長さ	22	22	6	5.5	11	6.1	6.2	8.2	6.6	7.2	6.8	6	6.2
径	18	17	2.8	3.1	3.0	3.2	3.2	2.8	2.8	3.5	2	3	3.1
孔径	4.5	4.5	1.3	1.9	1.8	2.2	1.6	1.5	1.5	1.5	1	1.5	1.8
重さ(g)	9.3	9.1	※	※	0.1	※	※	0.1	※	※	※	※	※
穿孔方向	両	両	両	両	片	片	両	両	両	両	両	両	両

土塚墓番号	D - 7										D - 33				D-30
	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26		
長さ	2.8	1.8	3.2	1.6	2.2	2.2	2.2	2.4	7.8	8.4	7	7	14.4		
径	5.6	4.6	4.6	5.8	5.4	5.2	5.6	6.8	3	3.5	3	3.5	4		
孔径	0.4	0.6	1	0.6	0.6	0.8	0.6	4.4	1.8	1.8	1.5	1.8	2		
重さ(g)	※	※	※	※	※	※	※	※	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1 _上		
穿孔方向	両	両	両	両	両	両	両	一	片	両	片	両	両		

(※ 0.1g以下)

D-8号土塚墓 (Fig. 31)

当遺跡において小型の類に入り地山を、二段に掘り込んで作られた土塚墓である。墓塚の掘り方は隅丸長方形を示し長さ150cm、幅124cm、深さ70cmを測る。

棺部の平面形はB類に属し長軸99cm、小口最大部東側25cm、最小部幅西側15cm、深さ36cm、主軸の方向はS-42°-Eを指す。棺床面は小口最小幅より最大幅への傾斜が若干見られる。壁はやや傾斜を見せながらたちあがる。

この土塚墓の特徴として小口最大幅（頭位部）側は二段掘を示さず墓塚掘り方より直接棺底まで掘りこまれている。遺物は出土しなかった。(佐土原)

D-9号土塚墓 (Fig. 32)

墓塚の平面形は隅丸長方形を呈し、二段掘りで大きな墓塚である。主軸をS-36°-Eにとり、棺の平面形はC型である。壁はほぼ垂直に近い形で、底面にいたる棺底は水平をなしている。副葬品はない。(副島)

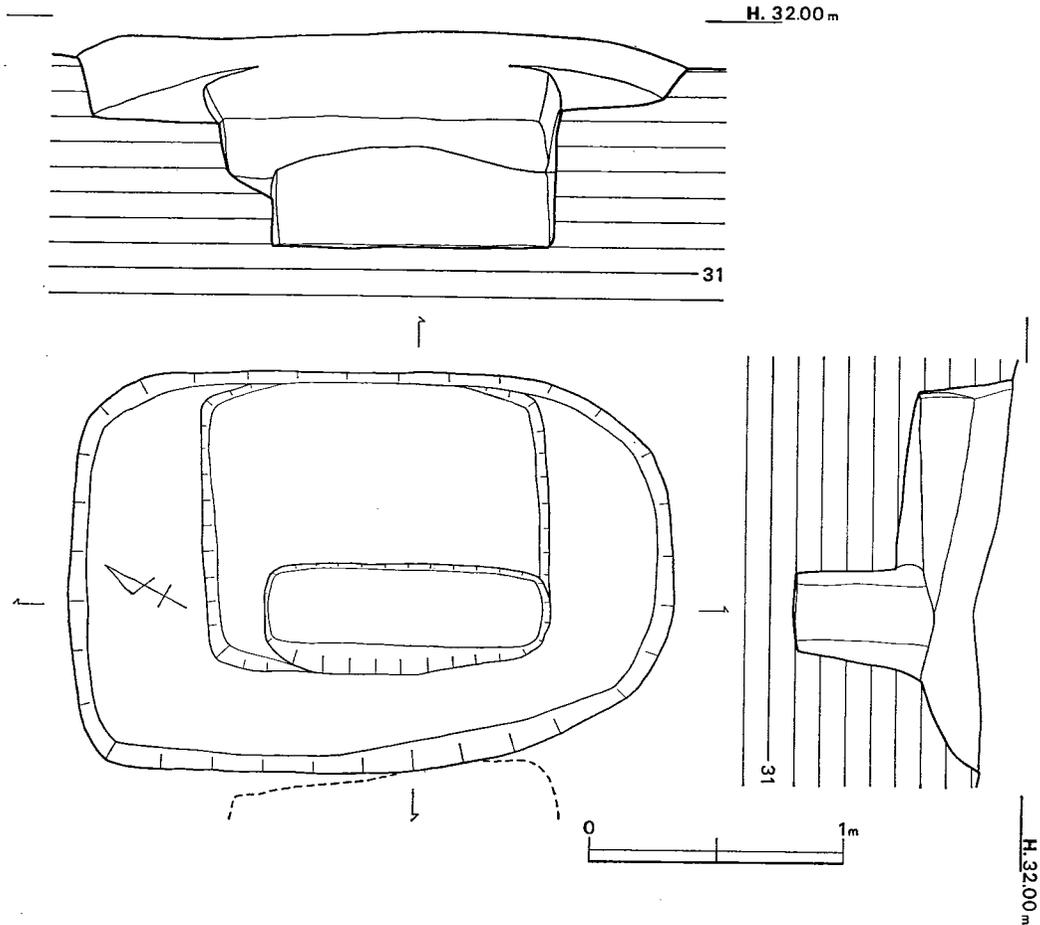


Fig. 33 D-10号土塚墓 (縮尺 1/30)

D-10号土塚墓 (Fig.33)

墓塚の平面形は不整長方形を呈し、二段掘りである。棺は中央部より若干はずれており、主軸はS-28°-Eで、棺の形態はC型である。北側に蓋を埋設するため構造がつくられている可能性を秘めている。副葬品なし。(副島)

D-11号土塚墓 (Fig.34)

墓塚の平面形は隅丸長方形を呈し、小形である。主軸はN-63°-Eで、棺の形態はC型である。今までより棺の方向が相違する。当遺跡では小さい方である。副葬品なし。(副島)

D-12号土塚墓 (Fig.35)

墓塚の平面形は隅丸長方形を呈し、小形である主軸はS-50°-Eで、棺の形態はA型である。

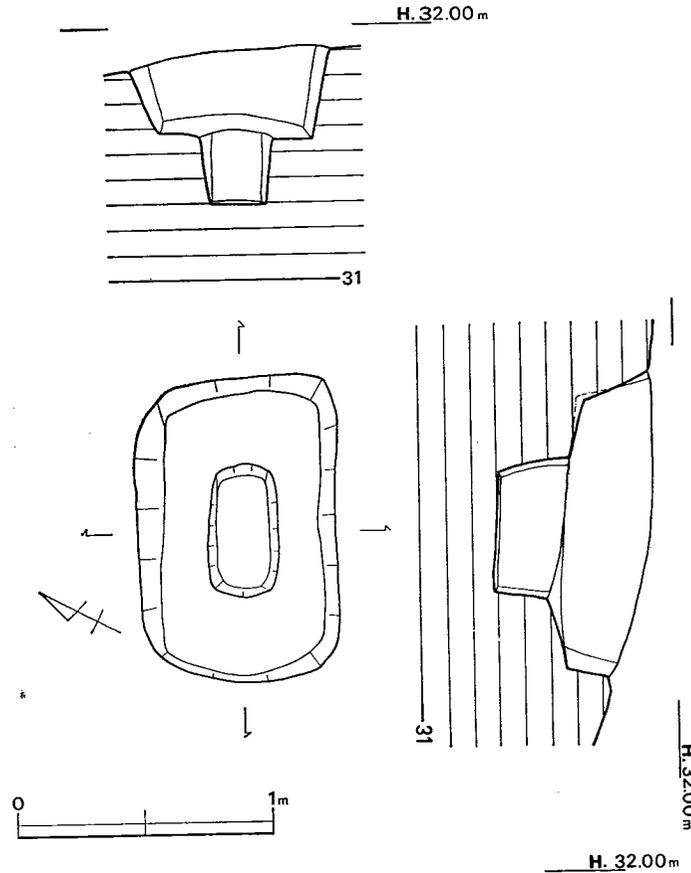


Fig. 34 D-11号土塚墓
(縮尺 1/30)

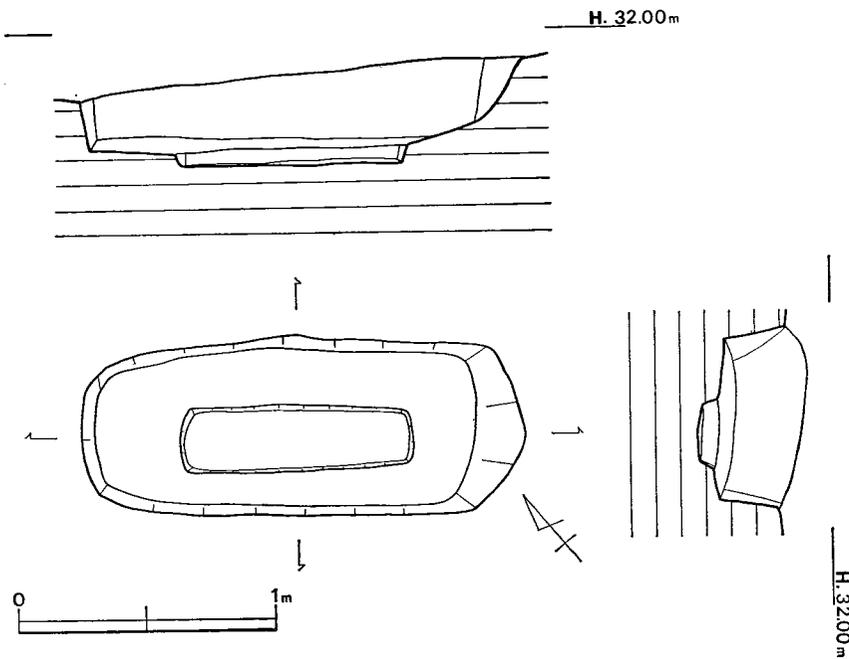


Fig. 35
D-12号土塚墓
(縮尺 1/30)

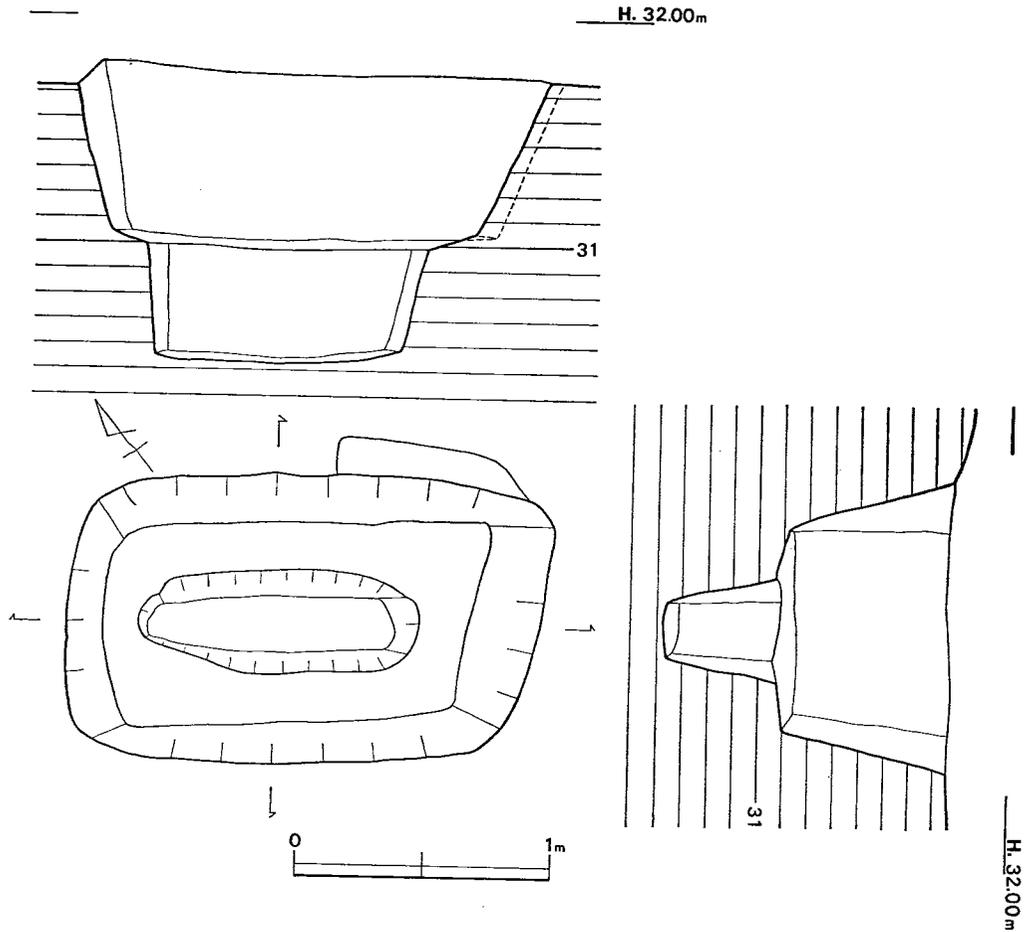


Fig. 36 D-13号土塚墓(縮尺 1/30)

D-10号との切り合い関係があり、D-10号よりも新しい。副葬品なし。(副島)

D-13号土塚墓 (Fig. 36)

14号土塚墓より西辺を切られた土塚墓である。墓塚の掘り方は東辺で歪みを持つ略長方形で長さ186cm、幅116cm、深さ114cmを測る。棺部の平面形はB型に属し長軸98cm、小口最大部幅20cm、最小部幅17cm、深さ45cm、主軸の方向はS-52°-Eを指す。棺床面は中央部にくぼみを見せる。壁はやや傾斜を見せながらたち上る。墓塚上端より棺部掘り込み面までが深い。遺物は出土しなかった。(佐土原)

D-14号土塚墓 (Fig. 37)

墓塚の平面形は隅丸方形で、棺底に人骨の一部が残っており大腿部の一部と下顎骨一部歯冠

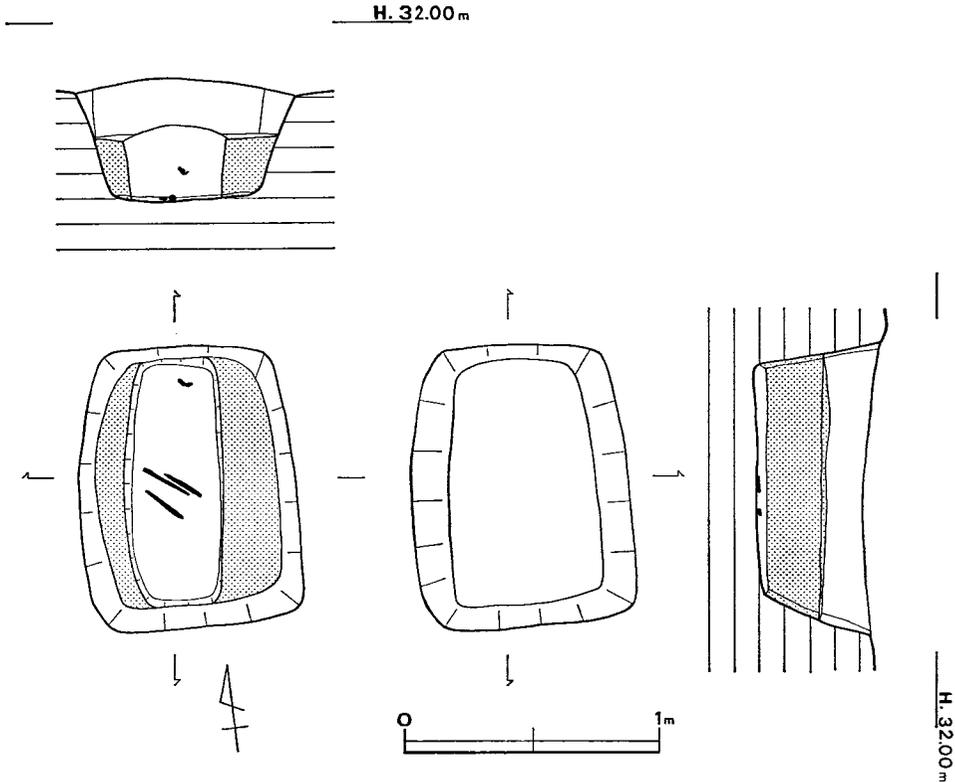


Fig. 37 D-14号土塚墓(縮尺 1/30)

が残っていた。主軸はN-8°-Eで棺の形態はA型であるD-13号と切り合っており、切り合関係からD-31号より新しくなる。棺は一段掘りであるが裏込をほどこし棺材を設定していると思われるので木棺形式であった可能性をもつ。(副島)

D-15号土塚墓 (Fig. 38)

磨製石剣先端部、(Fig. 23-④)を出土した土塚墓である。墓塚の掘り方は13号土塚墓と同じく東辺に歪みを持つ略長方形で長さ212cm、幅140cm、深さ79cmを測る。

棺部の平面形はB型に属し長軸160cm、小口最大幅34cm、最小幅18cmで東頭位と考えられ主軸の方向はS-43°-Eを指す。棺床面は頭位側(小口最大幅)より足位部側(小口最小幅)へと若干下る。壁は垂直に近くたちあがる。

石剣刃先は棺中央部より若干頭位側に刃先を内側にして出土した。

遺物

磨製石剣 (Fig. 23-⑤) 刃先は断面菱形で厚さ1cm、残存長9.6cm、幅3.5cmを測り、石質は頁岩である。頭位と棺長から推察すれば腰に近い位置に副葬されたとも思われる。(佐土原)

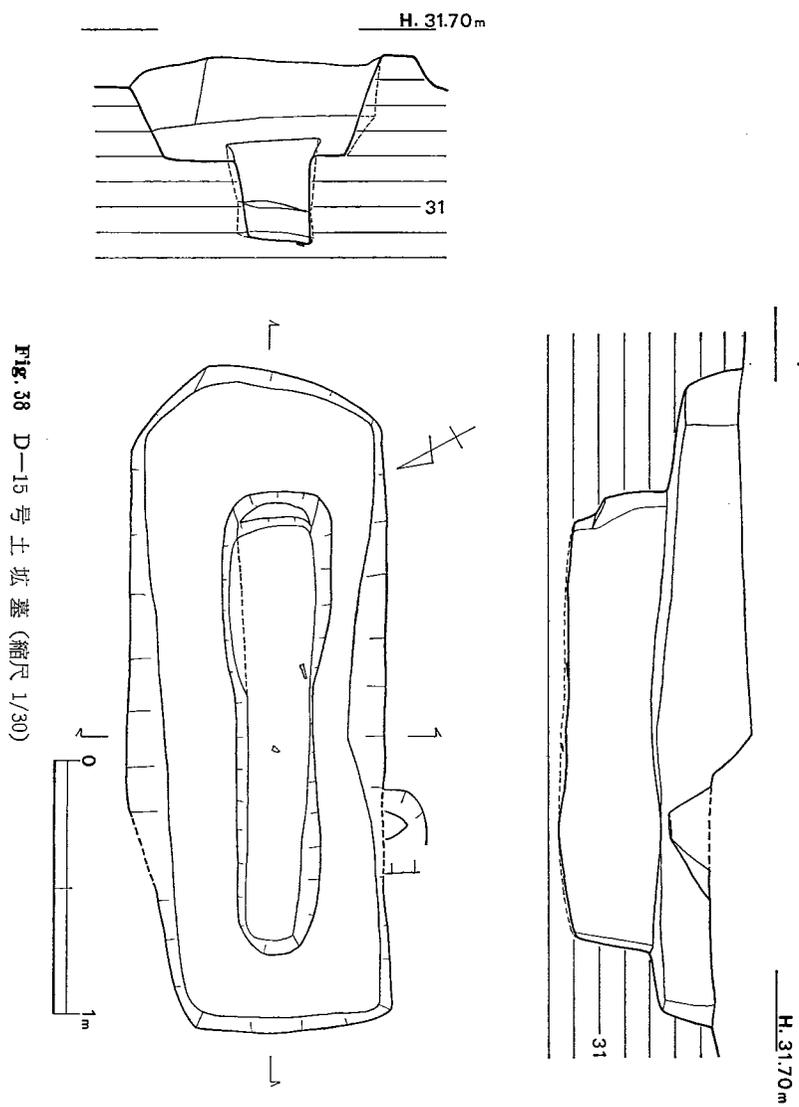


Fig. 38 D-15号土坑基(縮尺 1/30)

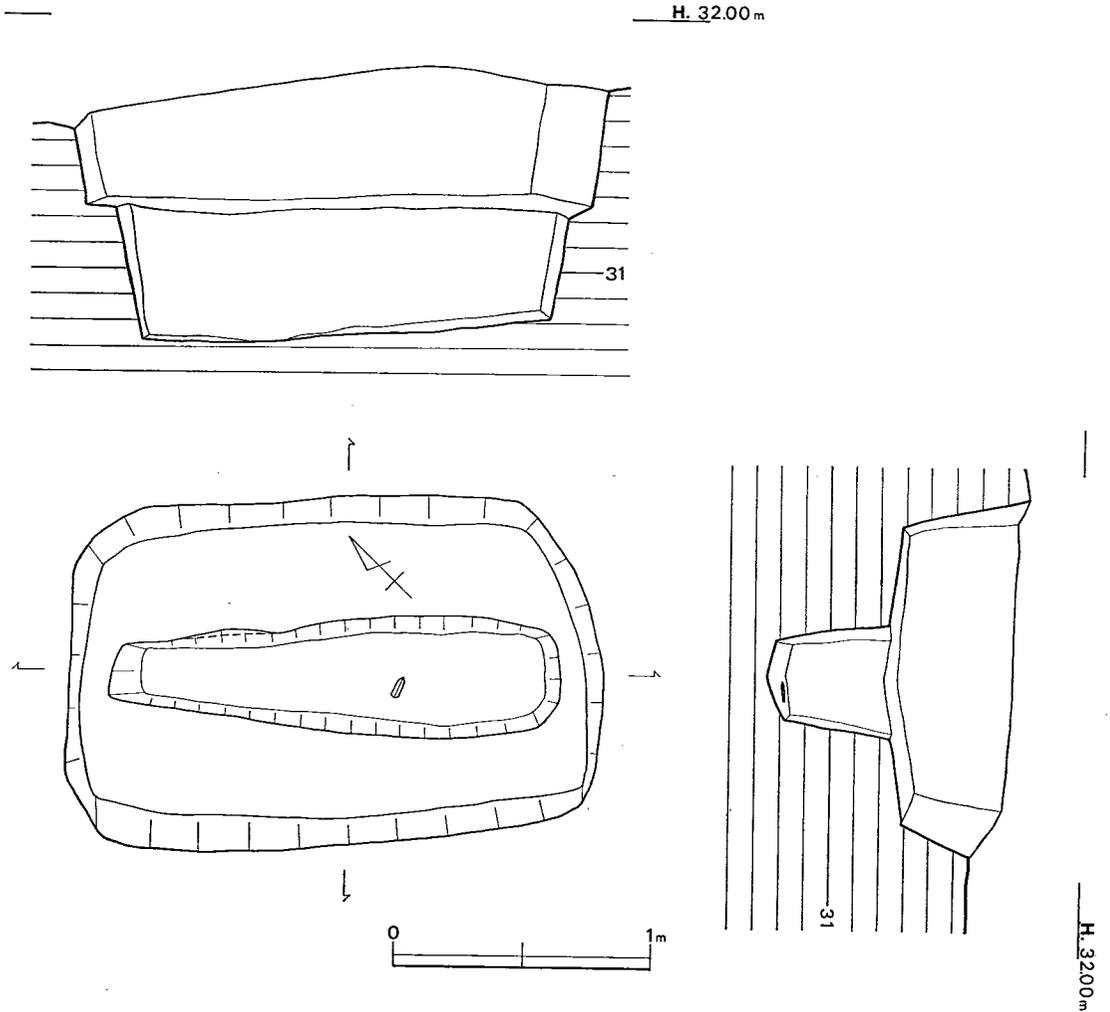


Fig. 39 D-16号土塚墓 (縮尺 1/30)

D-16号土塚墓 (Fig. 39)

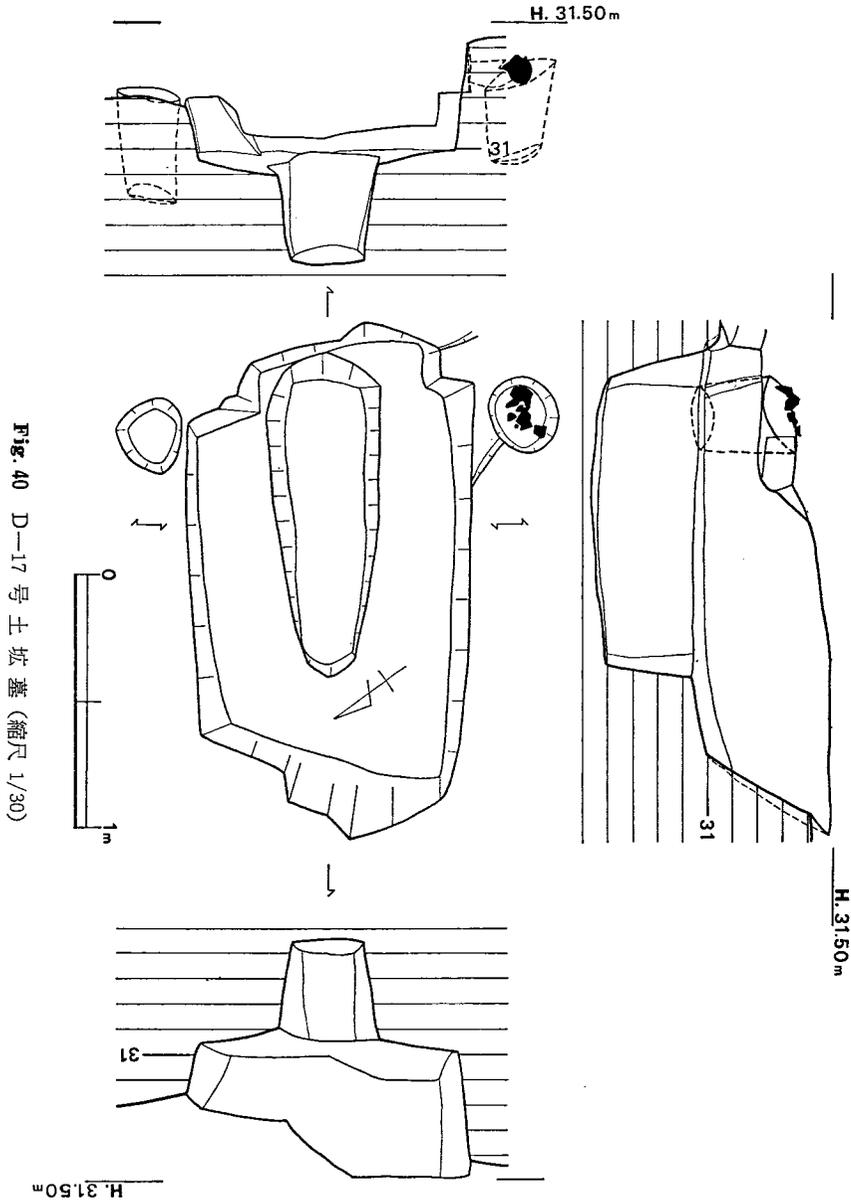
当土塚墓棺部より磨製石鏃2点(Fig. 23-⑤・⑥)を出土した。土塚墓群中、磨製石器(武器)を出土した遺構が3例目のものである。15号土塚墓西側に、東辺を接し西側に長軸をのぼす。墓塚の掘り方は長方形で長さ265cm、幅100cm、深さ72cmを測る。

棺部の平面形は、B型に属し長軸165cm、小口最大を東に30cm、最小幅19cm、深さ42cmで主軸の方向S-61°-Eを指す。棺床面はほぼ平坦になり壁はほぼ垂直に立ち上がる。

遺物

磨製石鏃 (Fig. 23—⑤・⑥) ⑤ 頁岩を石材として用い、残存長 5 cm、最大幅 2.0 cm、厚さ 0.5 cm、えぐり 0.5 cm を測る。先端部が欠けている。側辺部はほぼ直線的に走っている。

⑥ 逆ハート形を呈する頁岩製で長さ 3.6 cm、最大幅 1.7 cm、厚さ 0.2 cm、えぐり 0.2 cm を測る。両面共に研磨の跡が稜線として残っている。(佐土原)



D-17号土塚墓 (Fig. 40)

棺形B型土塚掘り方は、長さ187cm、幅119cmの小形の掘り方で、棺内法長軸74cm、幅33cm、下部11cm、深さ33cmの小形土塚である。土塚掘り方は、東側頭部において、段をつけられている。

土塚中央部は、後世の溝が走っている。このD-17号土塚については小児用土塚と思われるが、D-14号土塚の様に小型でも成人骨がみられる様に、一概に小児用ときめる事はできないが、大きさから考えて、小児用と考えるのが妥当と思う。(平ノ内)

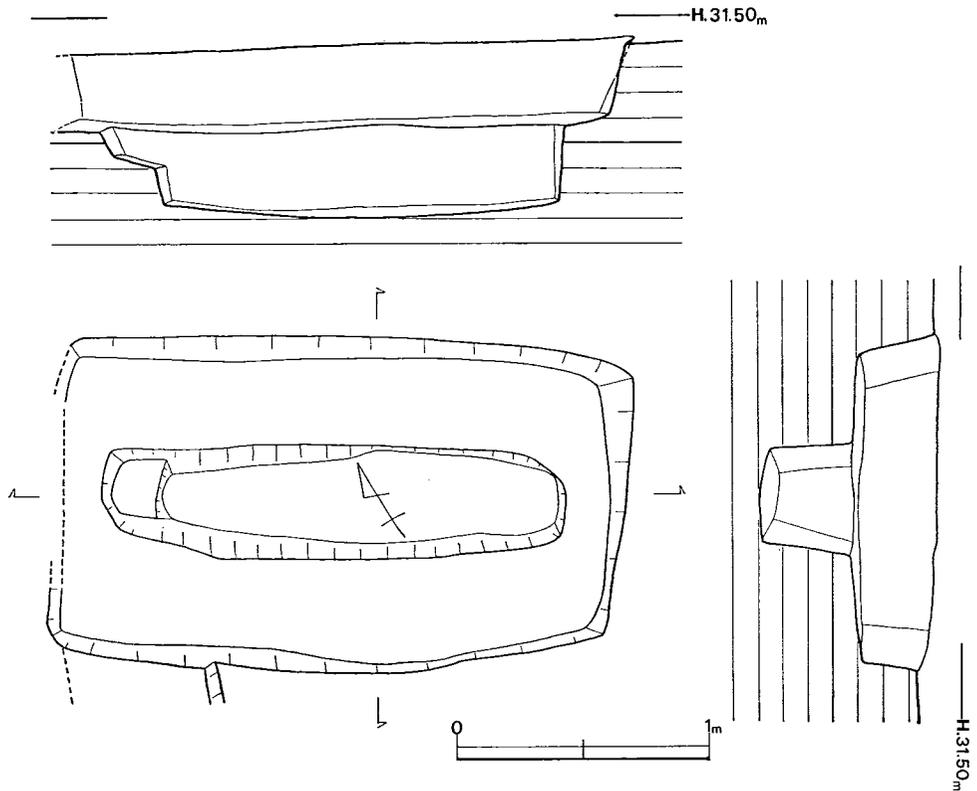


Fig. 41 D-18号土塚墓 (縮尺 1/30)

D-18号土塚墓 (Fig. 41)

墓塚平面形は長方形に仕上げ、主軸約230cm、幅121cm、深さ70cmを測る二段掘りの土塚である。

墓塚一段目のたちあがり、東壁約30cm、北壁30cmを測る。西壁は古墳時代の溝で切られているため不明である。南壁は尾根の傾斜のため低くなる。棺平面形はB型に属し、長軸158cm、

小口最大幅 20cm、小口最小幅 19cm、深さ 38cm を測り床面は水平である。墓坑は尾根線に対しほぼ直行し、S-58°-E を示すものである。

当土坑は主体部側面に段を作っている。おそらくこの段に裏込めがなされたものと思われる事と、東部壁がほぼ垂直に立ち上る事から考えて、木棺形式のものであると推測される。

(平ノ内)

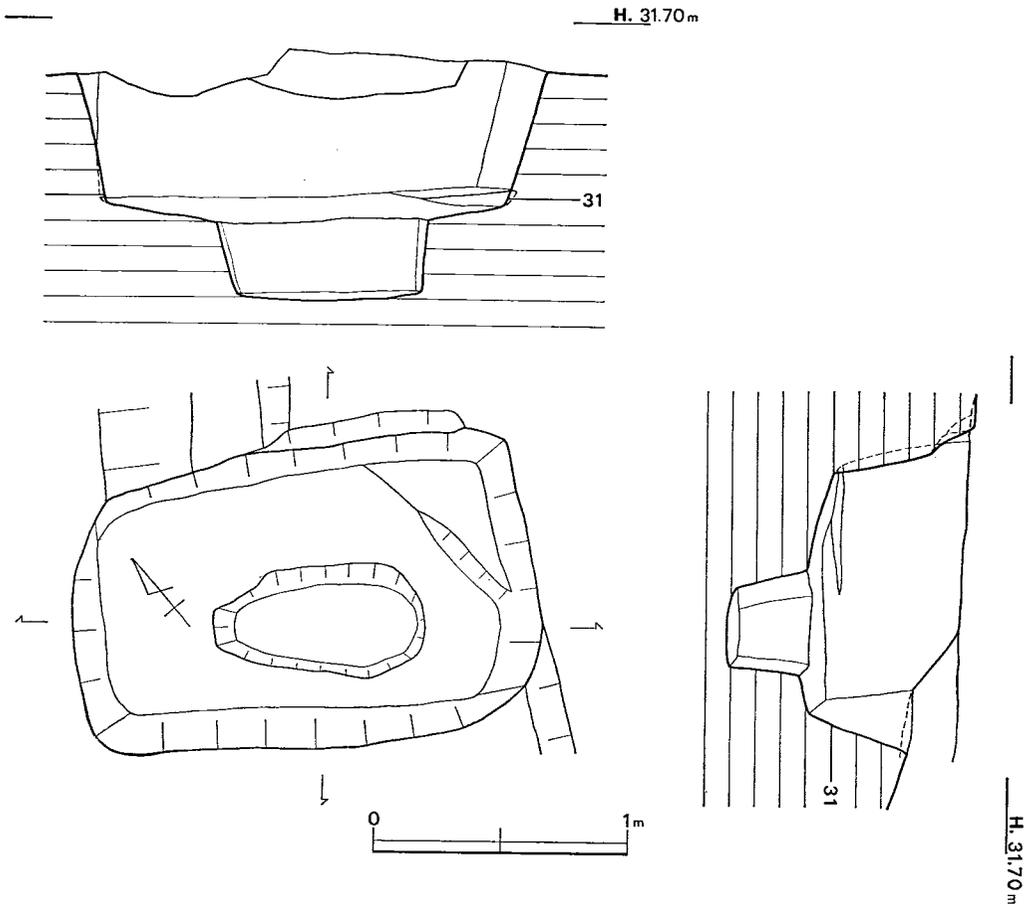


Fig. 42 D-19号土坑墓 (縮尺 1/30)

D-19号土坑墓 (Fig. 42)

須恵器の磨滅した破片を持つ溝状遺構に、東側土坑掘り方短辺を削平されている。墓坑の掘り方は長方形で、隅は若干丸味を持つもので長さ 188cm、幅 113cm、深さ 86cm を測る。

棺部の平面形は楕円形に近い長方形でB型に属し長さ 113cm、小口最大幅は東側で 27cm、最

小幅は西側で20cm、深さ40cm、主軸の方向はS-54°-Eを指す。棺床面は中央部に向って若干くぼむ。

墓坑の東半、東北両壁に接し、ピット2個を検出した。径約40cm、深さは1で45cm、2で40cm、長軸ほぼ直角に左右対照で位置する。2は上面に弥生中期土器（底部）を出土した。

(佐土原)

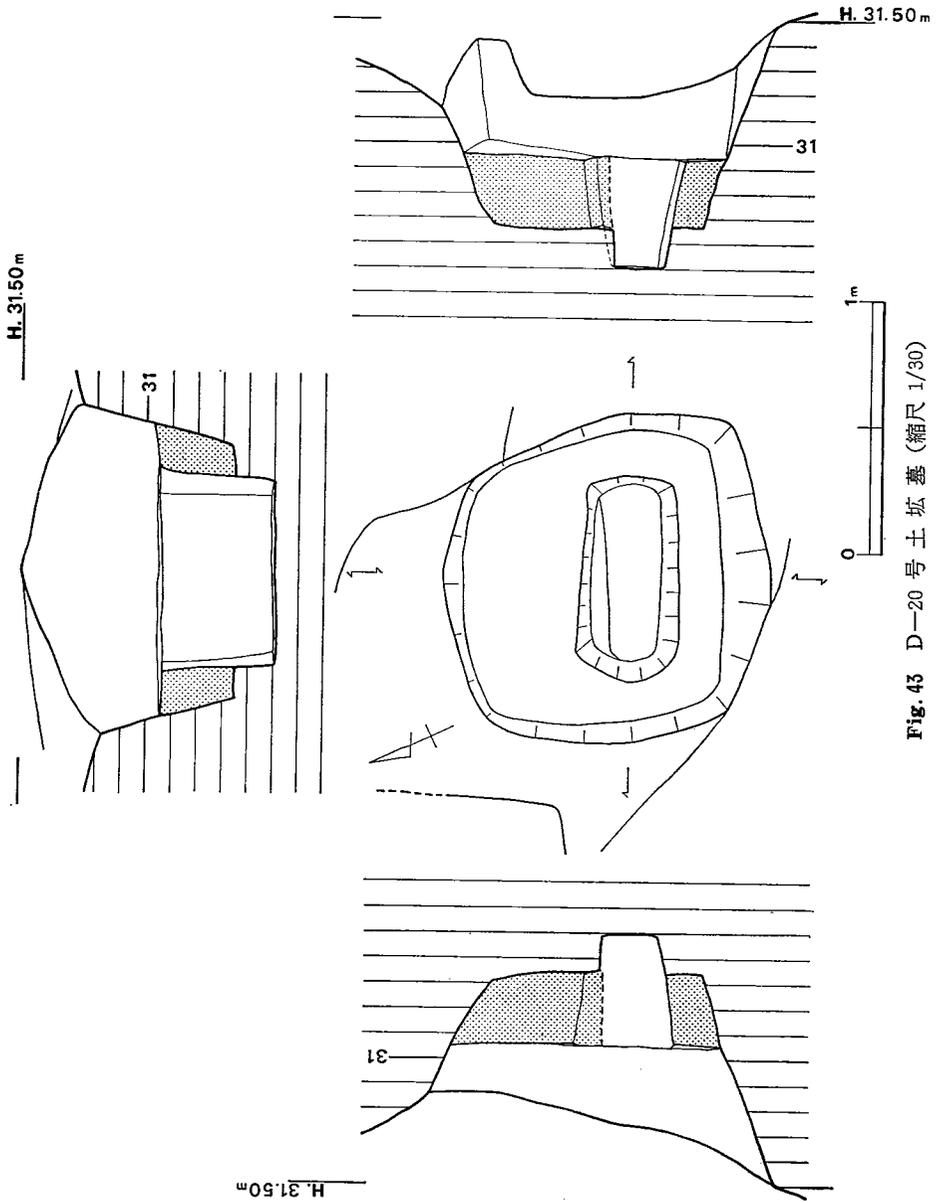
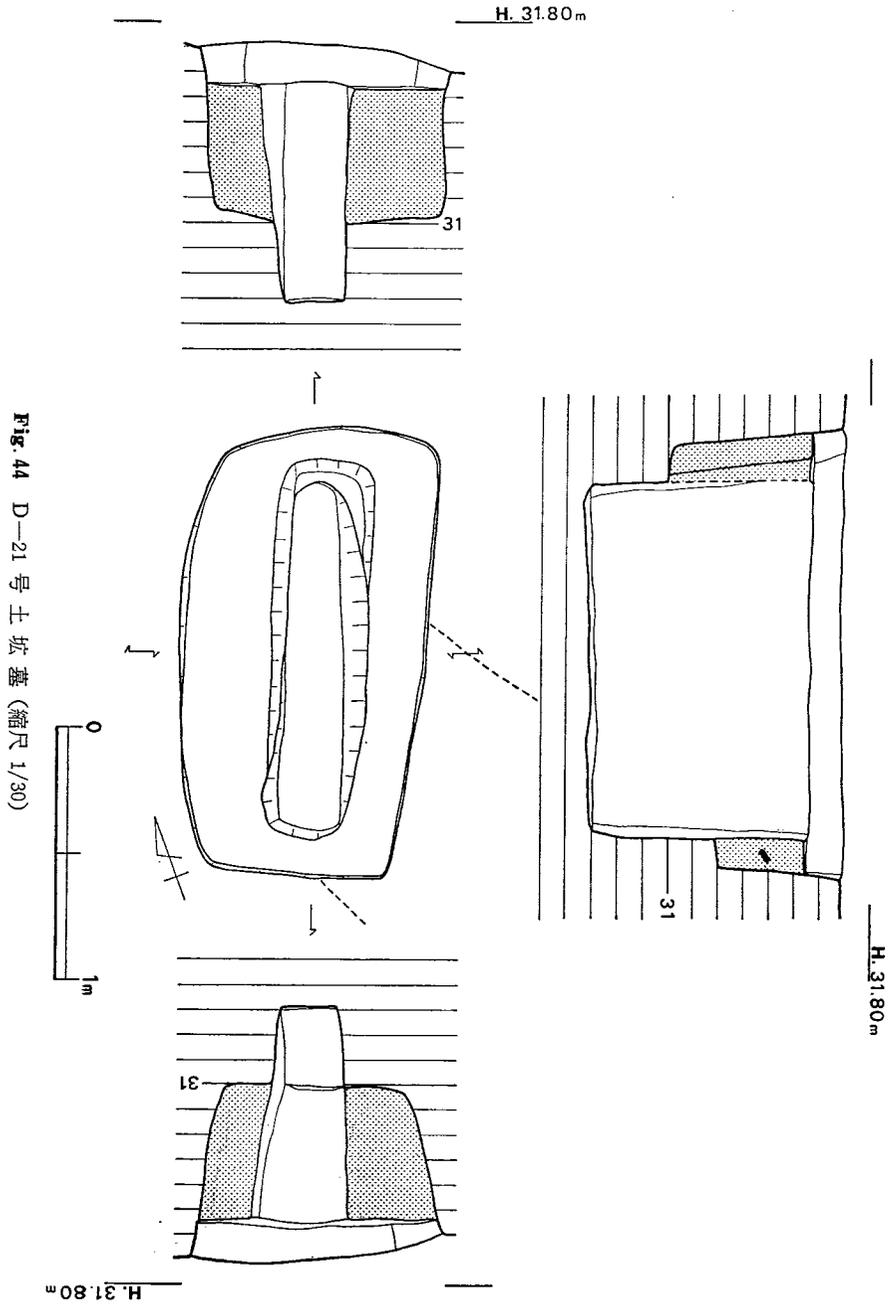


Fig. 43 D-20号土坑墓 (縮尺 1/30)

D-20号土塚墓 (Fig. 43)

墓塚の平面形は隅丸方形を呈し、小形の方に位置する。棺は主軸をS-64°-Eで、棺の平面の形態はB型である。棺底は水平である。副葬品はなく、埋土から弥生式土器片が少量出土した。(副島)



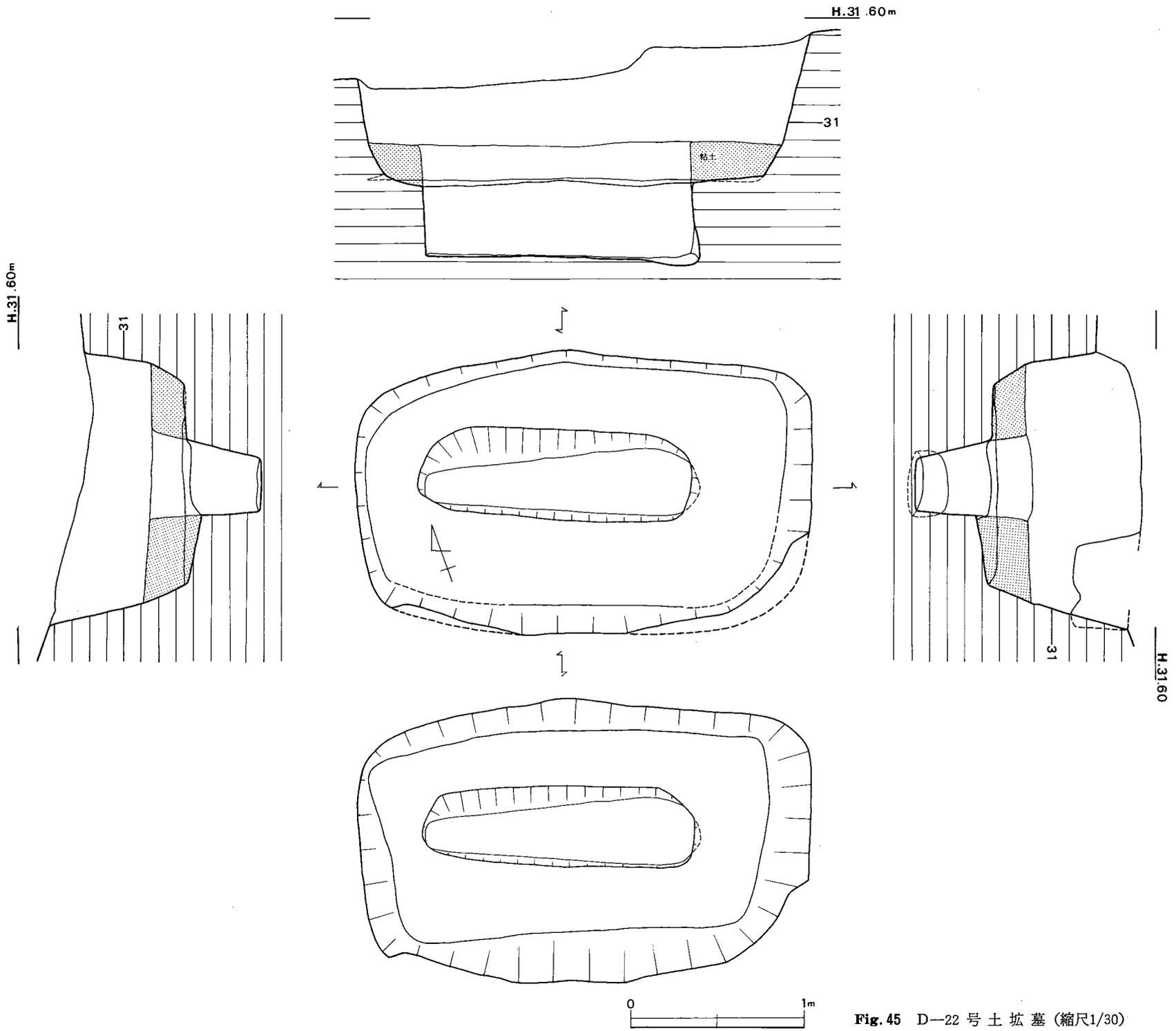


Fig. 45 D-22 号土坑墓 (縮尺1/30)

D-21号土塚墓 (Fig. 44)

墓塚は隅丸方形を呈し、主軸を S-20°-W に位置し、一群の土塚墓と方向を相違する。棺の平面形の型はB型をとり、棺底は水平で、副葬品はなく、裏込め埋土から弥生式土器片が少量出土した。(副島)

D-22号土塚墓 (Fig. 45)

調査区の西端に位置し、墓塚の一部をD-23号、D-24号に切られている。墓塚は隅丸長方形を呈し、長さ262cm、幅約162cm、深さ103cmである。二段掘りで棺の内法長軸152cm、小口(大)39cm、小口(小)15cmと顕著に細くなるB型をなす。棺底はほぼ平坦で頭位付近だけ若干低く、小口壁もえぐれている。主軸方向は S-70°-E で尾根稜線に対して直交し、頭位は棺の平面形などから考えて尾根側の東南にとったと思われる。

切合からD-24号、D-23号より古いことが言える。副葬品はなかった。(日高)

D-23号土塚墓 (Fig. 46・47)

墓塚の平面形は不整形の長方形を呈し、長さ約296cm、幅212cm、深さ79cmである。墓塚断面は地山掘込みの二段掘りで棺の内法は主軸190cm、小口(大)幅36cm、小口(小)幅26cmと顕著に細くなるB型をなす。棺底は東小口側が高く西小口側に傾斜し、地形と逆になっている。四壁ともほぼ垂直にちちあがっている。木棺の形跡は認められなかった。主軸方向は S-39°-E で尾根稜線に対して直交し、頭位は東南にとったと思われる。埋土内から土器破片が数点出土した。

墓塚北側の一部がD-22号の墓塚を切っているのでD-22号より新しいことが言える。副葬品はなかった。(日高)

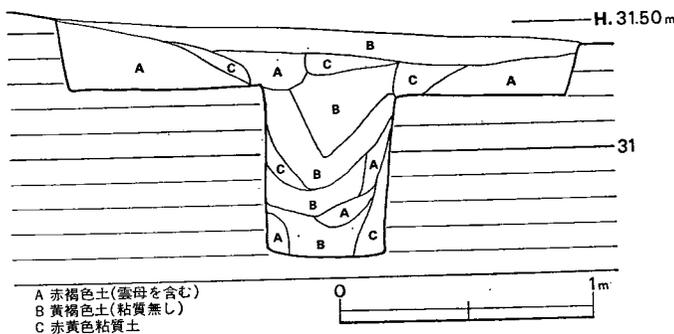


Fig. 46 D-23号土層実測図

D-24号土塚墓 (Fig. 48)

墓塚の平面形は長方形を呈し、小形の棺で主軸を S-64°-E におき、頭を東にする。棺の平面形の型はB型である。副葬品はなく、二段掘りで地山を切り込んで形成されている。(副島)

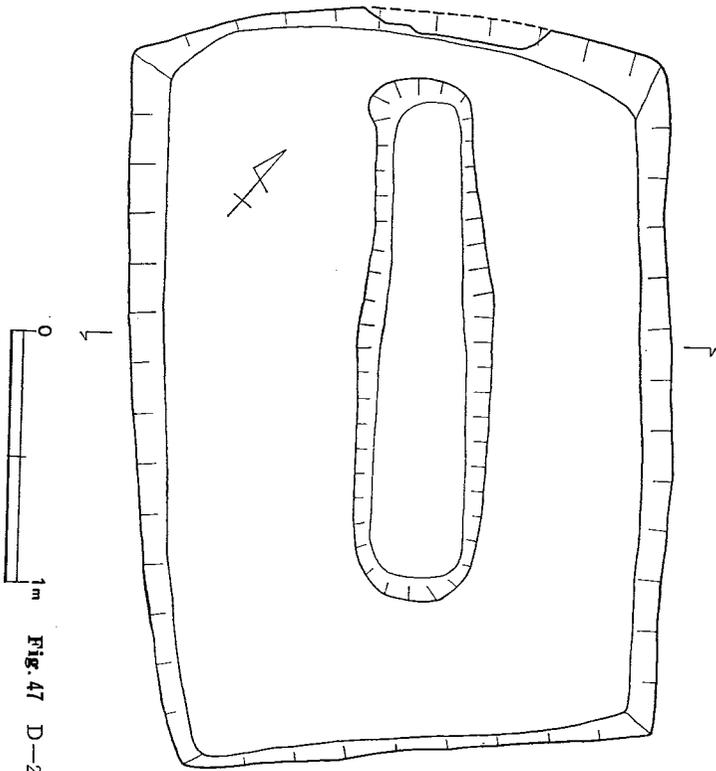
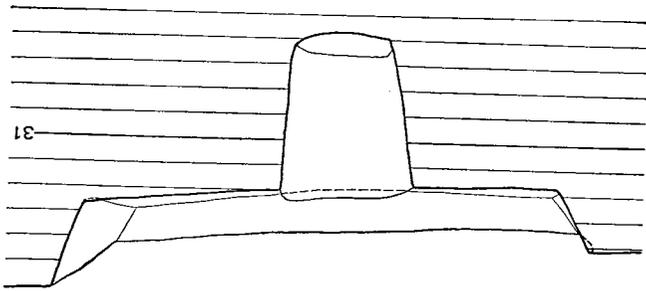
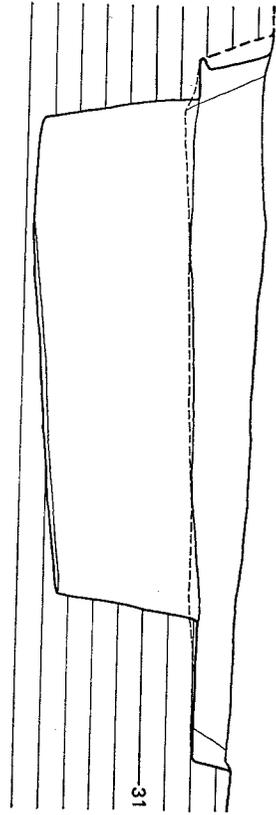


Fig. 47 D-23号土坑墓(縮尺 1/30)



H. 31.70m

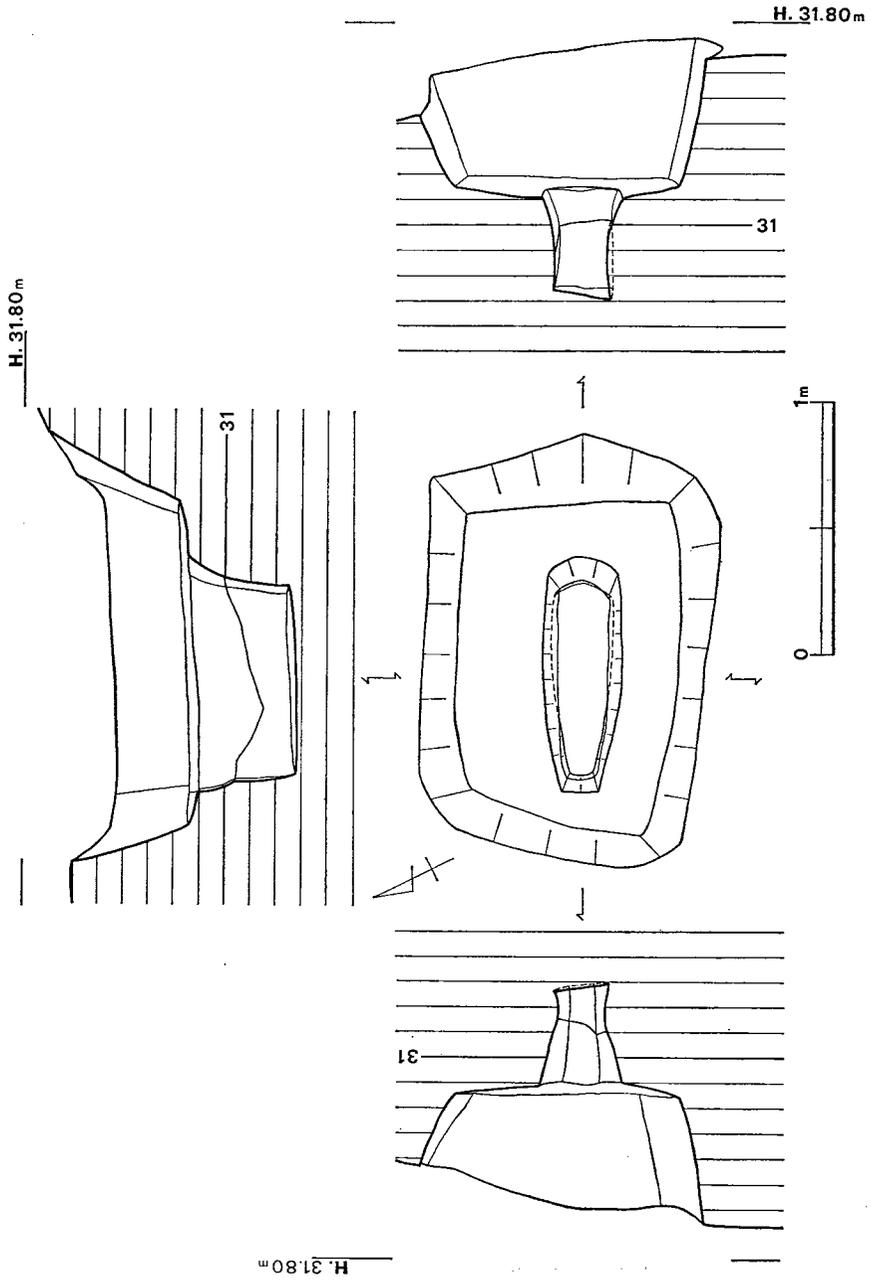


Fig. 48 D-24 号土坑墓 (縮尺 1/30)

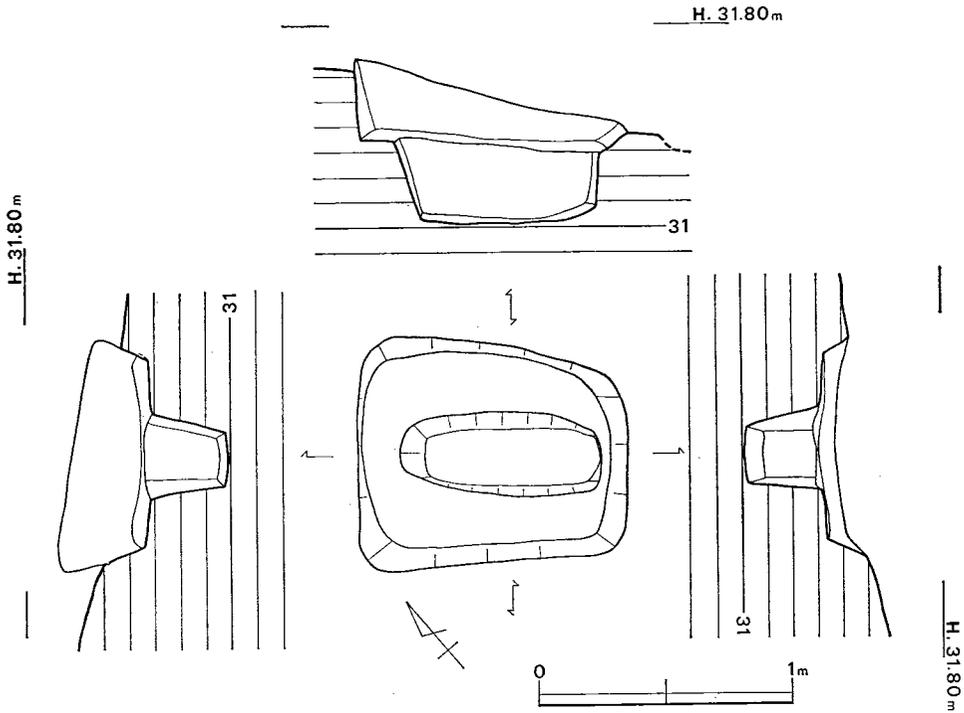
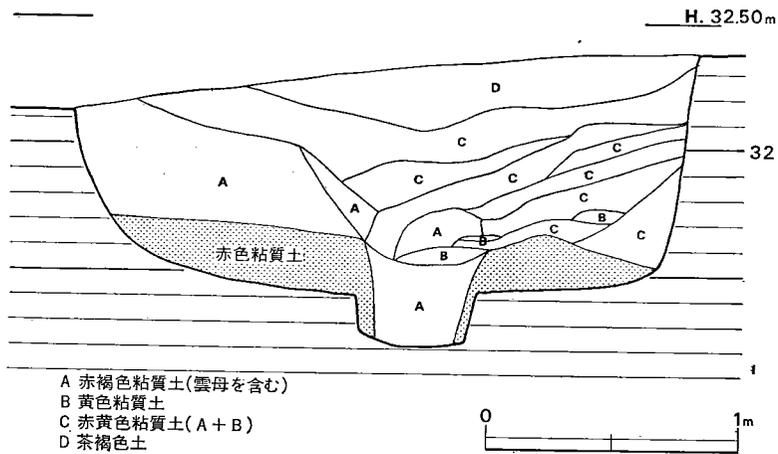


Fig. 49 D-25号土塚墓土塚墓 (縮尺 1/30)



- A 赤褐色粘質土(雲母を含む)
- B 黄色粘質土
- C 赤黄色粘質土(A+B)
- D 茶褐色土

Fig. 50 D-26号土層実測図 (縮尺 1/60)

D-25号土塚墓 (Fig. 49)

墓塚の平面形は隅丸方形を呈し、小形棺で主軸はN-49°-Wにおき、棺の平面形はB型である。副葬品はなく二段掘で地山を切り込んで形成されている。(副島)

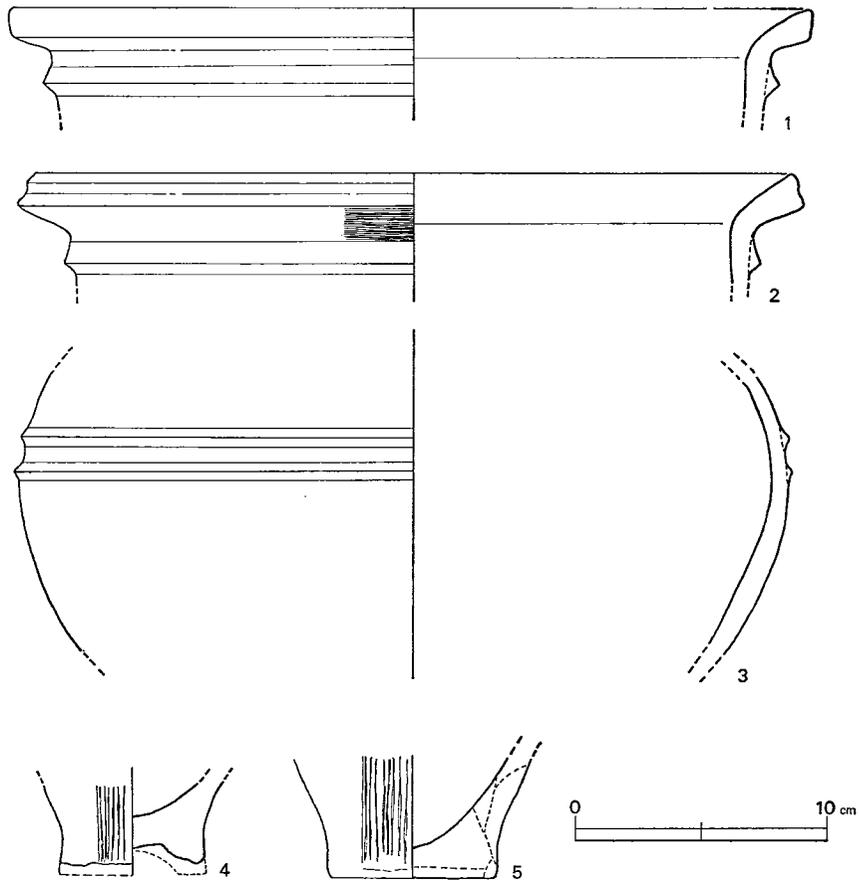


Fig. 51 土塚墓出土遺物実測図 (1/3)

D-26号土塚墓 (Fig. 52)

墓塚平面形は不正形の方形を呈し、主軸175cm、幅約100cm、深さ約40cmを測る、2段掘りの土塚である。主体部内法は長さ138cm、小口最大幅31cm、小口最小幅16cmと頭、著に細くなる高木遺跡に於けるB型に属するものである。

主体部東側にはゆるやかな段をつけており、ここに頭を安置したものと思われる。

主軸はS°60-Eを示し尾根線にほぼ直交する。D-26号土塚は東側で掘り方の線を曲げており、これはD-27号土塚の掘り方西側を意識しているためのものと思われる、時期的にもD-27号土塚の後に来るものと考えられる。(平ノ内)

D-27号土塚墓 (Fig. 54)

調査区では数少ない木棺墓であり、墓塚の平面形は不整形の長方形を呈し、長さ314cm、幅233cm、深さ107cmである。二段掘りの掘り方で、土塚の中に木棺を納めた木棺墓であり、内法

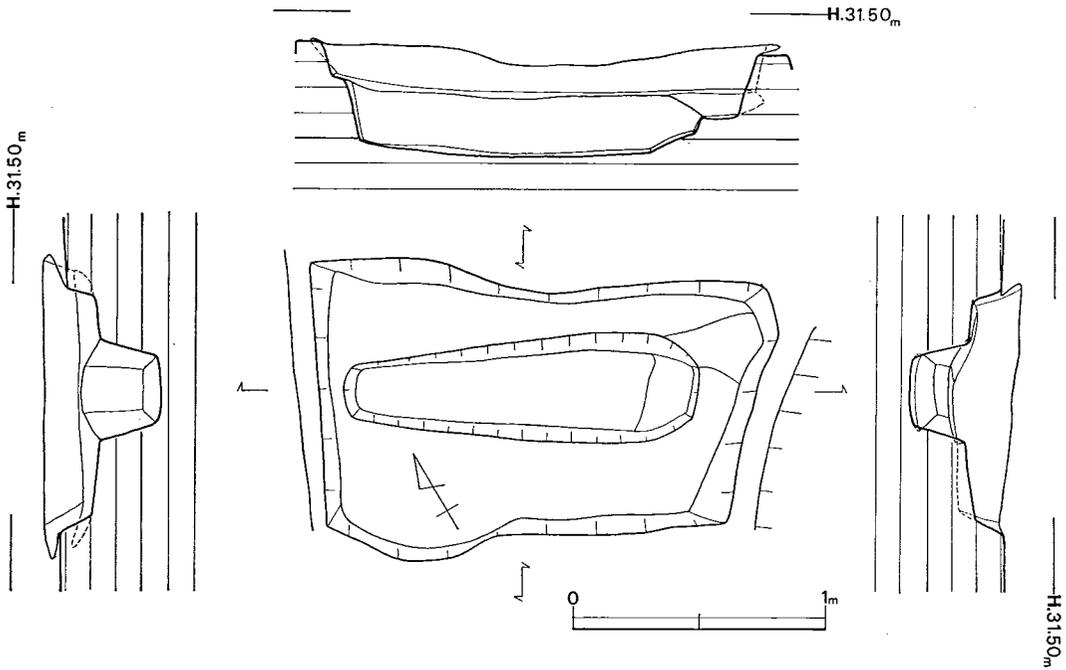


Fig. 52 D-26号土塚墓(縮尺1/30)

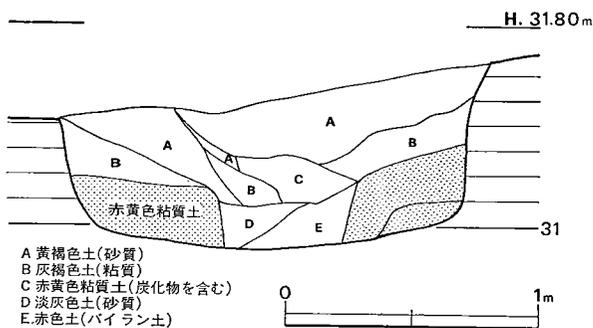


Fig. 53 D-28号土塚墓土層実測図(縮尺1/30)

は小口(大)幅42cm、小口(小)幅33cm、深さ約53cmである。土塚の東側小口は棺床より深さ18cmで幅30cmの溝が掘られている。西側小口および両側壁に木板をたてるための掘り込みは見られないが断面図をみると若干側板と思われるものが見られる。木棺の形態を復元すると、使用された西側小口の木板の厚さは、小口溝から推定して

3cm以下である。小口板と側板の組み合わせは東側小口板が内側に入り西側小口は北側角だけ側板よりはみだす形式だと思われる。底板の存在は不明である。

主軸方向は S-63°-E で尾根稜線に対して直交し、小口溝があり小口幅が広い東側に頭位をとったと推定される。西側小口直上の石は花崗岩でこの地域では地山に多く含まれているので、ここでは埋土内に偶然混じったものと考えたい。埋土より数点の土器破片が出土した。副葬品はなかった。(日高)

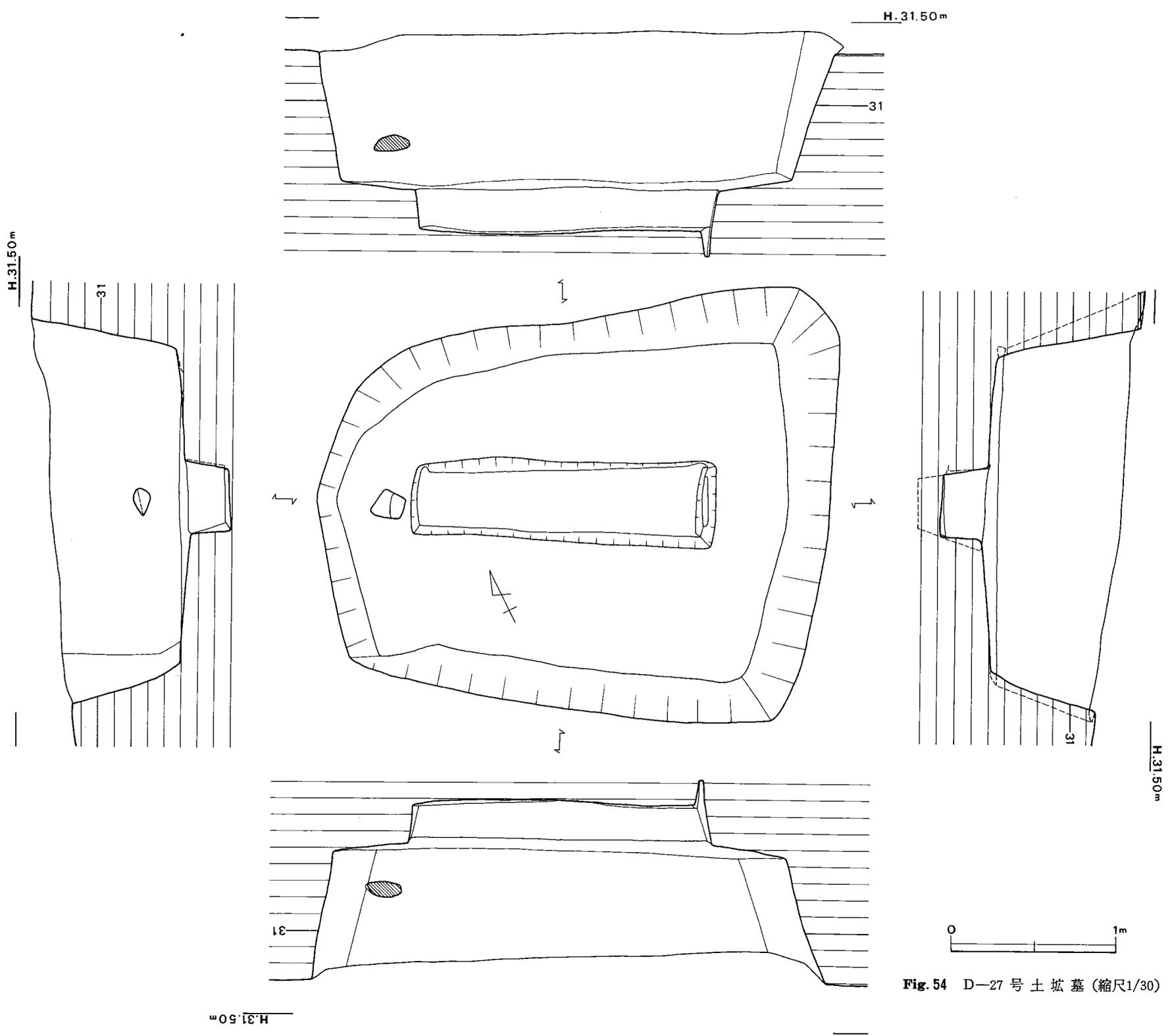


Fig. 54 D-27号土坑墓(縮尺1/30)

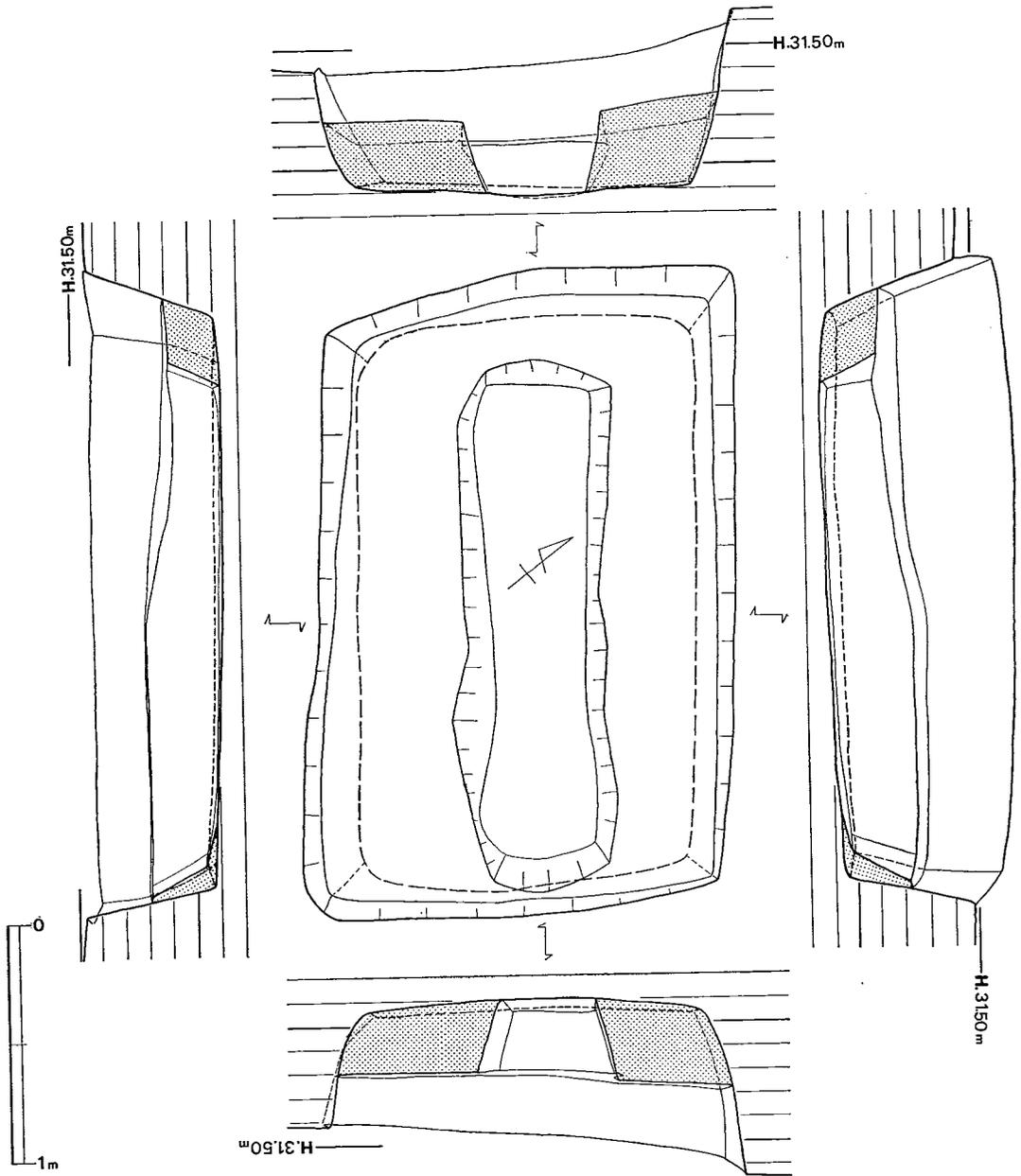


Fig. 55 D—28号土塚墓 (縮尺 1/30)

D—28号土塚墓 (Fig. 55)

墓塚平面形は長方形を呈し、主軸272cm、幅173cm、深さ北側で80cmを測る。一段掘りの土塚である。底面内法は、主軸方向に240cm、幅140cmである。壁は東側58cm、西側53cm、南側53cm

を測り尾根線の関係で、南側で浅くなる。

主体部は粘土による裏込めで作られており、その内法は、長さ 200cm、幅 40cm、深さ 30cm を測り、床面は水平であり棺は A 型に属するものである。

頭部位置は尾根線にほぼ直交し、S-51°-E を示すことから考えて当遺跡で最も一般的なタイプであると思われ、東側に置いたものと推測する。

当 28 号土坑は、高木遺跡において D-14 号と 2 つの例しか確認されていない数少ない一段掘りの土坑である。

土層図 (Fig. 53) によると、裏込めの粘土により主体部を形成している事が理解できる。さらに主体部内に入っている土は裏込め上部の土が落ち込んだ状態で入っている事から、D-28 号土坑は木蓋を有する木棺であったと考えられる。(平ノ内)

D-29号土坑墓 (Fig. 56)

当土坑墓は、2 段掘りではあるが 27 号、30 号両土坑墓に墓坑の南北を、それぞれ切られ墓坑

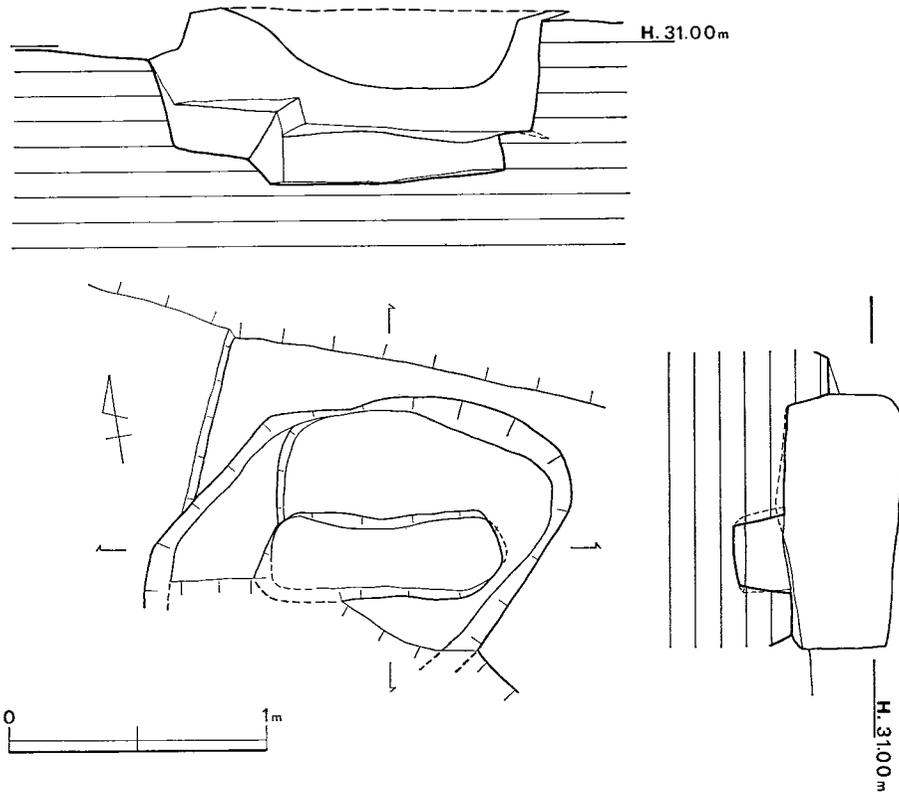


Fig. 56 D-29 号土坑墓 (縮尺 1/30)

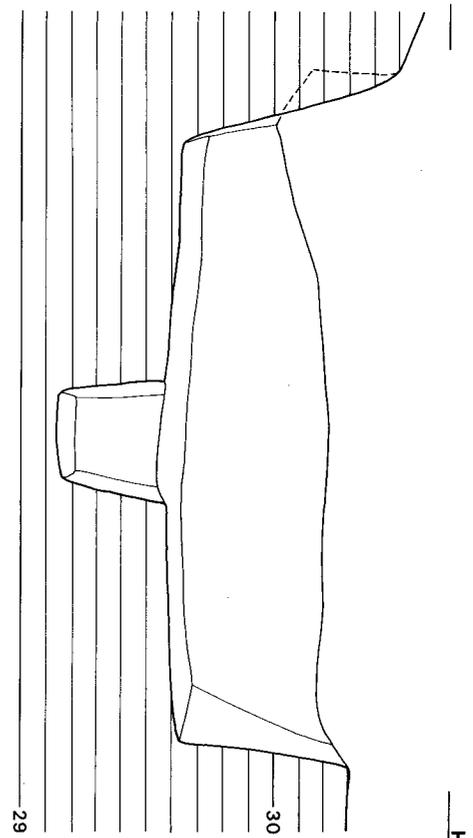
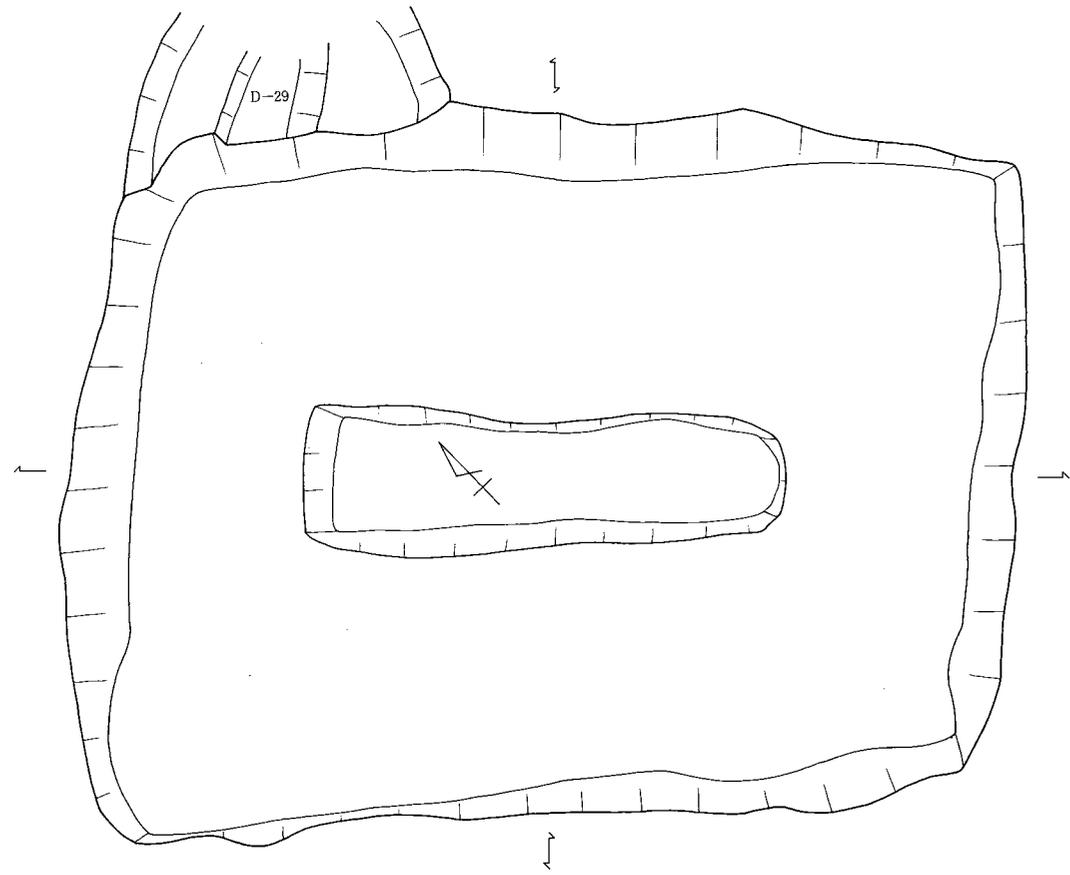
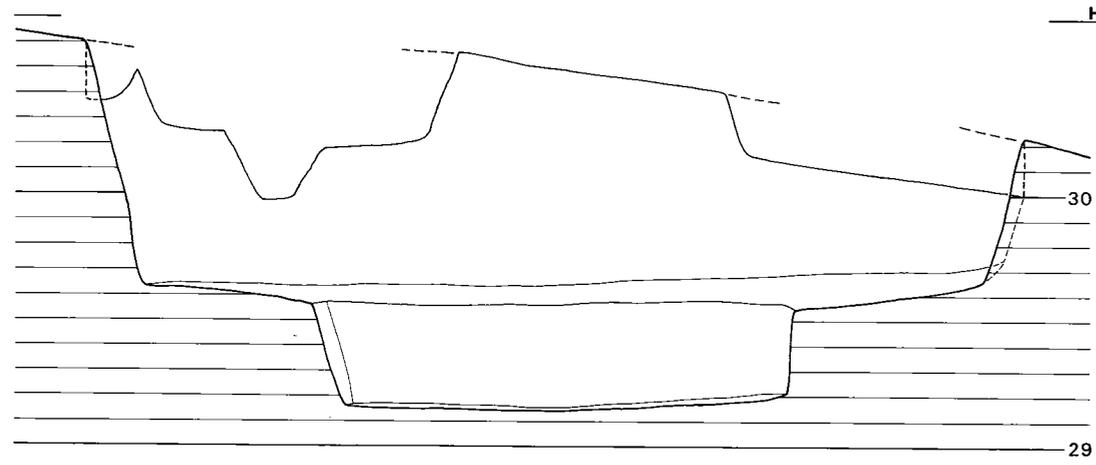
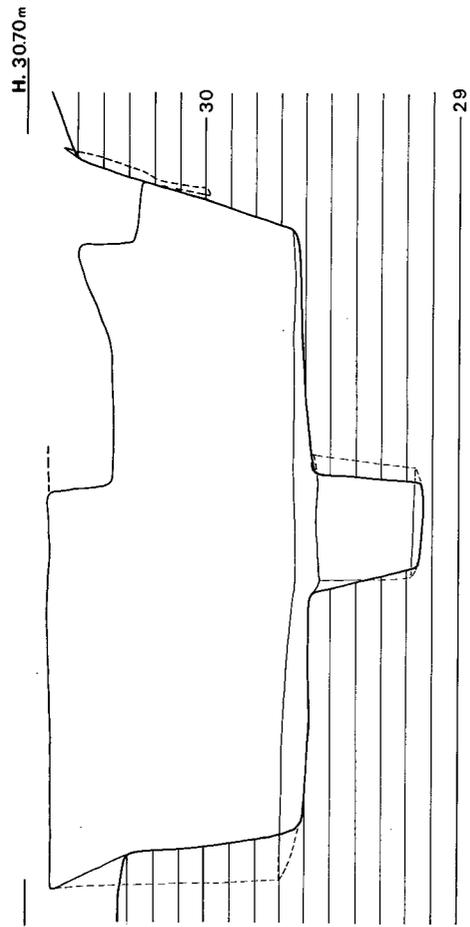


Fig. 57 D-30号土塚墓 (縮尺1/30)

H. 30.70m

の掘り方は長さ約156cm、幅128cm前後深さ64cmを測る。

棺部の平面形はC型に属し長軸91cm、東側小口部29cm、西側小口で23cm、深さ20cm、主軸の方向はS-82°-Eを指す。棺部中央が若干狭いが両小口側を掘り過ぎた。(佐土原)

D-30号土塚墓 (Fig. 57)

墓塚の掘り方、棺部長さにおいて当遺跡で3番目に大きく、副葬品として棺部内東側(頭位側)で碧玉製管玉1個を出土した。

また土塚墓の時期を知り得るものとして、小児用甕棺(弥生中期中期以降)が当墓塚掘り方東側上面にはほぼ同様の主軸方向で埋設されている。甕棺に当土塚墓が先行するものである。またD-31号を北側壁で切っている。

墓塚の掘り方平面形状は長方形で長さ337cm、幅278cm、深さ135cmを測る、棺部平面形はA型に属し小口は東側で33cm、西側は掘り過ぎで47cm、主軸の方向はS-45°-Eを指す。

遺物

管玉 (Fig. 30-23) 碧玉を素材とし、長さ14.4mm、径4mm、孔径0.8mmを測る。穿孔方向は両面から行っており、当遺跡で検出された管玉中最大のものである。(佐土原)

D-31号土塚墓 (Fig. 58)

墓塚平面形は、長方形を呈し、主軸長約270cm、幅約180cm、深さ約70cmを測る。二段掘りの土塚である。墓塚がB-II区の東側に位置しているため一段目掘り方は、明確にとらえる事ができなかった。主体部内法は、長さ158cm、小口最大幅24cm、小口最小幅20cm、深さ52cmを測り、棺はB型に属する。

墓塚は尾根線に対して、ほぼ直交しS-46°-Eを示す。頭部位置は、小口最大幅の東側に置いたものと思われる。(平ノ内)

D-32号土塚墓 (Fig. 59)

墓塚平面形は長方形を呈し、主軸約420cm以上、幅約360cm以上、深さ97cmを測る三段掘りの土塚である。平面全体形は西側を通る道によって切られているため不明である。

墓塚東側で20cm程の段をつけている物は、2号石棺と当遺構以外、高木遺跡では他に例がない。

二段目は主体部の周りに主軸方向で約20cm、側面30cm幅で、掘り込みをつけ、深さ約10cm前後である。

主体部は、長さ256cm、幅54cm、深さ27cmを測る。型式はC型に属するもので、棺の立ち上りに丸みを持ち、舟底状のものである。

頭部位置は墓塚一段目にステップを持つことから東側と思われる。

主軸は尾根線に対してほぼ直交し、S-49°-Eを示す、今回調査した中で二番目に大きな

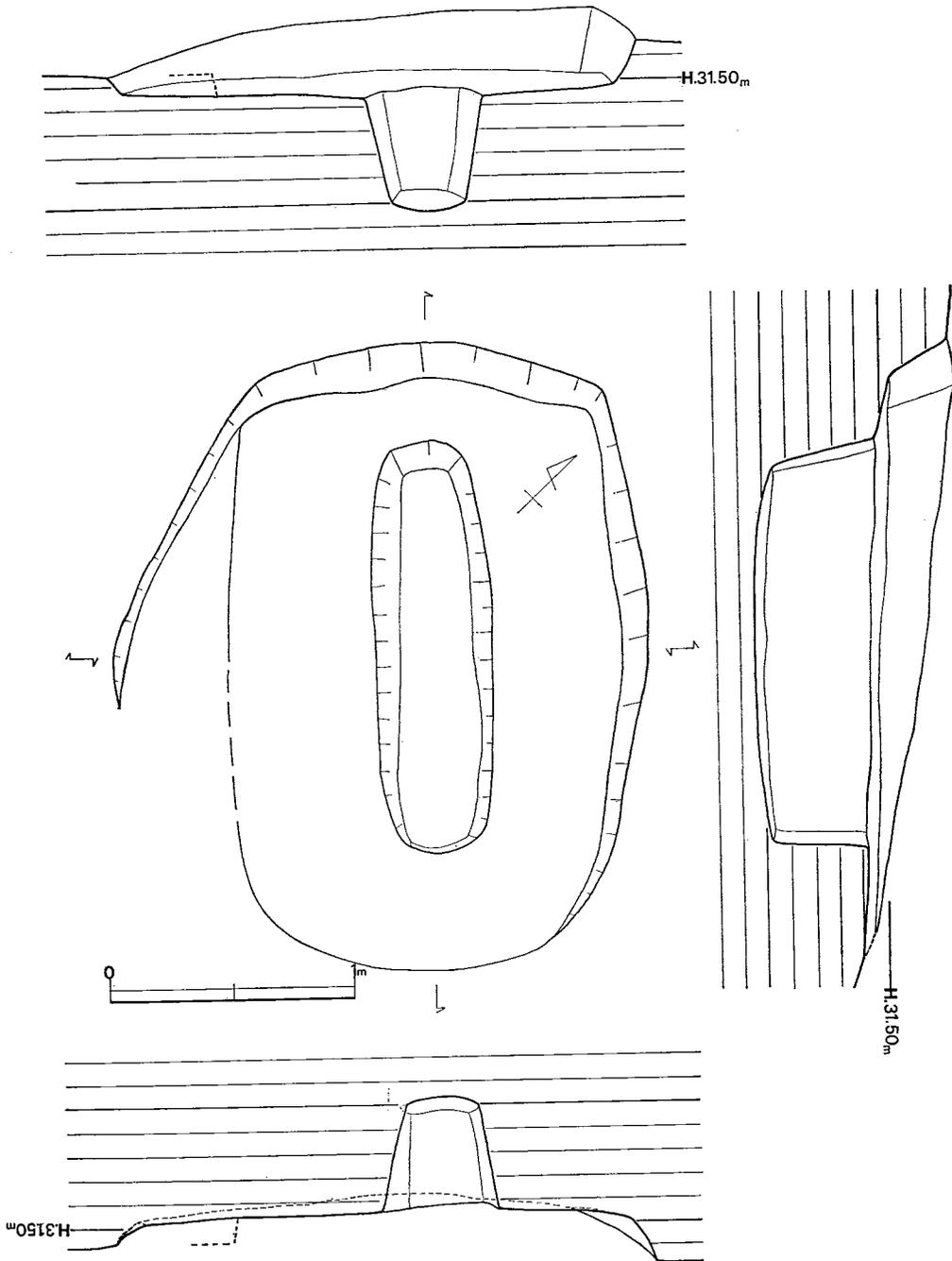


Fig. 58 D-31号土塚墓(縮尺 1/30)

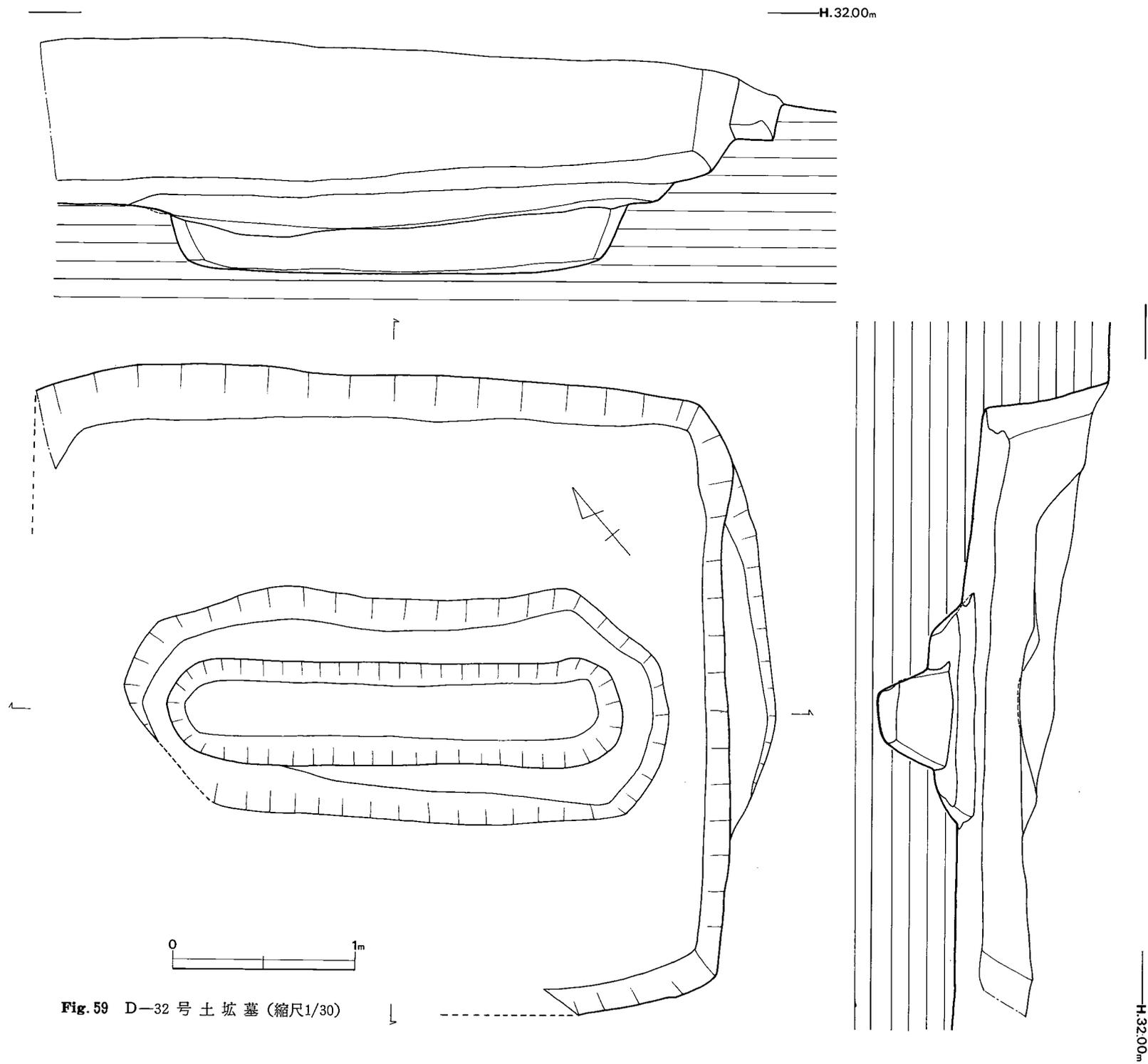


Fig. 59 D-32号土坑墓(縮尺1/30)

土塚墓である。確認された遺構のうちもっとも西南隅に位置している。

土層図 (Fig. 60) 墓塚床面と棺との間に浅い掘り込みを作り、赤黄色粘質土でかため、さらに棺の両側面にも赤黄色粘質土でほぼ垂直に立ち上りを作っている。これで見限り主体部幅35cm、高さ約45cmが埋葬時に於ける棺幅と高さであったことが推測される。

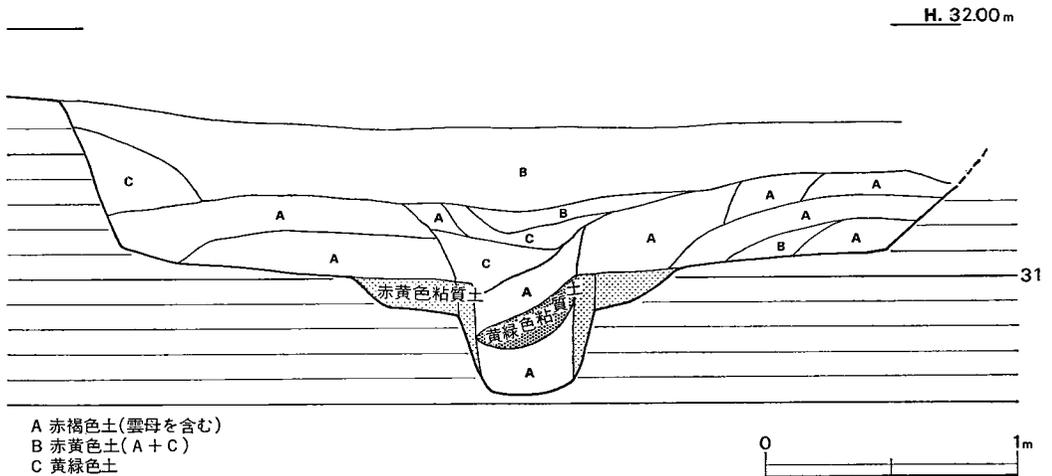


Fig. 60 D—32号土塚墓 土層実測図 (縮尺 1/30)

棺の蓋については、主体部床面から45cm前後の高さの所に置かれたものと思われ、さらに棺蓋には黄緑色粘土によって目張りがされていたと思われる。目張りは蓋全面になされていたものでなく、接目の間隙などに限ってされていたと推測される。

黒曜石製のフレイクが1点出土した。(平ノ内)

D—33号土塚墓 (Fig. 63)

墓塚平面形はほぼ正方形を呈し、主軸長さ398cm、幅417cm、深さ130cmを測る。高木遺跡において最も大きな三段掘りの土塚である。二段目は、主体部の回りだけ墓塚の床面を掘り下げているものである。深さ約10cm前後で、幅は東西で約30cm前後、南北で40cm前後を測るものがある。

主体部は、長さ205cm、幅50cm、深さ20cmを測り床面は水平である。東側小口部分には、10cm程の厚さの裏込が施されている、棺はA型に属するものである。

頭部位置は、尾根線に対しほぼ直交するものでS-61°-Eであり、さらに主体部床面東側により、管玉4個出土しており、東側に頭を置いたものと考えられる。

今回の調査で確認した遺構のうち、もっとも南に位置するものである。

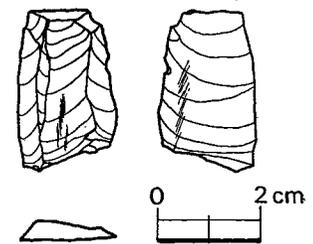


Fig. 61 D—32号出土遺物実測図 (石器) (縮尺 2/3)

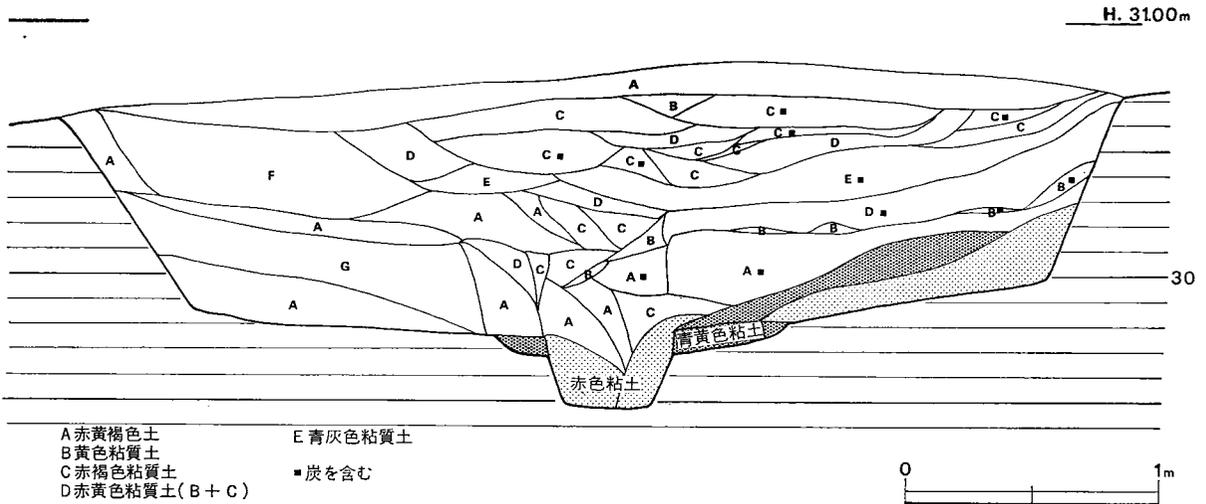


Fig. 62 D-33号土塚墓 土層実測図 (縮尺 1/30)

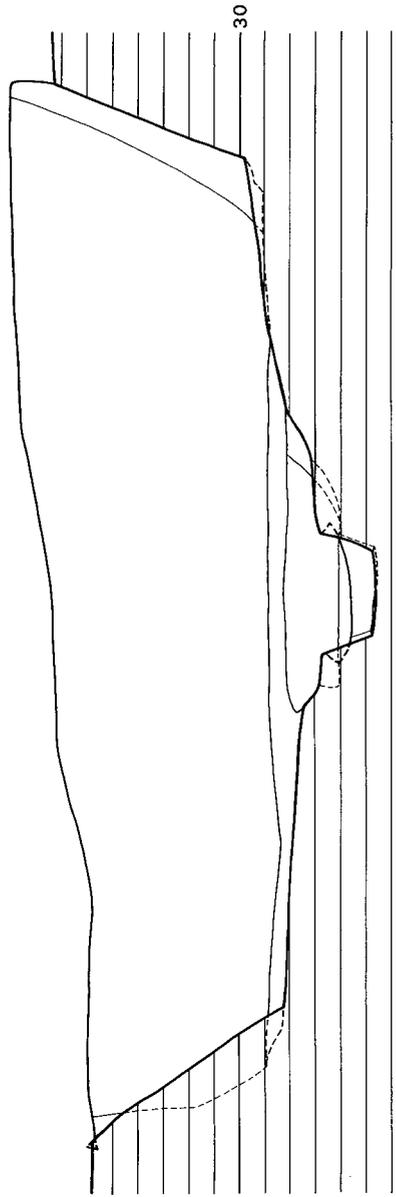
当 33 号土塚墓の場合、被葬者を埋葬の際北側の掘り方の上場で焚火をした形跡が残っており、さらに棺を安置した後に埋土とともにこの焚火の炭を混ぜている事が断面で確認できた。

炭はドングリ類の木を用いており、調査中多量のドングリの炭化物を採集した。このような焚火の例は高木遺跡で、D-8号、D-14号で焼土と炭が確認できたが、33号程層位的に明確にとらえる事はできなかった。

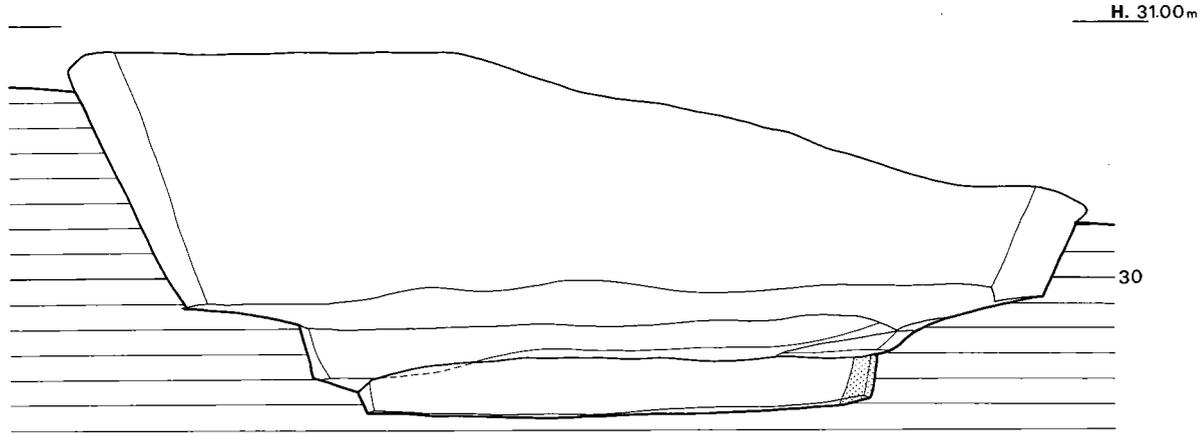
遺物

管玉 (Fig.30-㊸) 碧玉を素材に用い、D-7号土塚のものより若干太めである。色は淡い緑である。計測値は表4を参照。(平ノ内)

H. 3100 m

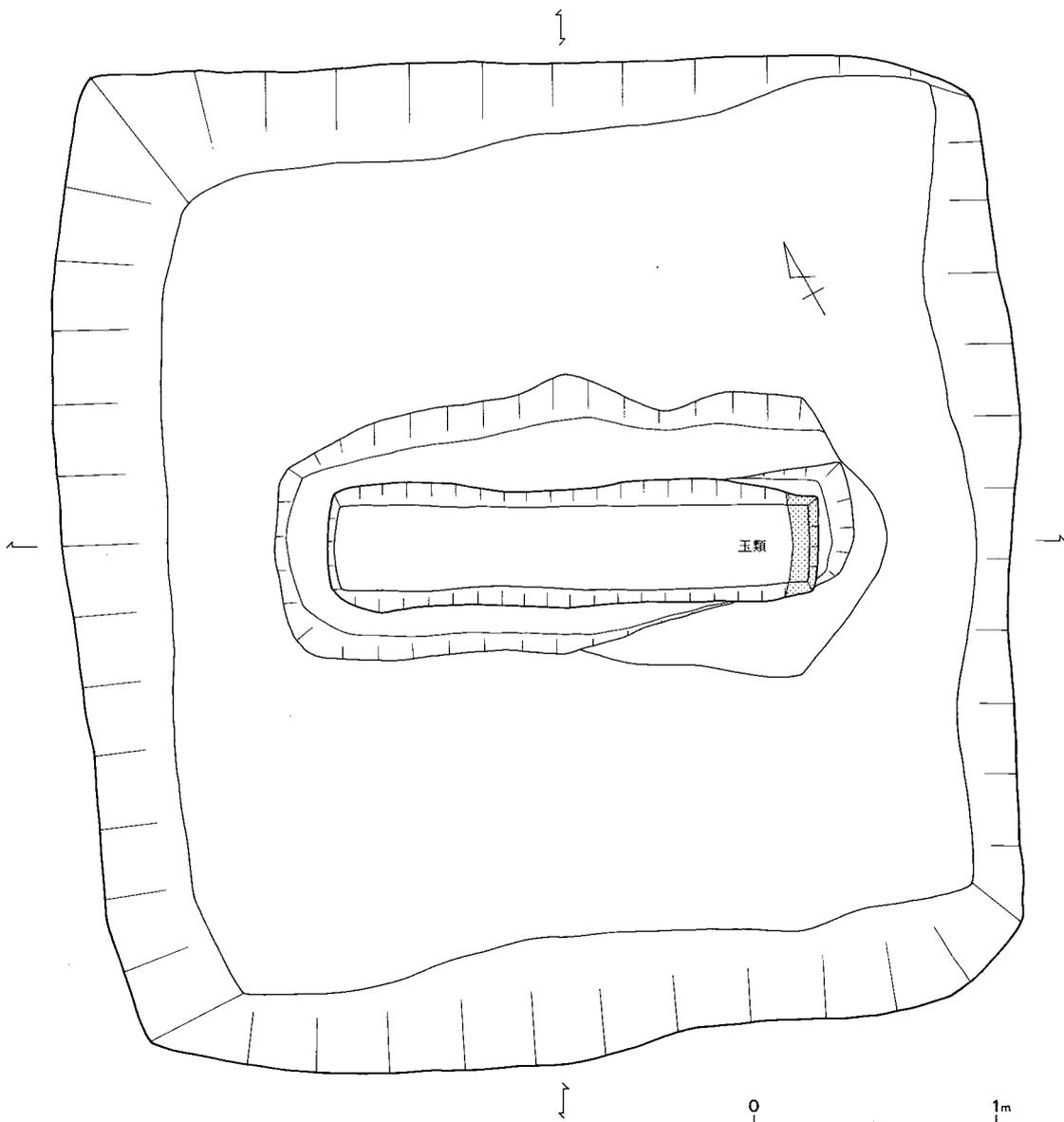


30



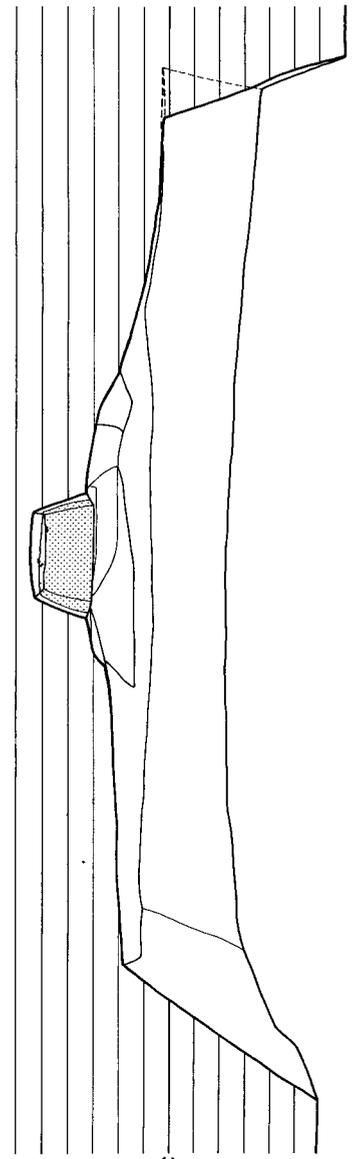
H. 3100 m

30



0 1m

Fig. 63 D-33号土坟墓 (縮尺1/30)



30

H. 3100 m

甕 棺 墓 (Fig. 64~67)

土塚墓群と共に一つの共同墓地を形成するが、時期的には土塚墓群が先行するようである。この地方では所謂、大形甕形土器を使用する成人棺は存在しない。

福岡平野ではこの弥生時代中期後半の時期では、大形甕形土器を使った成人棺で主体を占めるが、遠賀川中・下流域では大形甕棺をみない。しかしながら遠賀川上流の穂波平野に所在する立岩遺跡までは、福岡平野からの影響が直接はといったものと思われる大形甕棺があるのに、中・下流域には大形甕棺を使用した甕棺がないということが問題である。

また遠賀川の対岸の北九州側にもなく、この地域と、立岩を中心とする穂波地区とは、文化圏の相違が見られる。

検出された2基の甕棺墓は、小形甕形土器を使用した、合口の小形甕棺墓である。(副島)

表5 甕棺墓一覧表

	方 位	傾 斜	墓 塚 長さ×幅×深さ	組 合 方	時 期	備 考
K-1	S-47°-E	-30°	50×40×24.5	甕+甕・接口式	弥生中期中葉	上甕底部欠
K-2	S-56°-E	-7°	51×46×20	甕+甕・接口式	弥生中期後半	上甕底部欠

K-1号甕棺墓 (Fig. 64)

K-1号は、B-II区中央部東側に位置し、墓塚の平面形は、ほぼ円形を呈し、主軸方向50cm、幅40cmを測り、傾斜約30°で掘り込まれている。

棺はどちらも小形の甕形土器を使用した接口式の小児用の甕棺墓である。主軸方向をS-47°-Eを示している。

上甕は胴部付近で欠損している。棺接口部分には間隙に置いたと思われる壺の胴部の破片が口縁部と上甕の中に入り込んでいた。

上 甕 (Fig. 65 ㊸)

上甕は口径31cm、高さ約30cmを測る小形の甕形土器を使用している。

口縁はほぼ水平で、外唇部に一条の沈線を持ち、口縁直下に「M」字状の突帯を一条付け、胴部はゆるやかに張り、胴部中位に「M」字状の突帯を二条付け、表面は全面に丹を塗り、内壁は7cm程まで丹を塗っている。

下 甕 (Fig. 65 ㊹)

下甕は口径28cm、底部径5.8cm、高さ30.2cmを測る小形の甕形土器を使用している。

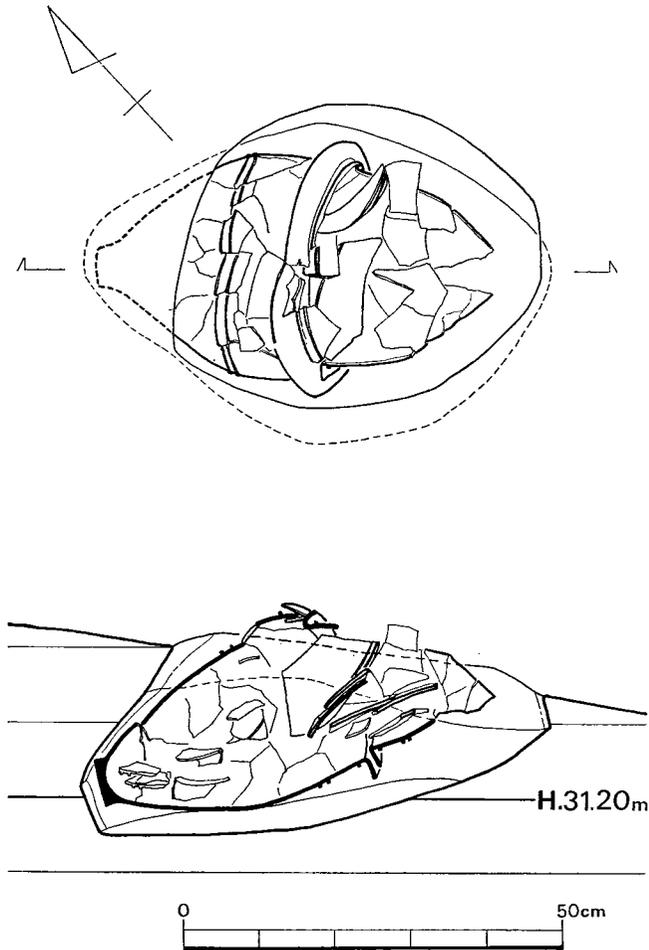


Fig. 64 K-1 号 甕 棺 墓 (縮尺 1/10)

口縁部はほぼ水平で、口縁部直下に三角の突帯が一条付き、胴部はゆるやかに張り胴中位に「M」字形の突帯を二条持つ、表面は全面に丹を塗り、内面は口縁部下5cm前後まで丹を塗っている。

当1号甕棺を中期中葉と比定したい。(平ノ内)

K-2号甕棺墓 (Fig. 66)

30号土塚墓側掘り方上面で検出した合せ口の小児用甕棺である。削平を受け下甕胴部から、口縁上甕底部と約半分を欠損している。墓塚掘り方も下甕側では確認できないが、上甕側では

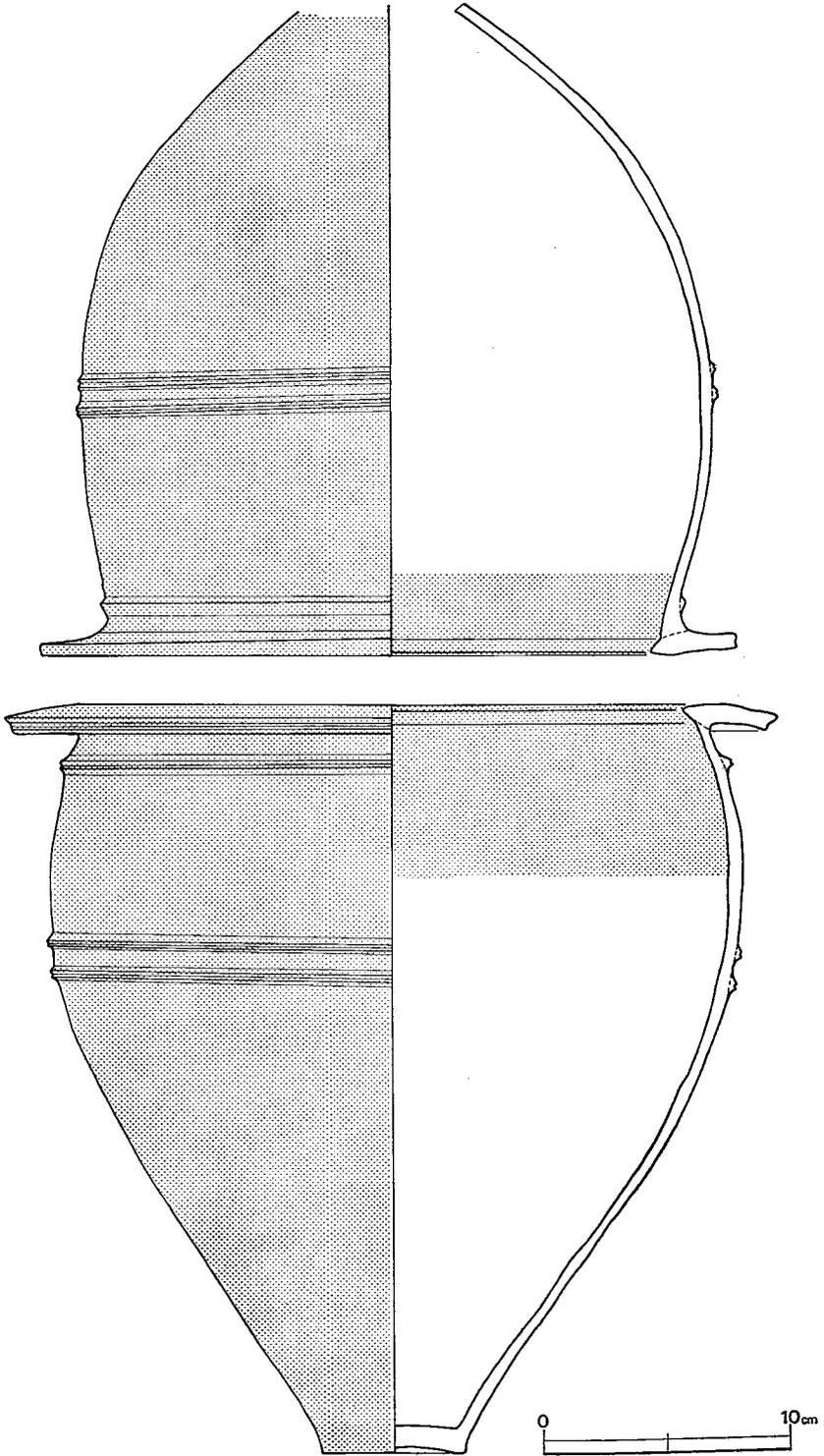


Fig. 65 甕棺実測図(縮尺 1/3)

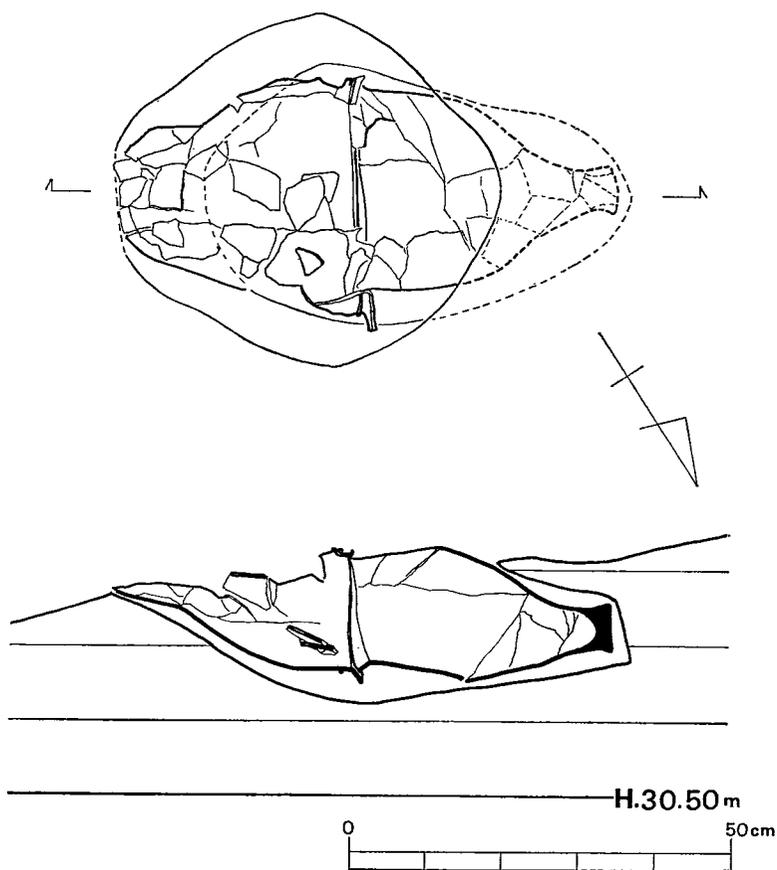


Fig. 66 K-2号甕棺墓 (縮尺 1/10)

不明確であった。上甕・下甕は形態の変化はあるが、弥生時代中期中葉以降のものであろう。

上 甕 (Fig. 67 ㊸)

小形の甕で、口径32.4cmで口縁部は「く」の字状に外反し、直下に三角突帯を有している。色調は黄褐色で胎土に細砂を含む、器面は非常に荒れているため調整痕は不明であった。

下 甕 (Fig. 67 ㊹)

小形の甕で、口径28cmで口縁部は「く」の字状に外反する。胴部の部分は取り上げ不可能であった。そのためにバインダー処置を行なった結果、底部だけはなんとか取り上げられた。

底部は、若干上がり気味である。底部のつくりかたが断面によって示すことができた。

底部の内面には丹がのこっている。器面の調整はハケの縦位が判別された。色調は褐色を呈

し、胎土は小砂を含み、器面に亀甲状の亀裂がはいっている。焼成は非常に悪い。(佐土原)

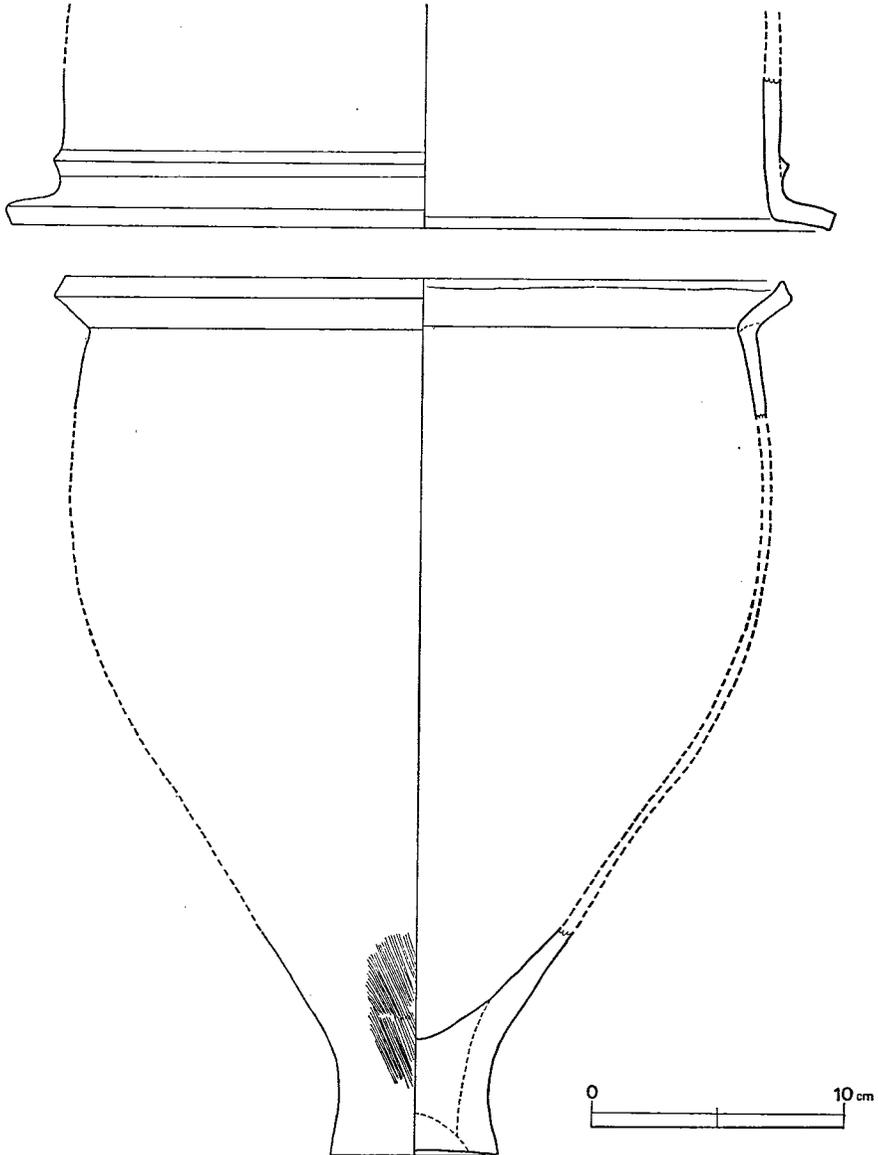


Fig. 67 甕棺実測図(縮尺 1/3)

石 棺 墓 (Fig. 68・69)

石棺墓は2基検出されている。1号石棺墓はB-1号墳の周溝をつくる時に破壊されていた。2号石棺墓によって、時期的な把握ができる。すなわち、蓋石のめばり弥生中期後半の甕形土器の破片が使用されたこと、掘り方内の埋土は土塚墓埋土と性質は同じである、以上のことから、時期的には弥生中期後半が妥当であろう。(副島)

表6 石棺墓一覧表

	方位	墓塚形状	墓塚 長さ×幅×深さ	石棺寸法 長さ×幅×深さ	時期	備考
1号石棺墓	S-37°-E			144×48×45	弥生時代	B-1周溝に切られている。
2号石棺墓	S-44°-E	隅丸方形	380×262×104	200×40×43	弥生時代 中期後半	蓋石目張に土器 片使用

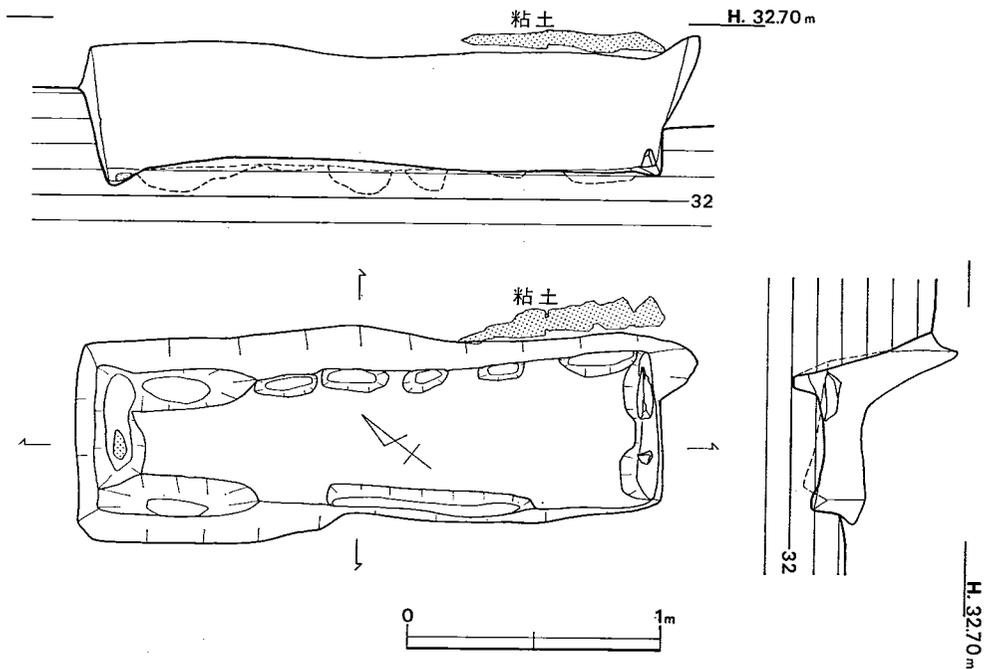


Fig. 68 1号石棺墓(縮尺1/30)

1号石棺墓 (Fig. 68)

墓塚及び石棺の石材は、B-1号墳構築の際の地山整形、さらに周溝によって破壊されてお

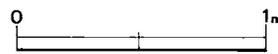
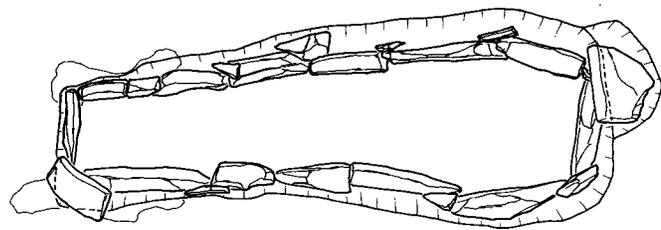
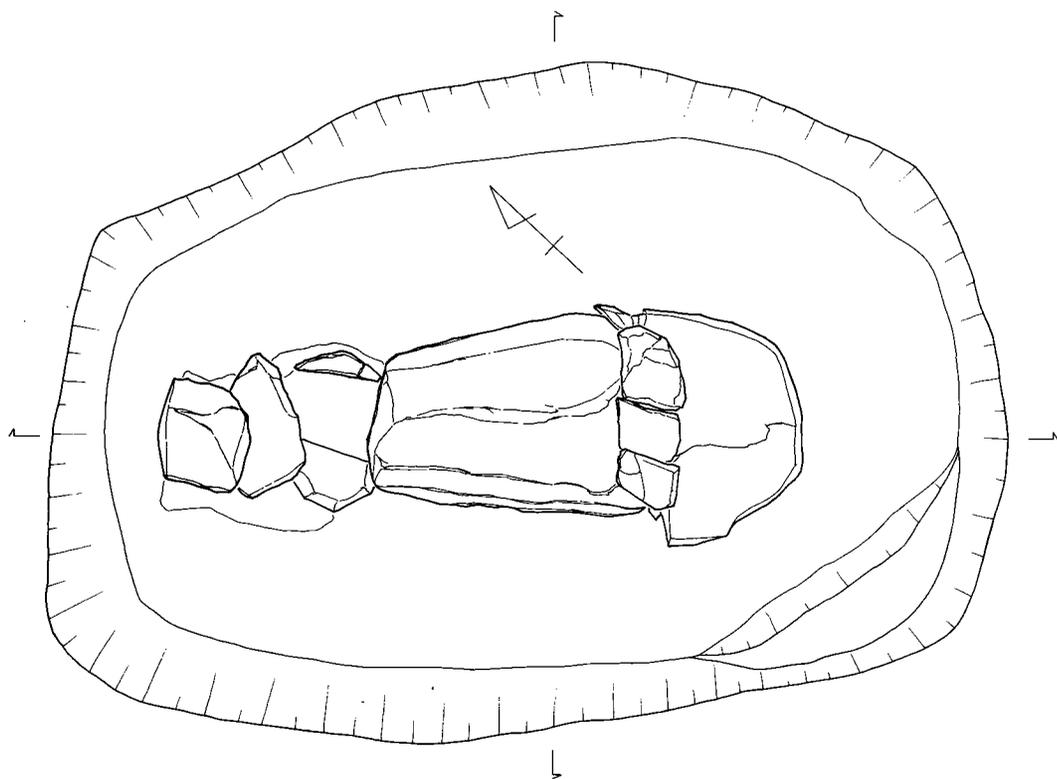
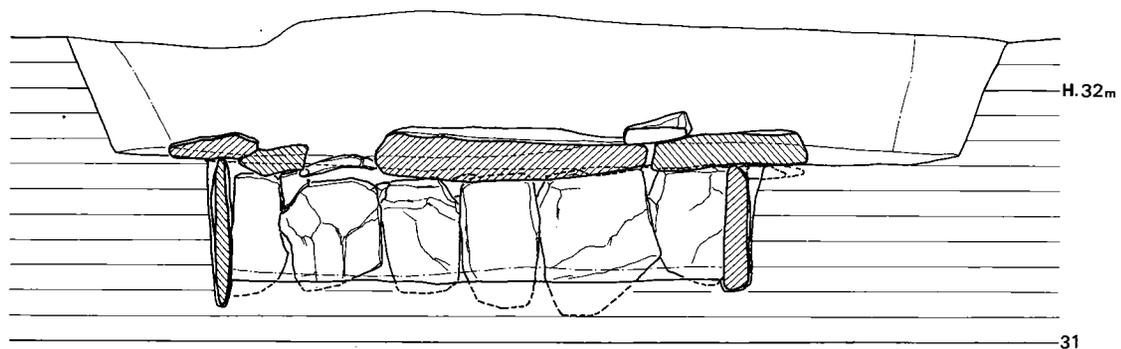


Fig.69 2号石棺墓(縮尺1/30)

り、確認できなかった。ただ石の抜き跡が、検出され、主体部だけをとらえる事ができた。

棺内法は、長さ約144cm、小口最大幅約48cm、最小幅約26cm、深さ45cmを測る。

北側壁上場と、西側小口石抜き跡から青灰色の粘土が検出された。壁の上場の粘土は目張のものである。

棺は長軸線南側は、1号墳周溝により切られているため、立ち上りは不明である。(平ノ内)

2号石棺墓 (Fig. 69)

墓壇平面形は、隅丸方形を呈し、主軸380cm、幅270、深さ105cmを測り、当遺跡B-II区尾根線中央部に位置する。

棺材は砂岩質及び花崗岩質のものを使用している。蓋石は頭部及び胸部に大きな扁平な石を置き、足部には小さな扁平な石を3枚使用している。頭部と胸部の隙間には、小さな石を3個並べている。さらに蓋石と棺との隙間に土器の口縁片を使用している。

主体部の内法は、長さ195cm、頭部幅40cm、足部幅30cm、深さ40cmを測る。

石材は扁平な砂岩質及び花崗岩質の石を使用しており、組立はまず小口を立て頭部側より、左右側面を平行に立ていき、足部小口を立てた後に、側板の隙間にクサビ状の石を打ち込み、側板の隙間をつめている。

床面は水平で、人骨が若干残っていたが、風化が進んでいるため取り上げ不可能であった。

当石棺は尾根線に対してほぼ直交し、主軸をS-44°-Eを示し、高木遺跡における一般的方向を示し、頭部位置を東にもつものである。

時期は、石棺の蓋に使用した土器片 (Fig. 51-8) が中期後半と比定される事から、それ以前と推定される。

遺物

壘形土器片 (Fig. 51-⑧) 口縁部は「く」の字状に外反し、口縁部直下には三角突帯を一条もち、口縁部と突帯の間に横にハケ目が入っている。

土器の胎土、焼成ともに良好で、色調は黄褐色である。(平ノ内)

(3) 古墳時代の生活遺構と古墳群

a) 生活遺構〔住居跡とその他遺構〕(Fig.70~75)

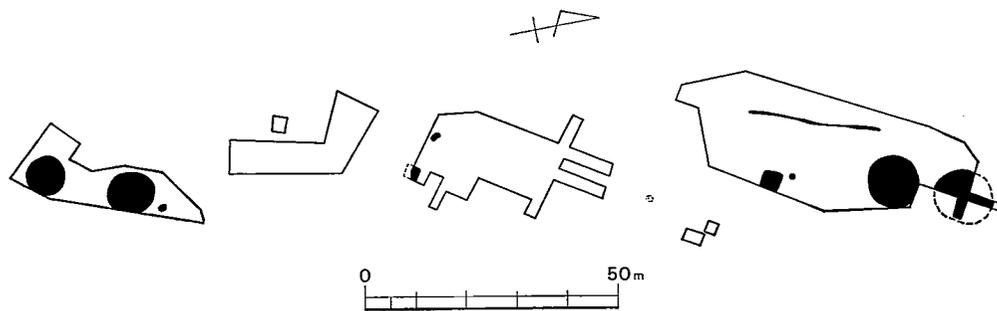


Fig. 70 古墳時代遺構配置図 (縮尺 1/1500)

古墳時代の住居跡はC区とD区に存在する。両者とも平面形は方形を呈している。

C区の1号住居跡は弥生時代のY-1号住居跡を切って造っている。東半分は、地山の傾斜によって消失している。ほぼ中央に炉を有している。

この住居跡の周辺部に土壇がある。土壇はY-1号住居跡を切ってつくられている。

D区の2号住居跡は道のため大部分が割愛されほぼ $\frac{1}{4}$ ぐらい残っている。東北の端に炉を有し、床面より紡錘車と須恵器破片が出土している。この住居跡の西側に須恵器と土師器が集中した土器溜がある。(副島)

1号住居跡 (Fig. 71)

Y-1号住居跡を切って、つくられている方形の住居跡で、東半分は地山の傾斜のため消失している。ただ一辺の長さ3.60mのみが計測され、炉を有しており、床面に柱穴がある。主柱穴は4本柱であったと推定されるが、東側の2本は見あたらない。西側の2本はおさえることができた。壁高は西側で約30cm前後で、壁の周囲に周溝をもっている。

出土遺物は、須恵器の杯2点と土師器杯・埴2点および支脚が完全な形で床面に密着していた。

炉跡のまわりは須恵器の甕の破片が存在していた。

遺物 (Fig. 72) 支脚、埴、須恵器の一部は焼きがあまかったので、取り上げ中に失敗して、実測できなかった。ただかろうじて、土師器と須恵器各1点を実測できた。

杯 (Fig. 72-①) 杯の身で、土師器である。口径13.8cm、器高は4.8cm、色調は灰褐色を呈し、一部天井部にかけて黒変している。調整はヘラ調整で、焼成はあまく、亀甲状の亀裂がはいっている。

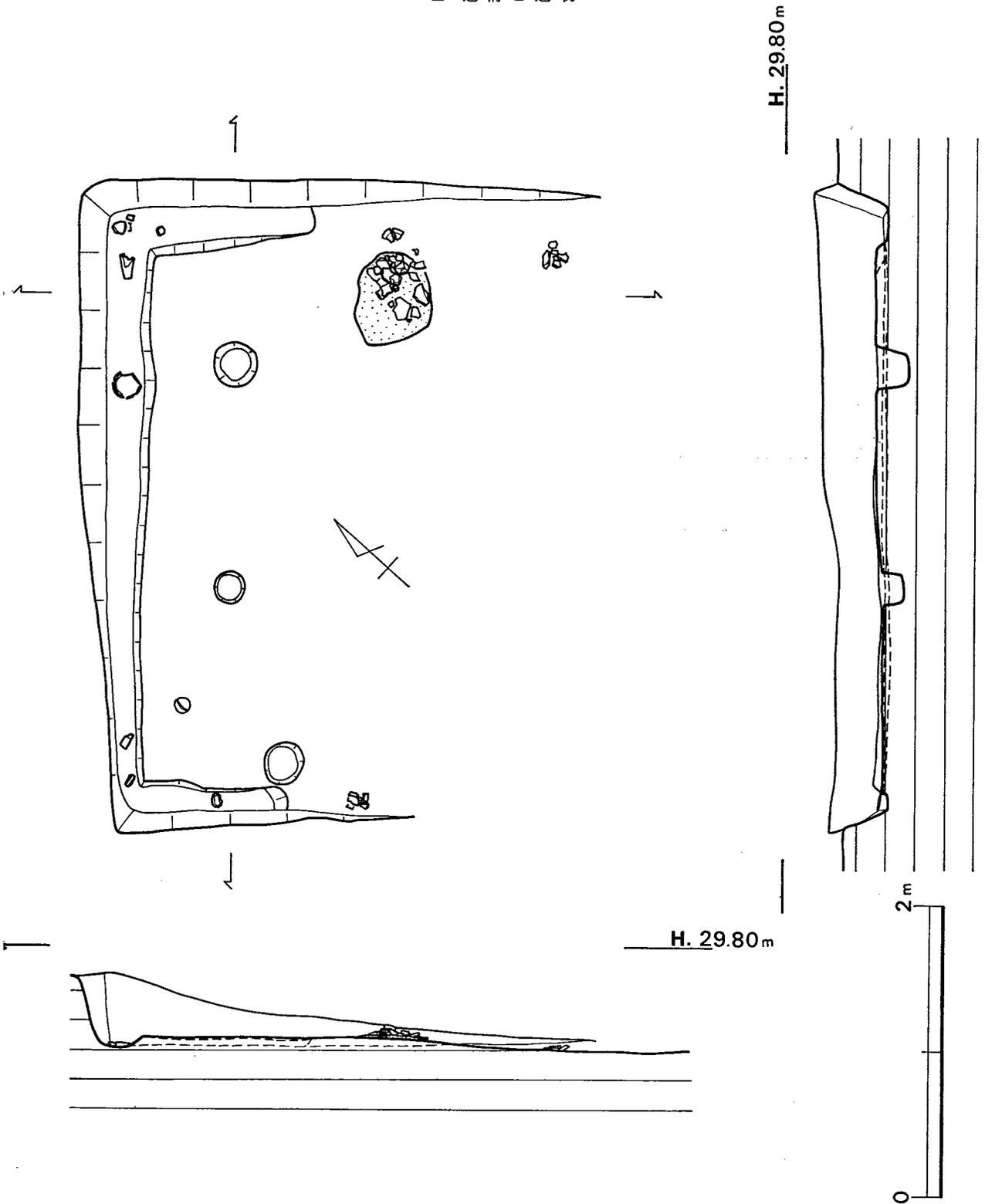


Fig. 71 1号住居跡(C区) (縮尺 1/40)

杯 (Fig. 72—㉔) 杯の身で、須恵器である。口径13.8cmでの天井部まで高さ5cm、色調は青灰色を呈し、焼成は良好である。天井部にかけて沈線が1本はいつている。調整はヘラにて仕上げ

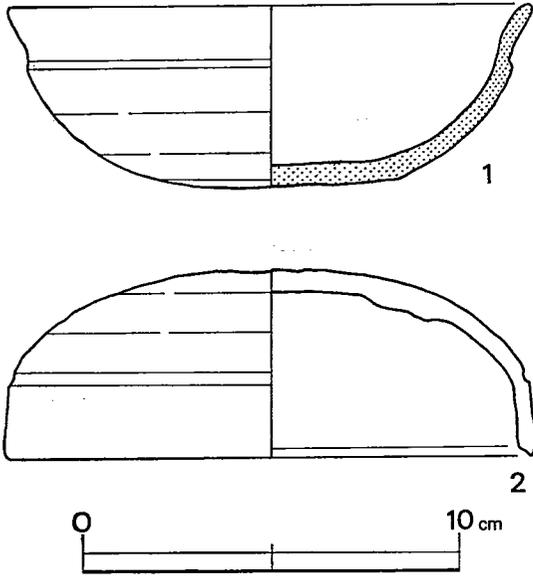


Fig. 72 出土遺物実測図 (縮尺 1/2)

げている。型式はⅢ型式である。

遺物によって住居跡の時期は、ほぼ6世紀後半頃と思われる。取り上げに失敗したあまやきの須恵器は、型式ではⅢ型式の古手にはいるものと思われるため、この古墳群が存在した頃と同時期か、あるいは一時期古いものと考えられる。(副島)

2号住居跡 (Fig. 73)

本住居跡は、D区南側に位置しD区とA区との間を通る切り通しのため、半分程削られている。全形は不明であるが東西約4.5m、南北現存2mの隅丸方形を呈し、壁はもっとも残りの良いところで20cmを測る。西側の下には幅20cm、深さ10cm、長さ1m程の周溝が掘られているが、周溝は西側に一部だけ掘られているだけで他にはその形跡がない。

柱穴は住居跡床面に2本掘られ、住居跡外に2本掘られている、合せて計4本が確認できた。柱穴はそれぞれ径約25cm、深さ約20cm程である。

炉跡は、中央部北側に位置し焼土の範囲は30×40cm程で、焼土の状態から考えて長時間使用されたものとは思われない。

床面はほぼ水平である。しかし地形が東側に傾斜しているため、中央部から東側にかけて若干床面を張っている。床面からは、滑石製紡錘車1点、周溝付近から須恵器片2点が検出された。

遺物

滑石製紡錘車 (Fig. 75) 直径3.5cm、上面径2.8cm、厚さ1.1cm、軸孔径0.7cmを測る。側面は、上面より調整のため細かく削っている。軸孔は両面から穿孔されており、ほぼ垂直にあけている。(平ノ内)

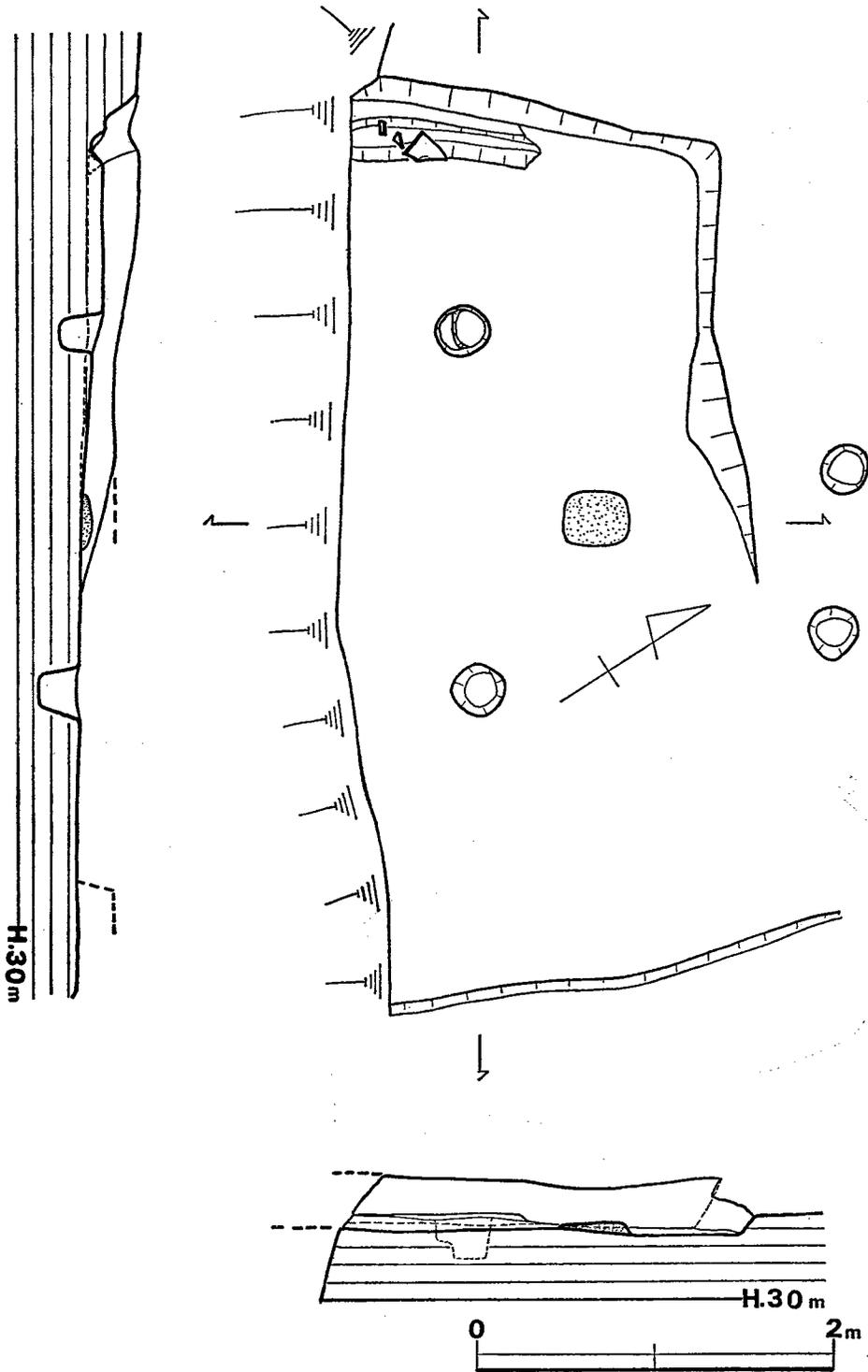


Fig. 73 2号住居跡(D区)(縮尺1/40)

その他の遺構 (Fig.74・75)

土 塚 (Fig.74)

Y-1号住居跡の東部に不整形円形を呈し、長さ150cm、幅100cmで、断面が袋状の竪穴を思わせるような土塚である。底面形は楕円形で、底に完形の壺形土器が横転し、土塚の内部からは壺形土器・埴等が一括して出土した。

遺 物 (Fig.75-①②③④⑤)

杯 (Fig.75-①) 口径12.5cm、器高4.7cmで、色調は褐色で、亀甲状の剥離があり、焼成は良くない。巻き上げ法でつくられており、指痕が残っている。

壺形土器 (Fig.75-②③④⑤) ②は口径16cm、器面調整は頸部から胴部にかけて、櫛を使っている。内面は指痕によって、大きくナデつけし、輪積の部分は指痕がのこっている。口縁部は

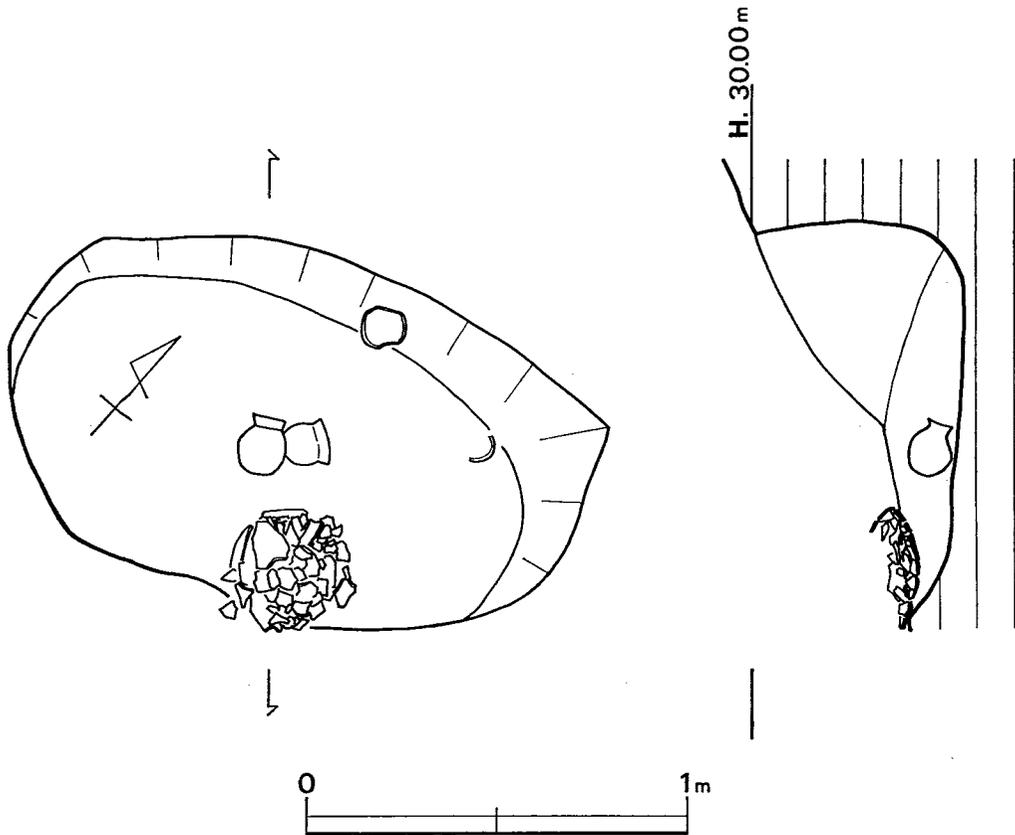


Fig. 74 C区土塚遺構実測図 (縮尺1/20)

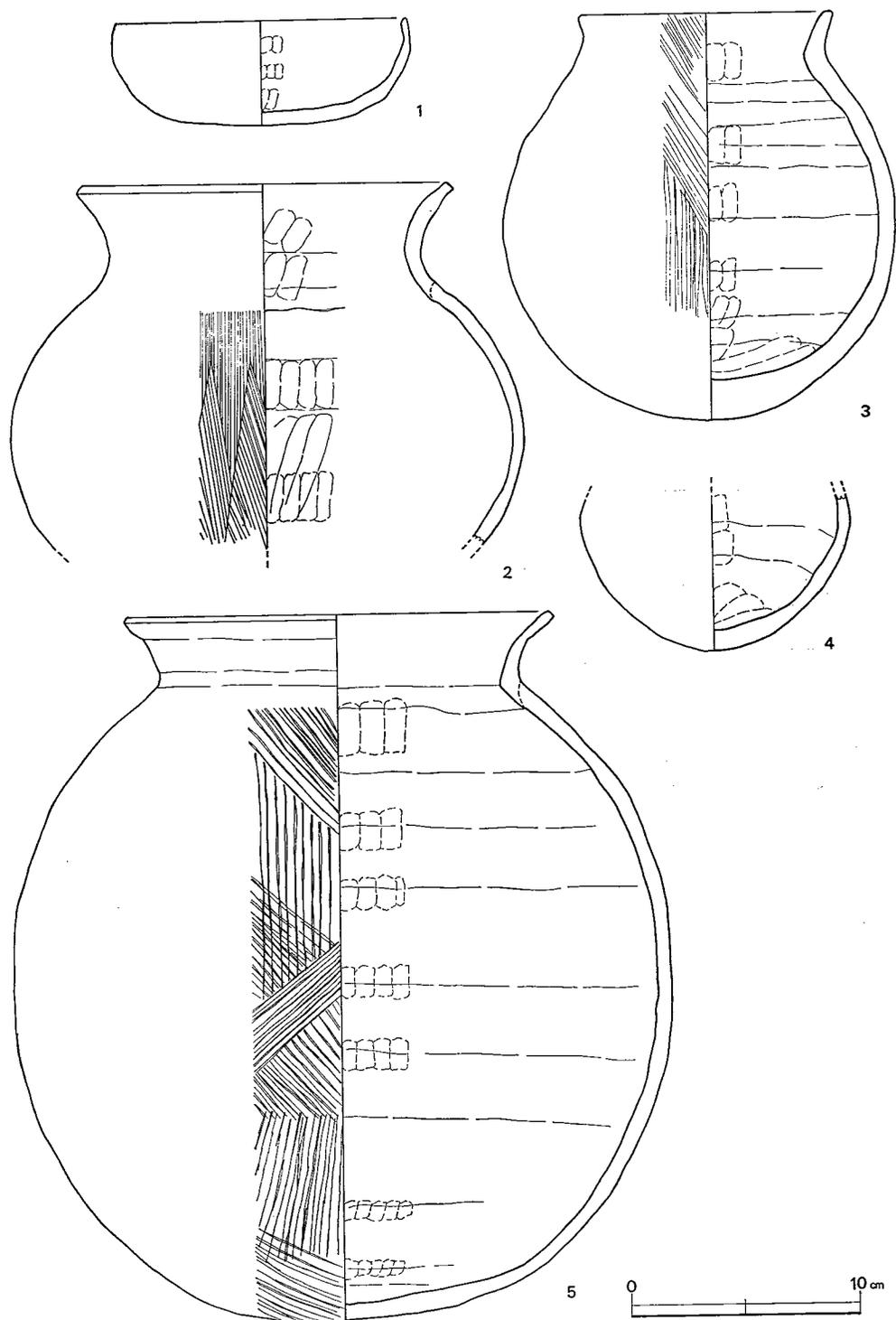


Fig. 75 出土遺物実測図 (縮尺1/3)

「く」の字状に外反している。色調は灰褐色、胎土に細砂を含むため器面が荒れている。

③は口径 11 cm、器高 17.8 cm、器面調整は口縁部から胴部下半にわたって、櫛を使用している。巻き上げ手法にて製作されているが、接合部には指痕のあとが残っている。色調は灰褐色で、胎土に細砂を含む、焼成は良好である。

④は胴部下半の破片で器壁は、うすくなって指痕が残っている。

⑤は口径 18 cm、器高 30.7 cm、器面調整は頸部下半、胴部とのつけねから斜行の櫛書きである。巻き上げ手法のため、接合部に指痕がのこっている。頸部は「く」の字状に外反し、胴部は丸味をもつ、色調は黄褐色を呈し、胎土に細砂を含み、焼成は軟質である。

遺物によって、ほぼ時期が決定できる。いわゆる関東地方でいう鬼高期に比定できるものと思われる。年代は 6 世紀後半ぐらいと推定している。(副島)

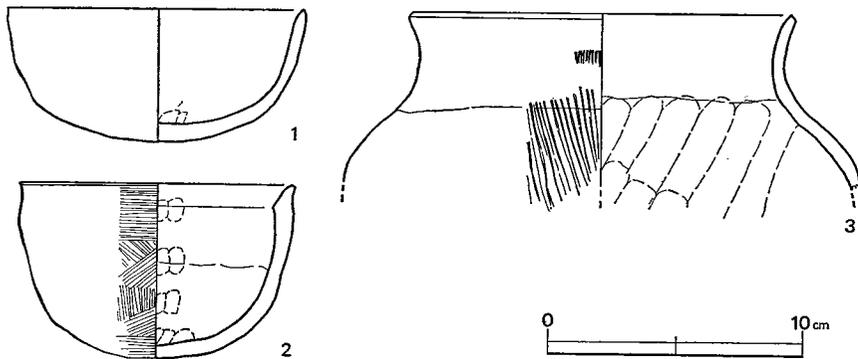


Fig. 76 土塚周辺出土遺物実測図 (縮尺1/3)

土塚周辺 (Fig. 76)

土塚周辺部から、高杯・杯・壺・埴等が出土した。

高杯 (Fig. 75-⑤) ⑤は高杯の脚部で、Y-1号住居跡と土塚との接点付近から出土したもので、色調は褐色を呈し、胎土に細砂を含み、焼成は軟質であるため、器面調整は判明しなかった。

杯 (Fig. 76-①) 口径 11.5 cm、器高 5.2 cm、器面の調整は刷毛にヨコナデされており、底部は 2 次的に火を受けている。内面には指痕が残っている。

埴 (Fig. 76-②) 口径 10.8 cm、器高 6.7 cm、器面調整は頸部から、刷毛にてヨコナデし、胴部から斜行し、互している。内面は接合部に指痕が残っている。色調は黄褐色を呈し、胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。

壺 (Fig. 76-③) 口径 14.7 cm で、口縁部直下は櫛にて器面を調整し、内面は口縁は付近から

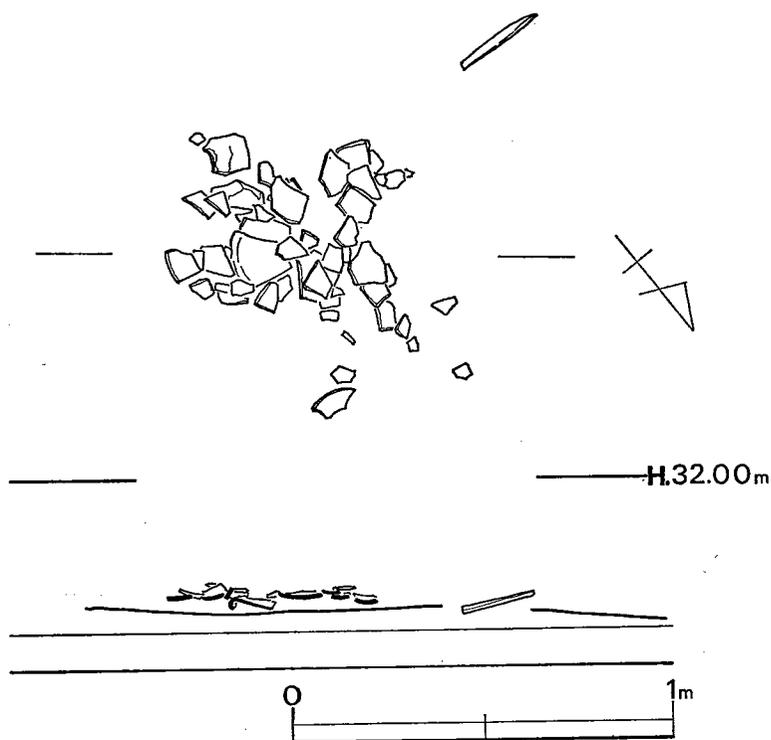


Fig. 77 土器溜遺構実測図 (縮尺 1/20)

胴部との接合点まではヨコナデしている。胴部は指にて上から下へとナデ上げられている。色調は褐色で器面は軟質で、焼成はよくない。(副島)

D区土器溜 (Fig. 77)

D区南西隅に東西約 90cm、南北約 100cmの広がりです師器と須恵器片が検出された。なお土器溜の西側からこれに伴なうと思われる、刀の先が1点検出されている。

当土器溜の北側にも土師器が単独で多量に検出されたが、風化が進んでおり復原はできなかった。

遺物 (Fig. 78・79)

長頸壺 (Fig. 78-①) 口頸部は、胴部からラップ状に広がって立ちあがり、胴部は正円に近く中位でその最大径を測る。頸部中位に二条の沈線が入り、その上下に櫛描の波条文が入る。

壺 (Fig. 78-②) 口縁は直線的に内側に立ちあがり、胴部の張りは中位にあり全体的に丸みが強い。長頸壺、壺、共に胎土・焼成は良好である。色調は青灰色。

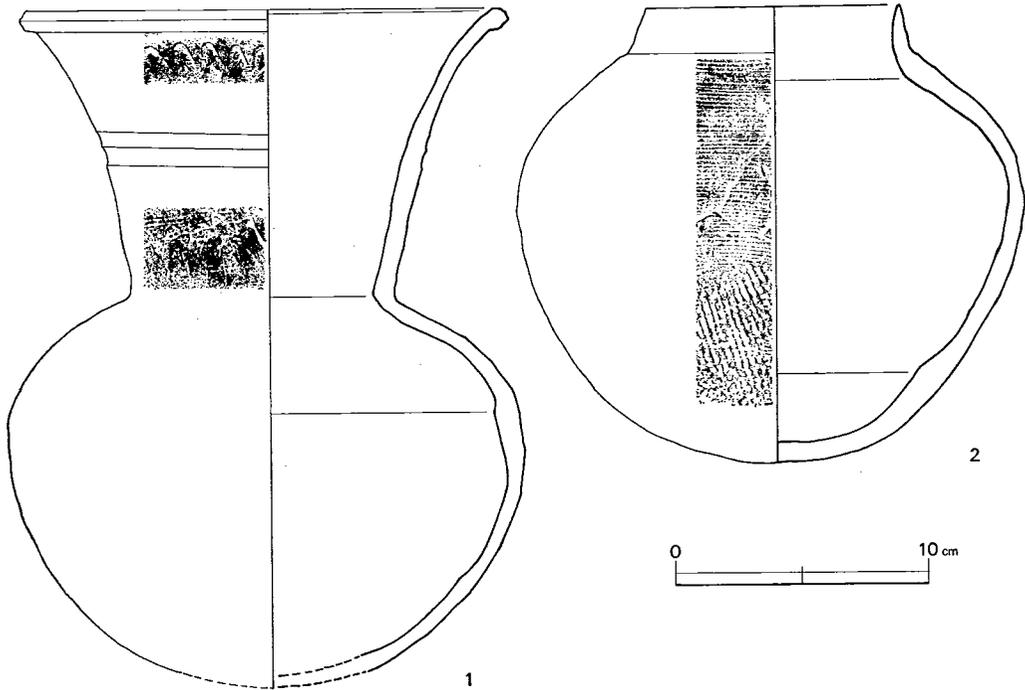


Fig. 78 出土遺物実測図（土器）（縮尺 1/3）

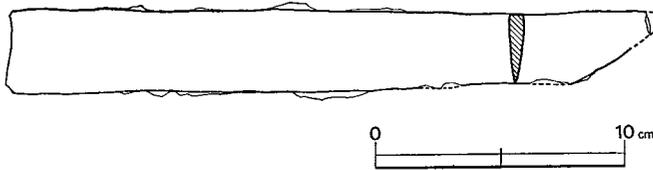


Fig. 79 出土遺物実測図（鉄器）（縮尺1/3）

刀 (Fig. 79)

直刀で中央部付近で折れ、先端部を一部欠く、残存長 25cm、幅 2.7cm、厚さ 0.5cm、断面三角形を呈する平棟平造である。（平ノ内）

D区の古墳時代遺物 (Fig. 80)

杯身 (Fig. 80—⑦~⑩) 当遺跡の須恵器杯身は、他の遺跡の同時期のものより全体的に器高が低いのが特徴である。

⑧・⑨・⑩は口唇部の立ち上りが薄く長い、⑦・⑩は口唇部の立ち上りが他より短い、器面調整はすべてヘラ切りとヨコナデで行われている。色は⑦・⑩が灰白色で、⑨・⑩が茶褐色、⑧は黒みをおびた青灰色である。胎土は全体的に小石を含み緻密でない。焼成は⑦・⑩があまり、あまり良くない、他は良好である。

杯蓋 (Fig. 80—①~⑥) 杯身同様全体的に器高は低く①・②・③・④は口径 13cm 前後であり、⑤・⑥は口径 16cm 前後で若干大きくなる。口唇部内側に稜線がすべて入っており、②・⑤は薄く他はふ厚い、器面調整はヘラ切りとヨコナデによって行なわれている。①は灰白色、②・

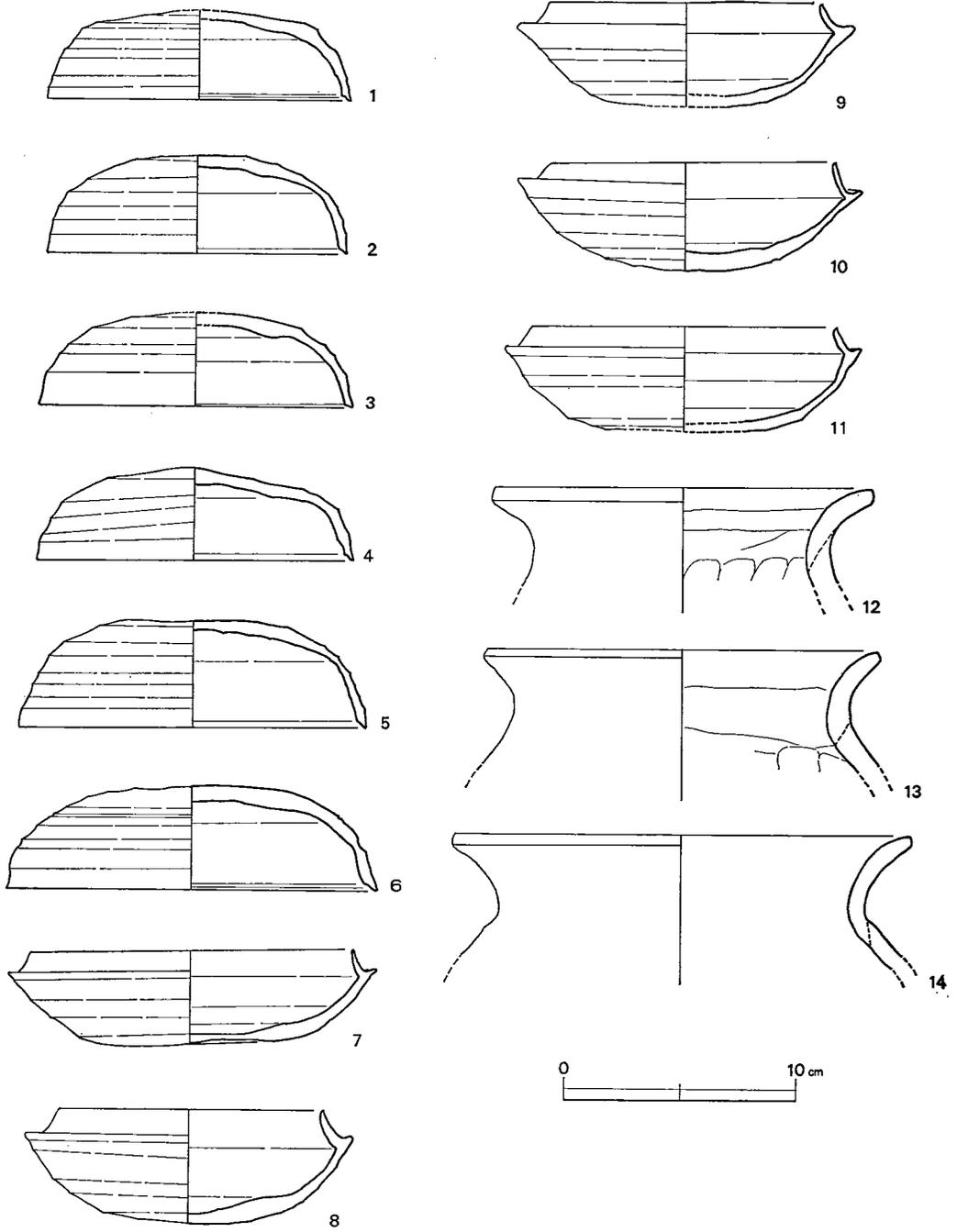


Fig. 80 出土遺物実測図 (縮尺 1/3)

③・④・⑤は青灰色、⑥は黒みの強い灰色、胎土は石英の小石を含み緻密ではない、焼成は全体的に良好である。

壺形土器 (Fig. 80—⑫~⑭) 口縁部は「く」の字状に外反し、⑫・⑬は内壁に指痕を残し、粘土のつながりの線が残る。3点とも土師器で、胎土は小石を含み、色調は黄褐色、焼成は3点とも良好である。(平ノ内)

b) 古墳群 (Fig. 81~106)

高木古墳群は、字高木をA群とし、字長家をB群とした。

室木に抜ける切通し側からA-1号墳、A-2号墳と称し、字長家の方は南側からB-1号墳、B-2号墳と称した。

全体が高木・長家古墳群と称され、古墳時代後期の横穴式石室である。ではA群から説明を加える。(副島)

表7 古墳石室内計測値一覧表

(単位 cm)

古墳	方位	後室長	後室幅		後室高	袖石幅	前室長	幅	仕切石幅	羨道長	時期
			奥幅	前幅							
A-1	S-75°-E	158	158	142	164	56	90	70	52	230	6C後半
A-2	S-45°-E	200	218	210	206	88	130	130	76	360	〃
B-1	S-70°-E	298	160	160	160	64				50	〃
B-2	N-71°-W	240	130	130	190	75	110	70	70	50	〃

A-1号墳 (Fig. 81~85)

墳丘

伐採後のみかけの墳丘規模は、東西約6m、南北約7m前後の小規模のものである。墳丘は盛土からなり石室天井より約1mの厚さで盛られている。

石室は地山に深く掘り込まれた墓壇内に横穴式石室として構築されており、裏込め部分は細かく入念に行なわれている。

構築当初の規模は、東西約8m、南北約8mで若干みかけの規模より大きくなる。周溝は幅約1.0m、深さ0.2mで墳丘を約半周している。

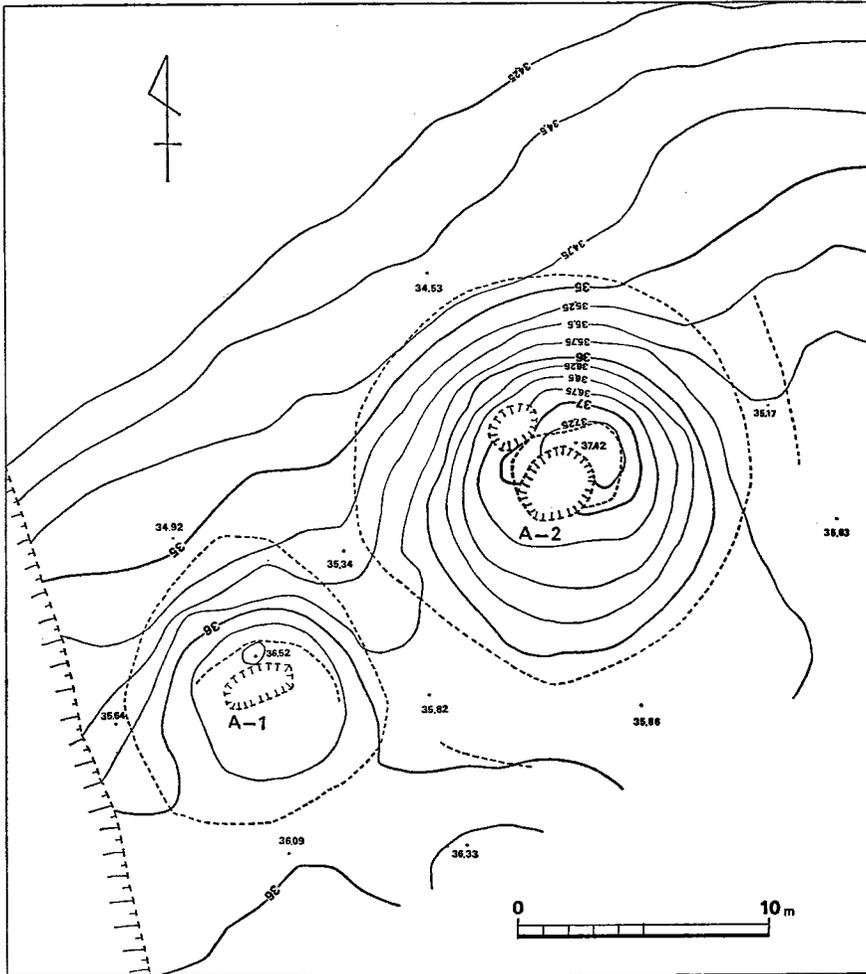


Fig. 81 A群地形測量図 (縮尺1/300)

石室

内部主体は、主軸を S-75°-E にとり、略東に開口する、複室の横穴式石室である。石室平面形は、仕切石と袖石との間を前室とし袖石から奥壁までを後室とした。本来袖石の間に仕切石があったものと思われるがなくなっている。

後室の平面形は略正方形で内法は奥壁幅1.58m、玄門部幅1.42m、奥行1.30mを測り、両側壁は腰石に長方形の大石をすえ、二段目にも腰石とはほぼ同じくらいの大石を平積みにし、三段目以後は若干、小形の石を使用している。奥壁は腰石に大石を用い、二段目以後は若干、小形の石を使用している。玄室部の石組の状態は大きめの形の整った石を積み上げており、構築は良好である。床面からの残存高は約1.64mである。

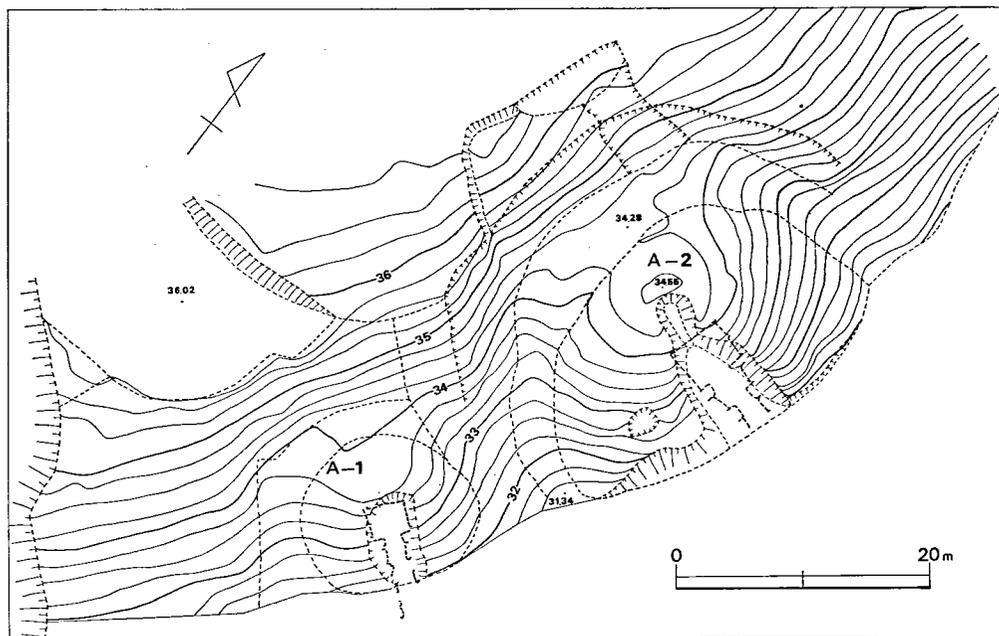


Fig. 82 A群地形測量図（発掘前）（縮尺1/600）

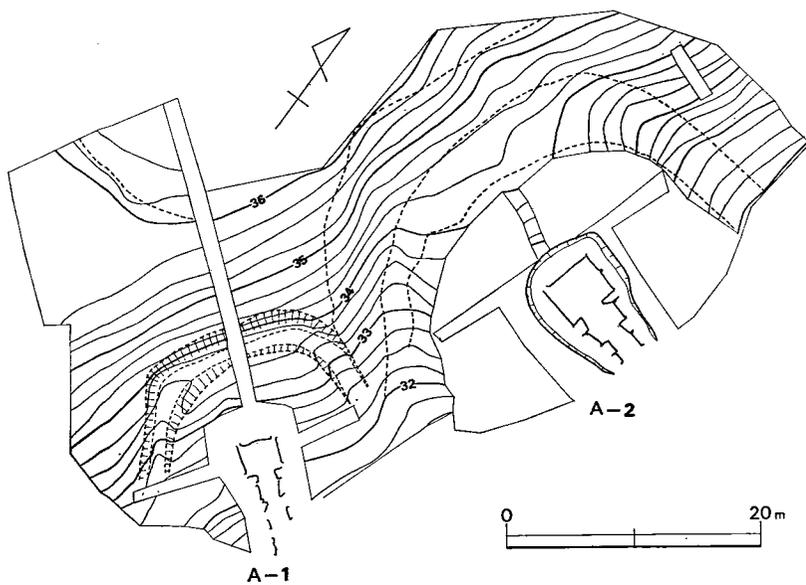


Fig. 83 A群地形測量図（発掘後）（縮尺1/600）

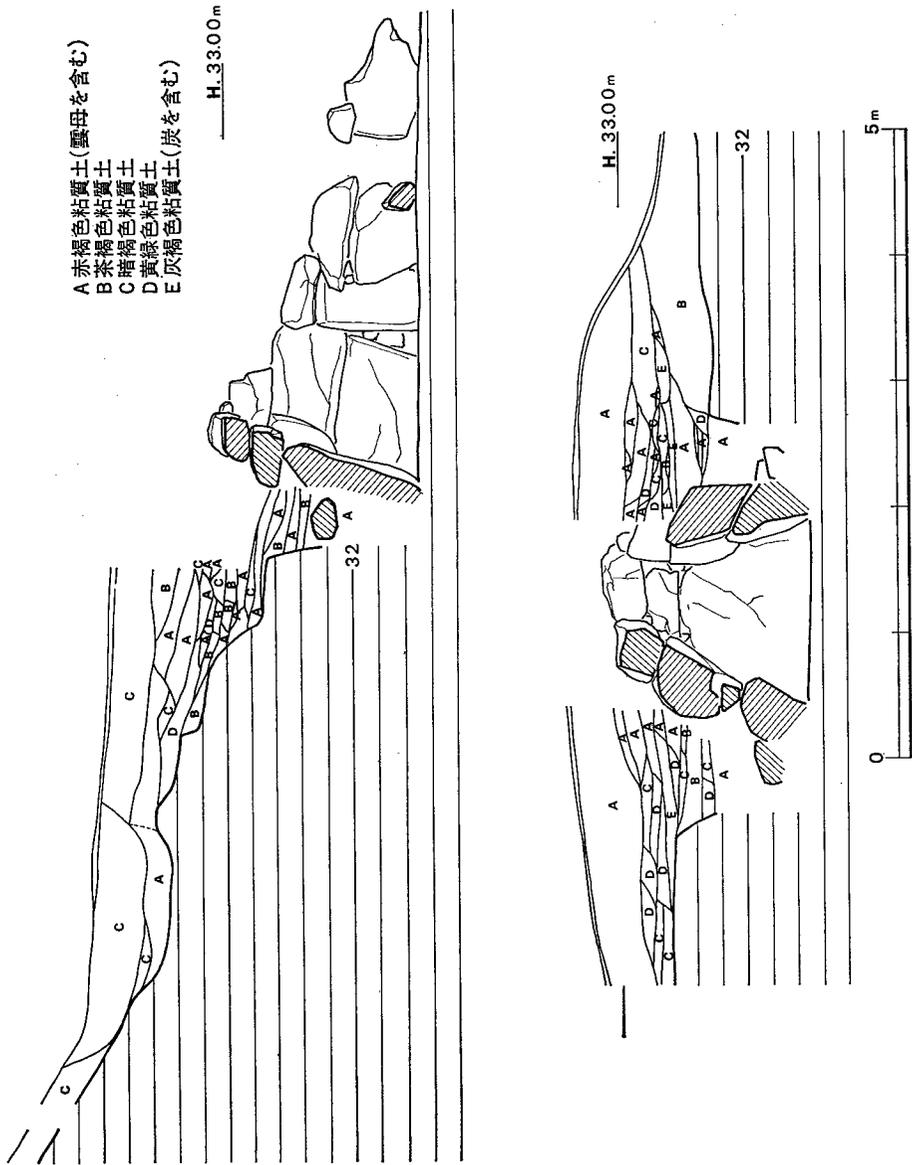


Fig. 84 A-1号墳丘土層図(縮尺1/60)

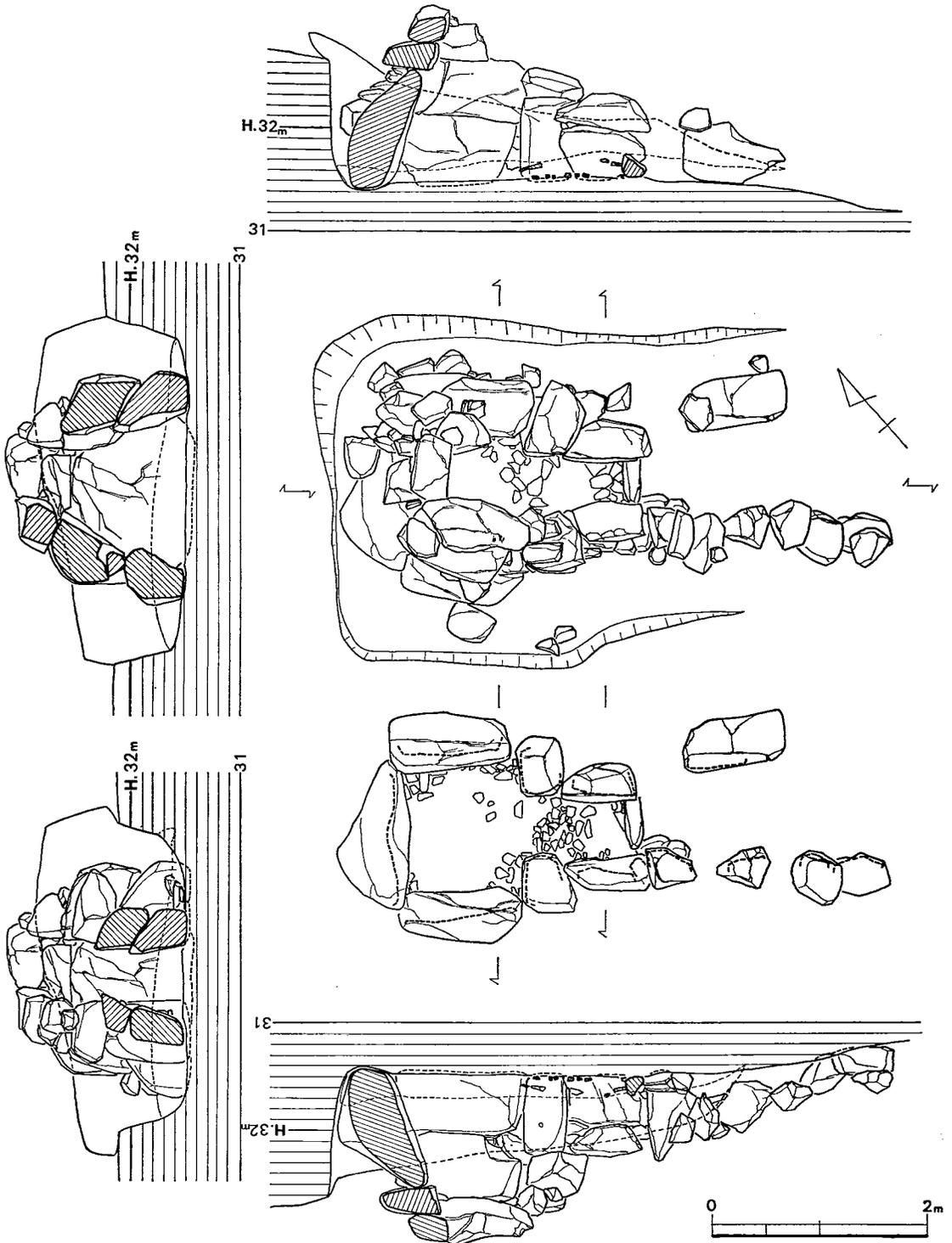


Fig. 85 A-1号石室実測図 (縮尺1/60)

石室床面には、小石大の円礫が使用されており前・後室部までおよんでいる。

敷石は二段に別れており、追葬の折りのものと考えられるが、一段目も二段目もかなり盗掘によって乱れているので、盗掘の際の攪乱とも思われる。

袖石は、南北とも 0.8m 程の角柱状の整った石を用いており、二段目に大きめの扁平な石を積んでいる。袖石の間には仕切石があったと思われるが盗掘の際閉塞石とともにはずされたものと思われる。

前室は幅 0.56m、長さ 0.9m を測る。平面形は長方形である。形態的には複室の形式であるが完全な複室ではない。

羨道部は長さ 2.30m、仕切石部分で幅 0.5m、先端部で約 1.0m を測る。(平ノ内)

A-2 号墳 (Fig. 86・87)

墳 丘

尾根筋ではなく、これを少し下った斜面に位置しており、尾根寄を周溝状に浅く広く掘りくぼめた円墳で、みかけの規模は東西径約 9m、南北径約 13.8m で、南側からのみかけの高さは約 3.2m である。墳丘築成に際して旧表土はすべて除去されているが、削り出しは殆んど行なわれていない。かなりの傾斜面に位置しているので、北東～南東側の土止めに意が用いられたと思われるが、列石等の施設は確認されていない。等高線と平行する南北方向では略水平位に、中心から外側へと盛土されているが、直交する東西方向では西側が稍高く、斜めに外側から中心へと盛土がなされるという地形に応じた相違がある。

奥壁腰石上位にあたる標高 33.1～33.4m の位置には、数 10cm の広がりをもつ一群の礫が認められた。遺存しているのは墳丘中でもこの部分のみであるが、土器その他を全く伴出していない。

石 室

略南東に向かって開口する複室式横穴式石室である。天井石・敷石のすべてと周壁上半の大部分を失っているが、横長の前・後室の俯をとどめている。石室は地山を穿った最大幅 4m 弱（上端値）、長さ約 5.4m（上端値）の墓坑底に築かれており、その深さは奥壁よりでは約 2.5m にも達し、現存墳頂部から 4.6m 強下位にある点が特徴的である。

腰石は坑底に直ちに置かれており、袖・仕切石についても同様である。奥壁寄により大きな石材を配する点是他例と変らないが、岩質は脆弱で各所に亀裂を生じている。上半を比較的良好にとどめている奥壁近くでは、控えよりも面を長くとり、壁面の凹凸もまた著しく、総じて粗雑な感を受ける。奥壁の内傾度よりも両側壁のそれの方が強く、奥壁では基部から 1.7m の高

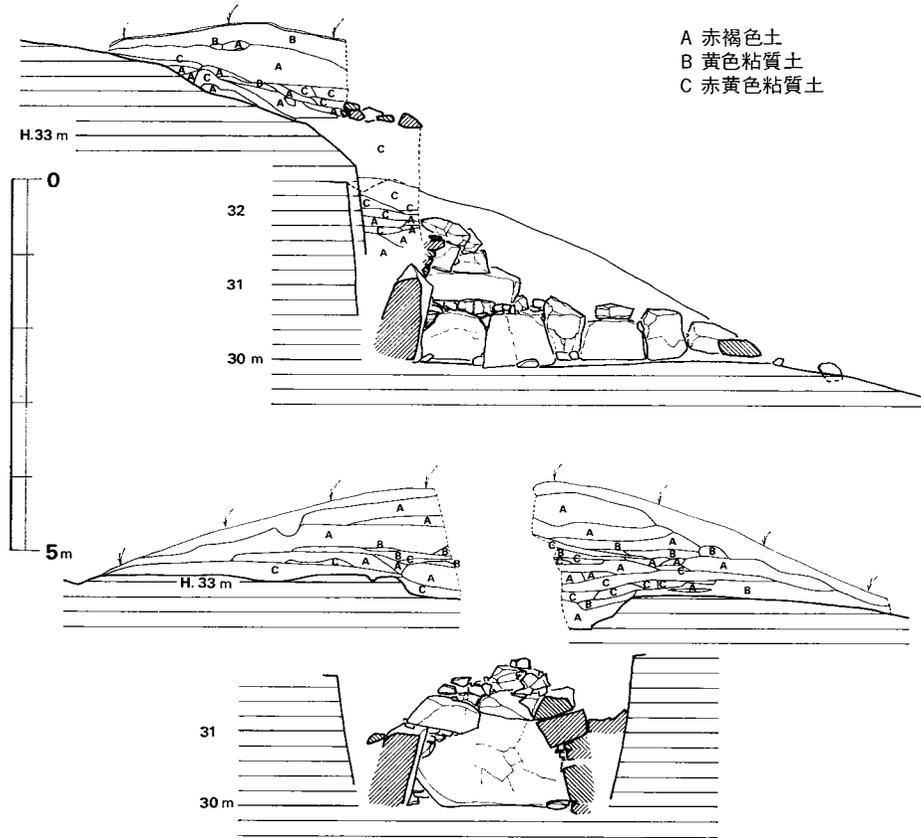
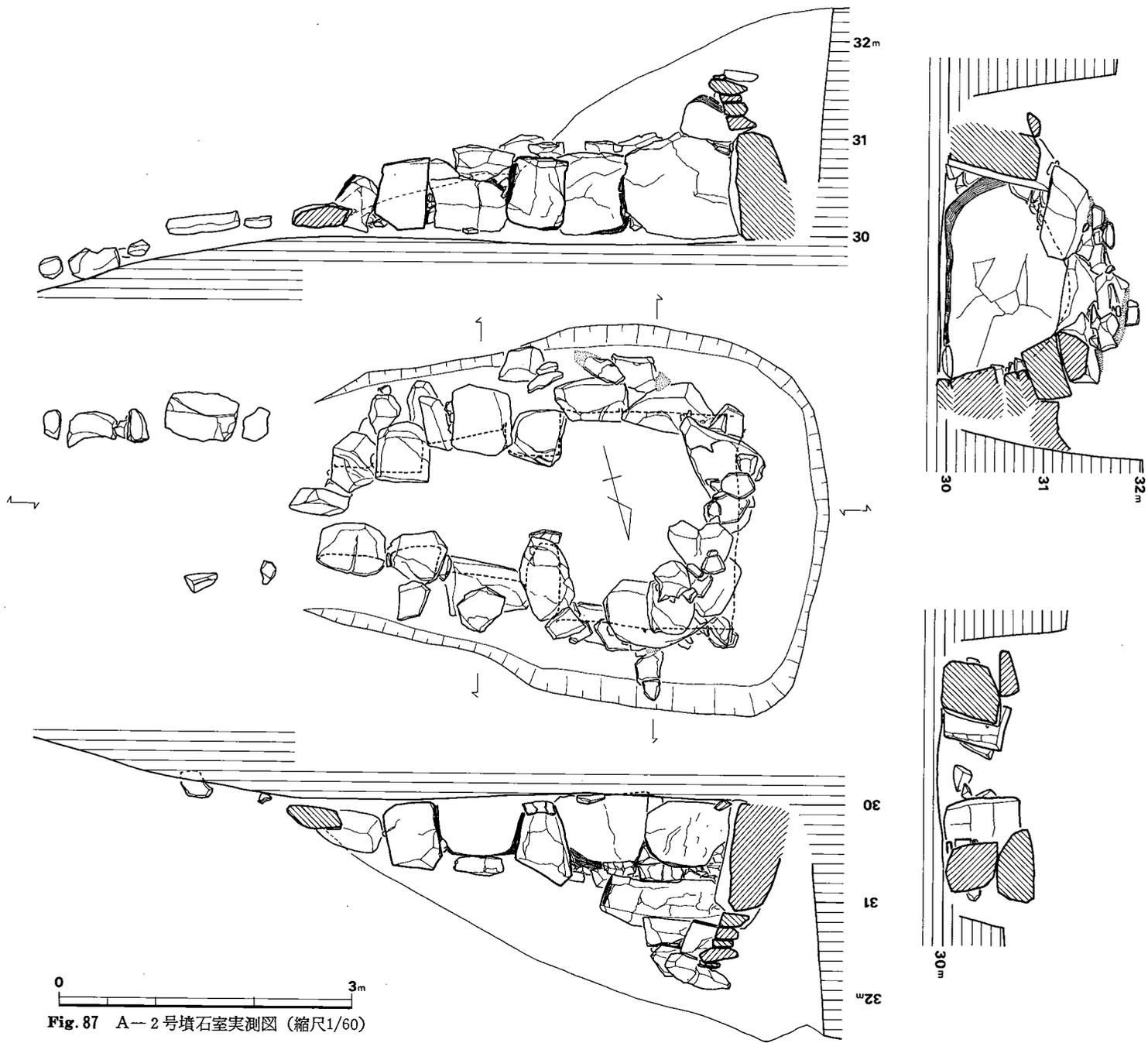


Fig. 86 A-2号墳丘土層図 (縮尺1/100)

さで0.4m、右側壁では同1.3mで0.5m迫り出している。

後室は長さ1.8m、幅2.2mの横長の長方形プラン。玄門には袖石が立てられているが、正面にはなく、少しく南に偏る。袖石間の幅は、下部で0.9m、上部で0.46mと極めて狭小である。前室は長さ約0.7m、幅は1.3~1.5mの不整形プランを呈し、後室と同様に横長である。羨門はさらに狭まって幅0.8mとなり、この前面に羨道側壁が続くが先端は破壊されており、全長は不明である(註1)。(石山)

註1 石室全長については、企画性の復元という観点から、ある程度の推測が可能である。A案は、後室幅2.2mを1単位とする。B案は、後室長1.8mを1単位とする。A案は長さとの比率である点で企画性という字義になじむが、2倍の4.4mでは短かく、3倍の6.6mでは長きに過ぎる。B案では、3倍の5.4mをとると、後室長、前室長(玄・羨門を含む)、羨道長が略同長で完数に近い。なお、A案の2.2mの2.5倍は5.5mとなる。同様にA-1号墳石室も、後室長を単位として企画された可能性がある。遺存度は良好でないが、後室長:前室長:全長が1:1:2、つまり後室長を4倍にとったのが全長であると思われるフシがある。



A-2号墳周溝横土器溜 (Fig. 88・89)

A-2号墳周溝北側に、2号墳築造後祭祀のものと思われる土器溜が検出された。
土器溜は南北100cm、東西70cmの範囲で土師器の甕、飯、埴等が割られたような状態で確認された。

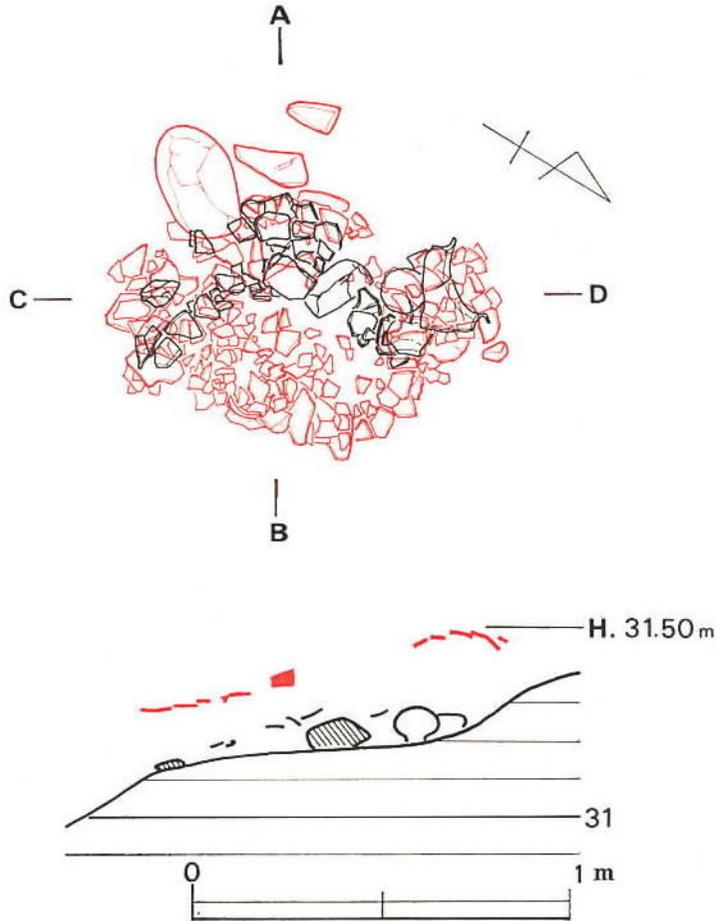


Fig. 88 周溝土器溜 (縮尺1/20)

遺物 (Fig. 89)

甕形土器 (Fig. 89-①~③) ①口縁径19cmで口縁は外反し、内面は口縁部付近はヨコナデをし、下部は底部方向よりヘラによって調整している。内面には粘土接合時の痕跡が残っている。色調は黄褐色、胎土は石英の小石を含み、焼成は良好である。

②口径は18.7cm、高さ34.5cmを測る。口縁はほぼ垂直に立ち上がり、表面はハケ目で調整

し、内面は、口縁部付近ヨコナデを施し、中位では指痕を残し底部方向からヘラ削りを施して調整している。色調灰褐色、胎土は石英の小石を含み、焼成は良好である。

③口縁径21.5を測り、口縁は「く」の字状に外反する。表面は、口縁部下に目の荒いハケで調整を施し、内壁は口縁部付近はヨコナデをし、中位は、横にヘラ削りを施している。色調は灰褐色、胎土は小石を含み、焼成は良好である。

甗 (Fig. 89—④) 口縁径約7.5cm、高さ約10cmを測る、口縁部は「く」の字状に外反し、胴部中央部で13.2cmで最も張り出している。色調赤褐色、胎土は石英の小石を含み、焼成は良好である。

甗 (Fig. 89—⑤) 口縁径29.7cm、高さ25.2cmを測る。表面は口縁部直下から中位にかけてハケ目調整を施し、底部からヘラ削りにより調整している。内壁は、口縁部直下には指痕を残し、下部からヘラで調整している。底部は若干傾斜している。(平ノ内)

B-1号墳 (Fig. 90~98)

墳丘

尾根から斜面にまたがった位置に営まれており、東側山麓部からのみかけを強く意識しての立地といえる。

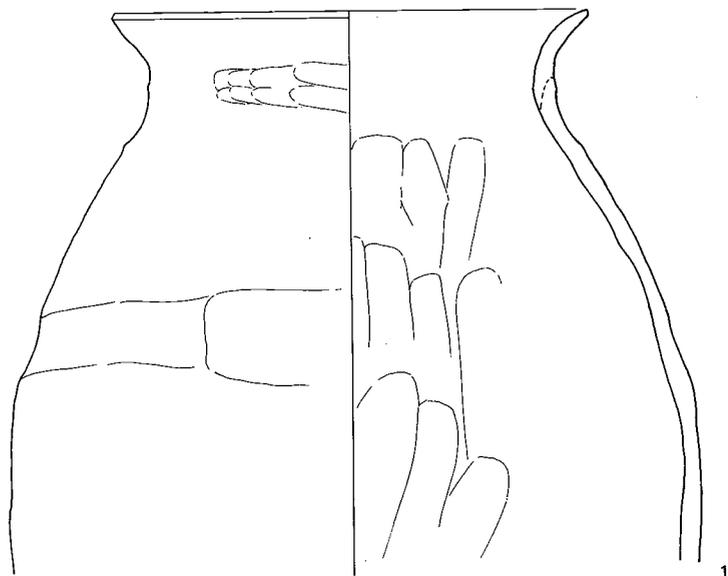
発掘前のみかけの規模は、東西径16.5m、南北径13.5mの長円形で、東側からの高さは4.5mに及ぶ堂々としたものであった。東側裾部には盗掘時の排土の堆積が認められたが、墳頂部の陥没は小規模で東側裾部からの盗掘孔も石室へは達しておらず、石室の遺存度は良好と推測されたのであるが、実際は後述のとおり、大破している。

旧表土は盛土作業に先行してすべて除去されており、裾部は斜面にあたる東側を除いて周溝状に掘り割られている。しかしこの掘割は盛土作業開始直後にいずれも埋め戻されており、一種の地割溝と思われる。墳丘築成に際しては、概して内側から外側へと順次盛られており、最終段階で上半に大量の土砂を置き、墳形を整えている。

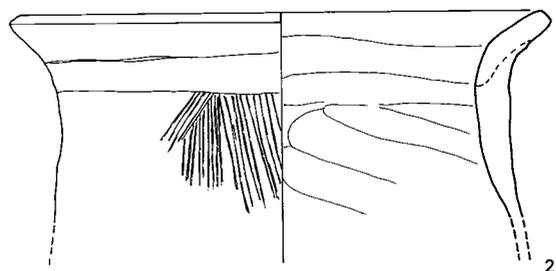
周溝によって画されていないので、墳丘規模については見かけの点をとらざるを得ず、東西はA B間(13.4m)、南北はC D間(12.7m)とみられるが、当然地形範囲はこれらを上まわる。

石室

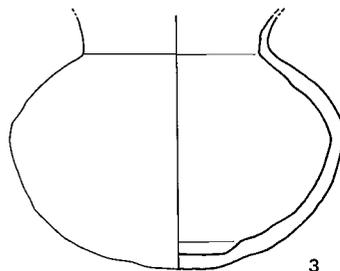
略南東に開口する単室横穴式石室で、狭長な切通状の墓道を付設している。墓壇は1.9mの深さに穿たれ、幅2.6~2.9m、長さ4.2m強(いずれも上端値)の不整長方形プランを呈し、



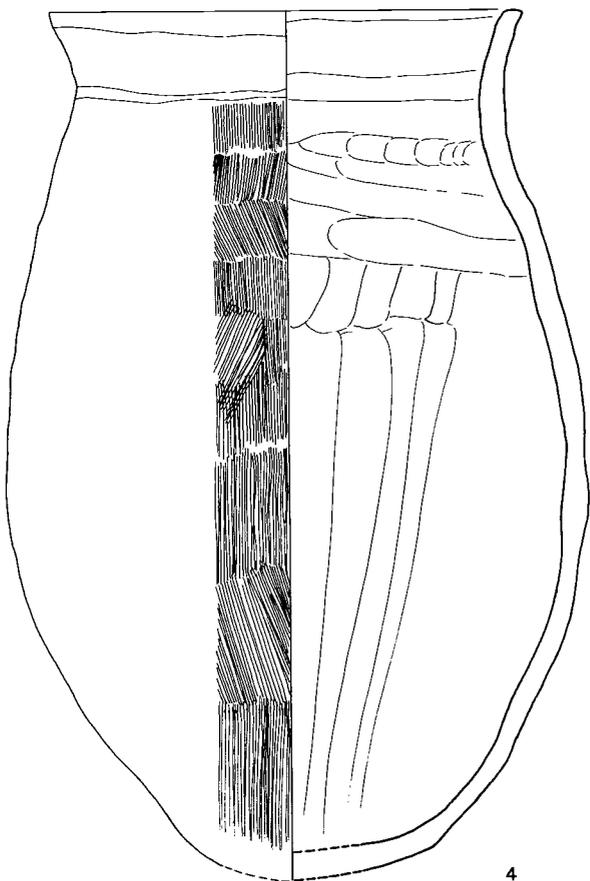
1



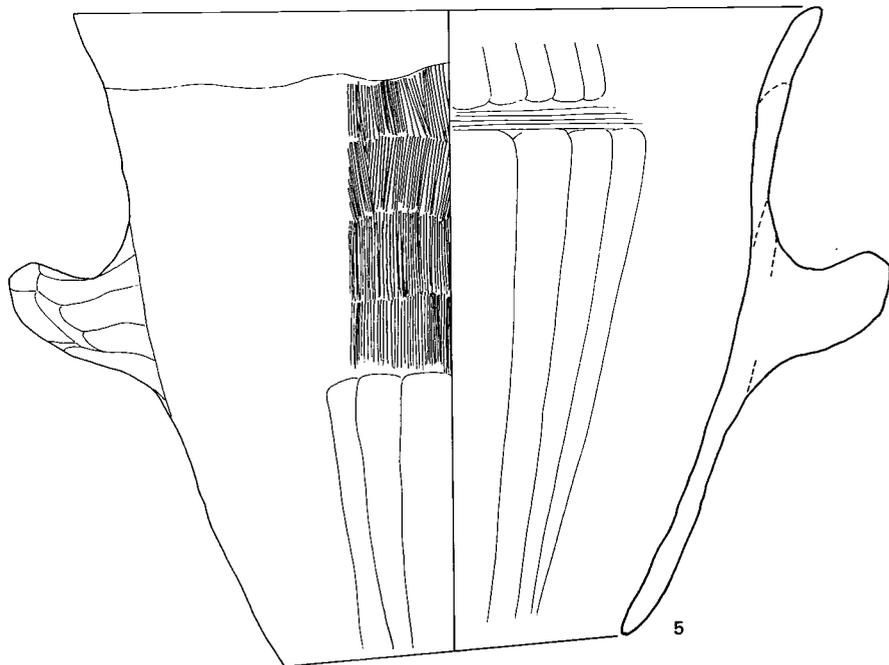
2



3



4



5



Fig. 89 遺物実測図(縮尺1/3)



Fig. 90 B群地形測量図 (縮尺1/300)



Fig. 91 B群地形測量図(縮尺1/300)

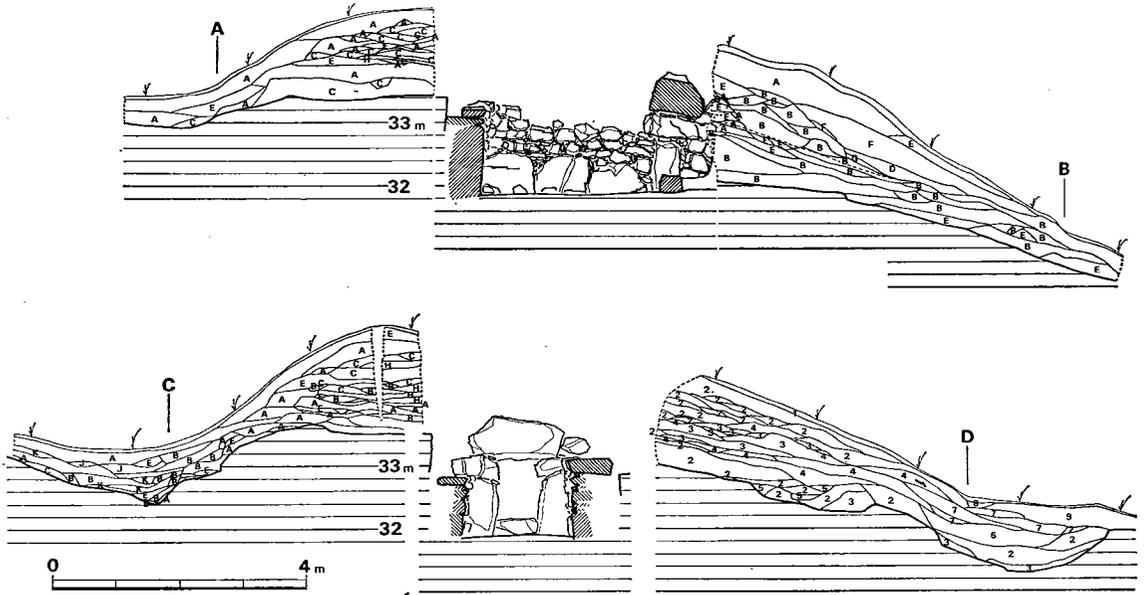


Fig. 92 B-1号墳丘土層図 (縮尺1/120)

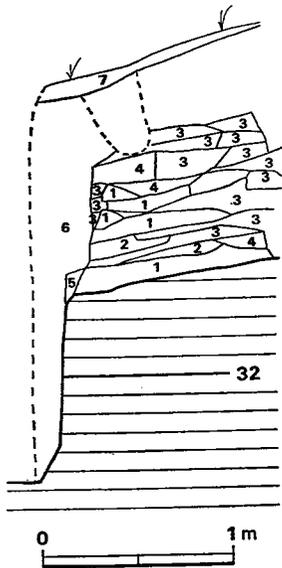


Fig. 93 B-1号墳丘土層図
(縮尺1/40)

には仕切石を置き、玄門の幅は上部で56cm、下部で62cm、高さは1m強と狭小である。

周壁はいずれも略直立する。玄室の長さは、左側壁沿いで2.9m、中央（奥壁から仕切石内側までの間）で2.8m、右側壁沿いで2.72m。幅は奥壁部で1.62m、横口部で1.68mに対し、中央部では1.96mと広がり、少しく胴張りとなる。

基部には大形花崗岩割石を腰石として用いるが、据えつけのための掘りこみは極めて浅い。天井及び側壁上部は破壊されており、現存高は1.6mが最高である。

石積は、小石を各所に充填しつつ各段が同高・水平位となるように意が払われ、控えも十分とり、面の凹凸も少なく、整美な感を受け、特に右側壁に著しい。床石は殆んどが除去されており、坂底は略水平に近いが、通例とは逆に奥壁側が僅かではあるが低い。

横口部の左右には各1石を立て、さらに各1石を平積し、この上に柵石を架構して前壁となしている。袖石間

これに続く羨道部は長さ34~50cmの極めて短筒なもので、この部分の墓坑底は玄室床面よりも0.3~0.4m高く、かつ玄室に比して石積も粗雑である。

墓道は、地山に穿たれた部分は、現存長5.7m、幅0.76~1.18m（上端値）の狭長なもので、羨道寄では1m強の深さ。羨道先端から1.5mまでは略水平位にあるが、これより手前は漸時下降する。墓道肩部（地山掘削部分）以上の盛土は、カットして仕上げられている（Fig.93参照）、墓道主軸方向の層序は整然としており、埋め戻され、また追葬時の排土作業も先端まで念入に行なわれたことを示唆している。

閉塞は、玄門仕切石直前で行なわれ、板石3枚を主体とする閉塞石群が現存する。間層上にあり、初葬時のものではない。

遺物出土状態

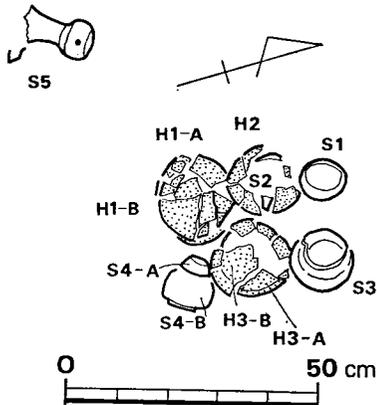


Fig. 95 B-2号墳丘遺物出土状態（縮尺1/15）

玄室内からは、堆積土中から耳環2個を採取し得たにとどまる。閉塞石の下、墓道より稍浮いた状態で鉄鏃片3が出土した。いずれも原位置にあるとは考えられず、追葬時に室内の整理が行なわれた結果によると思われる。

墓道左肩から0.9~1.6m離れた地点から、一群の供献土器が出土した。これらの土器は、地山直上ではなく十数cm上位の盛土中にあり、甕⑧を除けば蓋と身とがセットになった状態で2列に並置されていた。②を除けばすべて須恵器であるが、①・⑥・⑧は黄灰色を呈し焼甘の須恵器である。

①と⑥とは杯身と蓋杯のセットであるが、前者は身が蓋として使用されている。②は土師器の杯で、⑤の高台付短頸壺の蓋に代用されている。

⑦の有蓋短頸壺は転倒し、蓋も外れている。④と⑥のみが蓋を伴わず、前者は逆さまとなっている。甕⑧は、これらから稍離れて横倒となった状態で出土。

これら一群の土器は、杯をも含めて小形容器に限定され、初葬時被葬者への供献物を納めたと思われるが、飲食器を一切含まない点が注意される。

遺物

玄室内	耳環	2
玄室外	鉄鏃	3

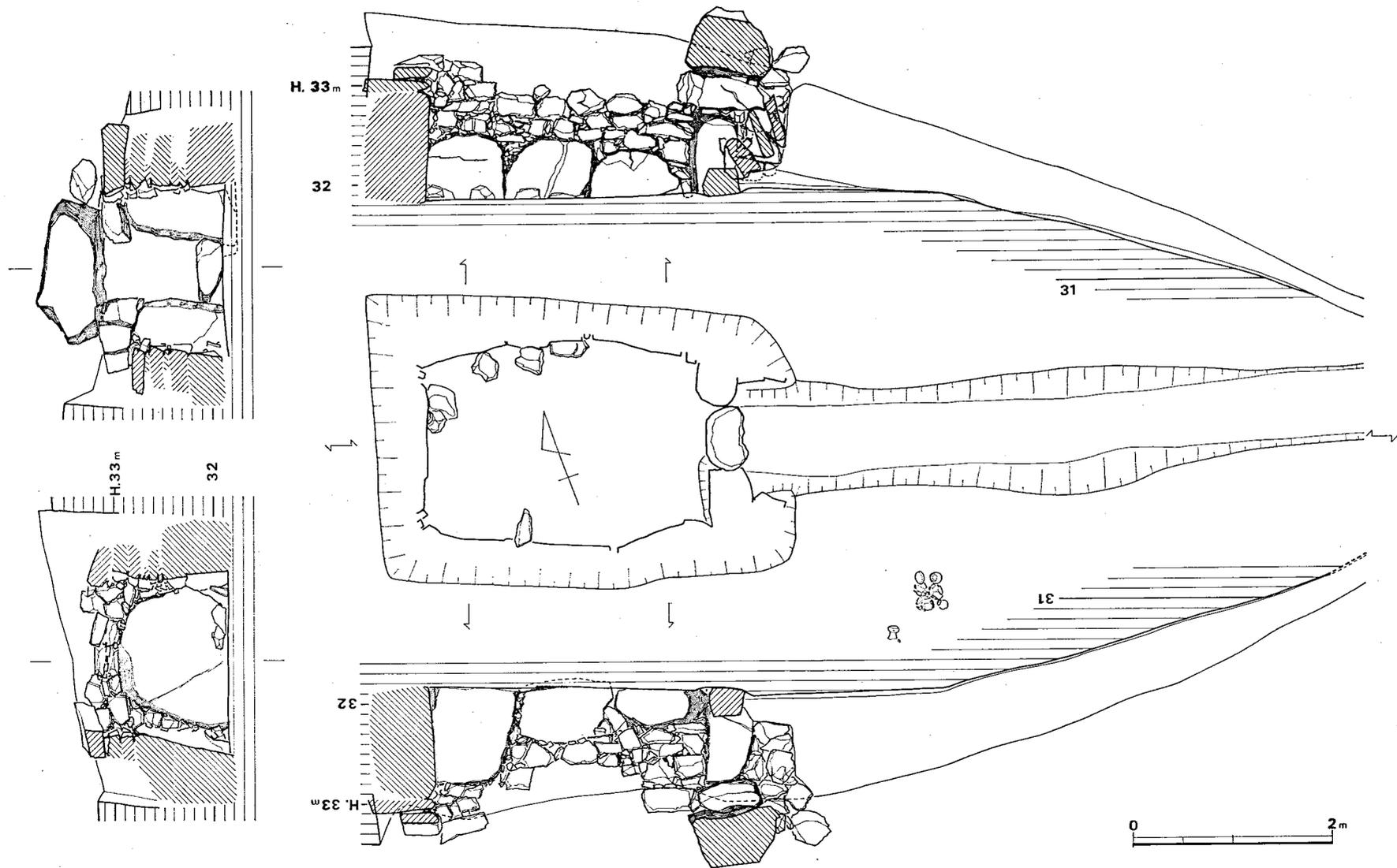


Fig. 94 B-1号石室实测图 (縮尺1/60)

土器 須恵器

蓋杯 2、杯身 2、甕 1、
有蓋短頸壺 1、短頸壺 1、
台付短頸壺 1、壺 1

土師器

杯 1

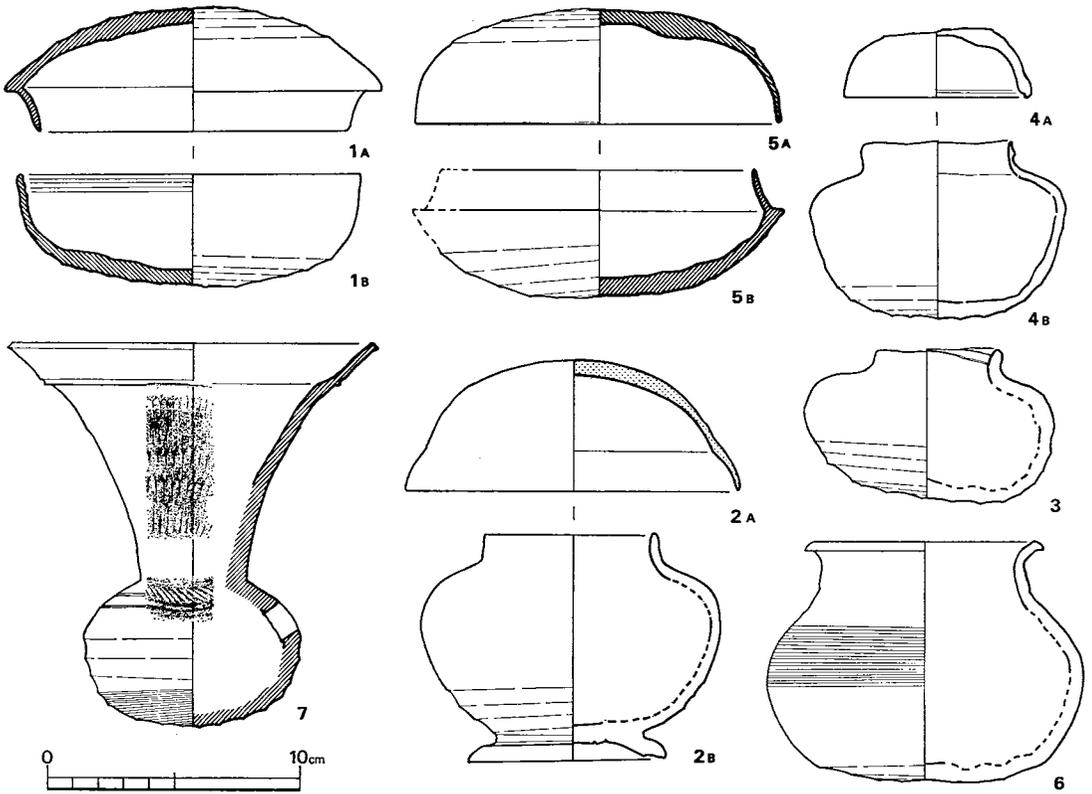


Fig.96 出土遺物実測図 (縮尺1/3)

耳環 (Fig.97)

2個が出土したが、別セットに属する。いずれも錆化が著しく進行しており、箔は現存しない。①は22mm×21mmで、断面は扁平に近い。②は20mm×21.5mmとひとまわり小さく、断面は円形。

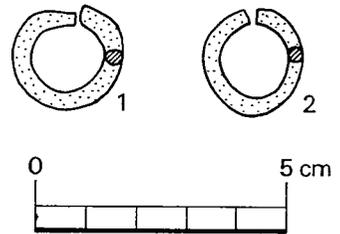


Fig.97 裝飾具実測図 (耳環) (縮尺2/3)

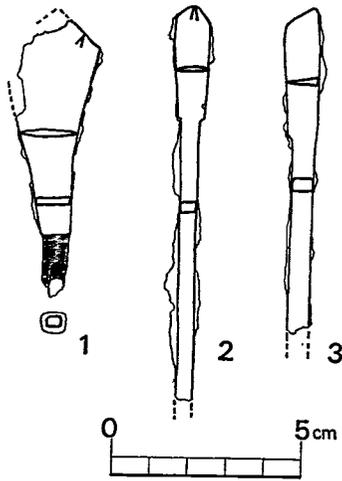


Fig. 98 鉄製品実測図 (縮尺1/2)

鉄 鏃 (Fig. 98)

3 個体出土し、各々形状を異にする。①は圭頭広根斧箭式 (註1) に属し、鋒部の復元最大幅27mm、同長62mm、現存全長73mm。樺卷の一部を留める上差矢。②は片丸造鑿箭式に属し、現存長105mm。身は、最大幅10mm、長さ29mm。③は腸折片箭式で、現存88mm。

註1 後藤守一「上古時代鉄鏃の年代研究」, 1940

須恵器 (Fig. 96)

通常の灰青色を呈するものと、焼甘で黄灰色を呈するもの (杯・甕) とがある。

有蓋短頸壺 (Fig. 96—④)

蓋 (④A)・壺 (④B) とともに完形。蓋は、7.3×6.8cmの長円形で、器高3.7cm前後。口唇内面は剝がれている。頂部のヘラ削りは手持状態にて施されている。壺は、口径6cm、胴部最大径10cm。底部内面に当て板痕をとどめる。口縁は波打ち、仕上げは稍雑。蓋と同時焼成で、灰青色を呈する。器肌はザラつく。

短頸壺 (Fig. 96—③)

完形。厚手、イビツで、成形、調整ともに粗雑。口径5cm、胴部最大径10cm、器高7cm前後。胎土は良好で器肌は滑らかである。

台付短頸壺 (Fig. 96—②B)

口径6.8cm、胴部最大径11.6cm、器高9cm前後。細粒を多く含むが、焼成良好で灰青色を呈す。蓋とは同時焼成であるが、本墳への埋置に際しては、土師器杯 (②A) を蓋とする。

壺 (Fig. 66—⑥)

口径9.5cm、胴部最大径12.5cm、器高9.5cm。体部上半にカキ目調整を施す。灰青色を呈し、砂粒を多く含む。

杯・甕

いずれも焼成甘く、黄灰色を呈する。形態・成形・調整は、須恵器の技法であるが、焼成・

色調ともに土師器とも明らかな差異がある(註2)。

蓋 杯 (Fig. 96—①B・⑤A)

①Bは、復元径 13.6cm、器高 4.4cm。口唇内面に2条の沈線をめぐらす。⑤Bは、ひとまわり大きく、口径 14.4cm、器高 4.6cm。共にヘラ削りの範囲は肩部にまで及んで、広い。

杯 身 (Fig. 96—①A・⑤B)

①Aは、復元径 14.6cm、器高 4.9cm。⑤Bは、径 14.7cm、器高 5cmとひとまわり大きい。いずれも蓋と同様ヘラ削りの範囲は広く、立ち上がり内面には鋭い稜がつく。

罍 (Fig. 96—⑦)

口径 14.5cm、頸径 4.2cm、胴部最大径 8.6cm、器高 15.1cm。口縁の一部を欠く。頸部に波状文、肩部に2条の沈線と櫛目文を施す。杯類に比すれば稍硬い焼成である。

ロクロの回転方向は、②B・③・④A・④Bが時計まわり、⑤B・⑥・⑦は逆まわりである。

土 師 器

杯 (Fig. 96—②A)

口径 13cm、器高 5.2cm。赤褐色を呈し、厚手であるが、器肌の一部に光沢をとどめ、調整良好。口縁近くでアクセントがつけられ、内面は斜め方向にヘラ磨きが施されている。(石山)

註2 罍は焼成不良の須恵器とみて略誤りないが、杯については若干の疑問があり、「赤焼き」の土器の可能性を残す。「赤焼き」の土器についての筆者の見解は、下記文献中に述べた。

拙稿、「赤焼き」の土器について 九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告 X 1977

B—2号墳 (Fig. 99~106)

墳 丘

伐採直後のみかけの墳丘規模は 10m 前後であった (Fig. 91)。Fig. 91 で明らかなように墳丘は盛土からなり、天井石より厚さ 1m 前後となり、石室は地山深く穿たれた墓壇内に構築されているので盛土は最小限上部を覆う程度でことたりる。

土盛作業は入念に行なわれた。とくに石室の裏込にはEとFとが互層に積む。当初の規模であるが、ほぼみかけの墳丘と同じである。地山傾斜と表土層の下AがはいるAとGとの接点

と、石室の中軸線までが約55mで、地山の傾斜の屈折点と中軸線がほぼのことから約11m前後の円墳となる。盛土の範囲はこの屈折点までで、墳丘構築に先行する地山整地作業によるものと思われる。

石室 (Fig.100)

内部主体は、主軸を N-71°-W にとり、略西に開口する。複室の横穴式石室である。石室の平面プランは仕切石と仕切石との間を前室とし、仕切石から奥壁までを後室とした。

後室の平面プランは両袖を有する不整長方形で、内法は奥壁幅1.60m、玄門部で0.75m、奥行2.40mである。周壁は基部に大石を腰石としてすえ、2段目に一まわり小さな石を平石積みにし、3段目以後はやや小さめの石を9段から10段積み上げている。途中で5段目・8段目に大きめの石を置きパッキング状態を呈する。2段目以後持ち送りを形成する。南側壁は天井までの持ち送り状態は良好であるが、北側壁は構築状態がわるかったためか、せり出し状態が見られる。間隙には粘土をつめた形跡は見られない。天井は大石を5枚かさね、すきまに小礫をつめこんでいる。敷石から天井石までの高さ1.93m、両側壁と天井石での幅0.2mであった。

石室床面には比較的表てが扁平な角礫を使用し敷石をなしている。玄室奥壁部分に2カ所の敷石がはがされていた。盗掘は閉塞石をはずして玄室内へと侵入したものと思われる。

玄門は、南北に高さ0.8(0.75)mを袖石とし、その間の床面に仕切石を置く、榎石から仕切石までの高さ0.78m前後と極めて低い。

前室は、玄門の仕切り石と前室の仕切り石との内側の長さ1.10m、幅は玄門寄0.75mである。

複室としては仕切石と仕切石とで仕切った範囲だけで、完全な複室形式ではない。みかけだけの複室といってよいであろう。

遺物 (Fig.101~106)

出土状況は盗掘を受けていたが、取り残しのものが原位置として保たれた形で残っていた。

玄室の左側壁下に、直刀1・刀子4・袖石付近で、鉄斧1・その周辺部に鉄鏃30本前後出土した。南側壁側の奥壁側で耳環が出土した。

北側壁部付近で土玉6点出土している。床面近くの覆土をフルイにかけたら、土玉20点・ガラス玉1がでてきた。須恵器や土師器等の容器類は出土をみなかった。

出土遺物を列記するとつぎのとおりである。

鉄	鏃	30本
直	刀	1本
刀	子	4本
鉄	斧	1本

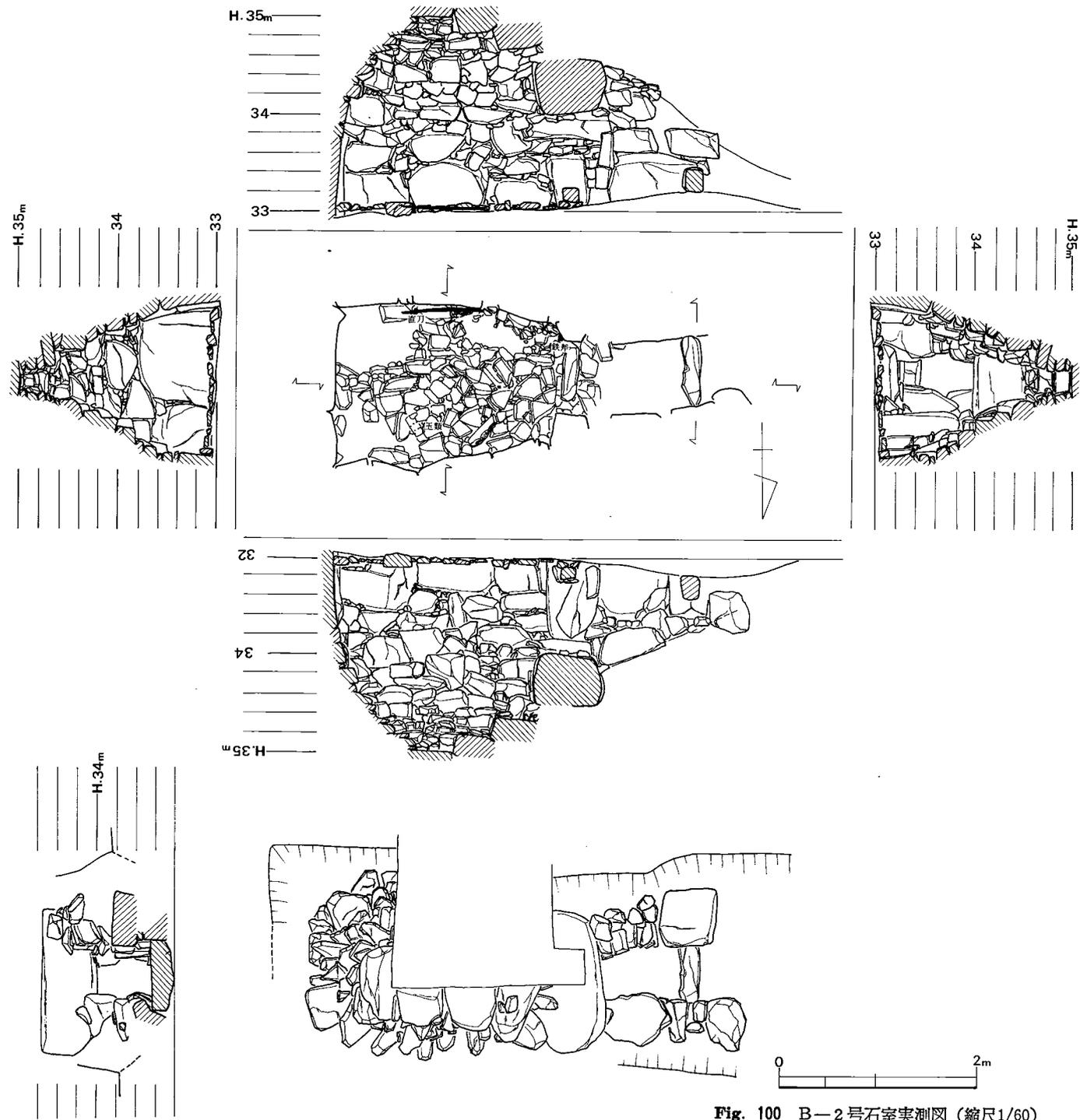


Fig. 100 B-2号石室実測図 (縮尺1/60)

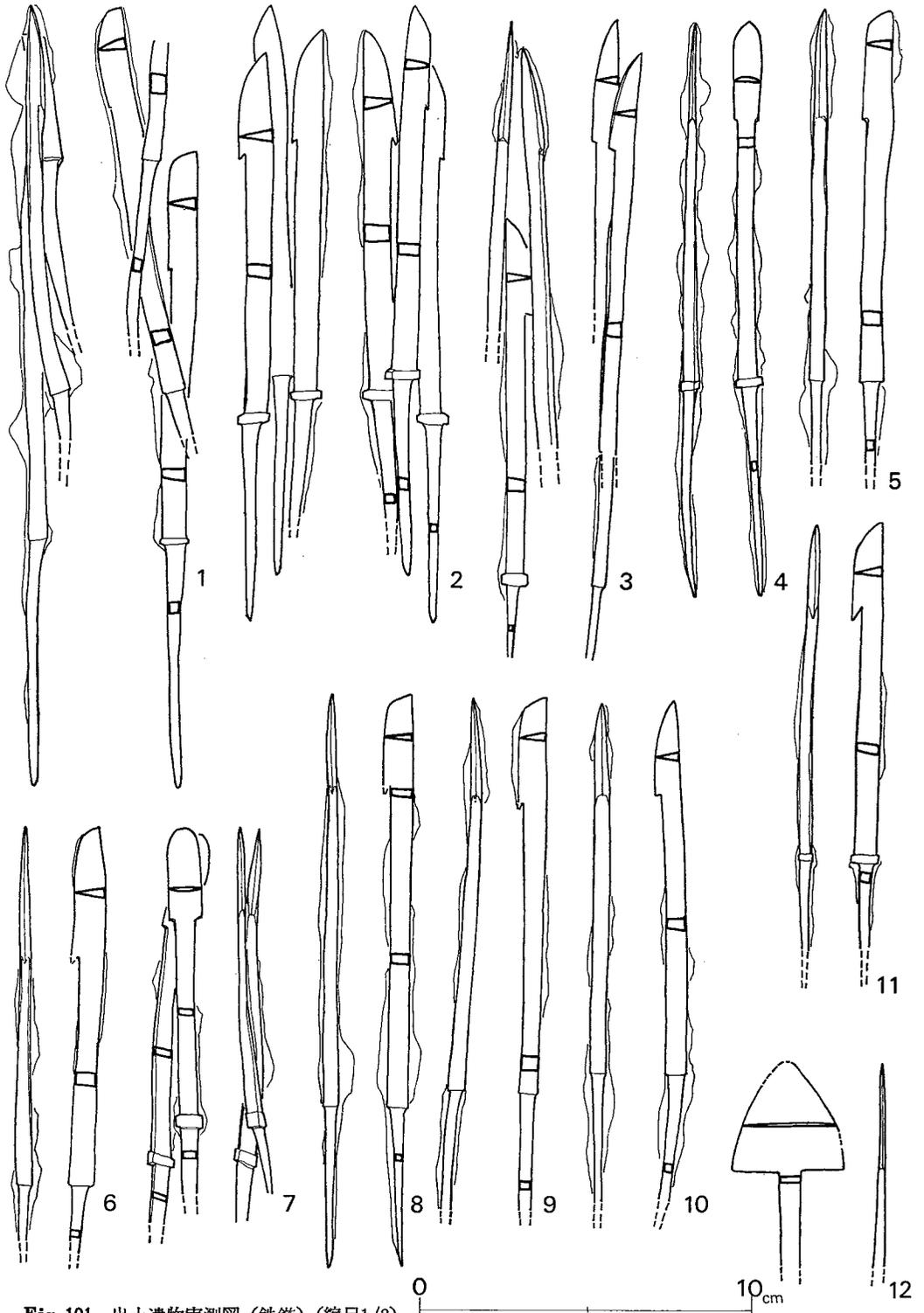


Fig. 101 出土遺物実測図（鉄鉄）（縮尺1/2）

耳環	2コ
土玉	30点
土製管玉	6点
ガラス玉	1点

である。

墳丘からは、須恵器の破片が若干出土している。以下において詳述する。

鉄 鏃 (Fig.101-①~⑫)

いづれも細身式に属する①~⑫。平根式が⑫である。細身式に属するもののうち①・②・③⑤・⑥・⑧・⑨・⑩・⑪は刀身形を呈し、④・⑦は剣形を呈する。厚さ幅2mmともにその数値を次第に減ずる。①~⑫はいずれも南壁沿いに一括して出土したものである。両丸造りで、全長18~21cmで、20cm前後の長さが最も多い。鋒の数値にも多少のバラツキがあるが、同一形式にふくめてさしつかえない。

直 刀 (Fig.103)

平棟平造りで、厚さ5~9mm、刃幅34mm、全長84cmに及ぶ長大な刀である。若干の内反りで片関で、目釘孔は2つ、鋺があって、鏑を有する。鏑は、倒卵形をなし、宝珠鏑である。

刀 子 (Fig.103-①~④)

平棟平造りで、厚さ2~4mm、刃幅7~14mm、全長11~12cmで、関の部分に木質がのこっている。

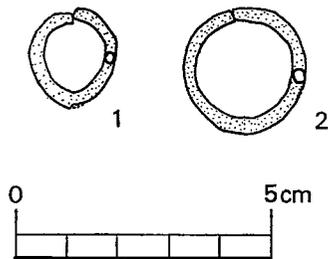


Fig.102 耳環実測図 (縮尺2/3)

鉄 斧 (Fig.104)

全長9.7cmの厚手で、実用品である。刃部最大幅4.6cmで、孤深1.2cmの孤をえがく。袋部は、厚さ5~7mmの鉄板を曲げて長径2.7cm、短径2.2cmの楕円形を作り、両端を中央部で合わせる普通の形式である。なお袋部に木質を認められず、また出土状態よりしても、斧頭のみ副葬されたようである。

耳 環 (Fig.102)

銅を土台にしたもので、めっきの部分は剝落している、②については出土場所不明である。

土 玉 (Fig.105—①~⑭)

数量は約40点ほど出土している。直径7mm~8mm、厚さ5~6mm、孔は1mm前後で、焼成前に片側から穿孔している。平均すると略直径8mm、厚さ5mm、孔は1mm前後の片側穿孔である。

⑩~⑭は土製管玉である。直径3~6mm、長さ7~9、孔は1mm前後で、焼成前に片側から穿孔されている。

ガラス玉 (Fig.105—⑮)

色調はコバルトブルーの小玉である。直径4mm、厚さ2mm、孔直径1mm、片側から穿孔されている。

表8 土玉・ガラス玉類計測表 (単位mm:重さg)

	長 さ	径	孔 径	重 さ (g)	穿 孔 方 向
1	5	7.6	約1.0	約0.3	片
2	5.6	6.8	"	"	"
3	4	6.4	"	"	"
4	5.2	6.4	"	"	"
5	6	8	"	"	"
6	5.2	8	"	"	"
7	8	7.2	"	"	"
8	4.8	7.2	"	"	"
9	3.6	6.8	"	"	"
10	4.8	7.6	"	"	"
11	8.4	6.8	"	0.5	"
12	10.4	6.2	"	0.7	"
13	10.8	6.8	"	0.6	"
14	9.6	6.8	"	0.6	"
15	2.8	4.4	"	0.1下	"
平均 値	5	7	1.0	0.3	片

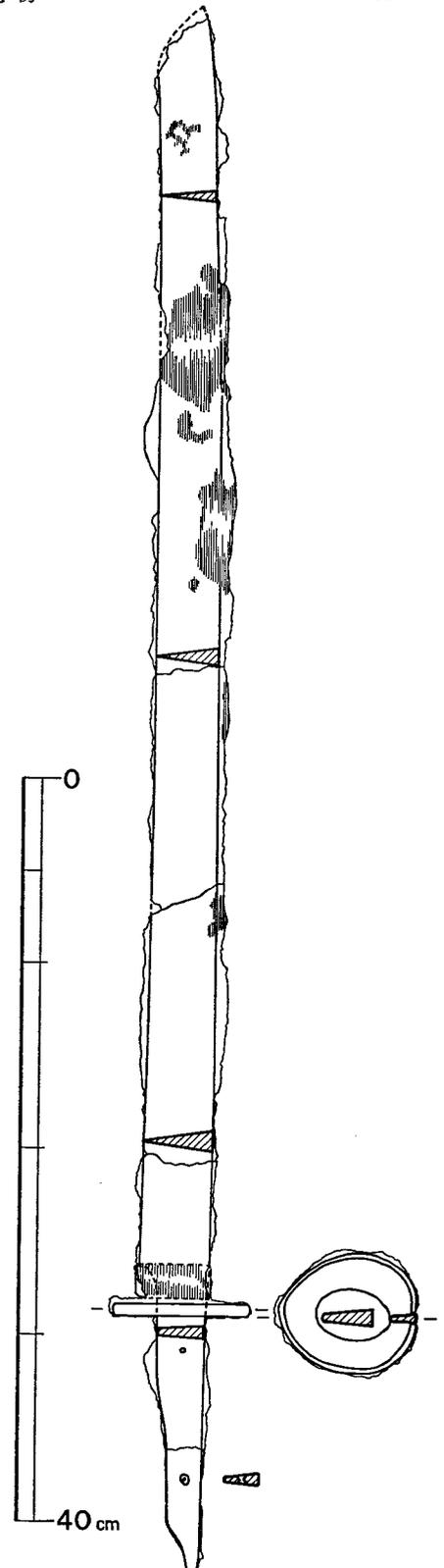


Fig.103 遺物実測図(直刀) (縮尺1/8)

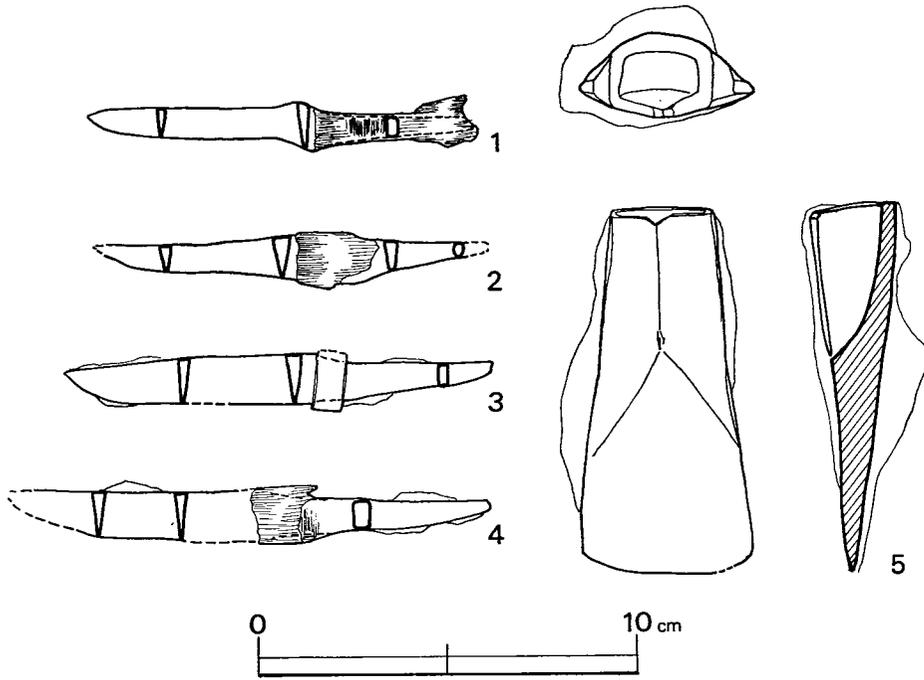


Fig. 104 出土遺物実測図 (刀子・鉄斧) (縮尺1/2)

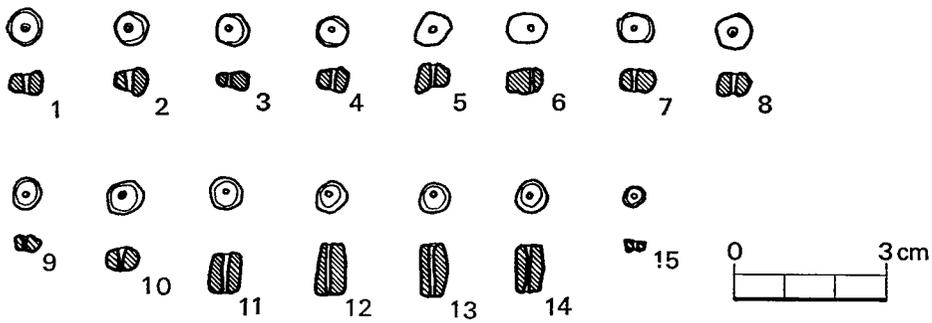


Fig. 105 出土玉類実測図 (縮尺2/3)

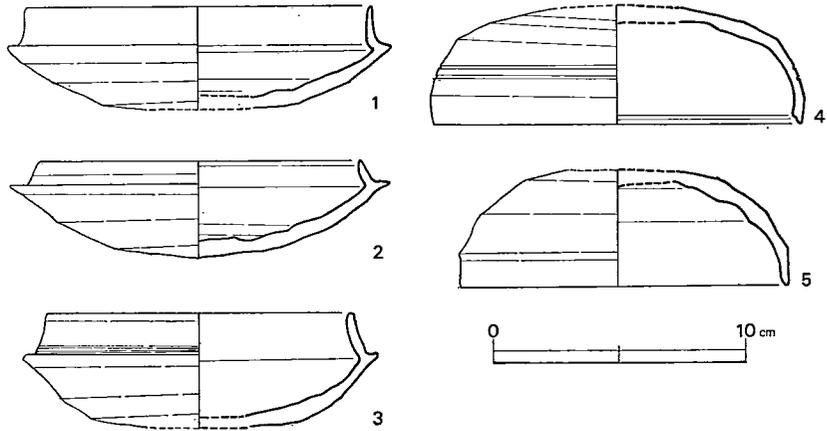


Fig. 106 墳丘出土土器実測図（縮尺1/3）

須恵器 (Fig.106)

墳丘出土のもので、杯の蓋と身が出土している。

杯 身 (Fig.106—①～③)

色調は青灰色から黒灰色を呈し、ヘラ切りで仕上げは丁寧で、立あがり10～12mmは内傾している。体部は深くなるものと浅くなるものとにわけられる。型的にはⅢ型式にはいるものである。

杯 蓋 (Fig.106—④⑤)

色調は青灰色が灰青色を呈し、ヘラ調整である。④は天井部は高く、途中に二筋の沈線を有する。口唇部に特長を有するものである。⑤は天井部は高く、途中一段稜がはいって天井部へとなる。両土器とも丁寧な仕上げである。型的にはⅢ型式である。

本墳の構築された年代は、墳丘から出土した須恵器や古墳構築の方法から、おおよそ、6世紀後半に比定される。

この古墳は、路線内に東側裾部がかかっており、カットされる運命にあったが、カット面を最小にすることから、かろうじて全体が残ることとなった。

天井まで完全な形で残っていることは、この地区では珍しいことである。この群集墳においても当古墳を除いてはないものである。(副島)

(4) その他の遺構と遺物 (Fig.107~109)

B-Ⅱ区から Pit が 3 個検出された。Pit 1、Pit 2 の埋め土は、ほぼ土塚墓内の埋め土に同じ色調を呈していたが、Pit 3 は黄褐色粘質土が埋め土にはいつていたため時期的には新しくなるだろう。Pit 1 と Pit 2 は、ほぼ土塚墓が存在した時よりも新しく、B-1 号古墳よりも古いと思われる。

一応ここでは弥生時代にいれるが、しかしながら、その他の遺構として説明する。

C 区の中央部隅から炉跡が出土している。時期的には古墳時代以降である。

まずは Pit から述べてみたい。(副島)

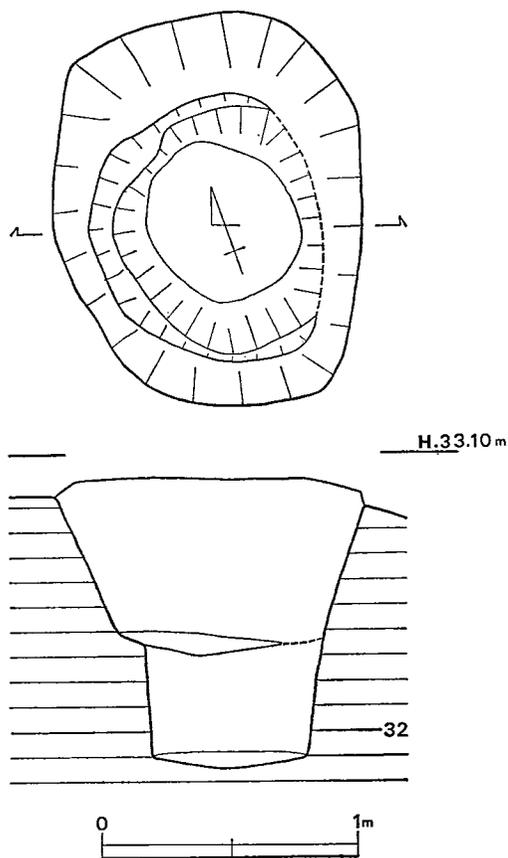


Fig. 107 Pit-1 実測図 (縮尺1/30)

P-1 (Fig.107)

調査区の北端に位置する竪穴で、平面は隅丸方形で、長さ155cm、幅120cm、深さ114cm壁面途中にステップがある。底面は長さ65cm、幅56cmの楕円形をなしている。遺物の出土はみられない。

(日高)

P-2 (Fig.108)

平面形は隅丸方形をなす竪穴で、長さ119cm、幅89cm、深さ40cmである。底面も隅丸方形を呈する長さ90cm、幅71cmである。遺物の出土はみられない。(日高)

P-3 (Fig.109)

調査区南端D-33号土塚墓の西側に位置し、平面形は楕円形で長さ97cm、幅87cm、深さ116cm、内壁断面は胴張り形で、途中にステップをもつ底面形は長さ44cm、幅38cmの楕円形である。埋土は黄褐色粘質土で底部に近くなるほど粘性が増す。遺物の出土はみられない。(日高)

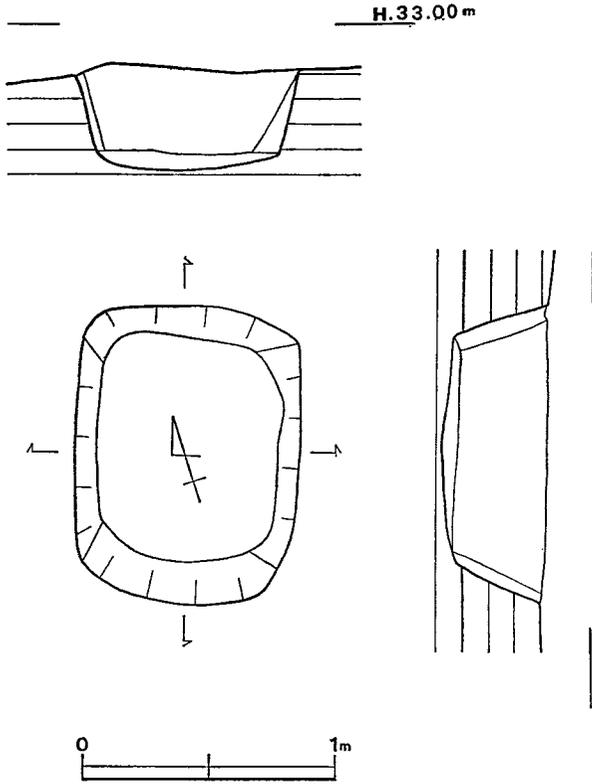


Fig. 108 Pit-2 実測図 (縮尺1/30)

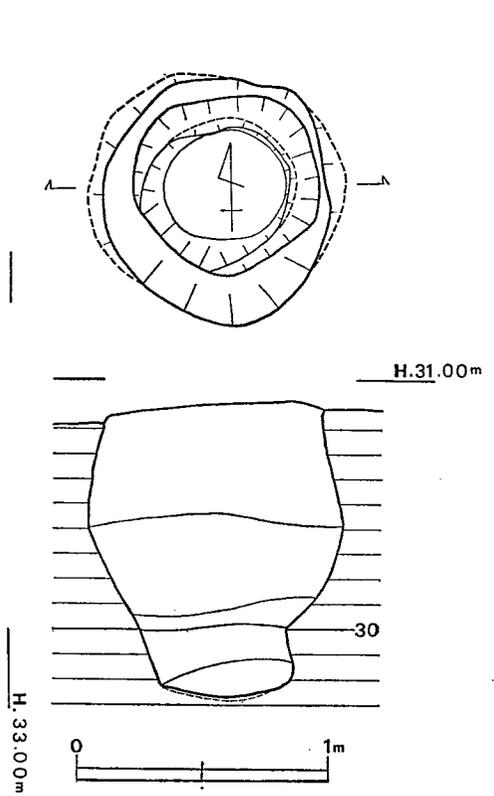


Fig. 109 Pit-3 実測図 (縮尺1/30)

炉 跡 (Fig. 110・111)

平面形は不整形を呈し、深さ20cmぐらいで摺鉢状に落ち込み、動物の骨をふくんだ覆土で、底面にいたって、炭と小動物の骨とが出土した。

骨は鳥の骨と推定される。この炉をつかって、この動物をバーベキューとして食べたものである。

时期的には表土下部から地山を切り込んでいるため、古墳時代以後のはほ新しい時代の所産であって、明確にこの時期であると述べることはできない。この炉跡の周辺から土師器 (杯、瓦器托) 2点出土している。

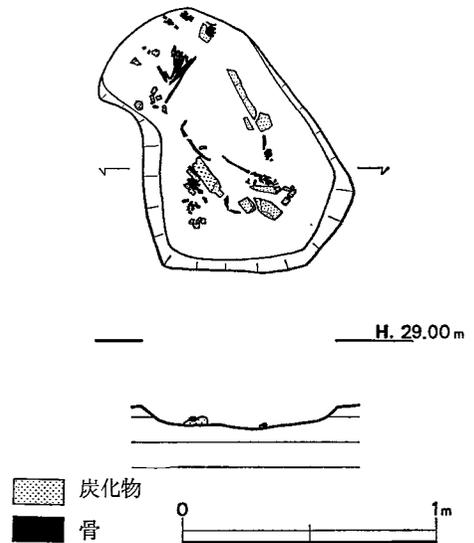


Fig. 110 炉跡実測図 (縮尺1/30)

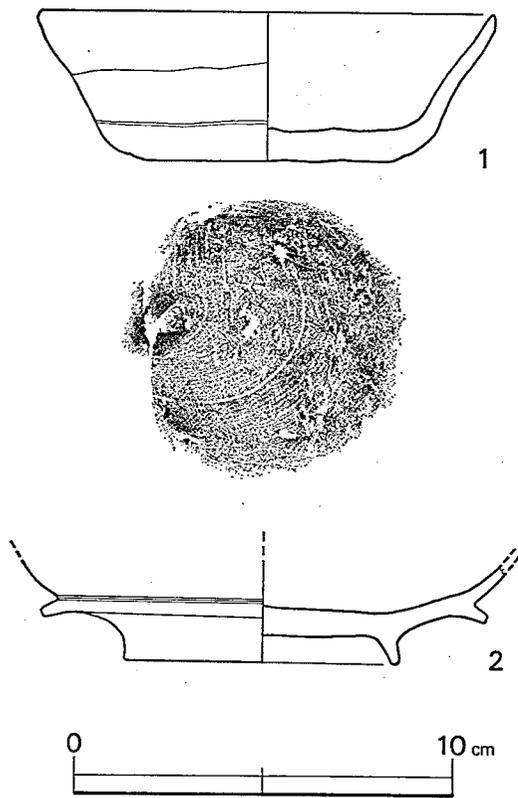


Fig. 111 出土遺物実測図 (縮尺1/2)

遺物 (Fig. 111)

杯 (Fig. 111-①) 口径12cm、器高4cmである。底部は順手の糸切りである。糸切痕を明瞭に残す。色調は灰黄褐色を呈し、胎土に細砂を含む、焼成は良好である。時期的には11世紀頃と思われる。

托 (Fig. 111-②)

黒褐色を呈し、高台は低く、胎土は荒く、焼成はあまいが瓦器質である。時期的には古手の瓦器としてとりあつかいたい。10世紀後半から11世紀頃と推定する。(副島)

手握土器 (Fig. 112)

C区、あるいはD区・A区から出土したもので、遺構としてともなっていない。A区古墳の周辺部から出土したもので、ブドウ畑で耕作のおり全面に攪乱を受けている、長期間表面に出土していたためか、青くコケがはえているものもある。

遺物 (Fig. 112)

高杯 (Fig. 112-①②③) で、指痕によって、脚部を形成している、色調は灰褐色である。胎土に細粒砂を含み、焼成は良好である。

鉢形土器 (Fig. 112-4~18) 丸底を呈するものと平底を呈するものとに分類される。4~10までは前者で11~18までは後者として位置づける。色調は灰褐色から黄褐色で、胎土は荒いものと良質のものがある。焼成は一般的に良好である。

丸底は小形化する傾向を持ち、平底は大型化する傾向がある。(副島)

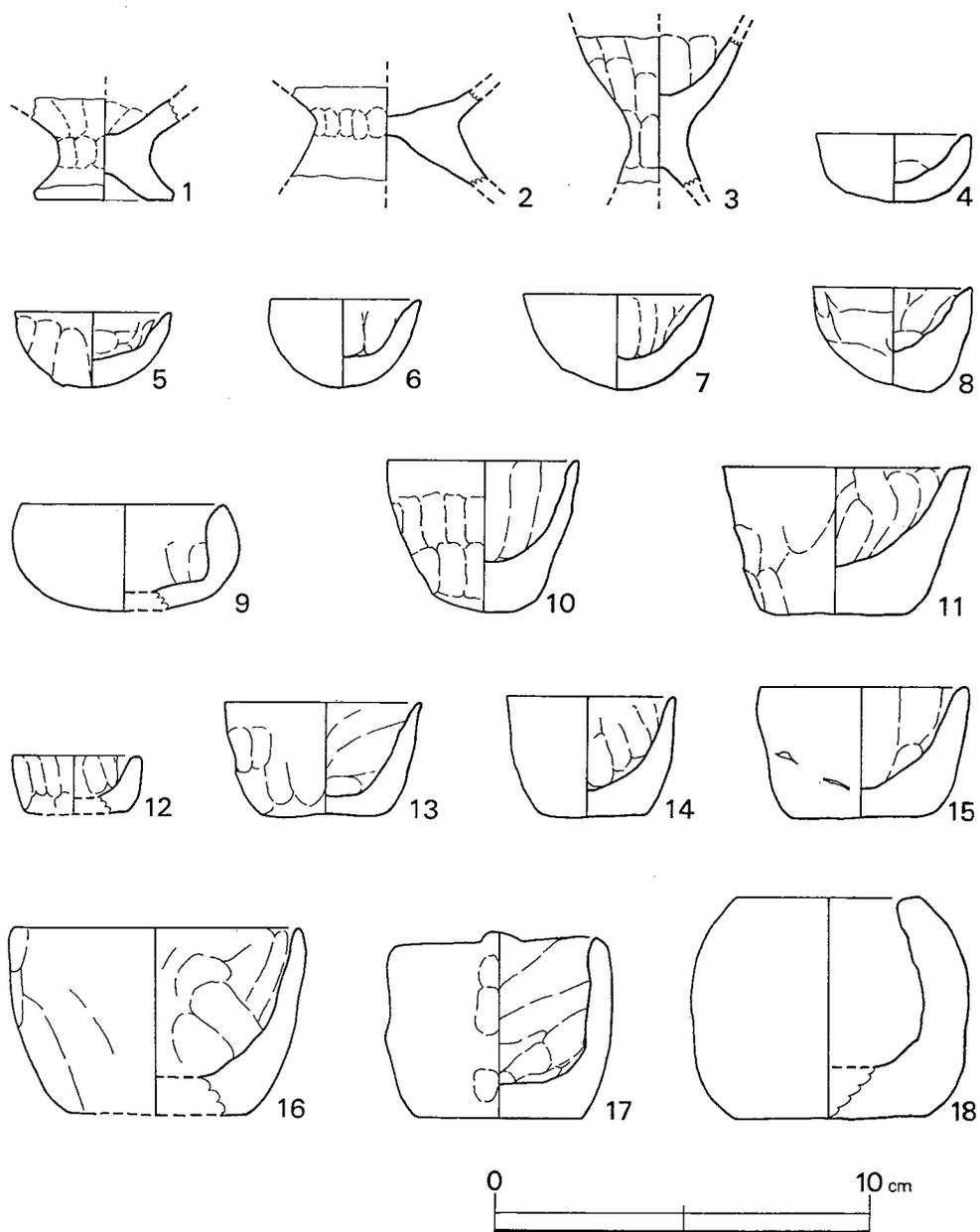


Fig. 112 C·D区出土遺物実測図(手捏) (縮尺1/2)

IV 考 察

本遺跡の発掘調査の記録を総括する意味で、Ⅲ遺構と遺物を踏まえて若干の考察を加えて結びとしたい。

1. 弥生時代墓地の方向性と地形との関係

高木遺跡が存在する丘陵では、Fig.113とFig.114で示めす様に、丘陵の尾根線を意識して使っている。弥生時代の墓地は尾根線に直交し、頭を東位に示めす。古墳時代は尾根線上と裾部に位置している。A群は裾部にB群は尾根線上に所在する。これは高木丘陵における巨視的な見方である。そして住居跡の位置とを踏まえながら遺跡の構造のあり方となる。

今回は弥生時代の墓地・土塚墓を中心に立地と方向性について若干述べてみたい。

弥生時代の土塚の方位について、神原英朗氏の四辻遺跡で興味深いことを述べている。それは「各土塚とも、その向きは一定の法則をもつ、尾根稜線に対して、直交するもの49例、平行するもの18例、斜向するもの5例である。しかし斜向するものについても、等高線に沿ってみた

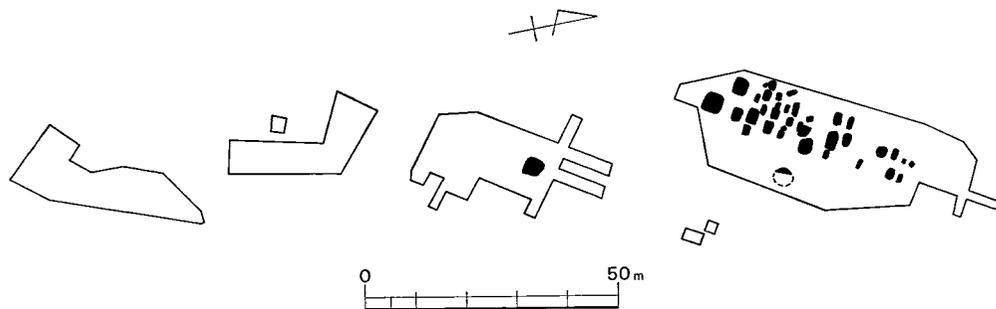


Fig.113 弥生時代遺構配置図 (縮尺 1/1500)

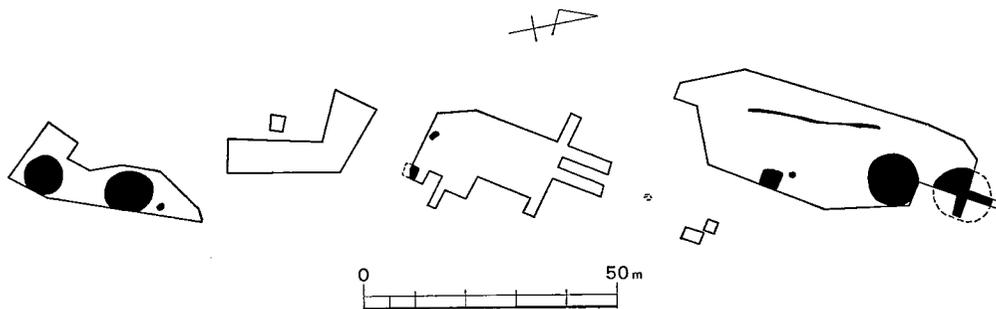


Fig.114 古墳時代遺構配置図 (縮尺 1/1500)

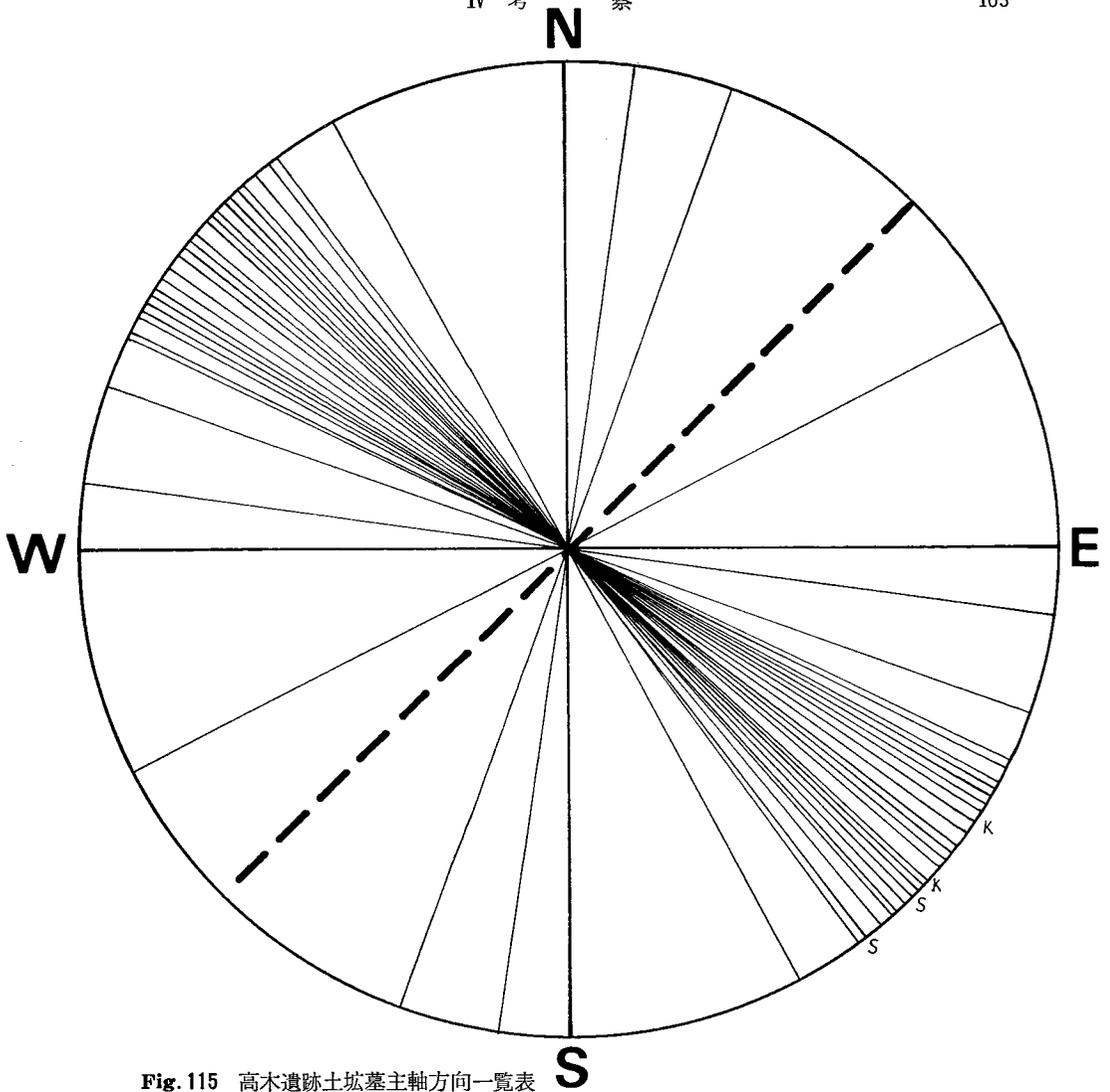


Fig. 115 高木遺跡土塚墓主軸方向一覧表

場合は常に直交または平行するのである。したがって、土塚の置かれる向きは、その構築の物理的要件もさることながら、一定形式として存在するのではないかと思われるのである。(註1)と述べている。ここに述べられていることが一般的に言われていることである。このことについて神原英朗氏は再確認の意味から、一定の形式の存在について考えている。

また、松本豊胤氏は葛島A地区(註2)の中で、「葛島A地区における石棺は、その構築に際しては山の傾斜の方向によって決定されることになる。またこの技法は石棺構築の際の地山の掘り方の労働を最少限に止めることとなる」と述べている。この考え方は前者の神原英朗が述べていることと相違する考え方である。後者は物理的要件を肯定する立場で、前者は物理的要件を否定する立場である。筆者は両方とも考えられると思われるが一応、神原氏の立場を支持

するため遺跡の類例を上げ分析してみたい。

では高木遺跡ではどうであろうか、Fig.115 で示すとおり、高木遺跡の土塚墓群は尾根線に対し、直交するものが多いことが考えられる。

主軸方向を円グラフを使用して表示し、.....は尾根線の方角を表わすものとし、一つの円グラフに3つの尾根線がはいっているものは、墓地群が大きく広がっているため、それぞれの墓地に尾根線があるものを言う。

Fig. 115 で示めたとおり、直交するものがその90%以上を示めす。このことは尾根線に対して直交すること、等高線に対してほぼ平行することが考えられる。

それでは、今回の分析では尾根線を中心に考えてみたい。

Fig. 116 で示めすグラフは、高木遺跡を筆頭として、ほぼ尾根線に対して直交する遺跡あるいは直交の方角が多いものを上げた。

これによると馬場山遺跡(註3)、宝台遺跡(註4)、木坂遺跡(註5)、西願寺遺跡(註6)、四辻遺跡(註1)等が上げられる。これらの遺跡については表9で若干説明するので参考にされたい。ここでは馬場山遺跡について若干の説明を加える。馬場山遺跡は遠賀川をはさんで、高木遺跡と比較できるもので、時期は弥生時代中期・後期を中心として甕棺墓と土塚墓が検出されている。この中で土塚墓だけを抜き出して表示した。これによると尾根線に対して平行するものと、直交に近いものとに大別され、その中を2つに細別されることが理解できる。その位置づけについては、報告書の中では記述されていない。

その理由はこちらで尾根線と規定したものが本当の尾根線ではなく、尾根線に対して西側の側面を利用して遺構の存在がみられているためである。とりをなおさず、等高線に対しては考えなくてはならない。馬場山遺跡の場合の尾根線の決め方は、N-80°-E東西線の位置ぐらいを定めたわけである。一応尾根線の説明をそれぞれの遺跡で述べなくてはならないが字数の関係から省くとする。この表9によって一般化できるであろう。

さて尾根線に対して平行な場合は、Fig.118、Fig.119で分析を行なわなければならない。尾根線に平行な場合と考えられるのは、汐井掛遺跡(註7)、上り立遺跡(註8)、板付遺跡(註9)、伯玄社遺跡(註10)、野方中原遺跡(註11)、中・寺尾遺跡(註12)である。各遺跡とも分析が行なわれていないが、ただ中・寺尾遺跡については酒井仁夫氏により分析が行なわれている。「土塚をA類・B類・C類に分類している。A類とB類について両類は時間的に並行関係にあり、両類とも各々は同一類の土塚と切り合わないよう意識していたと考えられる」と述べてある。このことは尾根線あるいは等高線から考えるとA類が平行するもので、B類が直交するもの、C類がその他と位置付けられるもので、直交するものと平行するものとの中間的に位置するものである。

Fig.119も尾根線に平行するものに、数値をとるもので、津古内畑遺跡(註13)、スダレ遺跡

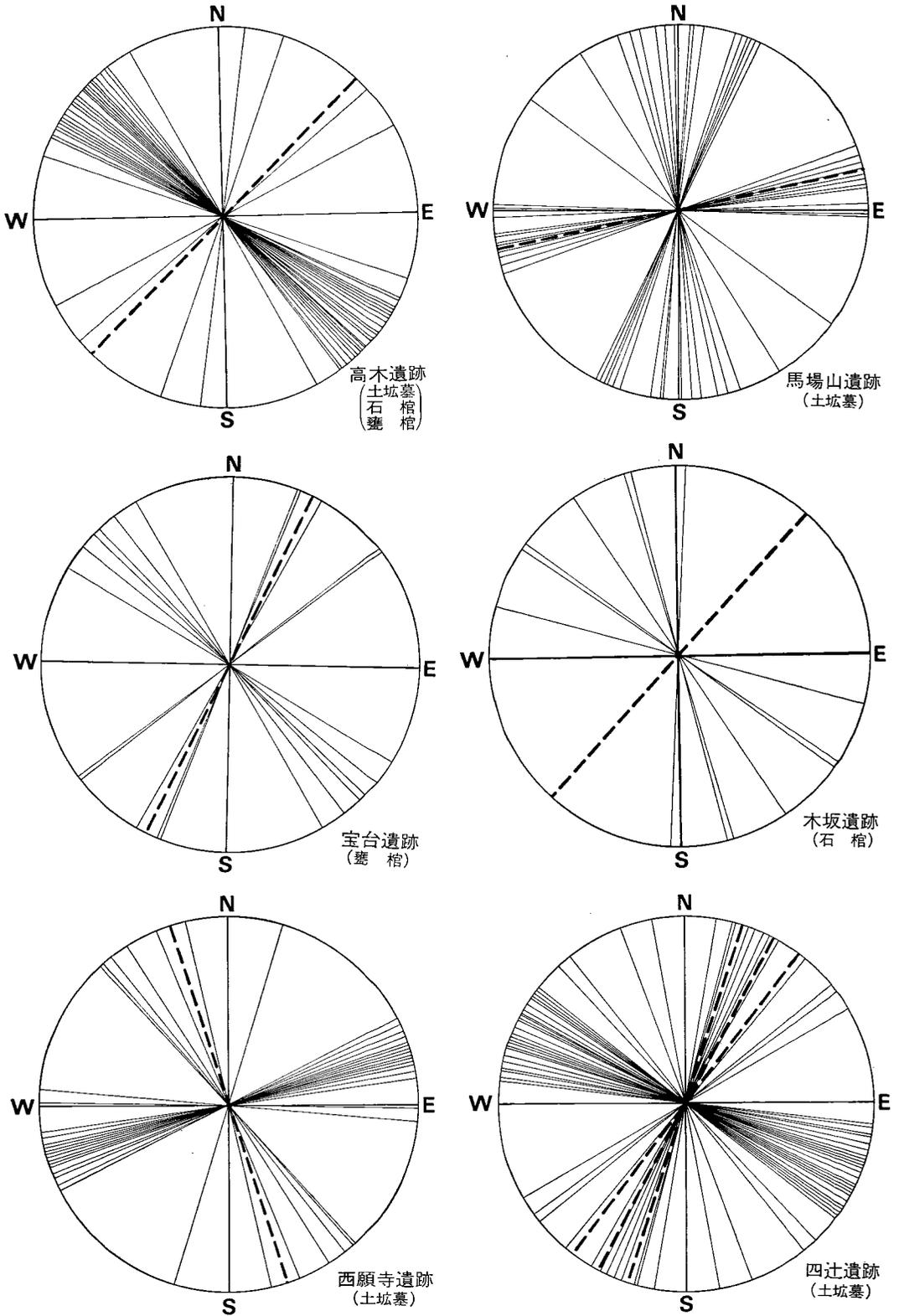


Fig. 116. 弥生時代墳墓主軸方向一覽表 (その1)

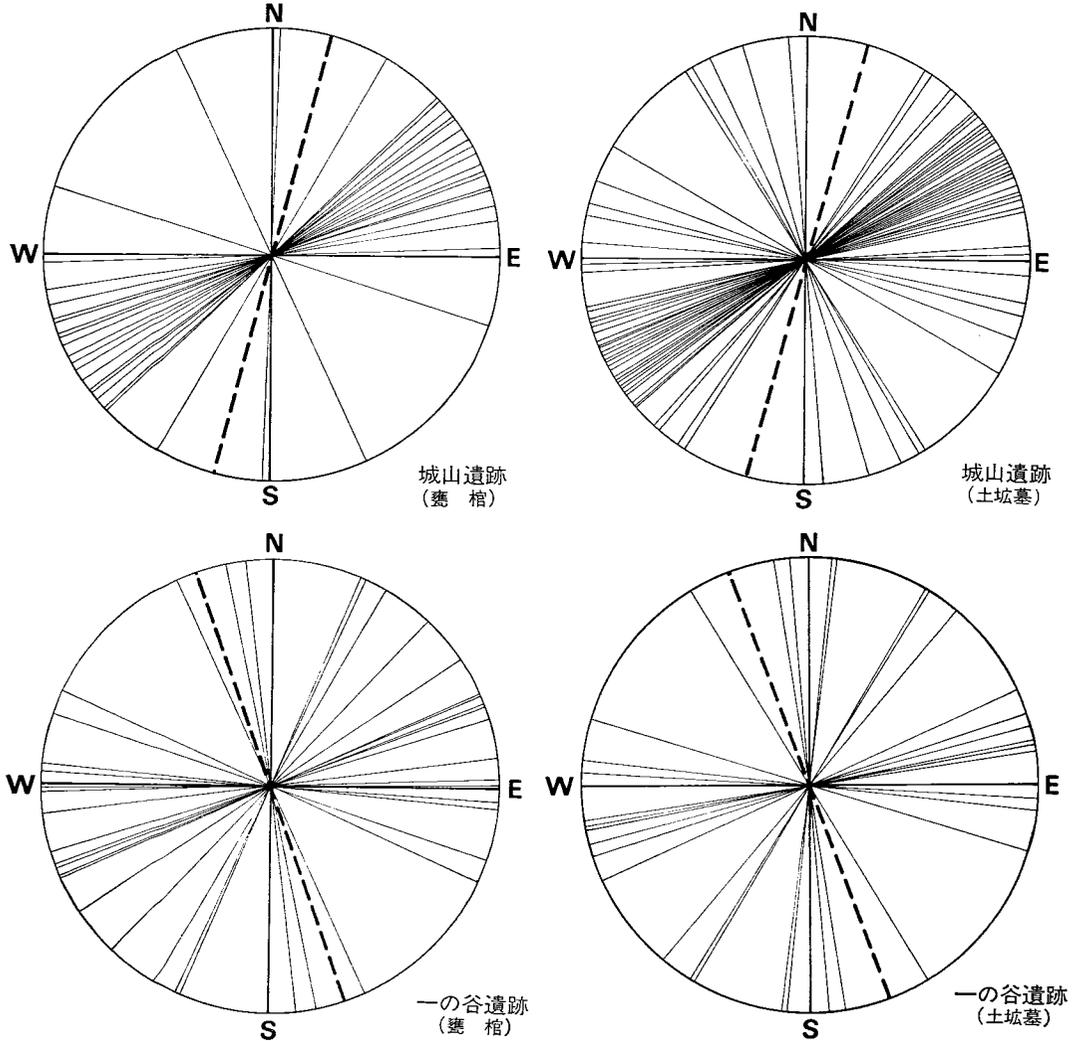


Fig. 117 弥生時代墳墓主軸方向一覧表 (その2)

(註14)、西本遺跡(註15)、葛島遺跡(註2)、宝満尾遺跡(註16)、津田遺跡(註17)、がそのタイプにはいる。直交するものとの切り合はそれぞれみとめられるが、平行するものについて切り合い関係はほとんど認められない。尾根線上に立地しているものは少なく等高線に平行するという意識があるわけで、尾根線の決め方について若干の問題があることはゆるがせない事実である。これはその発掘範囲の中で等高線によって推定したものであるから本当の尾根線から若干ずれるものがあった。しかし等高線から考えるとほぼ平行するばあいが多い。またこのことは尾根線上ではなく尾根線の両側に位置するものであるから尾根線＝等高線と置き換るならばつぎの様に理解できる。

尾根線に直交するばあいは、ほぼ等高線に平行することとなる。

尾根線に平行するばあいは、ほぼ等高線に直交することとなる。

このことから考えるとより興味深く理解できるであろう。

それぞれの遺跡での立地の巨視的な見方を述べたが、微視的な見方はどうであろうか、これはFig.117で示されている。

Fig. 117で示めすのは、遺跡の中で、甕棺と土塚墓の関係である。ここでは城山遺跡（註18）、一之谷遺跡（註19）の甕棺と土塚墓との関係を示めした。甕棺と土塚墓との方向性はほぼ一致する。このことは同一時期あるいは、時期の相違する場合においても方向性の一致がみられることが理解できるであろう。

両遺跡とも利用された時期的にも短期間で、そして切り合い関係が少ないことが特長である。

ではFig.120はどうであろうか、これも3つの遺跡での甕棺と土塚墓の関係と甕棺と石棺との関係について表示したものである。金隈遺跡（註20）、牟田辺遺跡（註21）とも甕棺と土塚墓との関係を表示したもので甕棺の場合はその方向性はないものと思われる。このことは共同体における埋葬地としての規定があったため、甕棺の墓壇を切り合っても埋葬したものであろう。土塚墓の場合は、平行の場合と直交に近い場合とに位置付けられ、地形の利用と方向性が規定されている。またこのことは牟田辺遺跡についても言えることである。

また姫方遺跡（註22）のごとく、甕棺と石棺について表示してみると石棺の広がりの方が少なく、甕棺は集中して墓地として規定されていたのか、どの方向にも存在する。尾根線の意識などないものと思われる。石棺墓は時期的に、甕棺墓よりも新しいためか、尾根線に対して直交に近い値を示めし、このことは等高線の意識が多くはたらいていると考えられる。

埋葬された人の頭位置は高木遺跡では尾根線直交するものは、副葬品・人骨の残りぐあいから全部が東を頭位としていることが実証された。

また、長崎県深堀遺跡（註23）の場合80%が東位である。山口県土井ヶ浜遺跡（註24）場合も85%は略東位に頭を位置させている。

その他の遺跡についてもおおよそのことは言えると考えられる。

朝太陽の昇る方向に向って埋葬したことは新しい生命の継承を意味するものと考えてもよいのではなかろうか。

以上に述べたことと今後の問題点を踏まえながらまとめてみる。

1. 尾根線に対して直交あるいは平行するという点については、各遺跡の状態から物理的要件から意識されたものが条件となって、一定の規定化が行なわれたと思われる。
2. ここでは尾根線を中心に考えてきたが、本当から言えば等高線の意識である。尾根線とっているが等高線と置換えてもおかしくない。

1. 弥生時代墓地の方向性と地形との関係

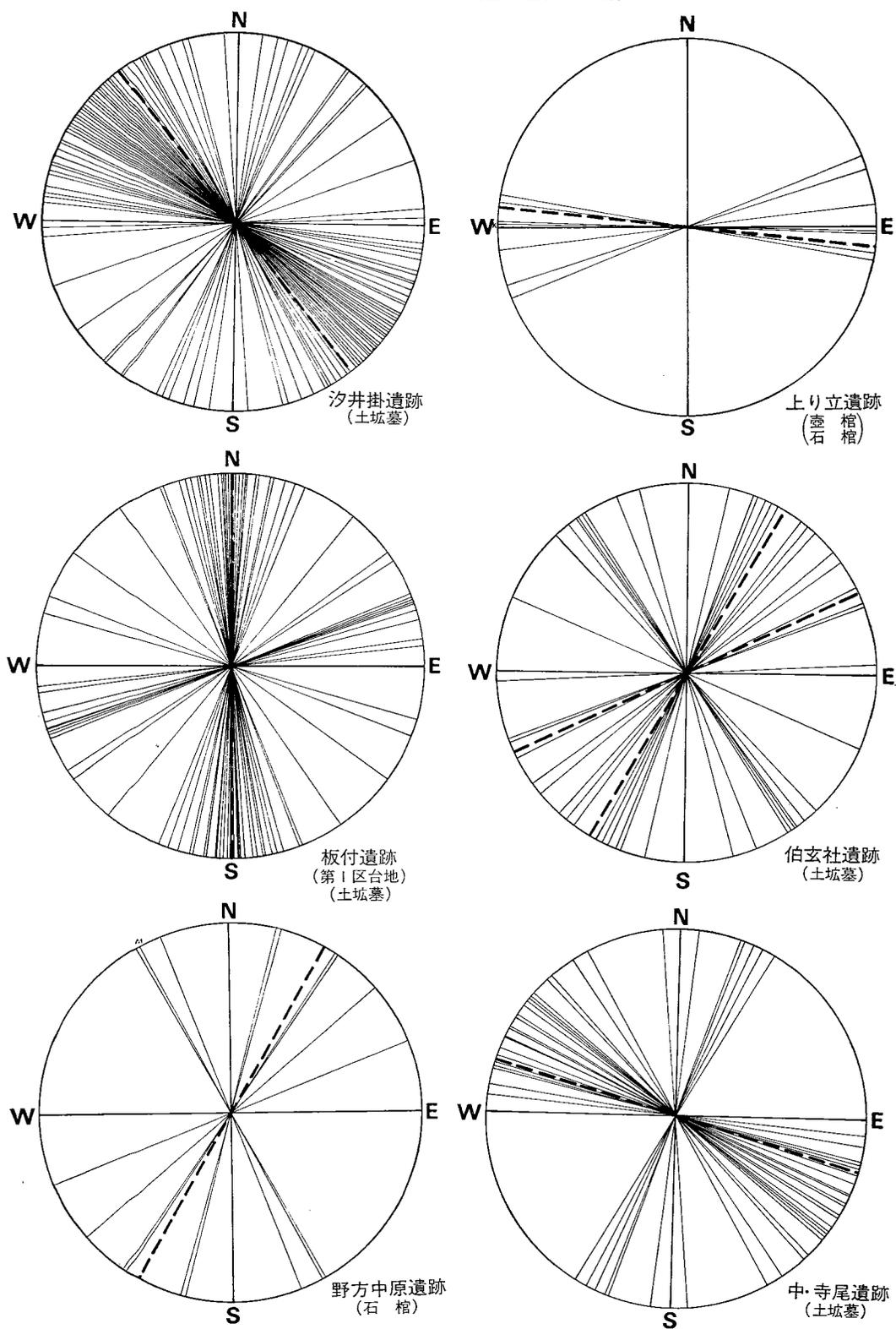


Fig. 118 弥生時代墳墓主軸方向一覧表 (その3)

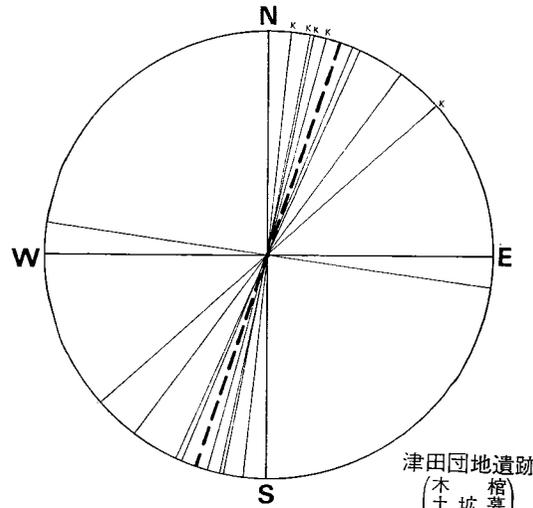
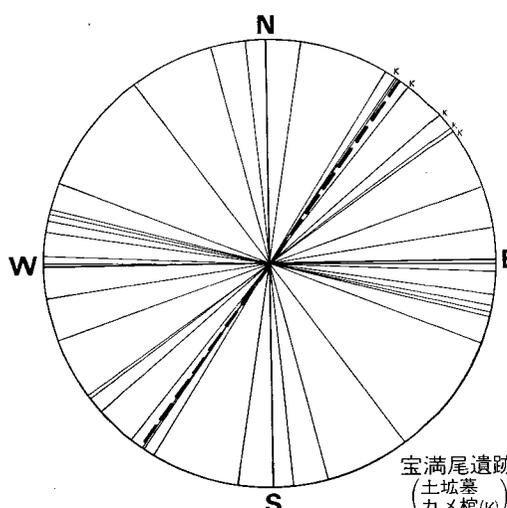
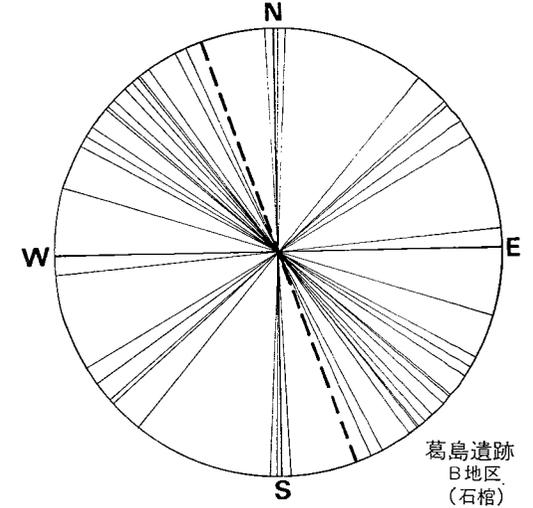
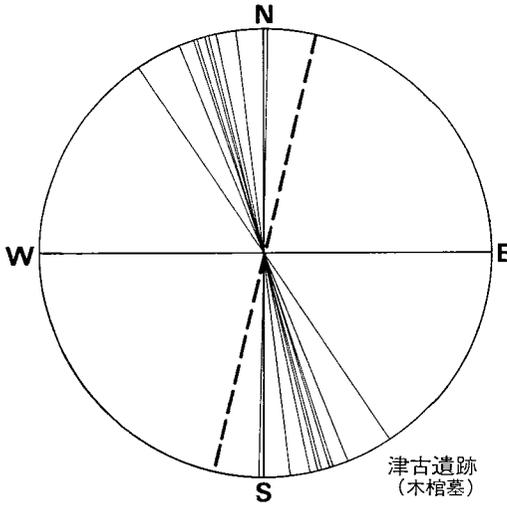
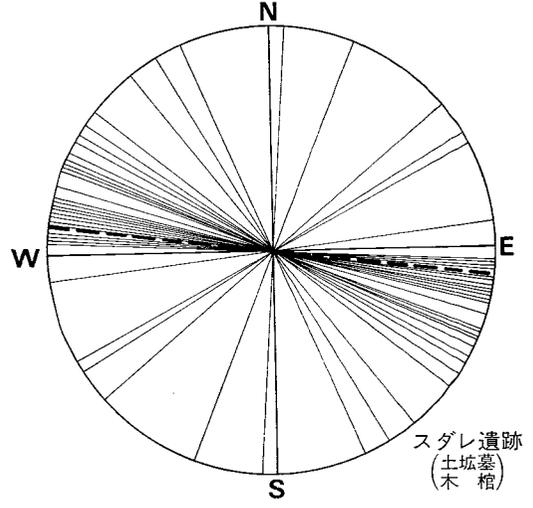
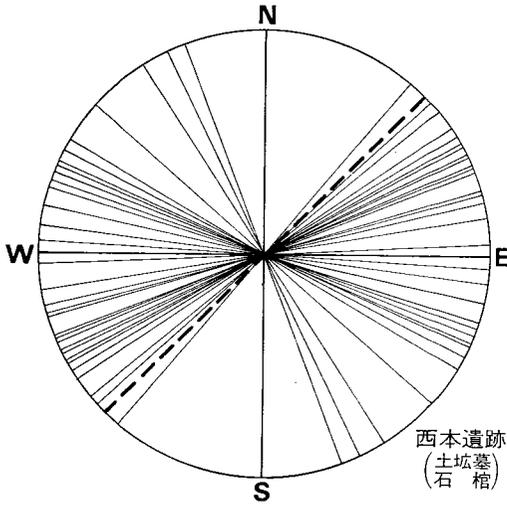


Fig. 119 弥生時代墳墓主軸方向一覧表 (その4)

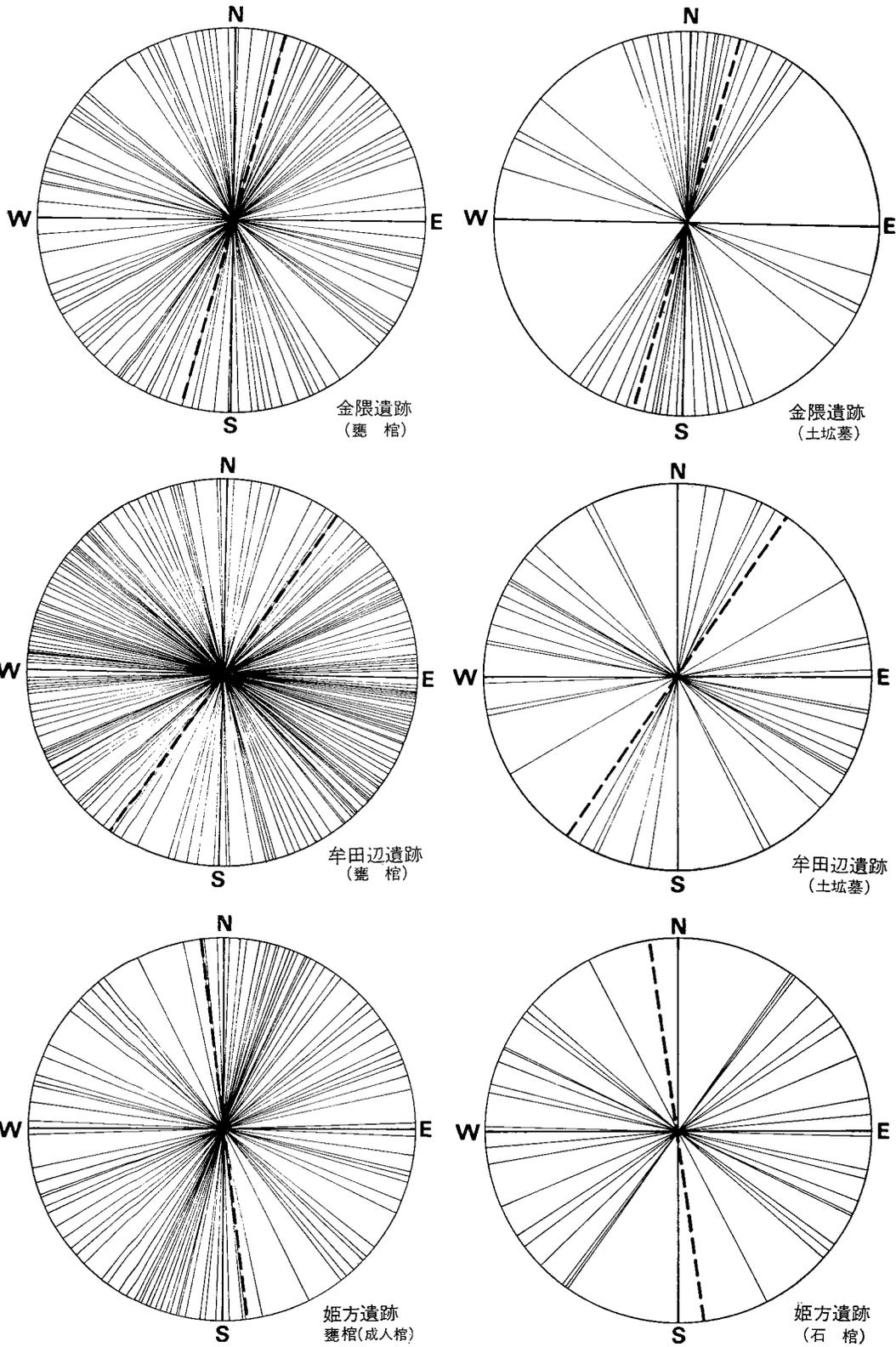


Fig. 120 弥生時代墳墓主軸方向一覧表 (その5)

表9. 弥生時代墓地遺跡の方向性比較表

遺跡名	所在地	種墓制	時 期	標 高	傾 斜	主軸方向	型 式	立 地	文 献
高木 (註8)	福岡県鞍手郡鞍手町新北字高木	土墳墓石棺 木棺 甕棺	弥生中期中葉 より(甕棺)	標高30~33m 丘陵	北-南4°	南 東	A	尾 根	
上り立 (註7)	福岡県 中間市上り立	石棺	弥生中期後半 より 後期	標高26~28m 丘陵	ほぼ 水平	東および西	B		福岡県上り立弥生墳墓 群調査報告 九州考古学33・34, 1968
沙井掛 (註3)	福岡県鞍手郡宮田 大字沼口字沙井掛	土墳墓 石棺	弥生後期から 古墳時代	標高73~76m 丘陵	3°	ほぼ西北	B	尾 根	くらのひかし —その3— 福岡県教育委員会1976
馬場山 (註3)	北九州市八幡西区 大字馬場山	土墳墓 甕棺	弥生中期初頭 より中期後半 (甕棺)	標高26.5~ 27.5m低丘陵	1°	北および西	B		馬場山遺跡 北九州市埋蔵文化財調 査会1975
津田 (註17)	北九州市小倉南区 大字津田冷水	土墳墓 甕棺	弥生中期中葉	標高16~18m 低丘陵	3°	北 東	B		津田団地遺跡 津田団地調査会1973
スダレ (註14)	福岡県嘉穂郡穂波 町椿	土墳墓 甕棺	弥生中期前半	標高45~56m 舌状台地	8°	西北および 東北	B	尾 根	スダレ遺跡 穂波町教育委員会1976
金 限 (註20)	福岡市博多区金限 字日姪	土墳墓 甕棺	弥生前期より 後期	標高30m位 丘陵	11°	甕棺全方向 土墳墓は北	甕棺 C 土墳墓 B	尾 根	金限遺跡第一次調査報告 金限遺跡第二次調査報告 福岡市教育委員会1970 1971
宝 台 (註4)	福岡市西区上長尾	甕 棺	弥生中期前半 より後半	標高30m位 丘陵	ほぼ 水平	北西および 北東	A		宝台遺跡 福岡市教育委員会1970
宝 満 尾 (註16)	福岡市博多区大字 下月隈	土墳墓 甕棺	弥生後期前半 (甕棺)	標高24~29m 丘陵	9°	北東および 西北	甕棺 B 土墳墓 C		宝満尾遺跡 福岡市教育委員会1974
野方中原 (註11)	福岡市西区野方字 中原	土墳墓 石棺 木棺 甕棺	古墳時代	標高18~23m 丘陵	2°	北東および 北西	B		野方中原遺跡概観 福岡市教育委員会1974
板 付 (註9)	福岡市博多区板付 2丁目	土墳墓 甕棺	弥生前期末よ り中期中葉 (甕棺)	標高8m 台地	ほぼ 水平	北	B		板 付 福岡市教育委員会1976
伯 玄 社 (註10)	春日市大字小倉字 伯玄社	土墳墓 甕棺	弥生前期より 古墳時代	標高14~18m 丘陵	ほぼ 水平	北東および 北西	B		福岡県伯玄社遺跡 調査概観 福岡県教育委員会1966
一 の 谷 (註19)	春日市大字白字水 一の谷	土墳墓 甕棺	弥生中期後半 より後期前半 (甕棺)	標高33~37m 丘陵	3°	東北および 西・北西	A		一の谷遺跡 春日町教育委員会1969
中・寺 尾 (註12)	大野市中329の 1~329の3	土墳墓 甕棺	弥生前期前半 より中期初頭 (甕棺)	標高25~28m 丘陵	2°	西北および 北東	B	尾 根	中・寺尾遺跡 1971 大野町教育委員会
津古内畑 (註13)	小郡市大字津古字 内畑	土墳墓 甕棺	弥生前期末よ り中期初頭 (甕棺)	標高36~39m 丘陵	10°	北西および 南東	B	等高線 (平行)	津古内畑遺跡 小郡町教育委員会1970
城 山 (註18)	福岡県朝倉郡夜須 町大字四三島字城 山	土墳墓 甕棺	弥生前期末よ り中期前半 (甕棺)	標高38~42m 丘陵	3°	ほぼ東北	C	等高線 (直交)	城山遺跡群発掘調査 報告書 夜須町教育委員会1973
牟 田 辺 (註21)	佐賀県多久市南多 久町	土墳墓 甕棺	弥生中期前半 より中葉 (甕棺)	標高14~20m 舌状低丘陵	4°	甕棺全方向 土墳墓西北 北東・北西	甕棺 C 土墳墓 A		牟田辺遺跡報告書 多久市教育委員会1971
姫 方 (註22)	佐賀県三養基郡中 原町	石棺 甕棺	弥生中期 (甕棺)	標高47~55m 丘陵	4°	甕棺全方向 石棺東北お よび西北	甕棺 C 土墳墓 A		姫方遺跡 佐賀県教育委員会1970
木 坂 (註5)	長崎県上県郡藤町 大字木坂	石棺	弥生中期前半 より後期末	標高10~27m 丘陵	14°	ほぼ北東	A		対馬の考古学 坂田邦洋1976
西 願 寺 (註6)	広島県広島市高陽 町知	土墳墓 甕棺	弥生	標高68m 丘陵	ほぼ 水平	東北および 北西	A	尾 根	西願寺遺跡群 広島県教育委員会1974
西 本 (註15)	広島県東広島市高 屋町杵原	土墳墓 石棺 甕棺	弥生後期 (甕棺)	標高240m	3°および水平	西北および 東北	C	尾 根	西本遺跡群調査報告書 東広島市教育委員会 1976
四 辻 (註1)	岡山県赤松郡山陽 町	土墳墓	弥生時代 古墳時代	標高85~90m 丘陵	A地区 南北7° B地区 東西17°	東南および 北東	A		四辻土墳墓遺跡・四辻 古墳群 山陽団地調査団1973
葛 島 (註2)	香川県香川郡直島 町	石棺	古墳時代	標高50m 丘陵	6°	北東および 東北	B	等高線 (平行)	葛 島 香川県教育委員会1974

(※) Aは直交・Bは平行・Cはその他

3. 今回の場合、尾根線についての定義をなしていないため、分析が困難になった点がある。すなわち、尾根線対いして両側である。
4. 各遺跡の内容分析が不十分であるが今後課題として残しておく。
5. 今回は墓地の尾根線あるいは等高線に対する方向性のみの巨視的な立地をおさえたのであって、微視的見方は今後の研究にまきたい。
6. 一般的に埋葬する場合頭を略東位に置くことが理解できる。すなわち、太陽が昇る位置である。

今後の問題はそれぞれの遺跡について微視的な見方・分析によって、多くの事実が理解できるであろう。今日から以後の課題として後日を期する。大方の御批判を仰ぐ。

分析資料の採集にあたっては日高正幸君の協力があつたことを明記して感謝する。

(副島邦弘)

註23. 深掘遺跡 長崎県教育委員会 1973

註24. 土井ヶ浜遺跡 『日本農耕文化の生成』1967

2. 弥生時代の穿孔技術について

玉類の研究は坪井正五郎博士・高橋健自博士・浜田耕作博士・梅原末治博士等によって玉作遺跡という考古学上における生産遺跡の研究の一つの動向に刺激されて、昭和2年に京都帝国大学考古学研究報告の10冊として『出雲上代玉作遺物の』研究として刊行された。昭和2年以後の研究を踏まえながら、寺村光晴氏によって『古代玉作の研究』として集大成されている(註1)。

縄文時代の穿孔技術については、真福寺貝塚の報告書の中で甲野勇氏が例を引きながら考察している(註2)。真福寺貝塚から発見された勾玉六ヶについて4型式に分類している、その中に玉類の穿孔法について、分類を行なっている。

第I式から第III式まで分類している(Fig.123)に示めすとおりである。

第I式 一面より穿孔し、この面における孔部直径は、他の面上の孔径に比し甚だ大である(Fig.123-I)。

第II式 一面より穿孔するも、これと他側面との孔径の差は第I式の如く甚だしくない(Fig.123-II)。

第III式 両面より穿孔する為め、何れの面の孔径も孔の内部の径に比して大きい(Fig.123-III)。

この三種に分類したことは観察した状態から不変である。

この他にも樋口清之博士が分類を行なっている(註3)これは硬玉製玉類を通してである。

1はV字形に一方または両方から穿たれ、その孔壁断面が直線をなしているもの。

2は孔の両径も孔中径も均しく竹管の中を見るようなもの。

3は孔が一方から穿たれて孔底U字形を成し、孔内壁面が外へ向って曲線にふくらむものでそのU字の底部分の薄いところを破って他の面より孔を貫通せしめたもの。

とに分けている。これは概略的には、甲野説を踏襲している。

筆者は甲野説を支持しながら明らかにしていきたい。

第I式と第III式とは穿孔技術的には普遍的に施行されているものである。第II式すなわち樋口説では2にあたるもの、直孔の性状を呈するものは、円管状(管状)のもので穿孔されたと考えられる。管錐の役目ををはたすものは竹管か鳥類・小哺乳類の長骨が該当する。しかし、これらは直に石製品に穿孔することは困難である。穿孔された孔には螺旋状の微溝の存在が観察されるため、ここに穿孔する媒介として被穿孔物体より硬度の高い砂粒、または石の粉末を使用して磨擦すれば穿孔できるのである。この技術は縄文時代の穿孔技術と古墳時代の穿孔技術との外見からの相違としては考えられない。鉄製工具の普及と、専門集団の構成によって、

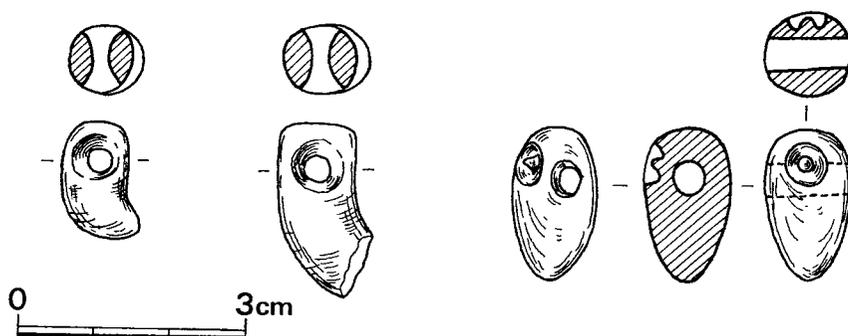


Fig. 121 真福寺貝塚出土の勾玉（縮尺1/1）

簡素化され、確一化されてくる。その時期は弥生時代後期に比定される。

ではそれ以前はどうであろう旧石器時代より物に穿孔する技術は、穿孔石器としてのドリルとオールとして考えられる。

ドリルは物に装着して使用するもので、オールは手によって使用し穿孔するのである。

セミーノフによる（註4）と、回転の動きをとまなう刺突は穿孔の始まりである。穿孔は回転運動によって、道具の先端に、軸線に直角方向で中軸線のぐるりをまるくめぐる痕跡を残す。

穿孔は

1. 非連続単方向回転（片手の穿孔で、一ひねりごとに手をはなし、道具をもちなおしておこなう）
2. 連続複方向回転（片手で、手をはなさないで、右左ねじっておこなう穿孔、両手の掌の間にはさんで揉む穿孔、舞錐による穿孔など）
3. 連続単方向回転（手動ドリルや機械による穿孔）に分類できる。そのおのおのの使用痕も相違する特徴を有する。

片手穿孔では、一ひねりで $\frac{1}{2}$ ～ $\frac{1}{4}$ 回転しかできないから、1回転させるには手をはなし、持ちかえるか（非連続単方向回転）、手をはなさないで逆方向へまわし、右左とねじるか（連続複方向回転）しなければならないから、正確に中心のきまった回転をさせることがむずかしくなる。だから片手穿孔によってあけた孔は不整

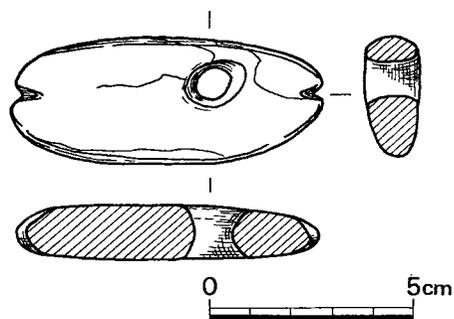


Fig. 122 山鹿貝塚出土の大珠（縮尺1/2）

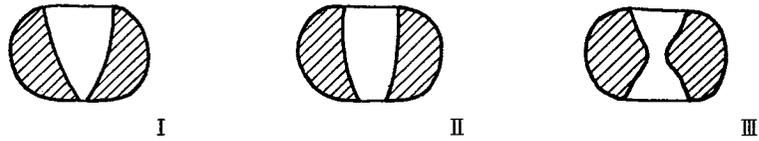


Fig. 123 玉類穿孔部断面図

形で、孔の径は穿孔具の径より大きくなる。線状痕は正確にはたがいに平行していない。

もみ錐の連続方向回転による両手穿孔は、精度がより高く、穿った孔もより整った形になる。

しかし長い柄のついた錐の軸線は回転時に傾くこともあって線状痕は平行するものばかりとは限らない。

舞錐はほぼ正円の孔を穿ち、線状痕も尖端からみれば同心円状の整ったものになる。

穿孔による使用痕は、なにに孔を穿ったかによってもかわる。柔らかいものに穿孔すれば、硬いものばあいより孔の形が整わず線状痕の平行性も乱れがちになる。石に穿孔する石錐の線状痕は平行に整ったはっきりしたものになるという。旧石器時代よりこのような技術があったと考えられる。ドリルとオールとの相違によって機能分離が石器の中にも表われた一例である。

穿孔の技術は、縄文時代になって土器の補修孔として一般的に目にする(註5)。その穿った孔は整った形で、片方あるいは両方から穿孔している。この技術的な裏付けが、管錐を使用し、断面が直孔する穿孔技術へと展開して行く、この時期が縄文時代中期に出現する硬玉製の大理として見られるわけである。

福岡県では山鹿貝塚(註6)・通古賀(註7)・江辻(註8)が知られている。しかしながら、山鹿貝塚を除きその実態は明確ではない。

九州では縄文時代の玉類についてみると、早期においてはまだ確実な例はないが、近くでは四国の上黒岩洞穴遺跡(註9)の第IV層より石製有孔の垂飾品が出土している。前期・中期の垂玉もそう多くなる、飾玉や牙玉程度である。後期も一般には不定形な玉が多く、後期末から晩期にいたって定形化し、勾玉や管玉が出現し、弥生時代に引き継がれていく。その多くの場合穿孔方向は両面から穿されている。その断面はⅢ式を呈している場合が多い、そして大珠に代表される直孔のⅡ式の場合は長骨と金剛砂(註10)という媒介を必要となる。

弥生時代で発見されている穿孔具としては、佐渡桂林遺跡の調査においては、長さ1cm前後径1mm以下の砂岩質の石針と称されているものが出土している(註11)。その実体は不明な点が多く、今後の研究に待ちたい。

次に穿孔法について、中口裕氏によって管状錐、舞錐、「タタキ孔」の三種に分類されている(註12)。

しかしながら、現在まで発見された遺物については孔壁に残る螺旋状の廻転痕を有するものが多いということから「タタキ孔」は除いてよいと思われる。今後の調査研究は遺物の残存と

孔内に残る痕跡によって判断されるわけである。

玉類の穿孔技術も弥生時代後期にいたって玉類の巾径に対して孔径は小さく、そして片側から断面V字にはいつているものが多い。このことは鉄製工具の使用が推定される。

その事例は島根県松江市矢田町平所遺跡から検出された鉄製工具である(註13)。このことから玉作の工房跡の発掘調査と研究によって、より明確に捕えることが期待され、工具の検出により、実証できることが今後の課題となる。

以下に若干まとめると

1. 弥生時代中期中葉ごろまで、両面穿孔で断面がⅢ式が主体を占める。
2. 弥生後期からは技術的裏付けとして、片面の穿孔、あるいは両面穿孔から断面V字となるⅠ式が主体を占める。
3. Ⅱ式の穿孔、直孔する技術については推定の域を出ないが今後の課題となる。
4. 弥生時代の工房跡の発見と資料の増加によって、穿孔工具の実証が行なわれ、穿孔方法の技術的な裏付けがなされることが今後の問題となる。

以上、まとめてみたが、今回は覚書程度のものであり、後日を期したい。大方の御教示を仰ぎたい。(副島邦弘)

- 註1. 寺村光晴「古代玉作の研究」1966。それ以前に一連の研究がある。
- 註2. 甲野勇「埼玉縣柏崎村真福寺貝塚調査報告」史前学会小報第2号, 1928。
- 註3. 樋口清之「垂玉考」鏡劔及玉の研究 1941。
- 註4. 田中琢訳「石器の用途と使用痕」S・A・セミョーノフ。考古学研究42。
- 註5. 補修孔については佐世保市泉福寺洞穴の最古の土器の一群である豆粒文土器にも見える。一般的には押型文土器にはわりあいに目にする。
- 註6. 永井昌文他『山鹿貝塚』山鹿貝塚調査団 1972。
- 註7. 中山平次郎「九州北部に於ける先史原史両時代中間期間の遺物に就て」考古学雑誌8—3, 1918。
- 註8. 中山平次郎「九州北部に於ける先史原史両時代中間期間の遺物に就て」考古学雑誌7—10, 1918。
- 註9. 江坂輝弥他「愛媛県上黒岩岩陰」『日本の洞穴遺跡』1967。
- 註10. 現在使用されている研磨砂のこと。玉すりを行なうのに水とともに重要なのが研磨砂である。続日本紀卷15, 天平15年9月13日条にも見える。
- 註11. 計良由松・椎名仙卓「後期弥生式文化の攻玉法」考古学雑誌47—1, 1961。
- 註12. 加賀市教育委員会編『加賀片山津玉造遺跡の研究』1963。
- 註13. 島根県教育委員会編『国道9号線バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』1976。

3. 副 葬 品 に つ い て

I

今回の発掘調査で棺内から出土した副葬品は2つに大別できる。

磨製石剣と磨製石鏃の武器を副葬するもの以下3基が出土している。

D-2号土塚墓 (石剣1・磨製石鏃1・打製石鏃1)

D-15号土塚墓 (石剣1)

D-16号土塚墓 (磨製石鏃2)

玉類を副葬するものは、これも3基である。

D-7号土塚墓 (水晶玉2・管玉11・ガラス玉8)

D-30号土塚墓 (管玉 1)

D-33号土塚墓 (管玉 4)

これらの葬品をもった土塚墓は (Fig.124) で示す通り、中心部に武器をもった一群と外側は玉類を副葬した一群が見い出される。棺内出土の石剣が出土したものは、橋口達也の報告によると、北九州では当遺跡をいれて11遺跡で16例にすぎない。

これらの時期は、弥生前期末から中期前半にかけて甕棺・石棺・木棺・土塚墓から出土し、これらが一定の時期に集中することから、この時期に流行した副葬の一形態としてとらえられる。中期後半以後になるとほとんどなくなってくる。このことは石製の武器が減少して、鉄器に変化すると考えられる。このことは打製石鏃についても考えられる。前期～中期中葉頃までは多くの打製石鏃をみるが、それ以後は減少することが見られる。このこともその裏返しである。

この内、磨製石鏃を共伴する遺跡では、

小郡市三沢ハサコノ宮遺跡 土塚墓内

飯塚市川島山村277 甕棺内

鞍手町高木遺跡 D-2号土塚墓内

の3例である。

また、玉類を副葬するものは墓塚が大きく、棺はA・B・C・各型式がある。このA型式はほぼC型式に近いもので、B型式の方に水晶玉2・管玉11・ガラス玉8が検出されたものである。

武器を副葬したものの棺の型はB型式ばかりである。頭が大きく足の部分が小さく隅丸である。0型である。

切り合い関係の棺の形態の新旧関係を調べると、棺の形態が何にも出てこない。

3. 副葬品について

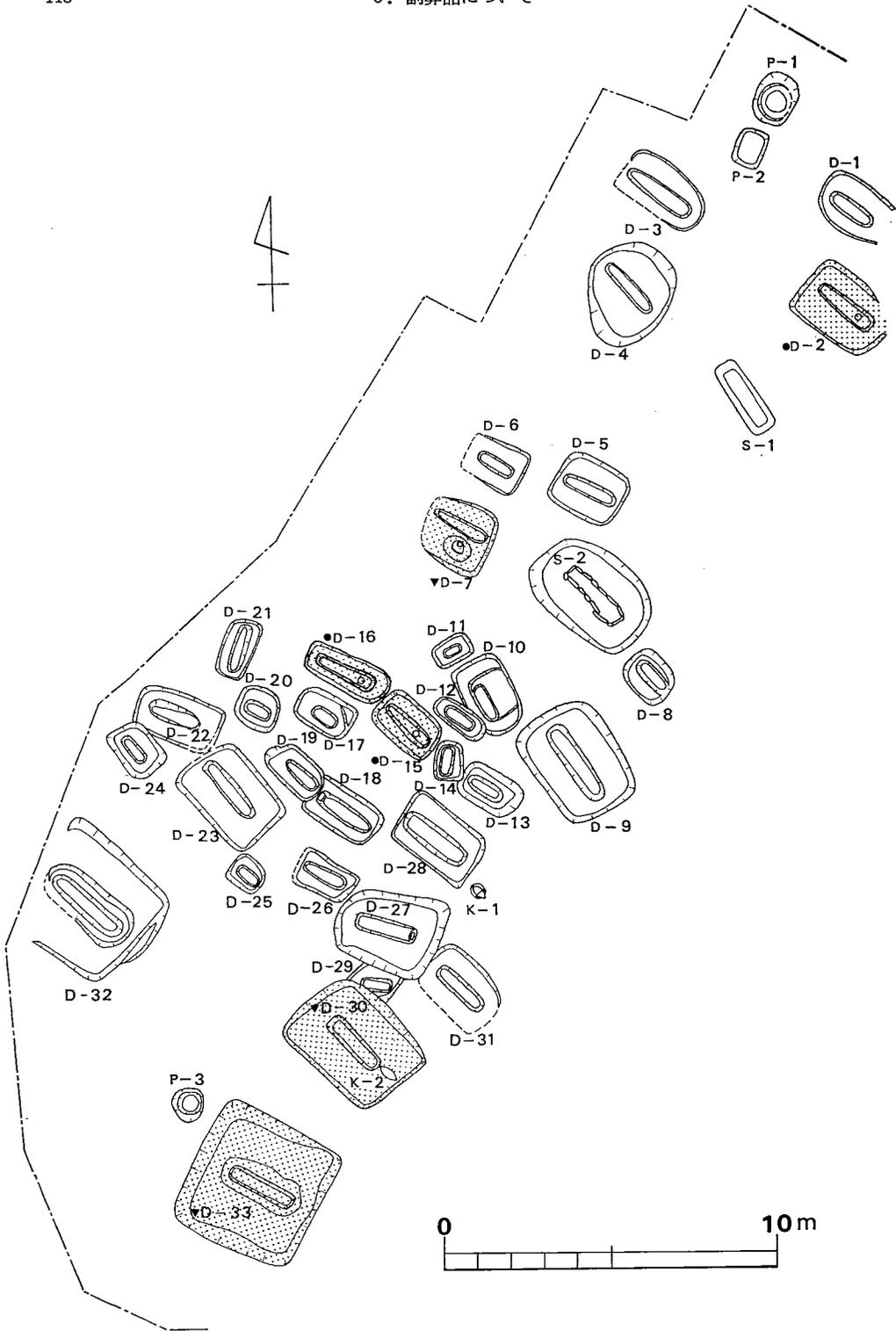


Fig. 124 高木遺跡彌生時代墓地(副葬品)配置図 ● 武器(縮尺 1/200)
▼ 玉類

高木遺跡の土塚墓群の時期決定は切り合い関係によって、次の様に考えられるであろう。

(古→新で示す)

D-29 → D-30 → K-2

D-22 → D-24

D-18 → D-19

D-31 → D-27

D-10 → D-12

これらのうち、切り合関係から下限はK-2号甕棺によって中期後半に位置付けられ、上限は墓坑内の埋土の中から出土した弥生式土器片や底部によって、ほぼ中期初頭(城ノ越式)に位置付けられる。

このことから、ほぼ石剣・磨製石鏃の出土した遺跡とほぼ同一の時期とみて、おかしくないものと思われる。

高木遺跡の弥生時代墳墓の時期は、中期初頭から中期後半以前に位置付けられる。

II

この位置付けによって、問題になってくるのは、D-7号土塚墓の水晶玉・ガラス玉が問題となってくる。一般的にはガラス製玉類については弥生中期中葉には出土を見ている。

しかしながら、水晶玉については非常に問題を呈している。

研究史的にみると水晶の玉が弥生時代に出土した発掘例の最初は、鏡山猛・渡辺正気氏等によって調査がなされた日佐原遺跡である(註1)。

これによると、E15号石蓋土塚墓の中から水晶製玉類が出土している。玉類は小型の算盤玉・棗玉・小玉など22点である。

小林行雄氏は日佐原の水晶の玉について「形状からいえば、6世紀の古墳出土品や朝鮮慶州金鈴塚出土品に類似したものである。日佐原の水晶製玉類の年代を4世紀後半までさげうるか否かは断言すべき傍証をもたないが、おそらく弥生のものであるまい。…(中略)…水晶製玉類の初現の時期を古くとも4世紀後葉までさかのぼらせうるにすぎぬ」(註2)とされ、日佐原遺跡の玉について疑問をもたれていられる。

この数年来の発掘調査において、確実に弥生時代末にも水晶の玉が出土する例が増加しつつある。すなわち、4世紀後半よりのぼるとみられる例としては、北から順に行くと

1. 福井県鯖江市長泉寺山古墳群西山三号墳(註3)
2. 岡山県倉敷市西尾辻山田遺跡(註4)
3. 島根県松江市矢田町平所遺跡(註5)

4. 福岡県鞍手郡若宮町汐井掛遺跡 (註6)
5. 福岡県鞍手郡鞍手町高木遺跡
6. 福岡県春日市日佐原遺跡 (註7)
7. 福岡県糸島郡前原町中尾遺跡 (註8)
8. 長崎県上県郡峰町木坂石棺 (註9)
9. 長崎県上県郡上対馬町塔ノ首遺跡 (註10)

9例ほど判明している。

この中で、5高木遺跡を除いた遺跡は、ほぼ弥生時代後期末から古式土師器期として位置づけられる。その中でも、松江市平所遺跡では水晶玉作工房跡が出土していることが注目を引く、玉作工程も理解できる多くの遺物が出土したことは、今後の水晶玉の編年的位置付けには大きな証拠をあたえてくれるだろう。時期的には、山陰地方における古式土師、鍵尾I式土器であるという。日佐原・辻山田・汐井掛等の遺跡は墓地群である。このことは高木も類似する。しかしながら、その出土状態を報告書等で調べるうちに、高木の出土例が一番古く、弥生中期前半から中葉に位置付けられるということとなると、二段階も古くなっていく。すなわち他の日佐原・汐井掛・辻山田にしても上限が弥生後期末と考えられる。王山長泉寺山の西山3号墳は内容が明確にとらえることができないが、報告書によると、弥生期終末期の所産という位置付けから問題はないであろう。7. 中尾遺跡は現在発掘調査中であるが、担当者の了解を得て発表すると「水晶の玉ではなく未加工品で素材であるという出土したのは古式土師器の時期で住居跡内である」という。ここでは一応上げておくが、正確なデータが発表されるのを待ちたい。

このことから、高木遺跡の出土状態が一番古いこととなることは明白である。

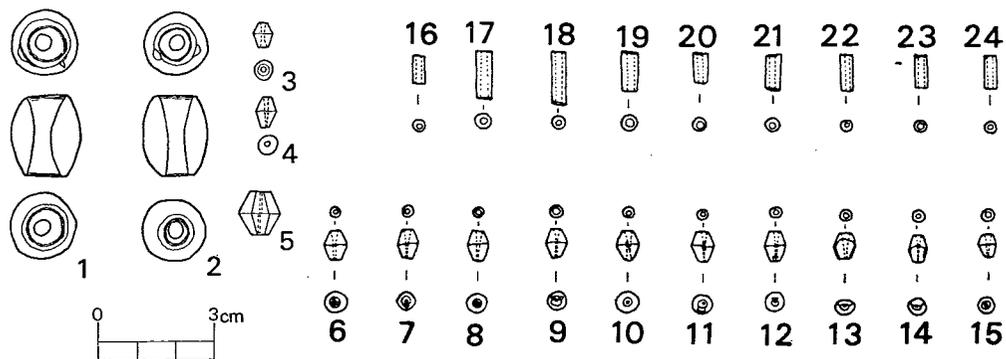


Fig. 125 水晶製玉類集成 (縮尺 1/2)

- | | |
|-----------|-------------|
| 1-2. 高木遺跡 | 5. 木坂石棺 |
| 3. 辻山田遺跡 | 6-24. 汐井掛遺跡 |
| 4. 塔ノ首遺跡 | |

では玉の形状からみた観察では、穿孔技術に相違がある。Fig. 125 は発表されているものの集成である。これによると、水晶玉は片面から穿孔であるのにたいし、両面から穿孔は高木遺跡の玉のみである。他の製品は小ぶりであるが、高木遺跡のものは大ぶりで、一番大きいと思われる。

穿孔技術の問題をふくめて、古く位置付けることができるのではないだろうか。

以上まとめてみると、

1. 高木遺跡の水晶玉は出土状況からみて、弥生時代中期中葉に位置付けされ、水晶の玉としては一番古くもってこれらと思われる。
2. 穿孔技術の面からも考えられる。片面穿孔は新しく、両面穿孔は古く位置付けられる。
3. 水晶玉は高木のもものは大ぶりで、他のものは小ぶりである。
4. このことから一般的に言われていた4世紀のものより一段階古くもってきてよいものと考えられる。
5. 水晶玉は今後の発掘資料の増加が期待できる。

以上のことから、実際工房跡の検出が行なわれたことと他遺跡の資料増加とあいまって、その裏付けがより完璧になることが考えられる。

- 註1. 鏡山猛・渡辺正気「福岡市日佐原の弥生時代墓地」『日本考古学協会第24回総会研究発表要旨』1959。
- 註2. 小林行雄「神功・応神紀の時代」『朝鮮学報』第36輯，1965。
- 註3. 齊藤優「西山第3号墳」『玉山・長泉寺山古墳群』鯖江市教育委員会，1967。
- 註4. 間壁忠彦・間壁菫子「辻山田遺跡」倉敷考古館研究集報第10号，1974。
- 註5. 松本岩雄「平所遺跡」『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書-I-』1976，島根県教育委員会。
- 註6. 福岡県教育委員会「くらてのむかし—その3—」1971。
- 註7. 鏡山猛・渡辺正気「福岡市日佐原の弥生時代墓地」『日本考古学協会第24回総会研究発表要旨』1959。
- 註8. 柳田康雄氏教示。
- 註9. 坂田邦洋『対馬の考古学』1976。
- 註10. 小田富士雄「塔ノ首遺跡」『対馬』1974。

III

管玉について若干のべてみたい。

弥生時代の管玉は古墳時代の管玉に比して一般にその大きさ、とりわけ長さと同径が小さな値を示すことに時代的特徴とされている。

このことについては下条信行氏の研究(註11)によっている。

氏は「弥生時代管玉は長さ3mm~20mmまでの比較的余裕のある数値巾を示すが最も主体となるのは8~10mm程度のもので、これに3~8mm、10~17mm程度の大きさの管玉が次いで、そのものの数値が小さく、或は大きくなるに従って出土例は少なくなる。

この長さに対して、径(幅)にも一定の限定数値があることが帰納的に窺いうる。現在の出土例の中で最も多い例は2~4mm、1mm~3mm台のものが一番多く、4mmをわずかにこえるものや2mm台のものが次いでいる」という。

弥生時代の管玉は長さにおいては小は3mm~20mmまでであるが、平均して8mm~10mmのものが通例で、その径については3mm位に齊一化している。

一般に古墳時代の管玉に比して、長さ、径共に小型であることを特徴としている。

このことによって現在まで出土している。管玉について、下条氏の述べていることはいえる。しかし、氏は穿孔技術の面からは述べていない。この面について、若干述べて、氏の論旨を助けることとする。

氏は計数表を時代ごとに掲示されている。これを基にして考えてみたい。

表10 弥生時代遺跡出土の管玉計測表

(単位はmm)

遺 跡 名	最大孔径	最大 径	%	時 期
佐賀県唐津市柏崎	2.2	3.5	63	前 期
福岡県小郡市津古内畑6号竪穴		3~6		
佐賀県唐津市宇木汲田60号甕棺	1.6~2.0	2.8	57~70	中 期
” 81号甕棺	1.5~1.9	2.5~3.6	53~60	
佐賀県唐津市中原 4号甕棺	1.2~2.1	3.1~3.8	39~55	
” 7号甕棺	2.1	3.4~4.0	53~*61	
長崎県島原市景華園		3		
佐賀県杵島郡禪島山	1.15~1.3	2~4	33~58	後 期
佐賀県唐津市桜馬場 2号甕棺	3	7	43*	
高木遺跡 D-7 土塚墓 No. 1	1.3	2.8	64	
” No. 2	1.9	3.1	91	
” No. 3	1.8	3	60	
” No. 4	2.2	3	73	
” No. 5	2.5	3.2	78	
” No. 6	1.6	2.8	57	
” No. 7	1.5	2.8	54	
” No. 8	1.5	3.5	43	
” No. 9	1	2	50	
” No. 10	1.5	3	50	
” No. 11	1.8	3.1	58	

高木遺跡	D-30土塚墓		2	4	50	
高木遺跡	D-33土塚墓	No. 1	1.8	3	60	
	"	No. 2	1.8	3.5	52	
	"	No. 3	1.5	3	50	
	"	No. 4	1.8	3.5	52	

* 最大孔径の最小値と最大値に対する最大径の両極値のパーセンテージを各々機械的に数値化したもので、絶対値ではない。

長さや径については氏が述べられた傾向は、言えるわけで、筆者は径と穿孔されは孔径を問題としてとり上げたい。

このことからみると、弥生時代後期からはその百分率は50%を割り40%前後となる。古墳時代にいたっては30%前後に落ちついてくる。弥生前期にかけて50%前後から70%にかけての数値が多く、このことは直径に対する孔径の大きいことが理解される。このことから技術面では、穿孔技術稚拙が大きいことが考えられ、熟練したものではないと思われるし、鉄製品をもって孔を穿けているのは中期中頃以後と考えられる。すなわち50%を割ることから熟練した人々の介添えすることと考えられるのではなかろうか。

以上まとめてみると、

1. 一般的に弥生時代の管玉は細身である。古墳時代の管玉と比較すると長さや径が小さな値を示すことが特長である。
2. この長さや径から特長に付加することが考えられる。すなわち、径と孔径との関係である。
3. 百分率が高い（50～70%）のが弥生時代のもので古墳時代にいたっては百分率は低く、50%を割ることが常識で、古墳時代後期にいたっては30%前後に落ちつくことが明らかである。

若干のまとめを記したが資料の分析が少ないことが不満である。大約的に述べたことを記して後日を期する。（副島邦弘）

註11. 下条信行『宮の前A～D地点』福岡県労働者住宅供給公社，1971。

4. 土塚墓出土のガラス玉の材質について

I 試料

これらのガラス玉は、淡青～帯緑淡青色をしており、厚さ 2 mm 程度、中心に 1.5 mm 程の孔を有し、形は円形でなく、台形、多角形に近いつぶれた形 (5.5—3 mm) をしている。微細な気泡を含むため、半透明となっている。

II 蛍光 X 線分析結果

材質を知る目的で非破壊的に、8 個のガラス玉について (冠頭写真参照) 蛍光 X 線分析を行った。

- 測定条件 X線対陰極：白金、印加電圧—電流：40KV—20mA、分光結晶：弗化リチウム、検出器：シンチレーション・カウンター
- 検出元素、バリウム (微)、錫 (微)、鉛 (強)、ストロンチウム (微)、銅 (弱)、鉄 (微)、砒素 (極微)? アンチモン (極微)?

鉛は主成分、その他は少量、微量成分である。試料が小さく、微量成分はスペクトル強度が弱く、判定が困難で砒素、アンチモンは存在不確実である。重金属領域の測定なので、珪素、アルミニウム、カルシウム、マグネシウム、カリウム、ナトリウムは測定していないが、この種のガラスの主成分として含有されていることは明らかと考える。

検出された元素から、これらのガラスは、鉛をかなり含むソーダ石灰ガラスであり、特にバリウムが検出されているのが特徴である。着色は銅、鉄によるものである。両者の含有量により青～帯緑青色に色調が変わる。鉛ガラスに含まれている鉄、銅の従来分析値は、鉄： Fe_2O_3 として 0.2～1%、銅： CuO として 0.5～1%程度である。

鉛含有量は、今回、比較する標準試料が少く、X線分析では定量できなかったが、鉄含有量が最も多く検出された試料No. 5 (巻頭写真の左から5番目) について、比重瓶法で、比重を測定し、3.48 を得た。この数値から PbO 40%程度の鉛ガラスであると推定した。

III 考察

今回調査したこれらのガラス玉は、アルカリ石灰ガラスと鉛ガラスの中間の成分で、バリウムを含んでいる特徴から、中国製の漢時代の鉛ガラスに、アルカリ・石灰系ガラス又はその成分の原料をまぜて、我が国で熔融、成型されたものとする。バリウムを含む鉛ガラスは中国の漢時代に製造されたことが知られている。

恐らく管状に製作したものを輪切りにして成形されたものであるが、円をなしていないことから、まだ技術的に慣れていないように思われる。中国との交通および技法上から興味ある試料である。(江本義理)

5. 高木古墳群の石室について

今回の調査では各2基から構成されるA・B2群計4基を対象としたが、群間には、空間的のみならず立地・石室構造等に明らかな差異が認められる。以下、両群についての若干の比較と、特定の二三の問題について簡略に述べたい。

立地では、いずれも東側からのみかけを意識する点で共通しながらも、A群では斜面中腹に、B群では尾根あるいはこれから少しく斜面にかかる位置にあって、異なる。石室構造上でも、前者は複室、後者は単室と対照的である。これらの差異は 営造時期の相違に基づくもので、石室構造・出土須恵器の型式からみてB-1号墳が6世紀中葉代、A-2号墳が6世紀末葉代にそれぞれ比定され、B群が先行する。

B-2・A-1号墳は、墳丘・主体のいずれの規模においてもB-1・A-2号墳を上まわって主墳たる地位にあり、時間的差をもちながらも群構成のパターンは同様である。ただし、A-1号墳には、その玄室内法からみて未成年者が埋葬された可能性がある。A-2号墳との先後関係は明確ではないが、相前後して営まれたとみられるこれら2号墳の主たる被葬者が親子との関係にあるとすれば、八女郡広川町・山の前3号墳(註1)と共通するものがある。だとすれば、群構成のパターンは同一であっても、契機が異なる可能性がある。

B-1号墳の主体は、整美な石積・少し胴張りとなる長方形プラン・狭長な墓道等にその特徴があり、4基の中では特異な存在といえる。これらの特徴は、石材を除けば玄海灘沿岸の宗像郡津屋崎町を中心とする一帯の単室横穴式石室に広く認められるものであり、被葬者のこの地域=宗像勢力との関係の深さを示唆するものとして注目される。こうした痕跡は、本墳に先行する鞍手町新延・鎧塚4号墳石室(註2)でも窺われるが、同地の古墳文化が周辺に与える影響力には時期による強弱の変化があるように思われ、看過できない。

B-1号墳墳丘中から出土した一群の土器が、初葬時に被葬者への飲食物供献に用いられた容器であることは明らかである。本墳に先行する古式須恵器の段階では、葬送儀礼の過程で参会者による飲食行為がなされる場合があり、その際に使用された飲食器は容器とともに破碎・遺棄されかつ埋め戻されている(註3)。本墳では、こうした飲食器は採取されておらず、従って、理論的には葬送儀礼に飲食行為が含まれなかった場合と行為後に飲食器を持ち帰った場合とが想定される。いずれにしても、背景たる死あるいは死者に対する観念の推移とも深く係わるのでなお慎重に検討する必要がある。(石山勲)

註1. 山の前3号墳は、大小2基の円墳からなり、先行する小に大が覆いかぶさるように営まれるという特異な構造をもつ。筆者は、これを夭折した子に対する親の心情の発露とみている。

川述昭人・石山勲「山の前3号墳」九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 III 1972 所収

註2 『鞍手町誌』

註3 拙稿「古墳における古式須恵器のあり方について」九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書 X 1977

6. 発掘調査の結果

高木遺跡群の発掘調査においての結果は、つぎのとおりである。

- 第1 弥生時代の住居跡2軒と墓地群（土塚墓33・石棺墓2・甕棺墓2）が検出された。
- 第2 弥生時代の墓地のうち、土塚墓から副葬品として、玉類をもつものと、武器をもつものとに分けられる。玉類をもつもの3基（D-7・30・33）、武器をもつもの3基（D-2・15・16）である。
- 第3 土塚墓それぞれの切り合い関係は少なく、切りあっても墓塚の若干の切り合いだけで、ほぼ同一時期と思われる。
- 第4 玉類の問題であるが、中でも水晶玉の位置づけ。
- 第5 古墳時代の住居跡2軒と古墳4基の調査を行なう。
- 第6 1号住居跡から出土した遺物よって古墳より古く位置付けられる。
- 第7 各時代、それぞれに問題点があるが、今回は弥生を中心に問題を提議し、若干の考えを述べた。
- 第8 鞍手地方の弥生時代から、古墳時代にかけての墓制のあり方と、生活遺構について理解できるものである。

発掘調査で協力を受けた鞍手町当局者、地主の石田茂氏及び発掘に携さわった人々に御礼を述べ、あいさつにかえたい。

資料採集のおり、森貞次郎先生・寺村光晴先生・楢山林継・前島己基・松本岩雄諸氏の協力を受けた記して謝意を表わす。

最後に今回発掘された、土塚・石棺・甕棺墓及び古墳に埋葬されていた先人の霊が安からんことを祈る。（副島邦弘）

付 周 辺 の 遺 跡

八 尋 旭 古 墳 群

鞍手郡鞍手町八尋字旭所在古墳

旭 1・2 号 墳 の 調 査

1. 調 査 の 経 過

旭古墳群は、鞍手郡鞍手町八尋字旭に所在し、銀冠の発見で著名な銀冠塚とは西側に山一つ隔てた丘陵上に営なまれている。

同地で採土作業中に石室（1号墳）が発見され、崩壊する危険があるため事前の調査が必要との話から、当時同町内で九州縦貫道中山工区所在遺跡の調査を行っていた鞍手発掘調査事務所でこの調査を担当することとなり、石山が事前打合のため現地へ赴いた。

心づくしの水と花とが捧げられた石室の前で、土地所有者である平田明換氏から事情を聴取した。それによると、氏が採土中ブルドーザーが大石に当たって停まってしまい、それを気づいた氏は直ちに鞍手町教育委員会に古墳発見の旨を連絡するとともに開口した石室を再び土砂で覆い現状を凍結されたとのことであった。この間町と県との間に連絡と若干の協議が行なわれたものの、徒らに時間のみが経過しており、迅速・有効に対応できなかった行政に対して氏は強く批判されて怒りを隠されず、返答に窮した次第であった。ともかく、調査についての承諾を得、当方のスケジュールの調査を開始した。

平田氏は、当初調査後削平を予定されていたが、調査期間中に本墳を現状保存したいとの意向を示された。氏の御好意に応えるため調査の後半では、このままでは崩壊のおそれがある墳丘・石室の補強工事を併行した。補強にあたっては、側面には土ノウを積んで墳丘の崩壊を防いだが、前室前面は深さ 1.5m 程削平されており、強固な土止めが不可欠の状態にあった。そのため石材の入手と運搬とに苦慮していたところ、氏が大分・宮崎県下から採集されていた巨石の提供を受け、またこの据えつけに際しては氏自らがブルドーザーを運転される等、全面的な御協力を得た。こうして所定の調査と最小限の補強作業を無事に終え、さらに墳丘にシートを被せ、前室に土ノウを積んで立入禁止とし、養生と不測の事故に備えた。

10月中旬にいたり、平田氏から採土中に新たに1基（2号墳）を発見したとの電話連絡があり、16日に宮小路賀宏・児玉真一・石山の3名は再度現地へ赴いた。氏との協議の結果、2号墳についてはその位置からみて現状保存は困難であるとの判断から、当該部分の採土作業を一時中断していただき早急に調査を実施することとした。1号墳調査時に本墳の所在を確認できなかったことが悔まれる。

これら2墳の調査にいたる経緯は、未指定文化財の保護について行政が迅速・有効に対応できず、個人の善意に負う所が多い現状を如実に示すものであり、1号墳が現状保存された喜び

とそれに対して行政は何を寄与できたのかというおもいが交錯する。

再度にわたり発見直後に自ら通報され、かつ調査終了時点まで現状を凍結され、加えて第1号墳を現状保存された平田氏に対して、心から御礼申し上げます。

なお、現状（旧規の約 $\frac{1}{4}$ ）保存された第1号墳のそばには直方青年会議所の御好意による説明板が設置され、見学のための便が図られている。上記の経過を御理解うえ御活用いただくよう懇望する次第である。（石山）

以下に、調査日誌によって経過をたどってみよう。

第1次調査日誌

- 5月17日（月）曇。発掘用器材を現地に運搬し、発掘の準備を行なう。
- 5月18日（火）曇。樹木の伐採作業を行なう。現状の遠景および近景の写真撮影を行なう。
- 5月19日（水）雨。天候不順のため、作業休止。
- 5月20日（木）曇のち雨。樹木の伐採作業を行なう。
- 5月21日（金）雨。天候不順のため、作業休止。
- 5月22日（土）曇。覆っていた土砂の削除を開始する。併行して、測量を開始する。
- 5月23日（日）作業休止。
- 5月24日（月）曇。土砂の削除を行なう。併行して、三角点から、絶対高を移動する。
- 5月25日（火）曇。土砂の削除と石室内の清掃を行なう。
- 5月26日（水）雨。天候不順のため、作業休止。
- 5月27日（木）曇。石室の割り付けを行なう。石室内の写真撮影を行なう。
- 5月28日（金）曇。石室の実測を開始する。
- 5月29日（土）曇。石室の実測を継続する。
- 5月30日（日）曇のち晴。石室の実測を継続する。
- 5月31日（月）晴のち曇。石室の実測を継続する。
- 6月1日（火）晴。石室の実測を継続する。
- 6月2日（水）雨。石室の実測を終了。（宇野）

第2次調査日誌

- 11月4日（木）晴れのち曇。発掘用器材を現地に運搬し、調査を開始する。石室内の埋土を排除し、前室・後室から副葬品を検出する。
- 11月5日（金）曇。石室内の清掃と並行して前室入口部で石室主軸と直交する形で石室掘り方を切断する。絶対高を移動し、石室の割り付けを開始する。
- 11月6日（土）雨のち曇。石室の割り付けを終了する。
- 11月7日（日）作業休止。
- 11月8日（月）晴。縮尺20分の1で石室の実測を開始する。
- 11月9日（火）晴。石室実測を継続する。
- 11月10日（水）曇。石室実測と並行して前室入口部での土層断面図を縮尺20分の1で作成する。
- 11月11日（木）曇。石室実測を終了する。写真撮影を行う。
- 11月12日（金）晴。器材を現地より撤収して調査を終了する。（児玉）

2. 旭 1 号 墳

墳 丘 (Fig. 126)

本墳は、南北に尾根筋をおく丘陵の西斜面に築造している。墳丘は、3分の1を残し、他は破壊されていた。残存する墳丘には、ゴミ溜の穴がいたる所に掘られていた。墳丘裾は、北側一部を残すのみであるが、径約12m、高さ約4mの円墳と推定される。

前室の墓壇掘り方の断面を見ると、地山直上に旧表土と思われる厚さ約2cmの暗褐色の層が一部確認され、また墓壇掘り方以前の盛土も見られないことから、旧表土を剥ぎ、若干の整地を行なうに止まり、丁寧な整地は行なわれていないものと思われる。盛土は、地山の花崗岩パイラン土だけではなく、赤土も含んでおり、周溝および墓壇掘り方の土だけではなく、他からも運搬したものと思われる。

周溝らしきものを石室中心点より北へ約5mのところ検出した。幅約3m、深さ約1.5mあり、本墳の周溝としては大き過ぎ、断面検出のみであるため、本墳に伴う周溝であるか否かは不明である。掘った後、比較的早く埋ったものと思われる。

石 室 (Fig. 127)

主軸をN-14°-Wにとり、ほぼ南方に開口する複室の横穴式石室である。後室と前室の一部を残し、羨道および前室天井石はすでに失っていた。本石室の現存長4.2mである。

後室は、長さ（奥壁より仕切り石の中心点まで）2.2m、幅2.1m、高さ1.8mのほぼ正方形プランをなし、奥壁および左右両側壁は、約70度の傾斜角度をもつ、比較的整った石室である。奥壁は、鏡石に一石を用い、左端に面を調整した鑿の跡がみられる。石室の構築は、楣石を載せる高さ、床面より約1.1mで各壁を調整している。奥壁は、石の側辺を揃えながら積んでいるが、左右両側壁は、石の重量を分散させるために交互に積んでいる。後室入口の袖石間0.7m、高さ1.2mである。敷石には、40cm前後の石を用い、四方より中心へと敷き、また敷石を安定させるために砂を厚さ5cm置いている。

前室は、長さ（前後石室の仕切り石の中心点間）1.7m、幅1.3m、推定高さ1.4mで、方形に近いプランをなしている。敷石には、20cm前後の石を多く用い、後室側より羨道の方へと敷いている。

羨道は失われているため判然としないが、前室入口の袖石の状態から、前後石室の主軸を通らず、少し左へ曲がっているものと思われる。

石室の石材は、主に砂岩系であるが、敷石の中には、珪化木が少し含まれる。

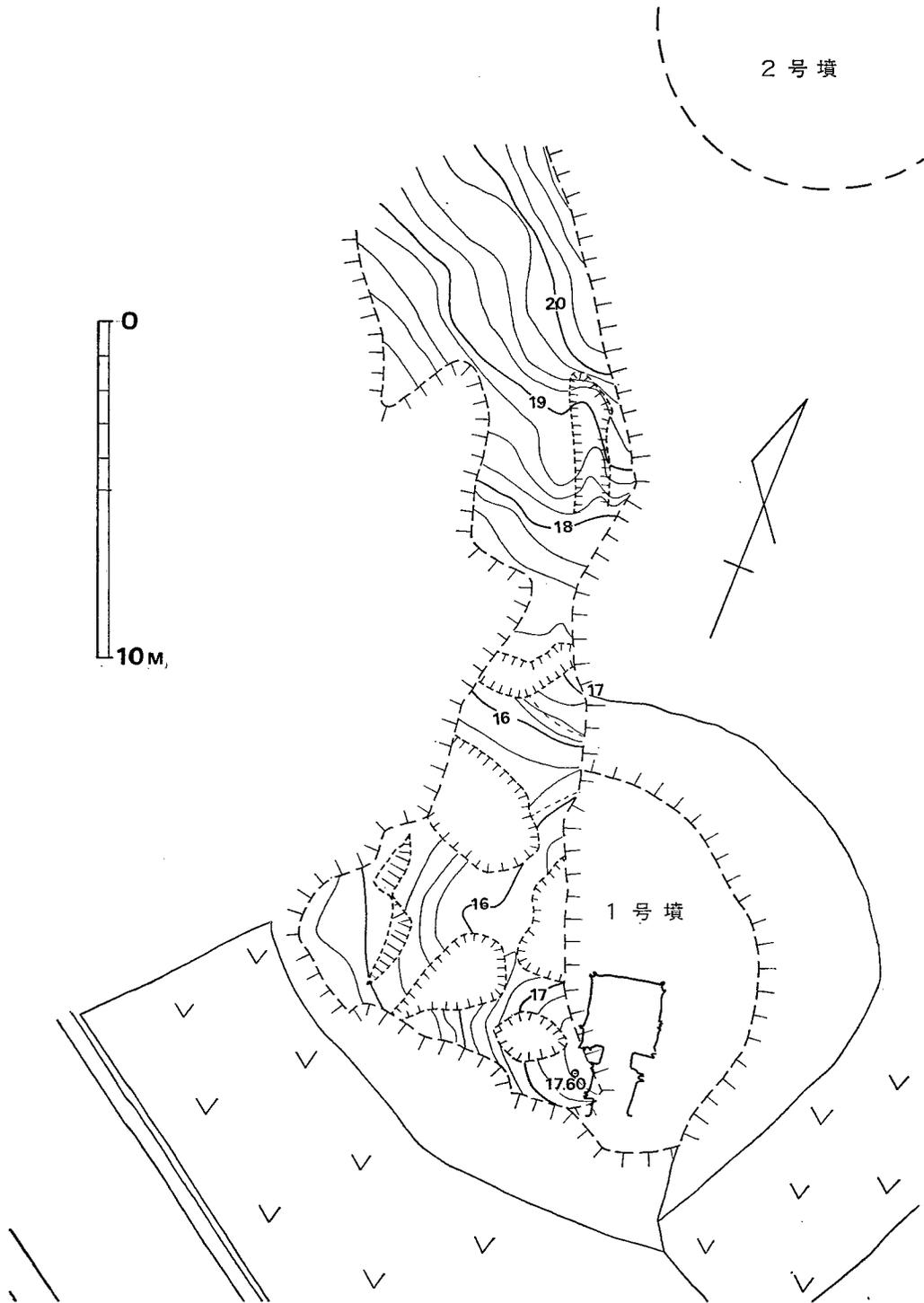


Fig. 126 旭 1・2号墳地形測量図 (縮尺1/200)

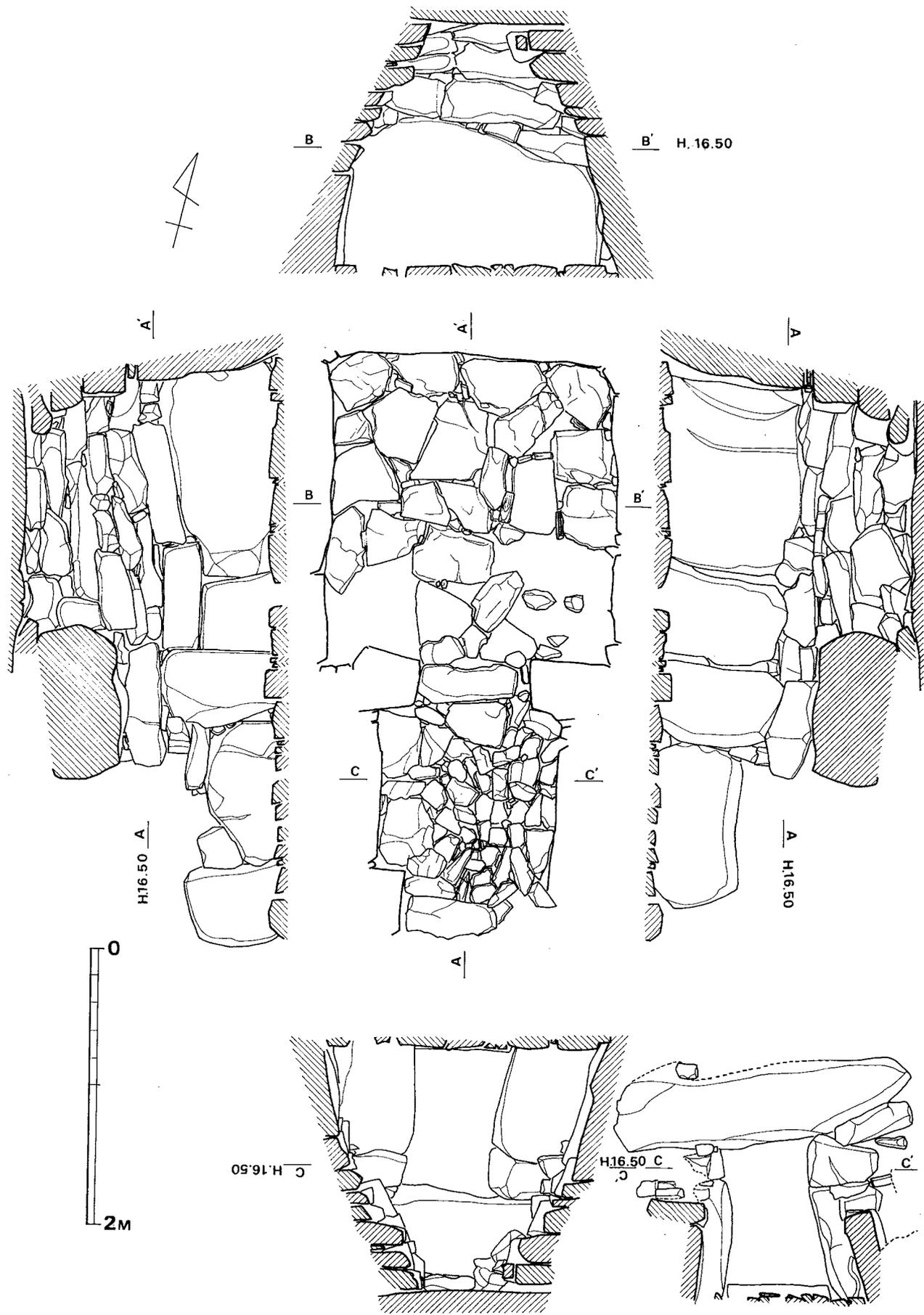


Fig. 127 旭1号墳石室実測図(縮尺 1/40)



Fig. 128 1号墳遺物出土状態(縮尺1/20)

出土遺物 (Fig. 128)

本墳は盗掘を受けており、原位置での遺物は少く、ほとんど破片として攪乱土より検出した。後室入口の仕切り石前面の敷石直上から馬具、前室左壁中央部の敷石直上から鑿と馬具片、前室入口の仕切り石後面の敷石直上から手斧鋏を検出した。鑿および手斧鋏は、袋部を後室の方に向け、ほぼ主軸に平行して置かれていた。他の遺物は、石室内の攪乱土より検出した。攪乱土中より、ガラス小玉、土製小玉、水晶切子玉、勾玉、鉄刀、鉄鏃、鏢、責金具、足金具、鞘口金具、鎌、刀子、轡、鉸具、提瓶、高杯、横盜などを検出した。

装身具 (Fig. 129)

ガラス小玉 (Fig. 129—①~⑯) 18個検出した。淡緑、淡紫、灰緑、紺の4色で、いずれも遺存状態は良好である。

土製小玉 (Fig. 129—⑰~⑳) 5個検出した。いずれも暗茶色で、中に石英粒子を含んでいる。1個は欠損しているが、他の4個は、遺存状態が良好である。

水晶切子玉 (Fig. 129—㉑~㉓) 7個検出した。㉑・㉒は、稜が明確ではなく、㉑・㉒~㉓は、稜が明確で比較的丁寧な仕上げである。㉒~㉓は、細長く、すっきりとした成形である。いずれも遺存状態は良好である。

表11 旭1号墳出土装身具計測表 (番号は挿図番号、単位はmm)

	径	厚さ	孔径	色	材質		径	厚さ	孔径	色	材質
1	2.75	1.55	1.05	淡 緑	ガラス	17	6.50	4.50	1.70	紺	ガラス
2	3.70	3.45	0.80	淡 紫	ガラス	18	6.50	3.60	1.70	紺	ガラス
3	3.80	2.90	1.25	淡 紫	ガラス	19	5.75	4.00	1.50	暗 茶	土 製
4	4.45	2.25	1.35	淡 緑	ガラス	20	6.10	4.40	1.50	暗 茶	土 製
5	4.60	2.70	1.45	淡 紫	ガラス	21				暗 茶	土 製
6	5.00	2.85	1.75	紺	ガラス	22	6.89	4.40	1.35	暗 茶	土 製
7	5.15	3.60	1.85	紺	ガラス	23	6.80	5.20	1.75	暗 茶	土 製
8	5.35	4.75	1.10	灰 緑	ガラス	24	7.40	7.85	{1.90 1.85		水 晶
9	5.60	3.25	1.25	紺	ガラス	25	7.70	11.05	{3.20 1.50		水 晶
10	5.70	3.25	1.45	紺	ガラス	26	11.70	9.80	{3.60 1.00		水 晶
12	5.90	3.75	1.80	紺	ガラス	27	14.20	24.75	{4.00 1.70		水 晶
13	6.00	3.60	2.30	紺	ガラス	28	15.10	29.60	{3.80 1.75		水 晶
14	6.25	3.40	1.50	紺	ガラス	29	15.90	27.60	{3.75 1.40		水 晶
15	6.30	3.40	1.75	紺	ガラス						
16	6.50	3.75	1.00	紺	ガラス	30	16.80	31.20	{4.35 1.80		水 晶

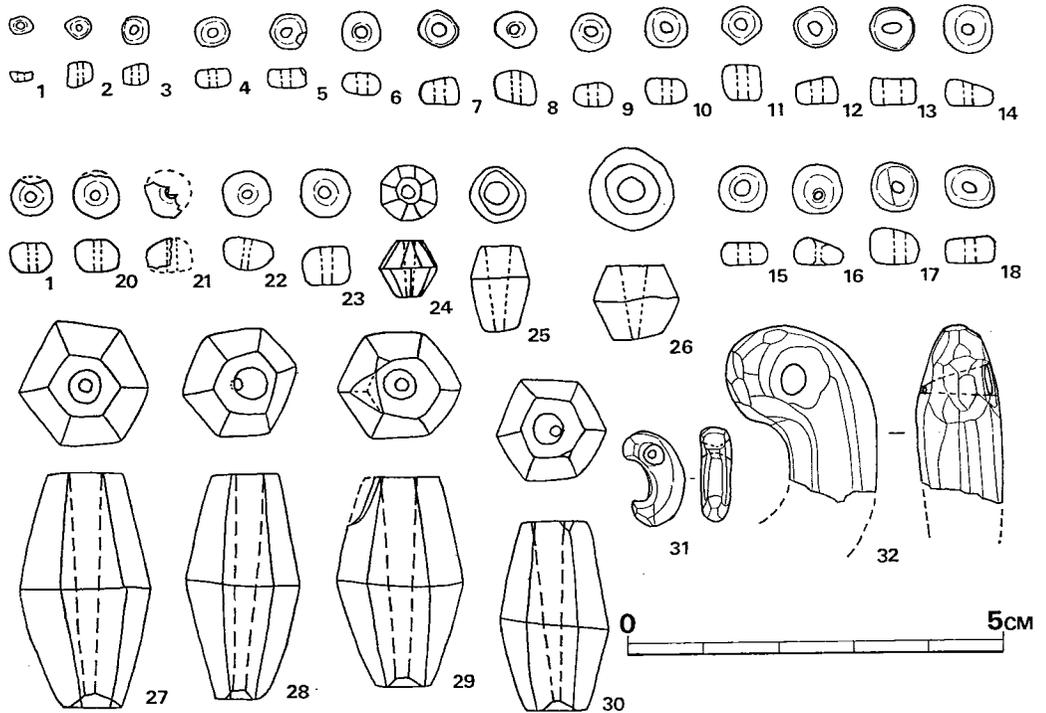


Fig. 129 出土遺物実測図（装身具）（縮尺1/1）

勾玉 (Fig. 129—㉑・㉒) 2個検出した。㉑は、瑪瑙製で尾部を欠失している。厚さ11mmあり、肉厚である。頭部先端は細くなっており、全体的に丸味を帯び、稜は明確でない。孔は両側よりあけている。比較的丁寧な仕上げである。㉒は、翡翠製で小形である。長さ12mm、厚さ4mmあり、頭部は肉厚で、腹部、尾部へと細くなっている。尾部端は、はね上がっている。全体的に丸味を帯び、稜は明確でない。孔は両側よりあけている。比較的丁寧な仕上げである。

武器

鉄刀 (Fig. 130—①～③) 2振分検出した。①は、鋒のみで、平棟、平造で、棟厚4mm、やや細身である。②は、刃身部のみで、刃幅25mm、棟厚8mm、厚身の造りである。③は、茎のみで、目釘孔がある。釘孔径3.5mmである。一部木質が錆着している。

鉄鏃 (Fig. 131—⑬～⑳) 15本分検出した。いずれも破片である。⑬～⑰は、有茎広根平造柳葉式、⑱・⑳は、関無両(片)丸造鑿箭式、⑲は、片丸造腸扶三角形式、㉑、㉒は、腹扶片刃箭式、㉓は、円頭細根斧箭式、㉔～㉘は、関部のみで、形式は不明である。

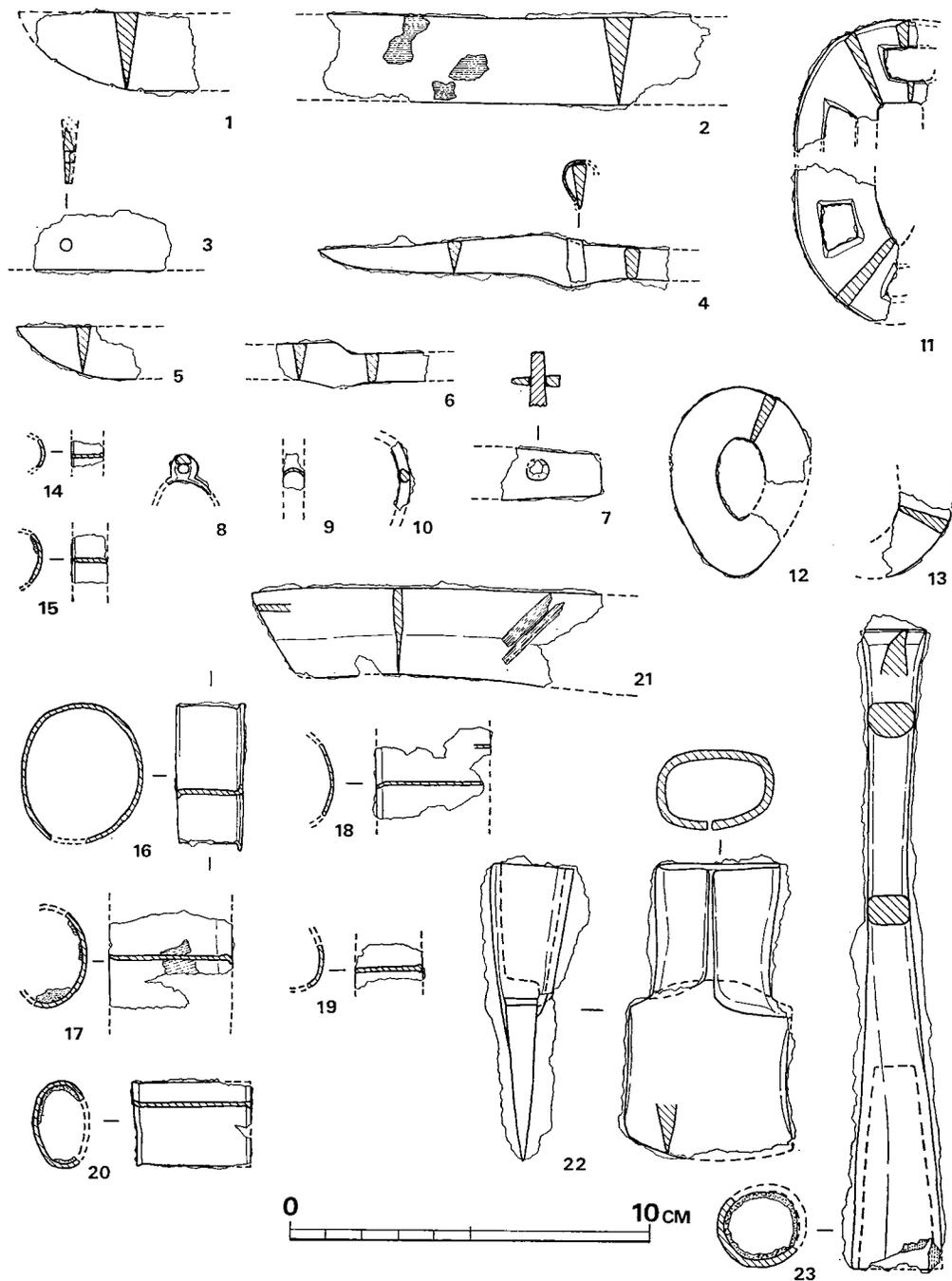


Fig. 130 出土遺物実測図（鉄製品）（縮尺1/2）

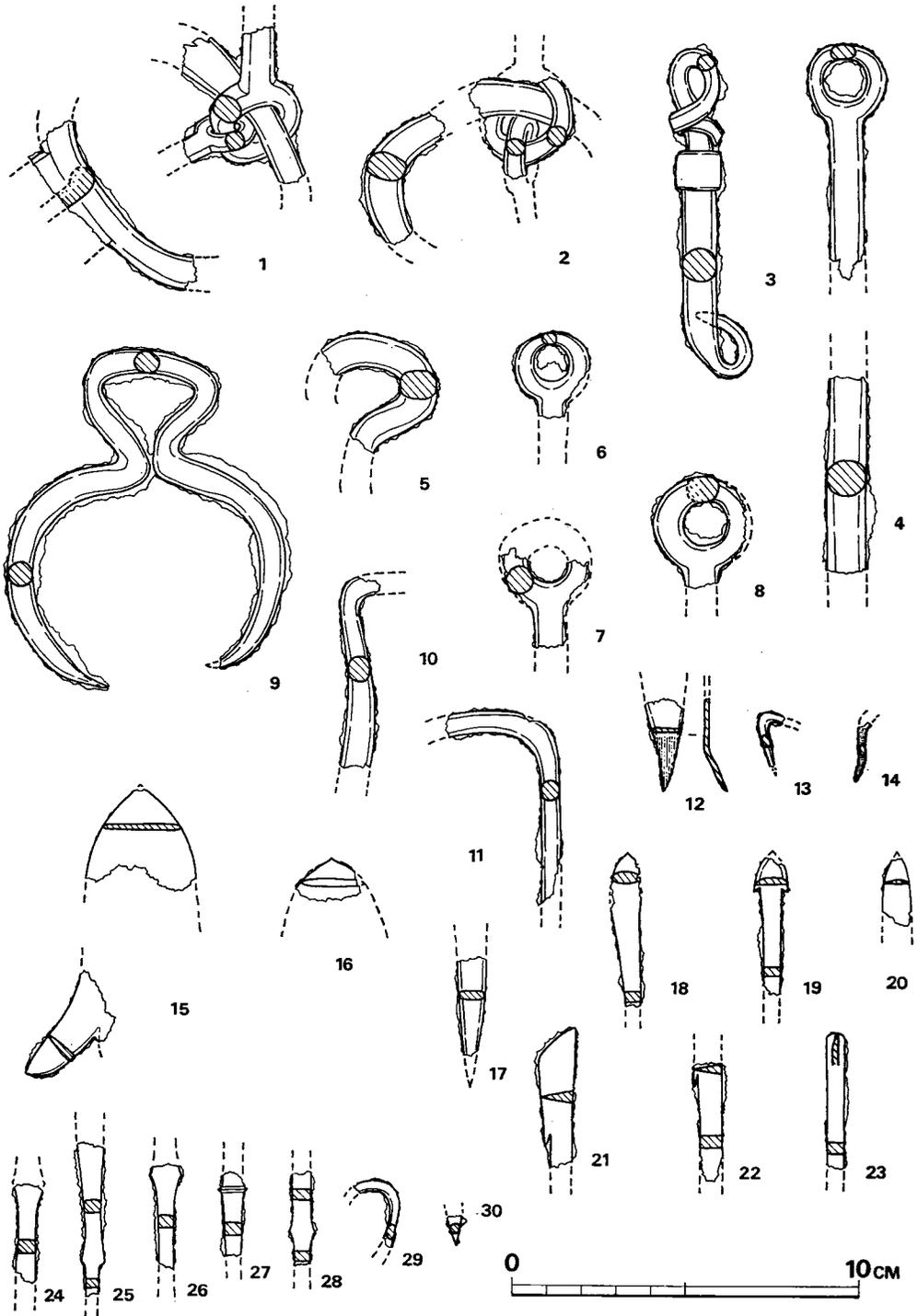


Fig. 131 出土遺物実測図（鉄製品）（縮尺1/2）

鏢 (Fig. 130—⑪~⑬) 3個体分検出した。いずれも卵形である。⑪は、長辺16mm、短辺12mm、縦10mmの扇形の窓で六窓であると思われる。⑫・⑬は、無窓のもので、刀子のものである。⑫は、全長53mm、最大幅38mmである。

責金具 (Fig. 130—⑨・⑩) 2個体分検出した。⑨は、銅に金箔を置くもので、金箔は縁まで置く。幅6.2mmである。⑩は、鉄製のもので、幅4.2mmである。内面に直角方向の木質を鑄着している。

足金具 (Fig. 130—⑧) 1個体分検出した。銅製でかなり腐蝕している。帯執孔径3.9mmである。

鞘口金具 (Fig. 130—⑰~⑳) 4個体分検出した。⑰・⑱は鉄刀、⑲・⑳は刀子のものである。⑰の長さ33mm、⑱の長さ32mm、⑲の長さ19mm、⑳の長さ34mm、幅24mm、内径12mmである。いずれも内面に一部あるいは全面に木質を鑄着し、⑰には外面にも一部木質が鑄着している。

縁金具 (Fig. 130—⑭~⑯) 3個体分検出した。⑭は鉄刀、⑮・⑯は刀子のものである。⑭の長さ9mm、⑮の長さ10mm、⑯の長さ19mm、幅49mm、内径30mmである。いずれも内面に一部木質を鑄着している。

農 具

鎌 (Fig. 130—㉑) 1個体分検出した。直線刃の鎌である。細身の造りである。稲藁が2本鑄着している。刃幅は2cmである。

工 具

手斧鋏 (Fig. 130—㉒) 1個体検出した。全長8.2cm、最大幅4.7cm、刃部長さ5cmの有肩式である。袋部幅3.2cm、高さ2.3cmの楕円形に近い隅丸方形である。刃部は使用による摩滅が認められる。重さ135gである。

鑿 (Fig. 130—㉓) 1個体検出した。平鑿で、全長17.9cm、身長12.3cm、刃幅1.7cmである。袋部には柄が付いていたものと思われ、木質が鑄着している。全体に少し捻っている。重さ146gである。

刀 子 (Fig. 130—④~⑦) 3個体分検出した。④は、茎を一部欠失しており、現存長14.8cm、刃部長6.4cm、棟幅4mmの平造である。縁金具を片側のみ残している。茎に一部木質が鑄着している。⑤は、鋒のみで、棟幅4mmの平造である。⑥は、関部のみで、棟幅4mmである。茎に一部木質が鑄着している。⑦は、茎の一部のみで、目釘が付いたままである。目釘の長さ15mm、径5mmと4mmで、5mmの方に3本の刻みがある。全体に薄く木質が鑄着している。

馬 具

轡 (Fig. 131—①~⑧) いずれも小破片のみであるが、1具以上あるものと思われる。①・②は、素環の鏡板に銜・引手が鑄着したものである。鏡板には幅3.2cmの立間が付く。③は、全長9.5cmの銜である。銜先の輪部は棒部を曲げ、巻きつけている。④は、引手である。⑤は、

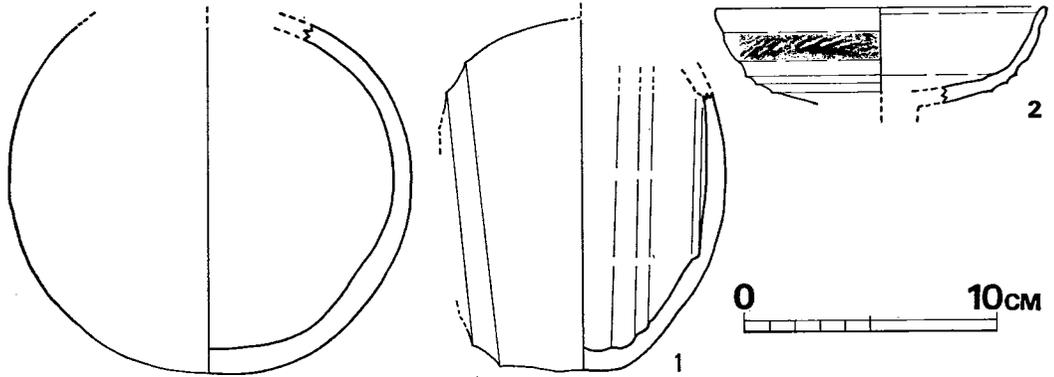


Fig. 132 出土遺物実測図(須恵器)(縮尺1/3)

引手か。輪部を少し捻っている。⑥は、銜の輪である。⑦・⑧は、引手の輪部である。

鉸 具 (Fig. 131—⑩・⑪) 2 個体分検出したが、いずれも小破片のみである。

用途不明鉄器 (Fig. 131—⑨・⑫~⑭・⑲・⑳) ⑨は、両端を尖らせた棒を曲げて造ったもので、立間のようなものを造っている。馬具の一種であろう。⑫は、先端を尖らせており、長軸方向に平行して木質が鑄着している。馬具の一種であろう。⑬・⑭は、先端を尖らせており、木質が長軸に対し直角方向に鑄着している。釘のようなものか。⑲は、貴金具か。⑳は、鉄鋌の先か。木質は鑄着していない。

須恵器 (Fig. 132)

提 瓶 (Fig. 132—①) 小型のものである。口縁部と胴部の一部を欠損する。胴部復原径約 16cm、幅約 11.5cm である。肩部には平行状の細かいカキ目、背面にはへら削り、内面にはナデを施し、比較的丁寧な仕上げをしている。色調は、暗灰色で、一部灰を被り、黒くなっている。胎土は小砂粒を含み、焼成はやや良好である。

高 杯 (Fig. 132—②) 口縁の一部を残すのみで、無蓋高杯である。復原口径約 13cm である。色調は、灰を被っているため黒灰色である。胎土は小砂粒を含み、焼成は良好である。

横 壺 胴部の一部を残すのみである。外面に叩き目、内面には同心円叩き目を施している。色調は、青灰色で、胎土は砂粒を含み、焼成はやや良好である。

出土遺物により、本墳の築造時期は、6 世紀後半であると思われる。(宇野)

3. 旭 2 号 墳

墳 丘

本墳は北から南に向かって傾斜する標高23m~20m位の丘陵斜面に構築されている。周囲は樹木のまじる竹やぶである。羨道・墓道はすでにブルドーザーで破壊され、高さ約3mの柱状の土塊の中に前室・後室が残っている状態であった。そのため墳丘裾部は全く残っておらず、土取りされた後の地形から判断すると後室直上付近の墳丘が一番高く標高約23m、土取りされた後の残存部分の標高が20m~21mであった。後者の測点は墳丘裾部外であり、本墳の見かけの高さは最も落差のある墓道側でせいぜい2m~2.5m程であったろうと推測する。また、最も落差の少ない北東側部分（後室奥壁側）で0.5m~1m弱程と思われる。

石室掘り方の平面プランや墳丘断面の調査は墳丘の残存状態から考えて非常に危険であったため、石室掘り方は前室入口部での横断面による調査ですまし、墳丘については残存土塊の断面を調べるにとどめた。その結果、残存土塊の断面に旧表土層と思われる黒色バンドの層を認定できなかった。よって、本墳は恐らく旧表土が残らない程に旧地形を改変し、石室の掘り方を穿ち、石室を構築して盛り土をしたと思われる。盛り土は旧地形改変時の土砂を用いたものであるが、残存土塊全面にわたっては明確な層序を認めることはできなかった。

石 室 (Fig.133)

本墳の内部構造は主軸を N-42°-E におき、南西に開口する現存長約4mの複室構造の横穴式石室である。すでにブルドーザーで破壊されて羨道・墓道は失っているが、前室・後室は共に天井石まで完存している。石室は周囲の土層観察によれば、旧地形改変後に深い坑を穿ち、天井石が石室掘り方上端から上へあまり出ないように構築されていると推察される。

前室入口部での石室掘り方断面図によれば、前室入口では袖石を据えた後に約30cm程の厚さの赤褐色土を石室掘り方に搬入し、更に約60cmの厚さで土砂を搬入し、前室袖石に扉石を架構した後に明赤褐色砂質土を入れている。この石室掘り方断面図で示されるように石室構築の作業過程の節となる段階で赤褐色土を使っているようである。すなわち、赤褐色土は黄褐色土系の土砂と異ってかなり意識して使用したのではないだろうかと思われる。次に目張りとして天井部分には主として赤褐色強粘質土を用い、側壁では主として青灰色粘質土を用いているようであり、石室内への水や土砂の流入を防いでいる。石室掘り方床面は後室から前室に向かって緩かに傾斜しており、敷石を安定させ更に水平・平坦に保つために土砂が搬入されている。この土砂は花崗岩バイラン土で厚さは5cm前後である。その範囲は前室全面と後室の入り口側付近の部分である。

後室は主軸長1.8m、幅1.7mで略正方形の平面プランを示す。床面には20cm前後の大きさの

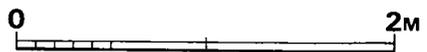
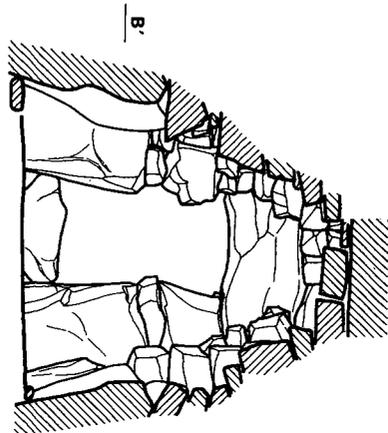
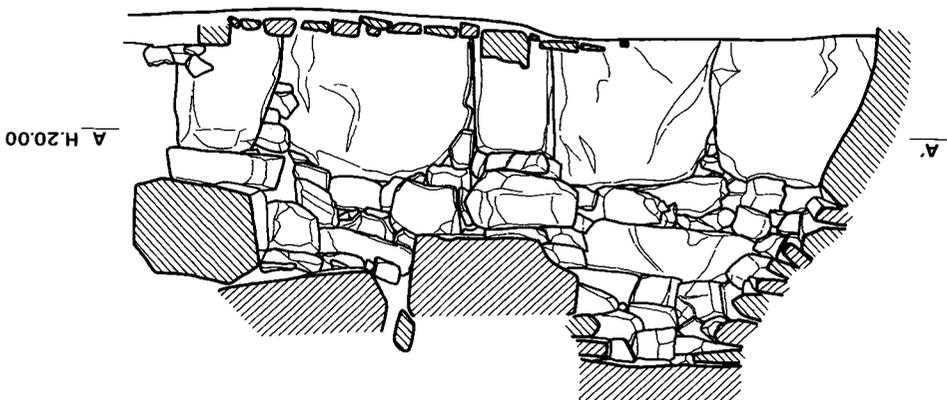
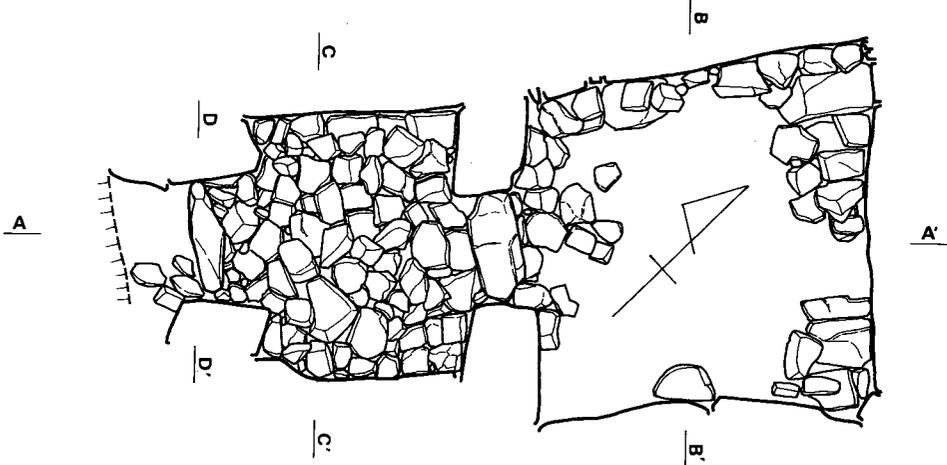
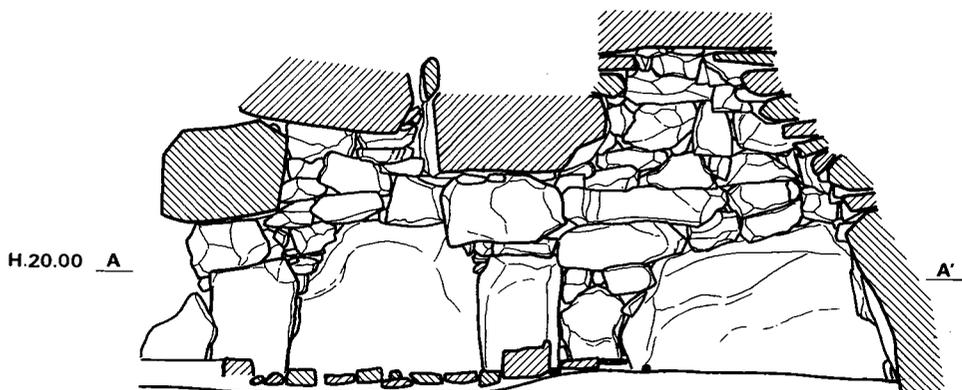
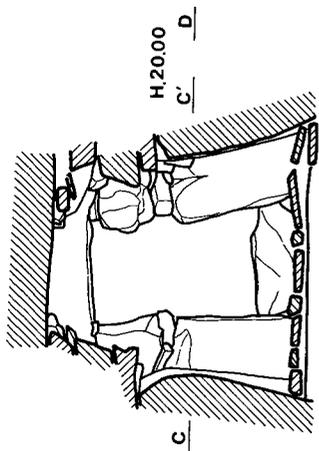
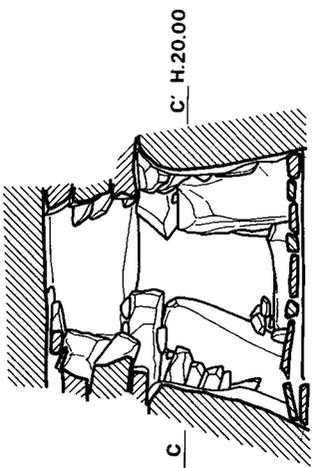
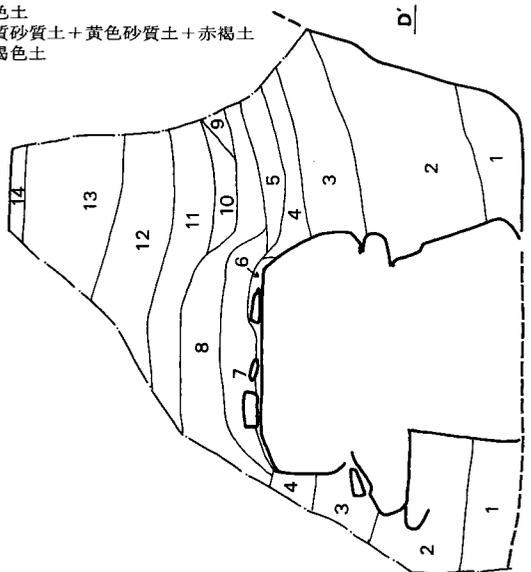
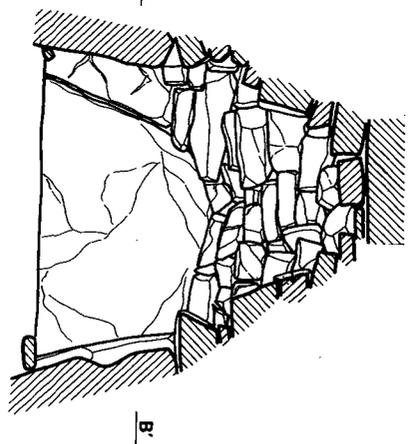


Fig. 133 旭2号墳石室実測図(縮尺1/40)

1. 赤褐色砂質土
2. 暗赤褐色砂質土
3. 明赤褐色砂質土
4. 黄色砂質土+赤褐色土
5. 明赤褐色弱粘質砂質土+黄色土
6. 明赤色粘質土
7. 黄色砂質土+赤褐色土
8. 明赤褐色弱粘質砂質土
9. 明赤褐砂質土
10. 赤褐色土+黄色土
11. 明赤褐色弱粘質砂質土+黄色砂質土+赤褐色土
12. 赤褐色土+黄褐色土
13. 赤褐色粘質土
14. 表土



B H.20.00



敷石が敷かれていたが、現在その殆どは盗掘された折に移動している。原位置をかるうじて保っているのは奥壁および左側壁に沿った部分と後室入口部仕切石付近だけである。敷石は若干の重り合う部分を除くと一重であり、追葬行為時の再度の敷石設定という重層構造は見られない。敷石の設置に先立って、腰石の合わせ目や腰石と袖石との隅部に根固め石が用いられており、この石は敷石の2～3倍程の大きさの石が使われている。

奥壁は中央に大石を立て、左側隙間部を縦長の石で補っている。この大石の上に8段の扁平な石を積んで天井石を架構している。しかし、部分的にはやや大きめの石を用いたりして石積みに変化を持たせているが、その反面において積み石相互の間に空隙が生じ、主として青灰色粘質土を充てて水や土砂の流入を防ぐ努力をしている。奥壁のせり出しはかなり急で傾斜はほぼ60度である。右壁はほぼ同大の石を2石用いて腰石となし、その上に7段の石を積み重ねて天井石に達する。左壁は奥壁側の腰石に大石を使用しているが、右壁と同様に7段に石を積んで天井石に達する。両壁とも傾斜角度は70度前後である。右壁は3段目に比較的大きな石を使用し他は30cm～40cmの小石で構築しているが、左壁は右壁に比べて使用石材は大き目である。後室の石室掘り方床面と天井石とのレベル差は1.7mであるが、敷石が敷かれた本来の石室床面とのレベル差は1.6m程度であったろうと思われる。

後室入口は左右両袖とも70cm程の高さの石の上にほぼ同大の石を横に乗せ、天井石を架構している。空隙には扁平な石をつめて積み石の安定をはかっている。尚、前壁もかなりせり出しており、その傾斜角度は奥壁同様約60度である。後室天井石は周壁のせり出しが急なためにわずかしか面を出さず、後室はドーム状を呈している。後室入口は幅40cm前後、高さ80cm程であり腰をかがめてやっと通れる広さである。

前室は長さ約1.2m、幅約1.4mでやや横長の平面プランである。全面に敷石があり、盗掘等による敷石の移動はない。敷石の大きさは後室のそれと同大で20cm前後の河原石を敷いている。前室は地山面のレベルが後室より10cm前後低くなっており、花崗岩パイラン土を敷石下につめてはいるが敷石上面のレベルは後室のそれより5cm～10cm低くなっている。側壁は両壁とも腰石は1石であり、腰石の上に3～4段に石積みして天井石に到る。この天井石は前室入口部に架構された榎石の上に乗っているが、後室入口袖石上に架構された石との間には空間を生じている。空間部には扁平割石と粘質土をつめている。前室入口は高さ70cm程の石を左右に立てた上に扁平な割石を横積みにして袖をつくり、榎石を架構している。入口の幅は30cm～40cm、高さ70cm前後であり腹ばいでしか通れない。尚、各々の入口には断面四角形の石が仕切り石として置かれている。

羨道は破壊されている。破壊したブルドーザーの運転手の話によれば左右両壁とも腰石は3石づつ使っていたとの事であり、長さは1.5m～2m程度であったようである。移動せられた石材を見ても、そのことは首肯しうる。墓道については破壊が行き届いており知る由もない。

旭2号墳の石材の多くは堆積岩であり、軟質の砂岩の場合重さに耐えきれずに割れている。総じて石材は不良である。(児玉)

出土遺物

後室は床面が荒らされていたので副葬品の残存状態は非常に悪かった。原位置を保つと考えられるのは仕切り石に並行して敷石直上に検出した鉄刀だけであり、床面から浮いた状態でガラス玉5個、歯1個を検出した。前室は副葬品の残りはよく須恵器2個、鉄鏃多数、鉄鎌1個を検出した。原位置を動いたものはほとんどなかった。羨道が破壊された時に、甕・壺・平瓶等が出土している。(児玉)

装身具 (Fig. 134)

ガラス玉 5個検出した。1個は白化しており、色彩は不明であるが、他の4個は全て紺色である。①～④までは、管状のものを切断したものと思われる。5は、孔径が2.9mmと2.1mmで、両端より穿けている。

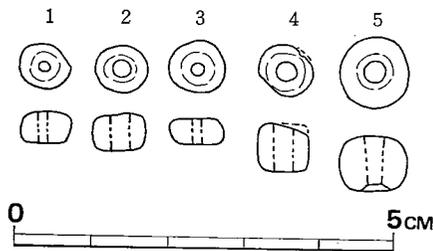


Fig. 134 出土遺物実測図 (装身具) (縮尺1/1)

第12表 旭2号墳出土装身具計測表

	径	厚さ	孔径	色	材質
1	6.65	4.55	1.20	紺	ガラス
2	6.85	4.90	2.90	紺	ガラス
3	7.35	3.75	1.75	紺	ガラス
4	7.35	6.10	2.65	紺	ガラス
5	9.75	7.20	2.9, 2.1	紺?	ガラス

(番号挿図番号、単位はmm)

武器 (Fig. 135)

鉄刀 いずれも小片になっており、詳細は不明である。

足金具 (Fig. 135-㉒) 鉄製のもので、帯執の径10mm、厚さ3mm、孔径3mmを測る。

鞘口金具 (Fig. 135-㉔) 大半を欠失しており、細部は不期である。内面に、一部木質を錆着している。厚手の造りである。

鉄鏃 (Fig. 135-①～㉑) 31個体分検出した。24本以上はあるものと推定される。①～⑦は、関無片丸造鑿箭式。⑧～⑪・⑬・⑮は、両丸造鑿箭式。12は、両関片丸造鑿箭式。⑭は、両関片丸造鑿箭式、⑯は、平造腸挟片刃箭式。⑰は、片関平造片刃箭式。8～21は、円頭広根斧箭式。㉒は、方頭細根斧箭式に属する。㉓～㉔は、鑿箭式、㉕・㉖は、平造片刃箭式に属するものと推定される。

農具 (Fig. 135)

鎌 (Fig. 135-㉓) 1個体分検出したが、大半を欠失しており、細部は不明である。最大身幅2.7cmを測る曲刃鎌と思われる。背が極めて薄くなっており、かなり長い間使用したための研

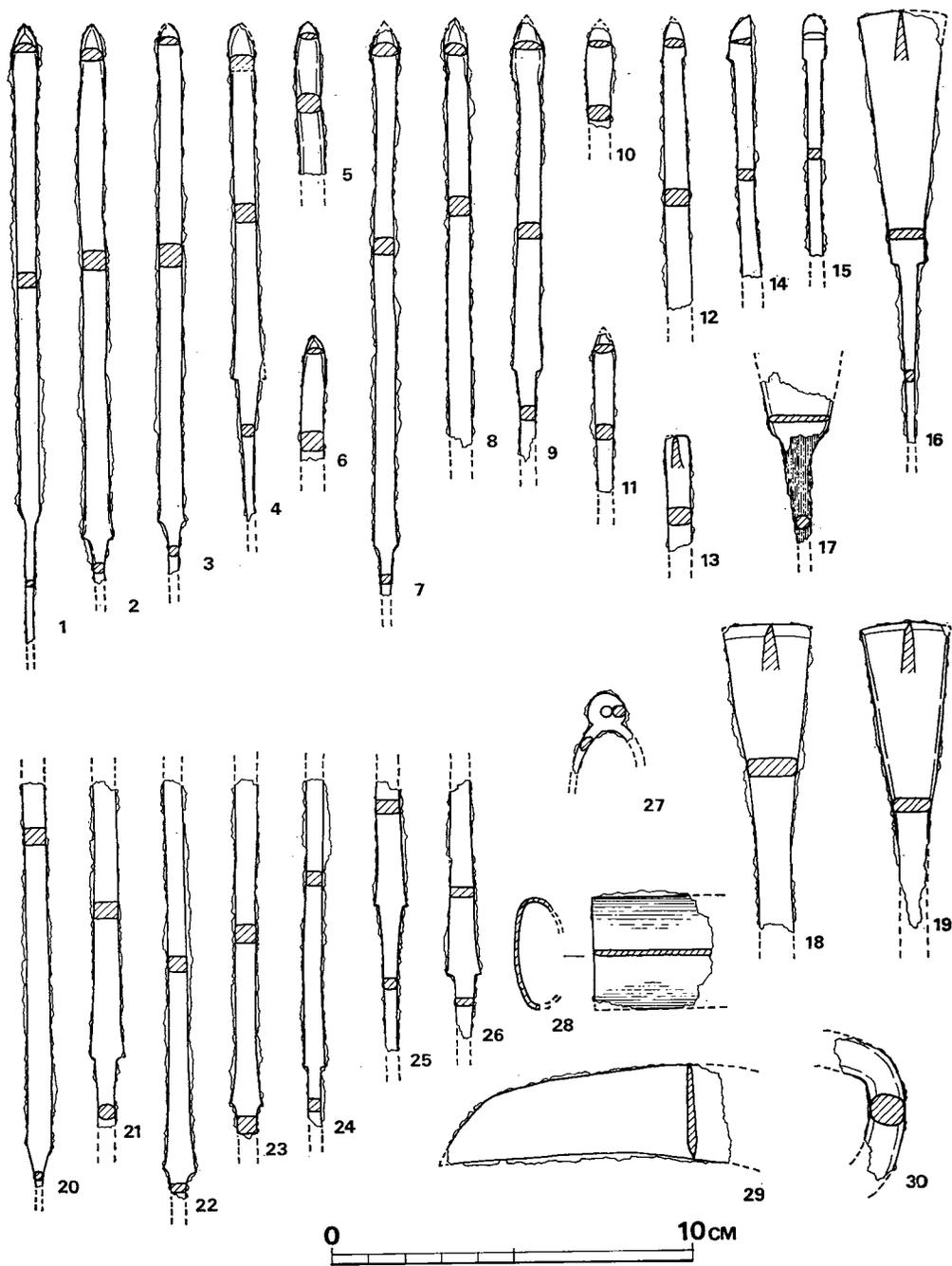


Fig. 135 出土遺物実測図 (鉄器) (縮尺1/2)

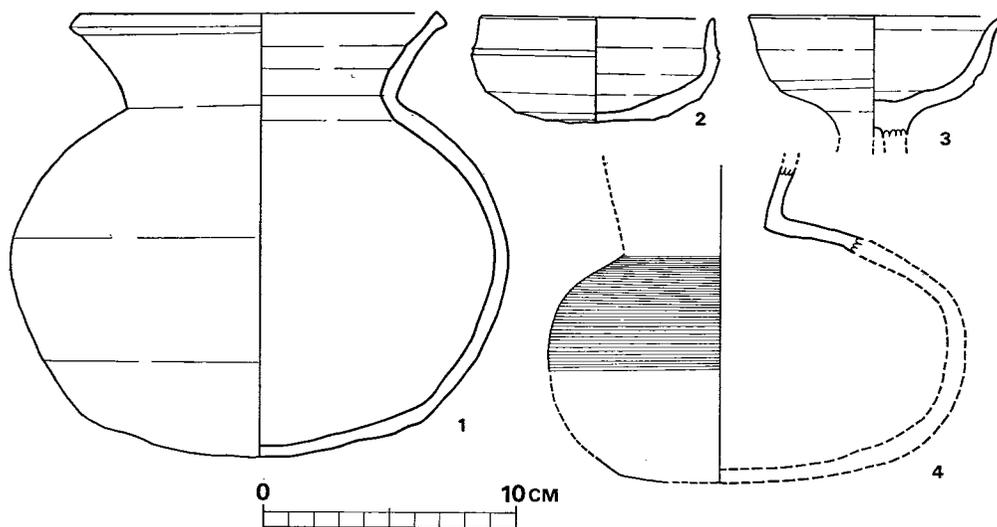


Fig. 136 出土遺物実測図（須恵器）（縮尺1/3）

ぎ減りであると思われる。

馬 具 (Fig. 135)

轡 (Fig. 135-㉕) 小破片のみを検出した。引手の一部か。(宇野)

須恵器 (Fig. 136-①~④)

前室床面から埴状の土器、高杯各1点が出土し、ブルドーザーで破壊された時に甕3个体分の破片、壺1、平瓶1、杯蓋片が出土した。

埴 (Fig. 136-②) 何かの蓋かとも考えたが、一応埴とした。口径は短径8.9cm、長径9.5cmでややゆがんでおり、平均値は9.2cmである。器高は4.3cmである。口縁部は直立気味でやや外彎し、ややくびれて体部に接続する。その部分に幅約2mmの凹線がめぐる。体部は厚手であるが底部は薄くつくられている。底部外面はヘラ削りされ、同内面はナデ、他の部分はヨコナデによる調整を行っている。胎部に砂粒を大量に含み、焼成良好で硬質である。色調は内面は黒灰色で、外面は暗青灰色を呈する。前室床面に密着して出土した。

高杯 (Fig. 136-③) 口径10cm、現器高4.8cmを測り、脚部を欠損している。脚部は小型で低いものだと推定される。口縁部は外反し、体部に幅3mmの凹線がめぐる。胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好で硬質である。外面は灰色で部分的に黒灰色、内面は黒灰色を呈し、灰をかぶっている。内底面はナデ、他はヨコナデによる調整を行っている。前室床面に密着して出土した。

壺 (Fig. 136-①) 口径13.8cm、器高17.9cm、胴部最大径19.5cmを測る完形品である。体部は略球形を呈し、口縁部はやや外反する。底部は凹凸が著しくつくりが荒い。胎土に多量の

砂粒を含み、焼成良好で硬質である。全体に暗灰色～黒灰色を呈するが火まわりの悪い底部は褐色をおびる。体部下半部は不定方向のヘラケズリ、底部内外面はナデ、他はヨコナデによる調整を行っている。羨道部を破壊した時に出土した由である。

平 瓶 (Fig. 136—④) 全体の約 $\frac{1}{4}$ を残す破片である。体部はカキ目が施されており、内面はヨコナデされている。胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好で硬質である。全体に黒灰色に近い色だが、内面と底部付近は褐色をおびている。羨道部を破壊された時に出土した由である。

他に杯蓋片が出土している。返りのあるものである。いわゆるIV型式の新しい時期のものである。破壊された時に出土した由である。

出土遺物より、本墳の構築された時期は、早くても6世紀末、おそらく7世紀代であろうと思われる。(児玉)

版 图



高木遺跡全景航空写真(東から)



高木遺跡全景航空写真（北から）



高木遺跡周辺遠景航空写真(南から) ↑ 矢印の部分 向山遺跡



高木遺跡遠景航空写真(東から)



高木遺跡全区航空写真(南から)



高木遺跡 A 区全景



高木遺跡 B・C 区全景



高木遺跡D区全景(東から)



高木遺跡C区全景



高木遺跡 C 区全景 (東から)



高木遺跡 Y-1 号住居跡全景 (東から)



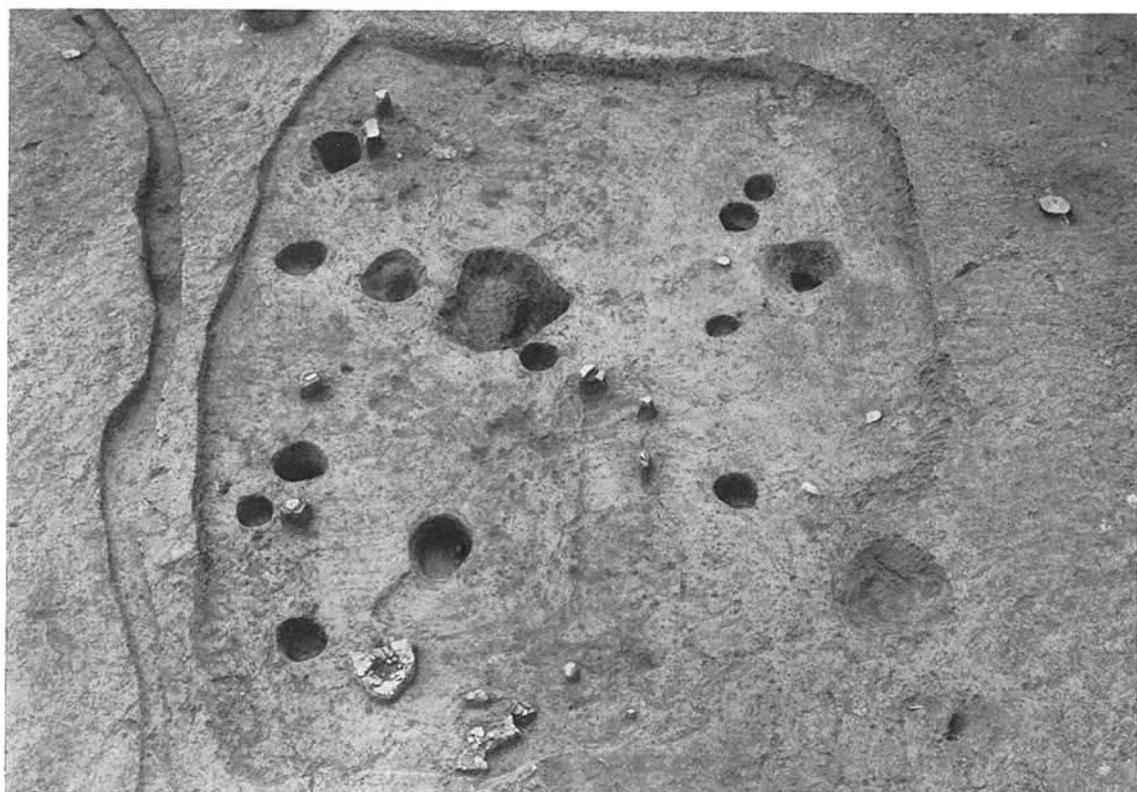
Y-1 号住居跡遺物出土状態



Y-1 号住居跡遺物出土状態



高木遺跡 D 区 (東から)



高木遺跡 Y-2 号住居跡 (北から)



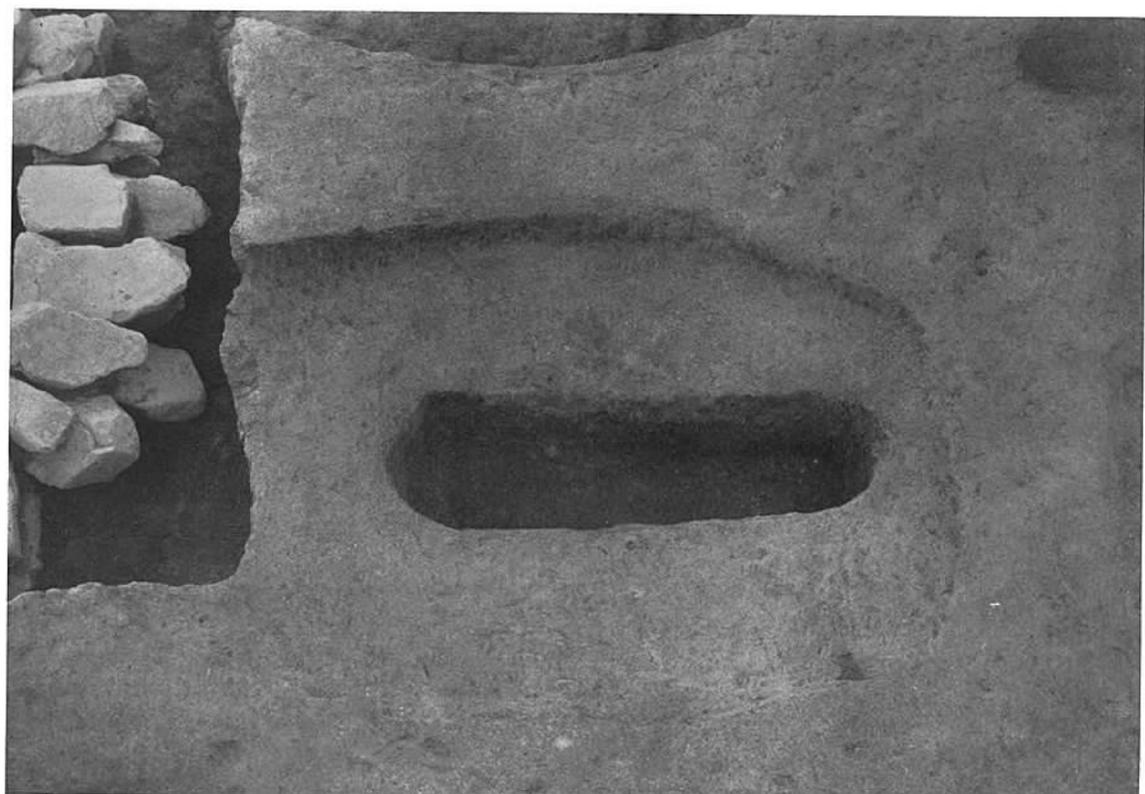
高木遺跡 B-Ⅱ 区出土弥生時代墓地全景(北から)



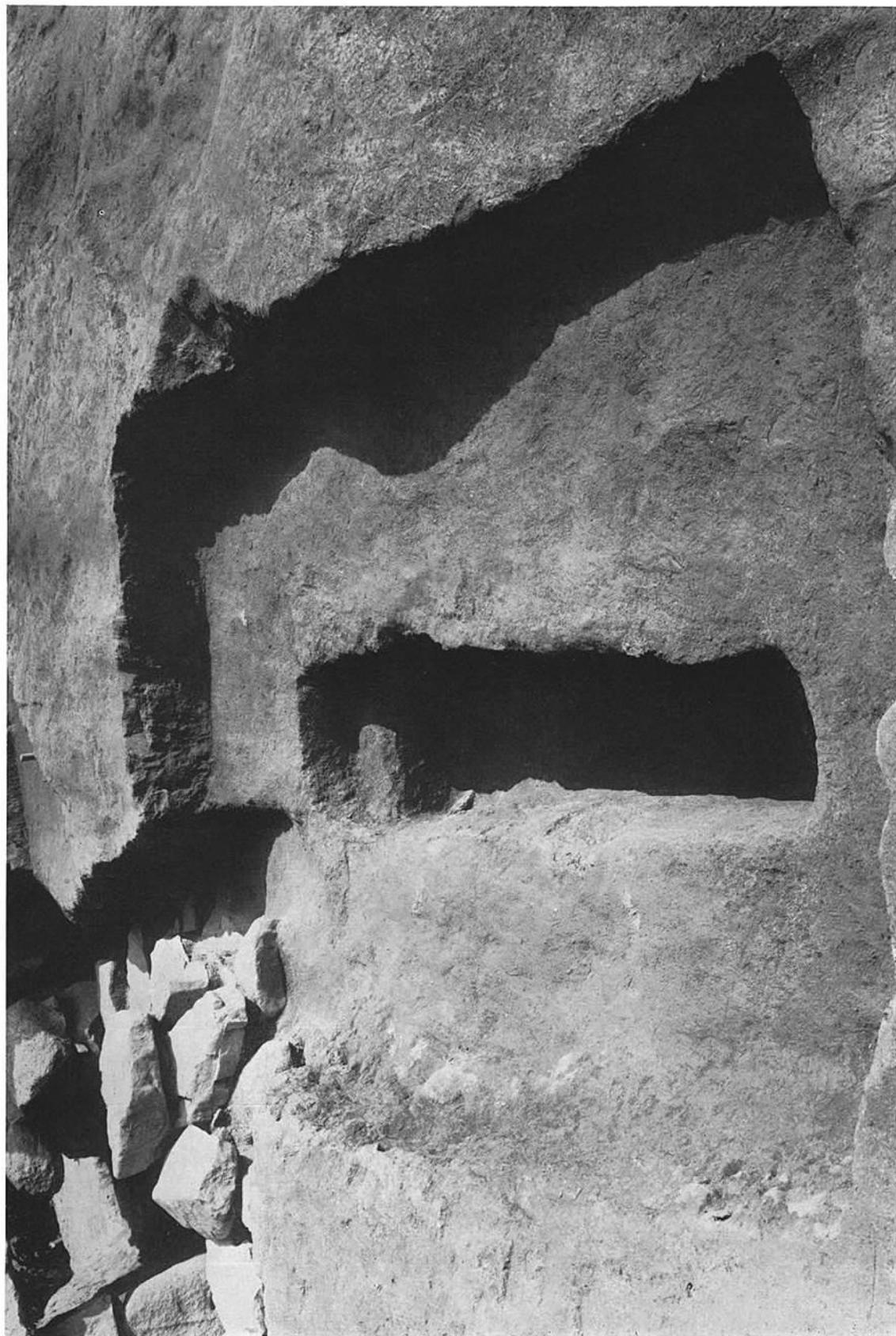
D-1号・D-2号土塚墓出土状態(東から)



D-1号土塚墓(北から)



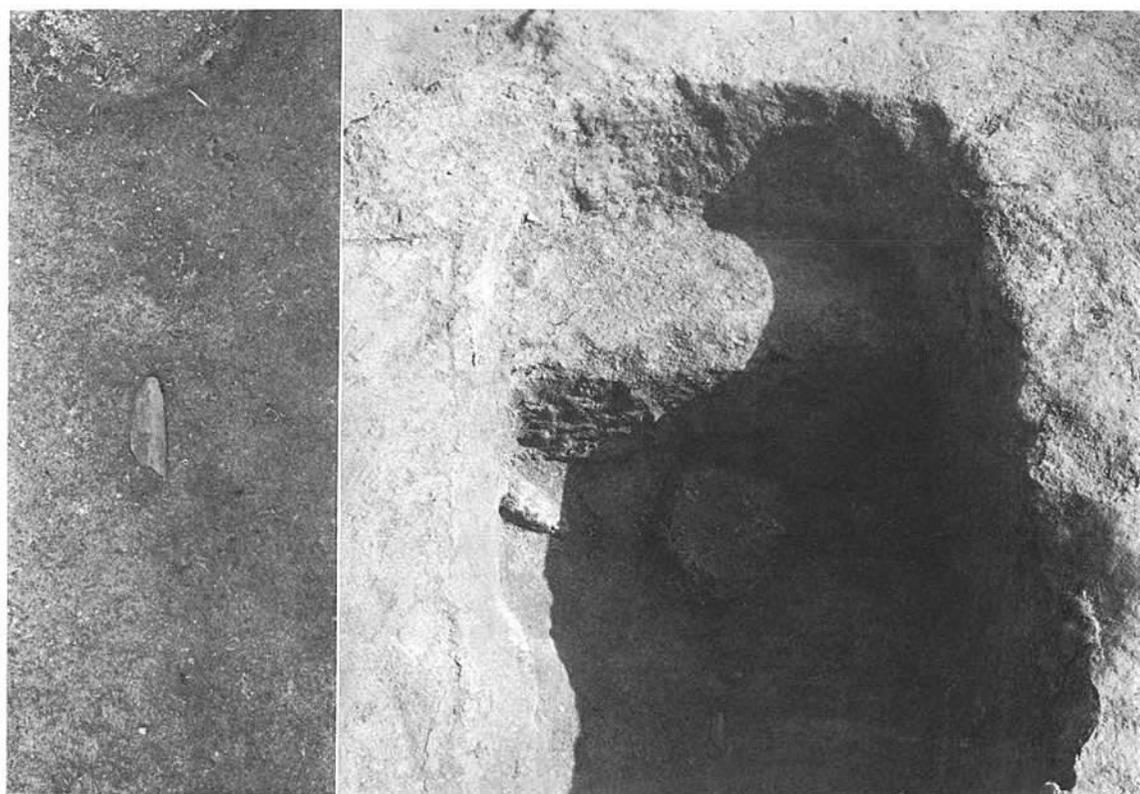
D-1号土塚墓(発掘後)



D-2号土坑墓(西から)



D — 2 号 土 塚 墓 (棺上面粘土状態)



副 葬 品 (磨 製 石 鏡) 出 土 状 態



D-3 号土塚墓 (西から)



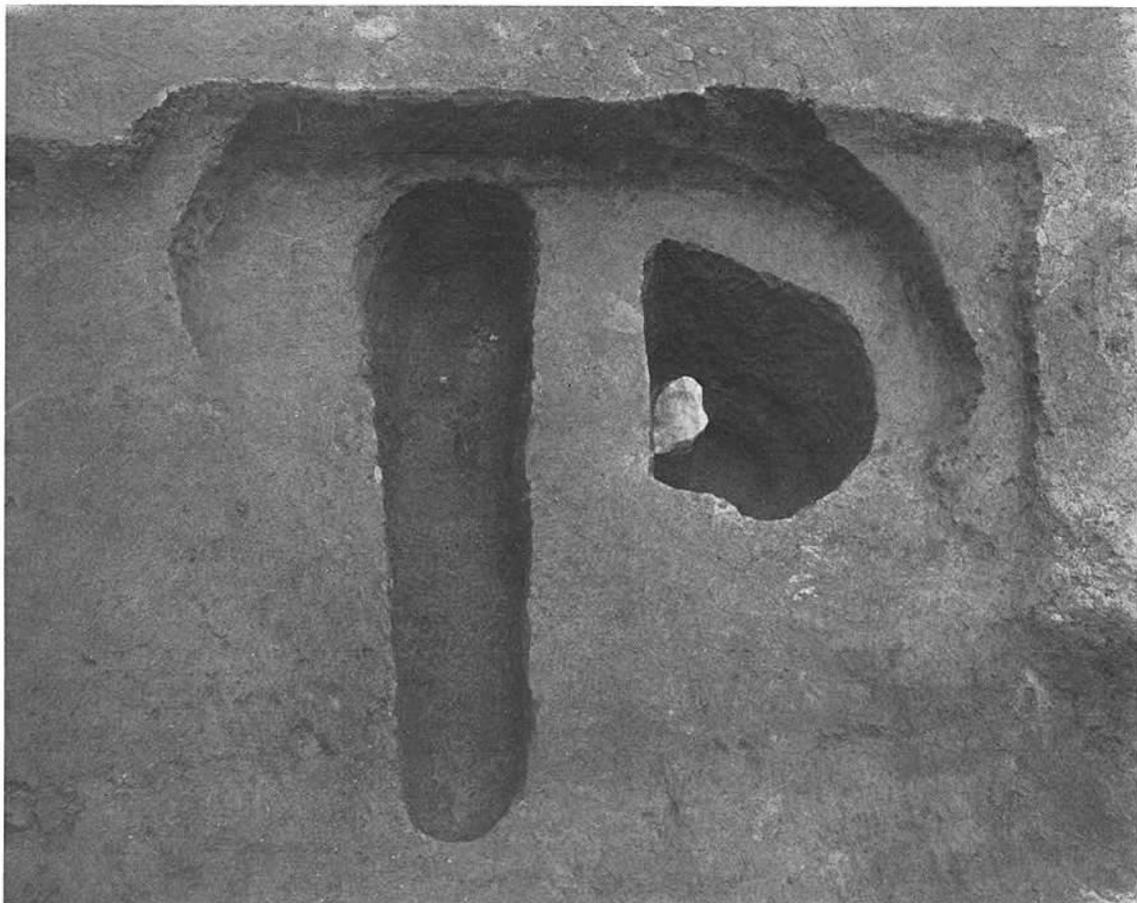
D-4 号土塚墓 (西から)



▲ D-5号土塚墓(東から)



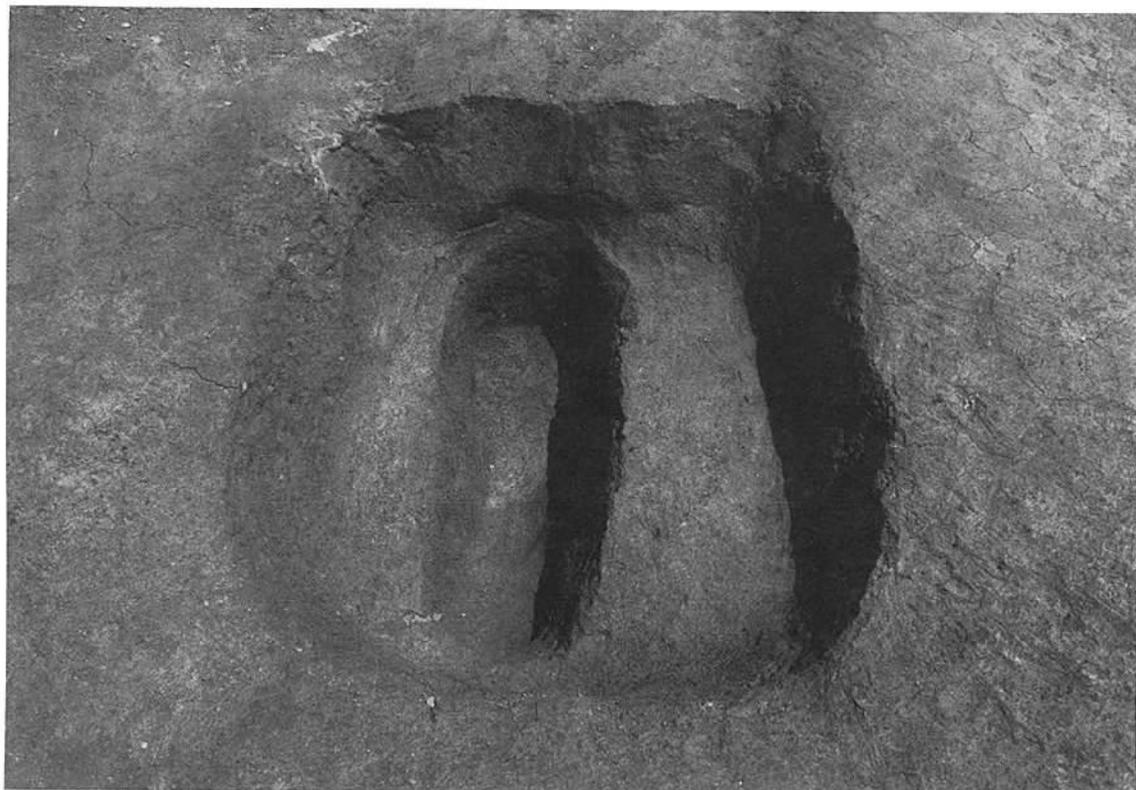
◀ D-6号土塚墓(東から)



D-7号土坑墓(西から)



D-7号土坑墓(玉類出土状態)(上から)



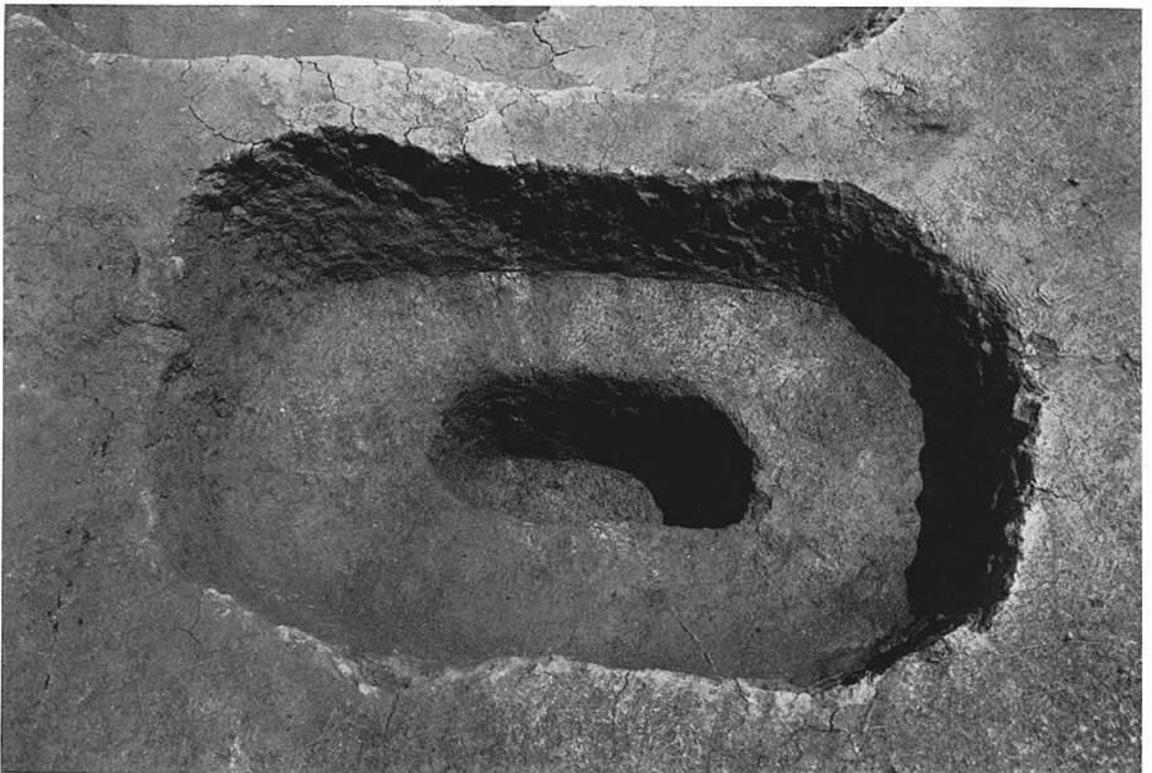
D - 8 号 土 塚 墓 (西から)



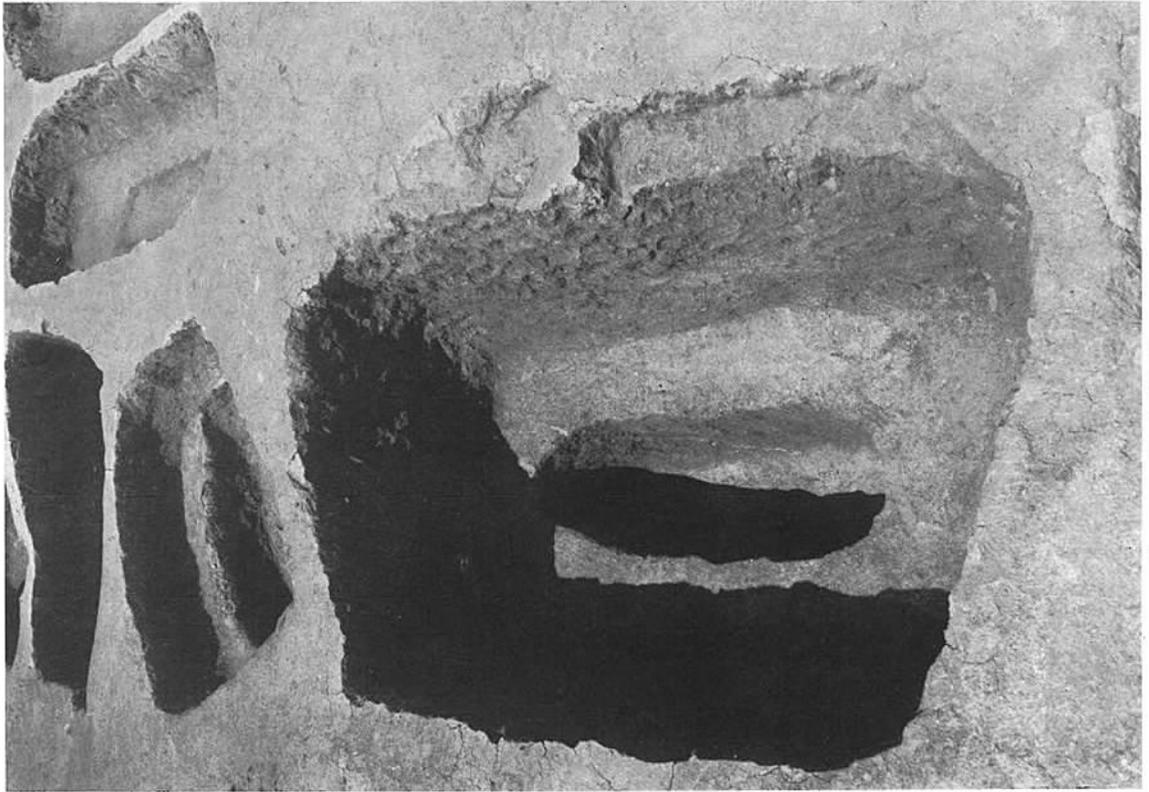
D - 9 号 土 塚 墓 (東から)



D - 10 号 土 塚 墓 (西から)



D - 11 号 土 塚 墓 (西から)



D-12号土坑墓(東から)



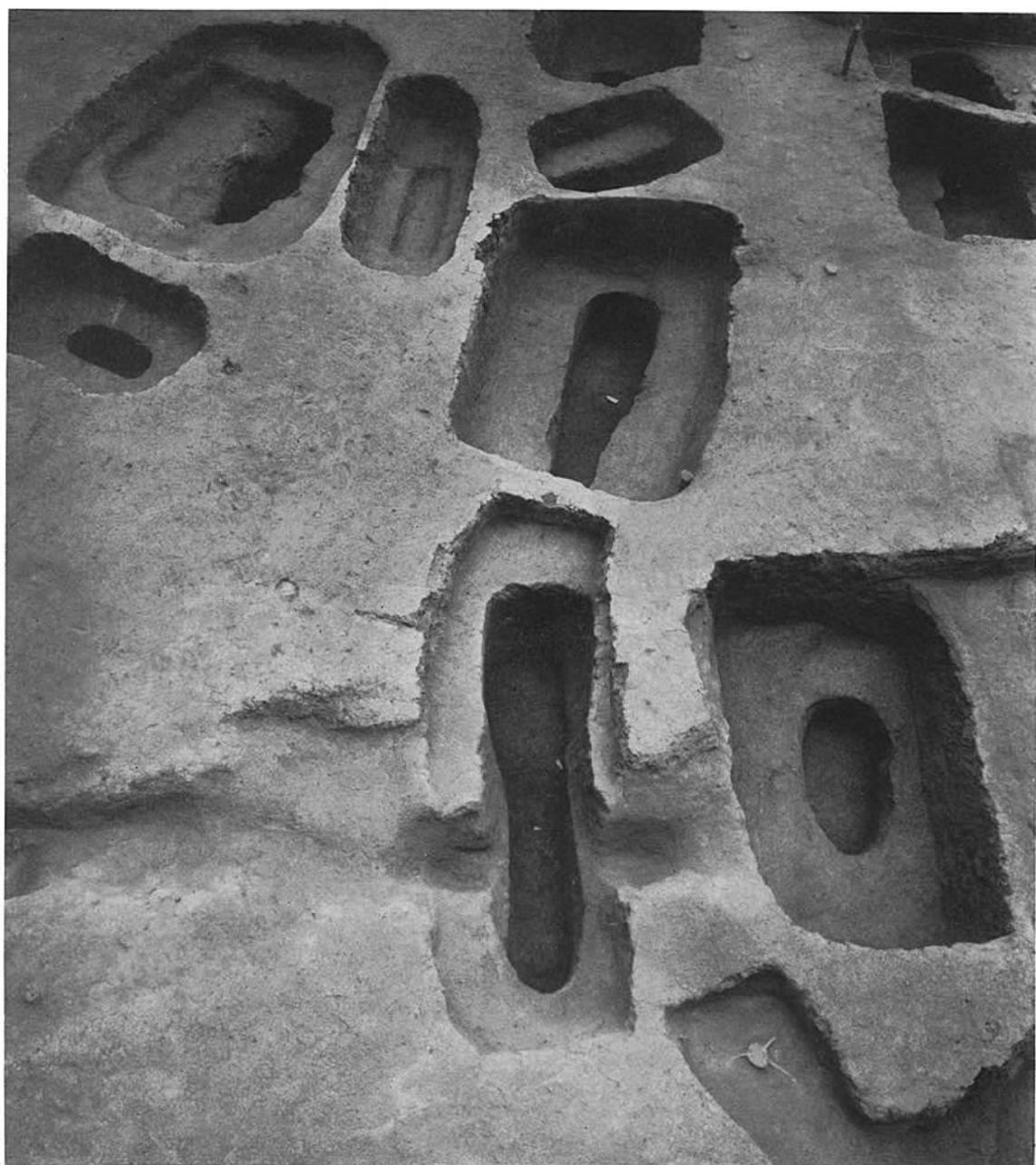
D-13号土坑墓(東から)



D-14号土坑墓(南から)



人骨出土状態



D-14・D-15・D-16号土塚墓遺物出土状態（東から）



D - 15 号 土 塚 墓 (南から)



石 剣 出 土 状 態 (北から)



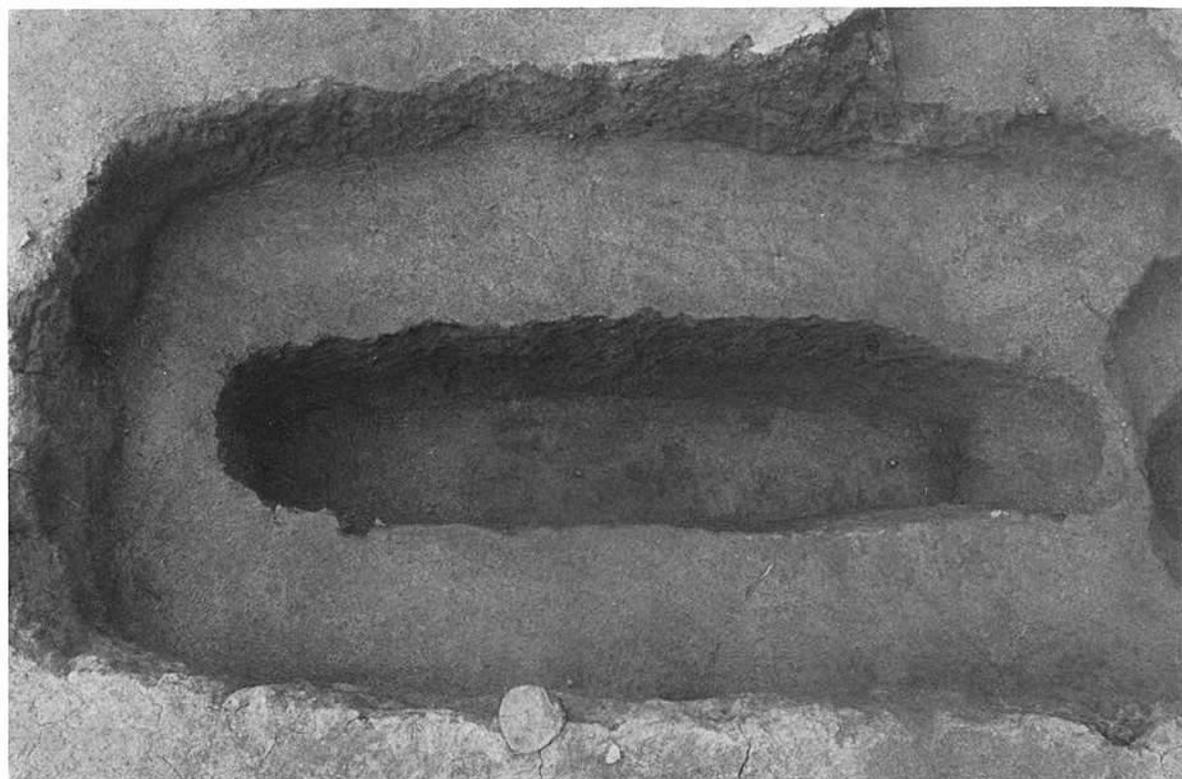
D-16号土坑墓(北から)



磨製石鏃出土状態(北から)



D - 17 号 土 塚 墓 (西から)



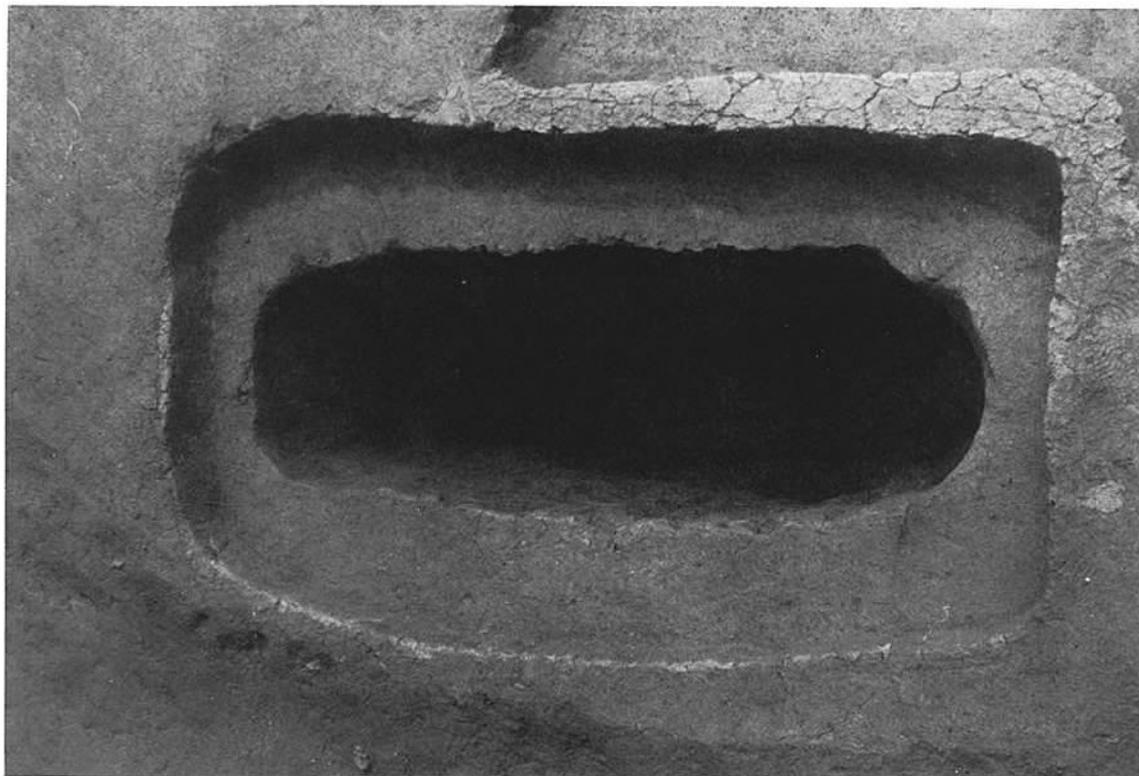
D - 18 号 土 塚 墓 (東から)



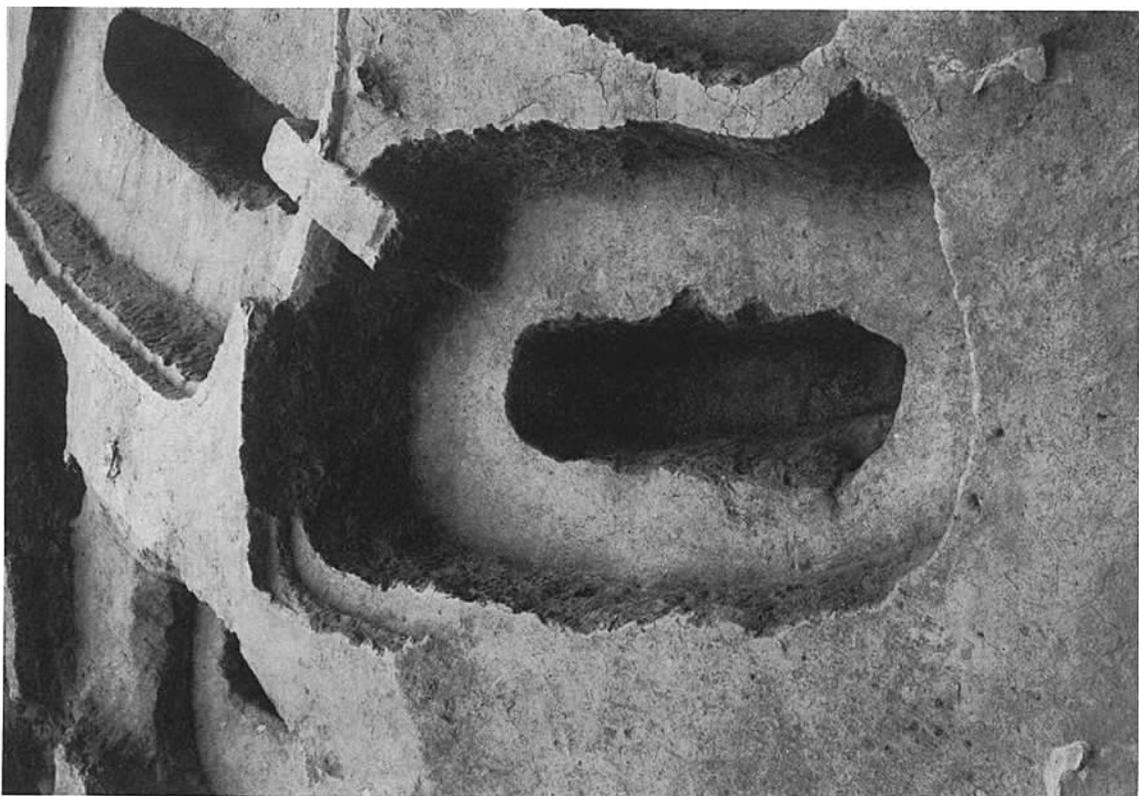
D - 19 号 土 塚 墓 (南から)



D - 20 号 土 塚 墓 (北から)



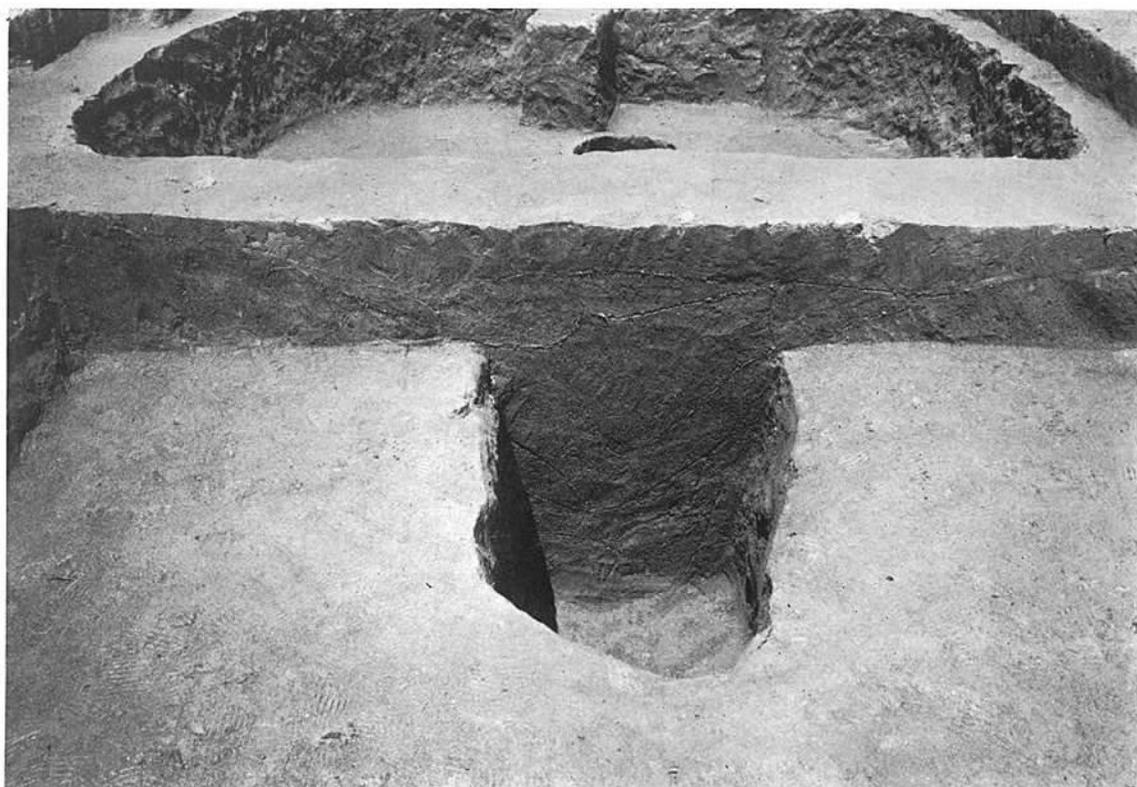
D-21 号土塚墓(南から)



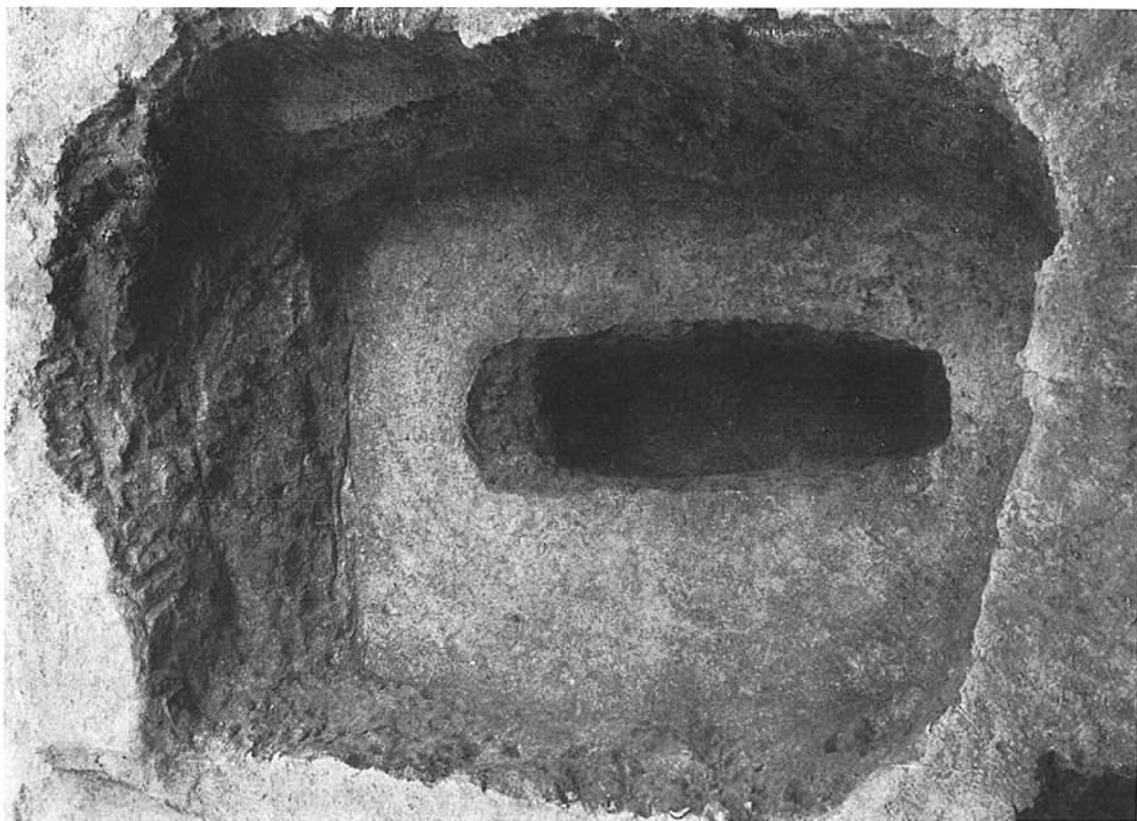
D-22 号土塚墓(西から)



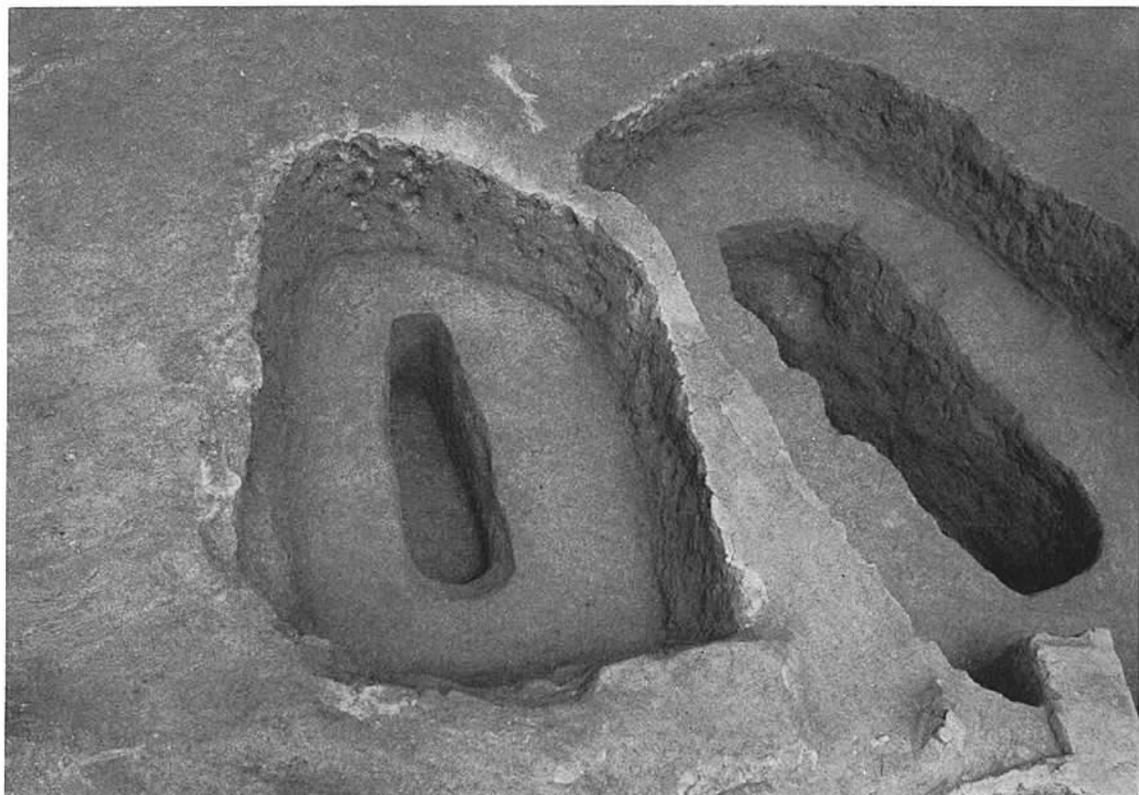
D-23号土坑墓(南から)



D-23号土坑墓断面(東から)



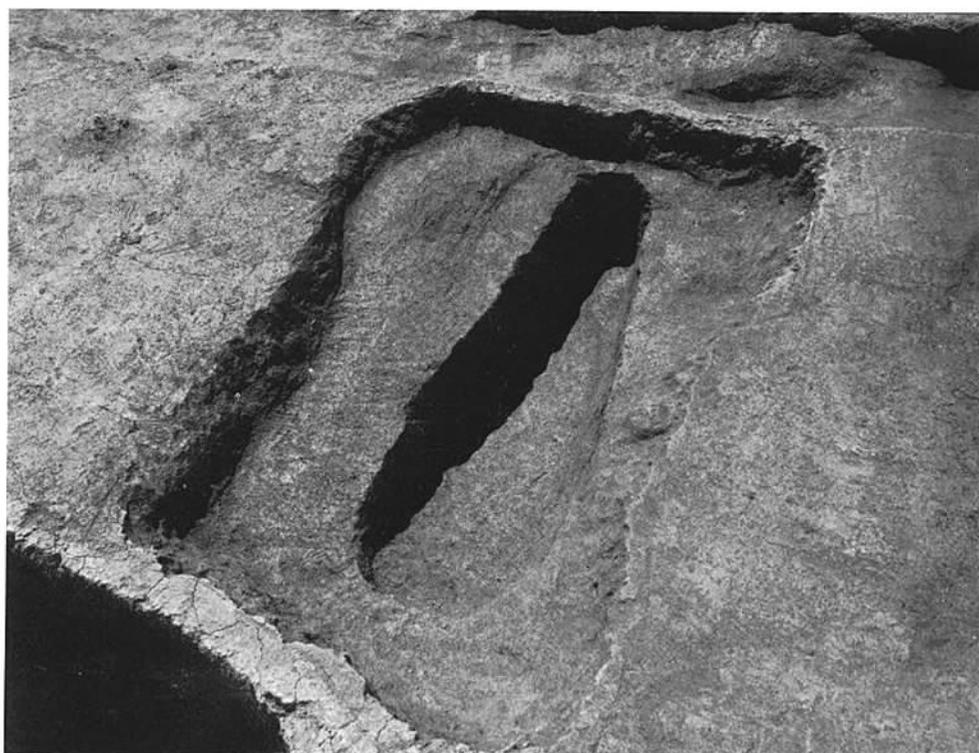
D-24 号土坑墓(西から)



D-22・D-24 号土坑墓関係(西から)



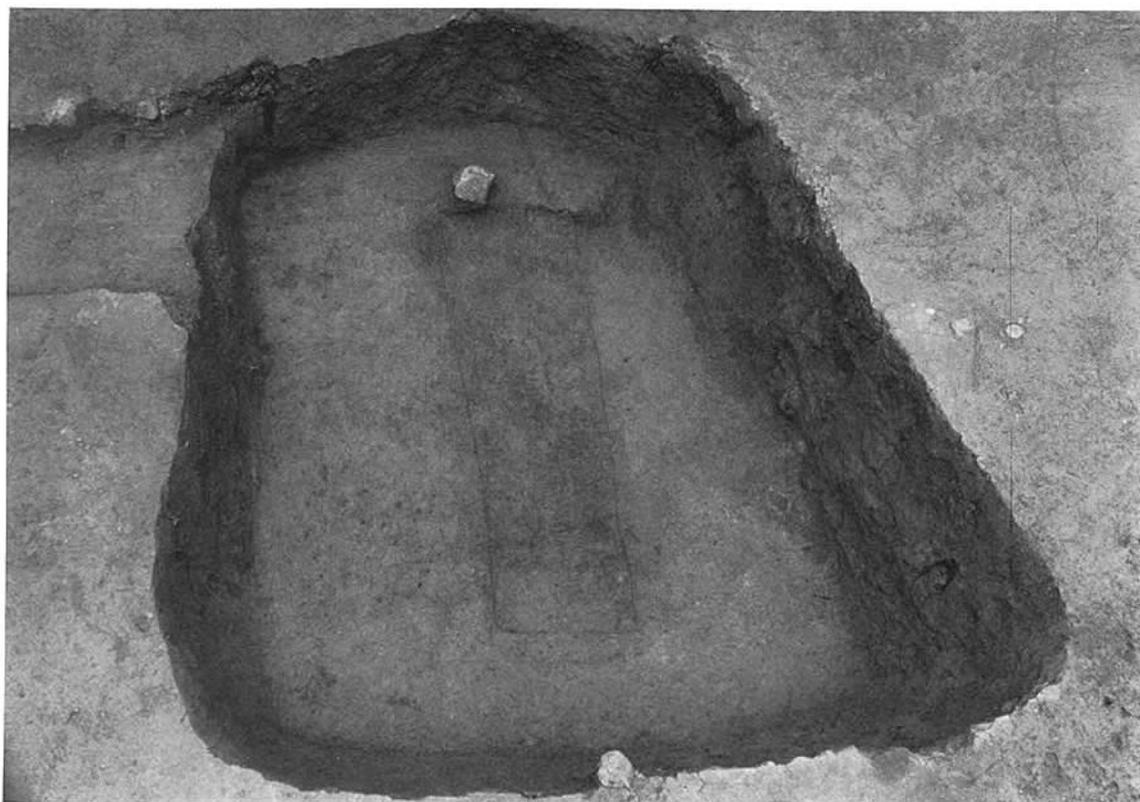
D - 25 号 土 塚 墓 (東から)



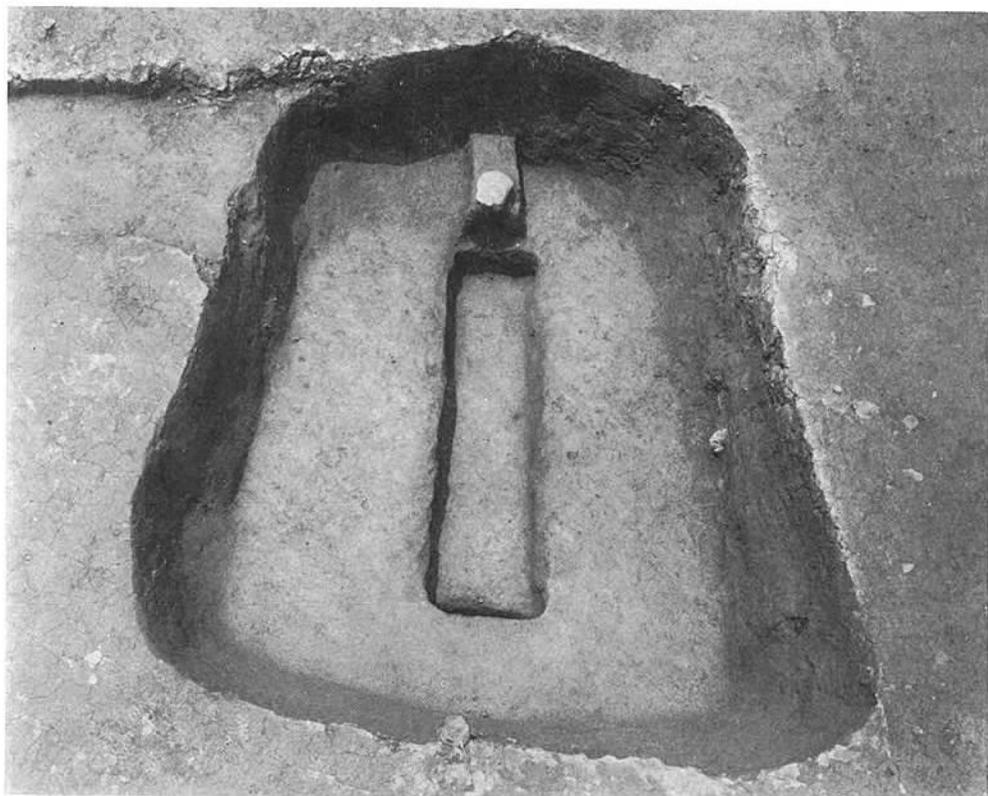
D - 26 号 土 塚 墓 (東から)



D-24号土塚墓主体部検出状態（西から）



D-27号土塚墓主体部検出状態（東から）



D-27 号 土 塚 墓 (東から)



小 口 部 分 の 状 態



D - 28 号 土 塚 墓 (東から)



D-28 号 土 塚 墓 1 段 掘り (東から)



D-29・D-30・D-31号土塚墓関係(東から)



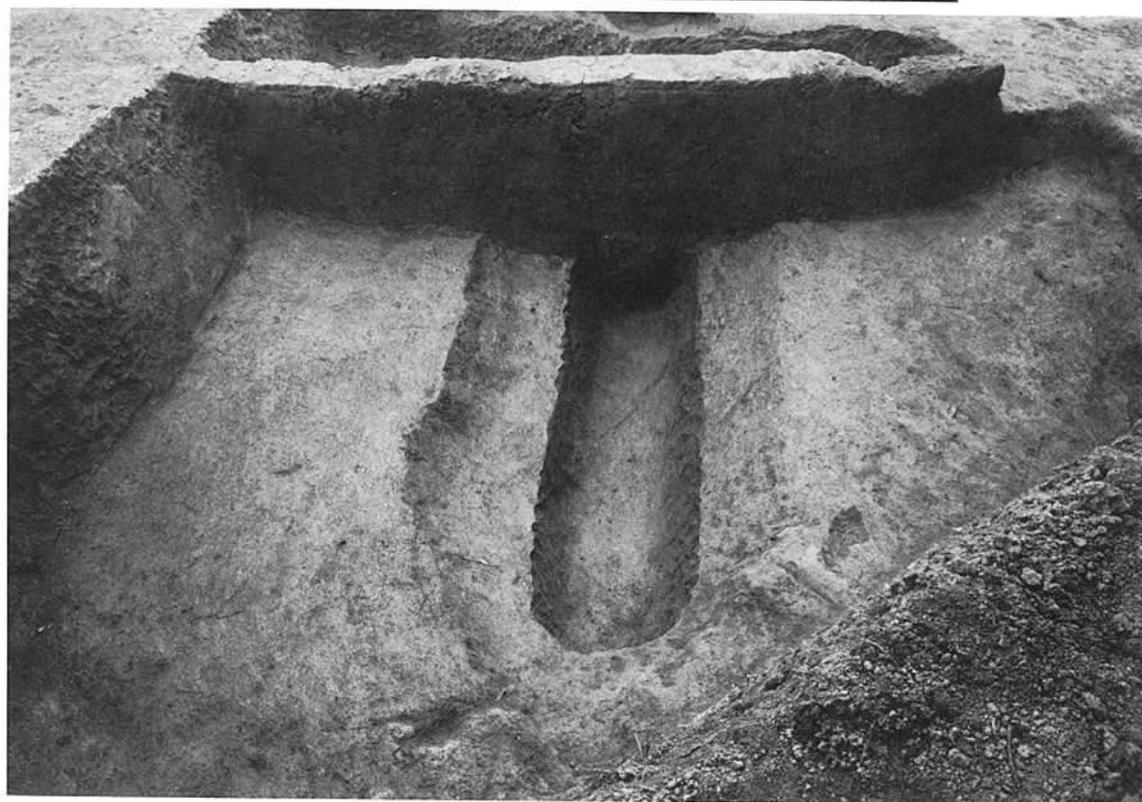
D-29号土塚墓(西から)



(上) D - 30 号 土 塚 墓 (東から)
(下) D - 31 号 土 塚 墓 (東から)



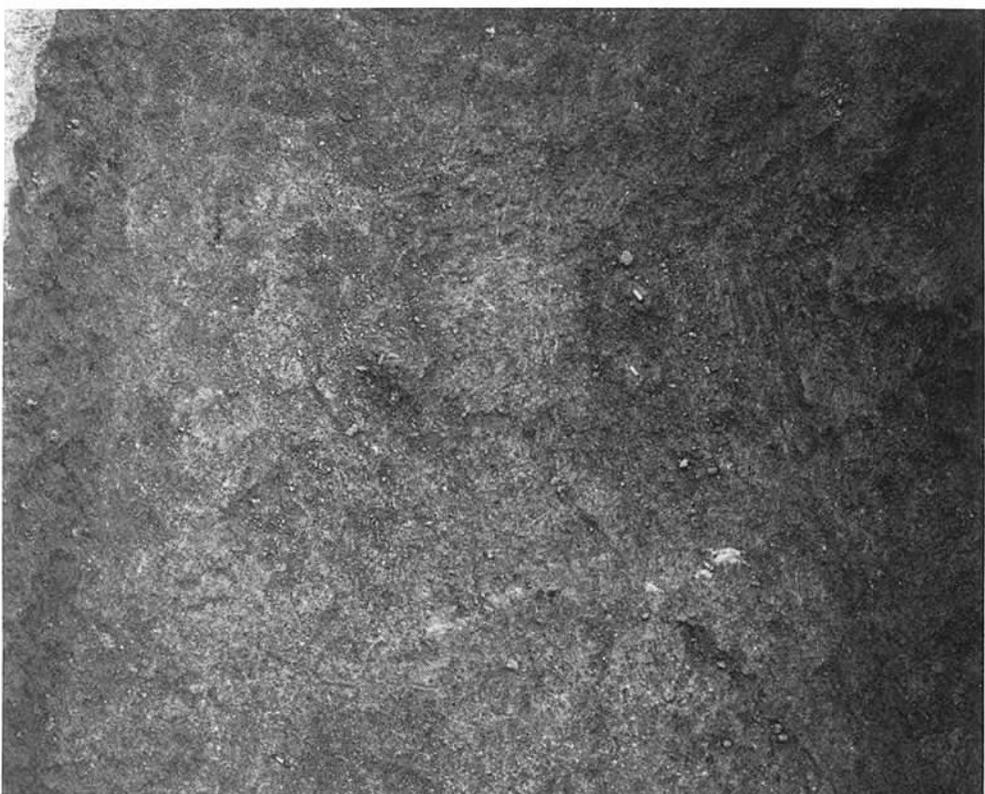
D-32号土塚墓(西から)



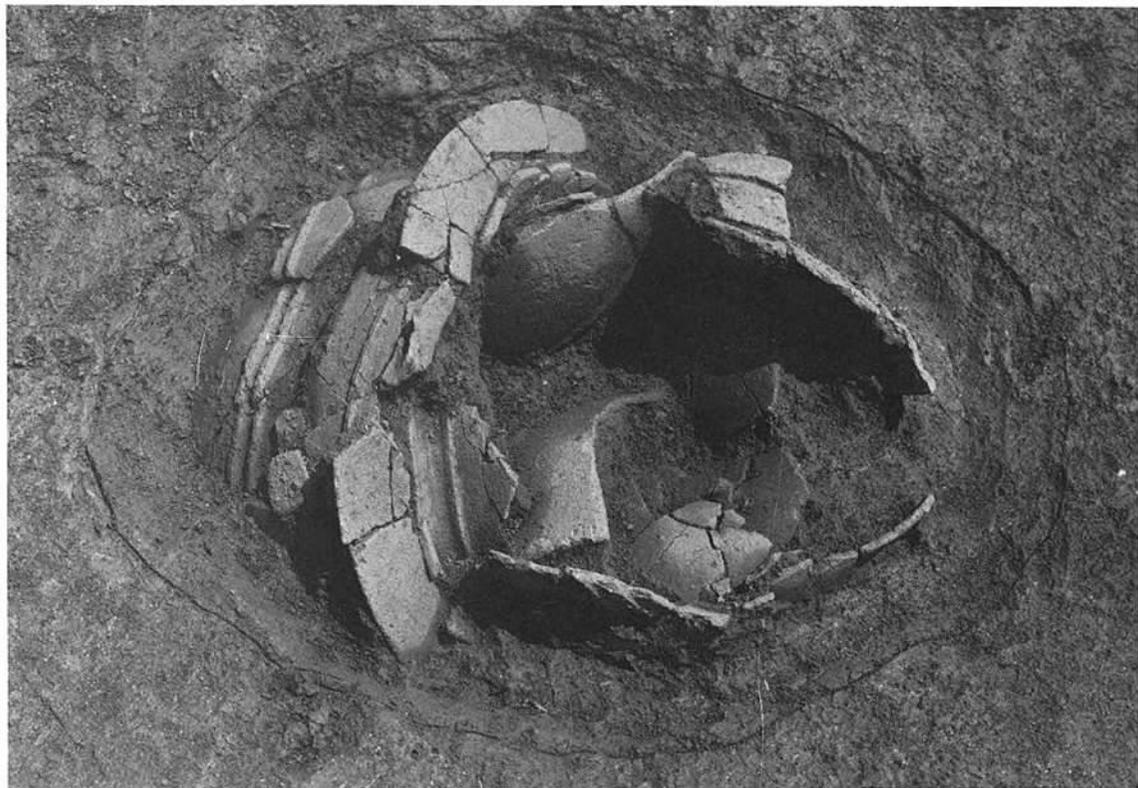
D-32号土塚墓断面(西から)



D - 33 号 土 坑 墓 (東から)

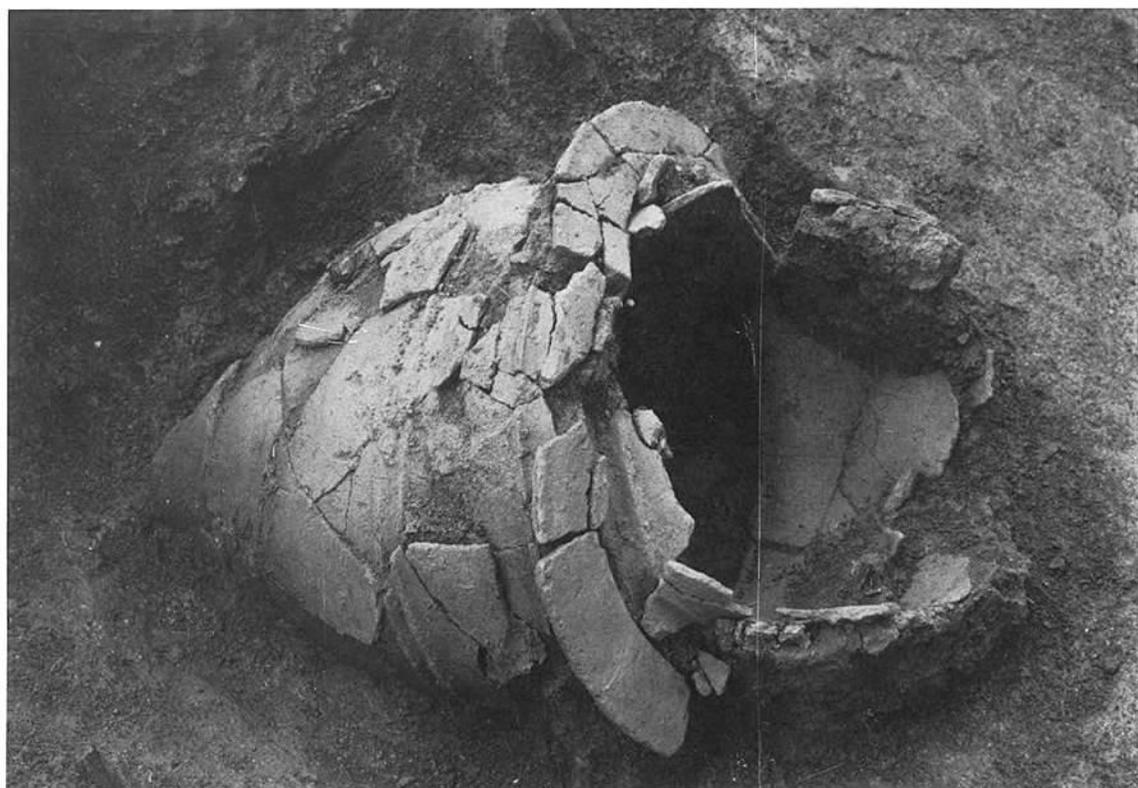


玉 類 出 土 状 態



K-1 号甕棺墓

(南から)



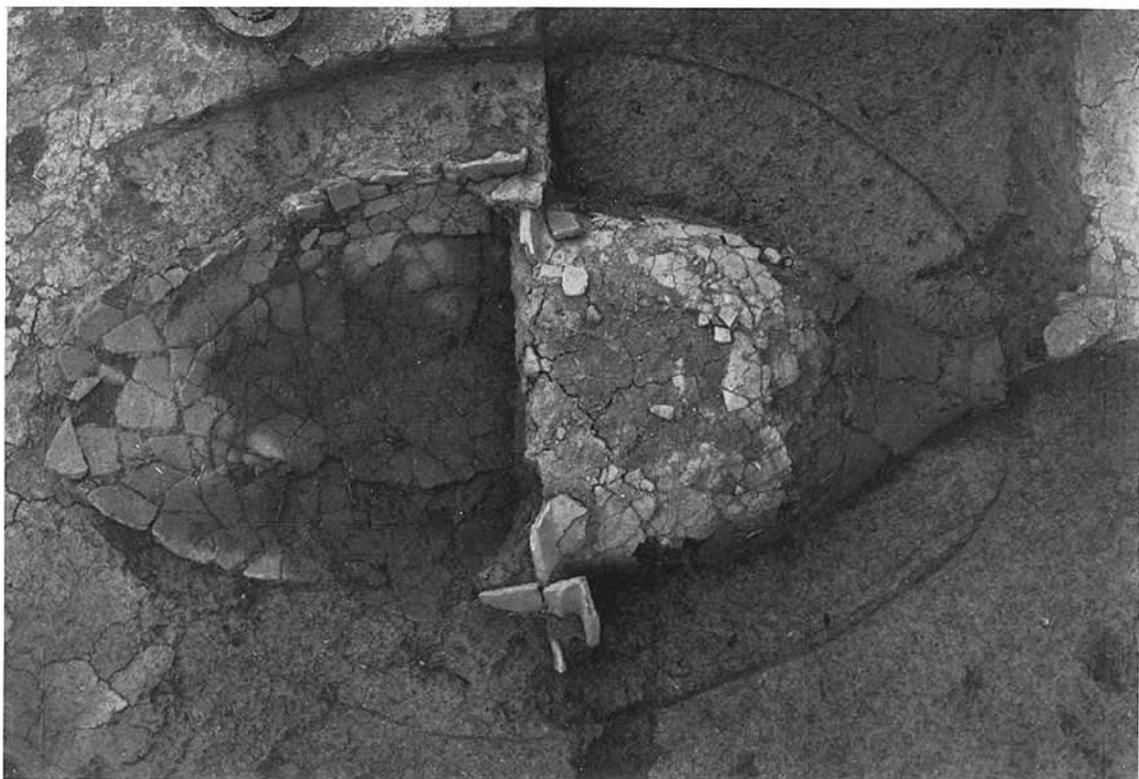
K-1 号甕棺墓差し合わせ状態



K-1 号 甕 棺



K-2号甕棺墓差合わせ状態



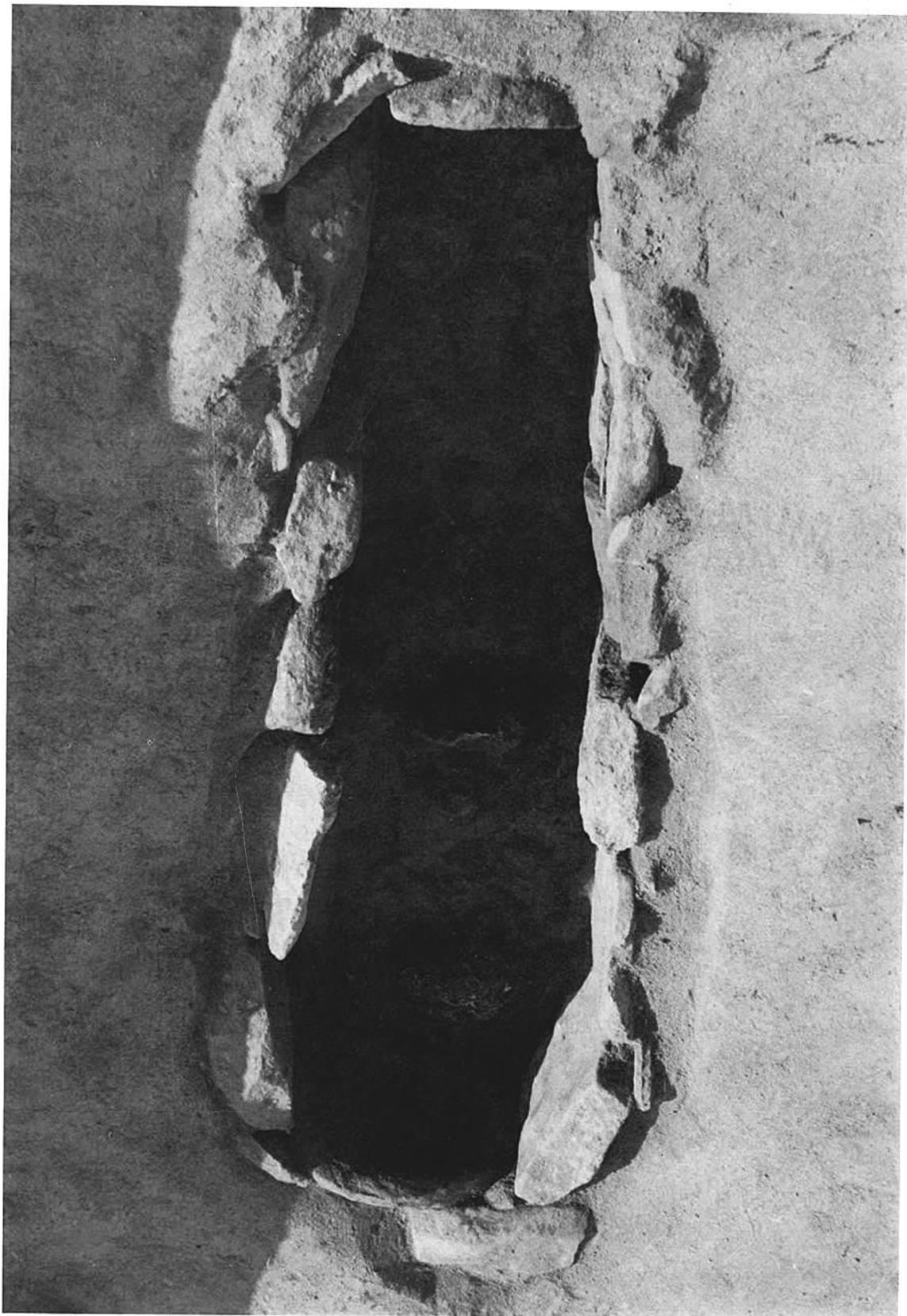
K-2号甕棺墓掘り方の状態



2号石棺墓（蓋石被覆状態）（北から）



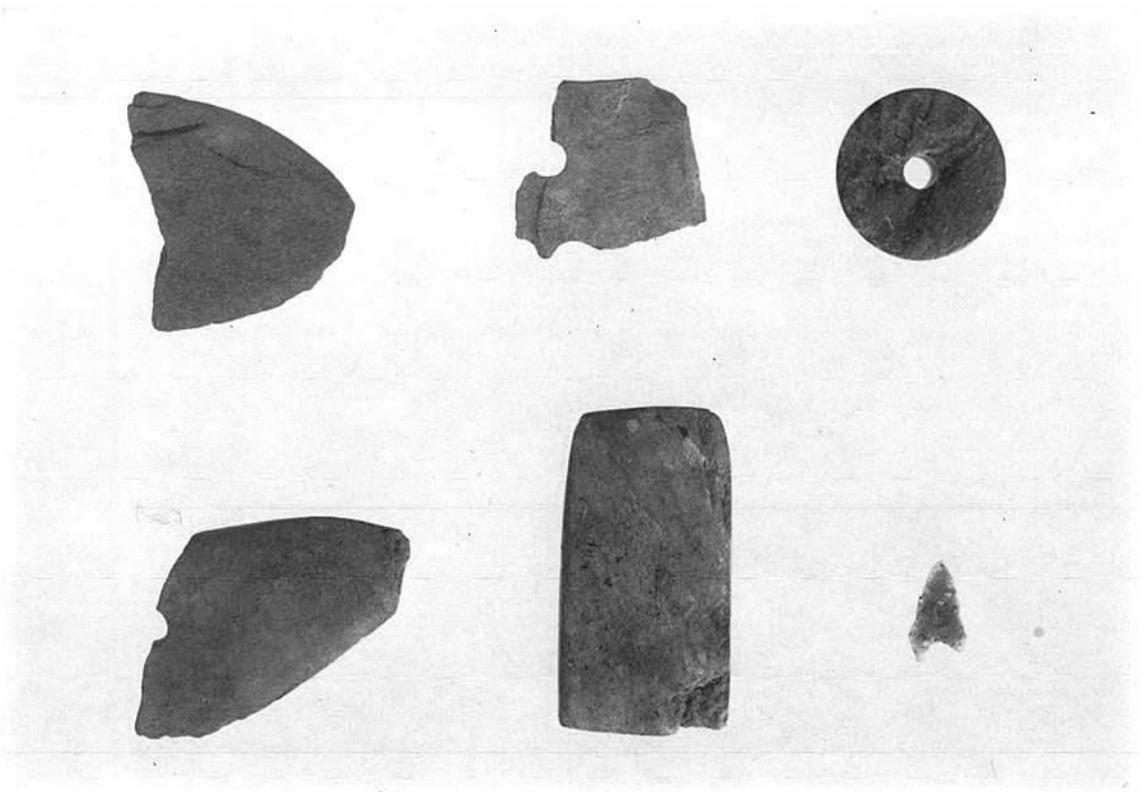
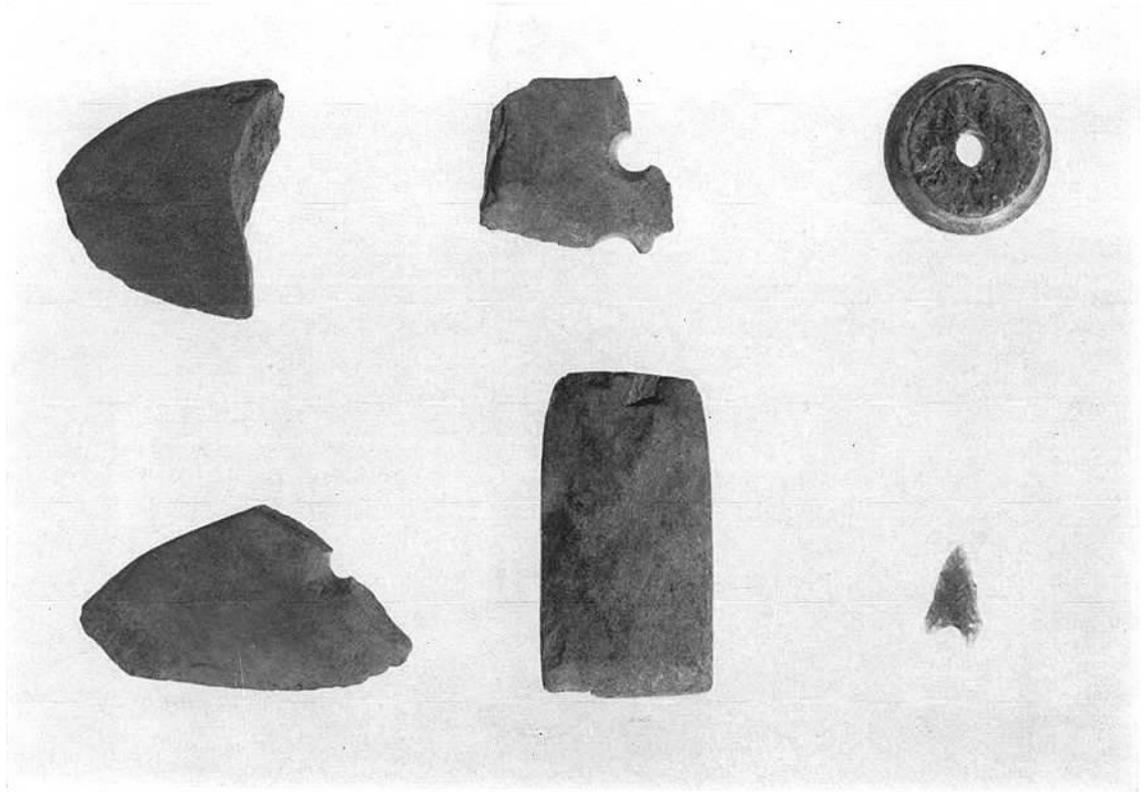
2号石棺墓（蓋石除去状態）（北から）



2号石棺墓(人骨出土状態)

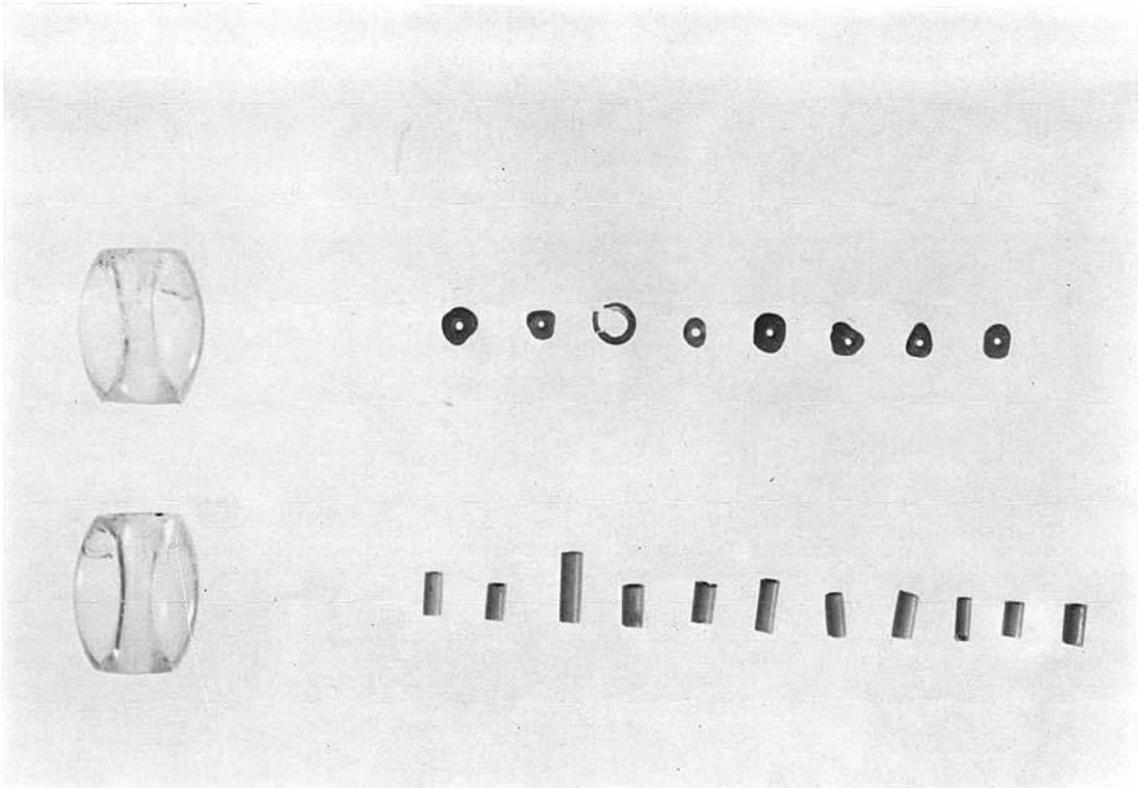


高木遺跡 B-II区 (発掘後)



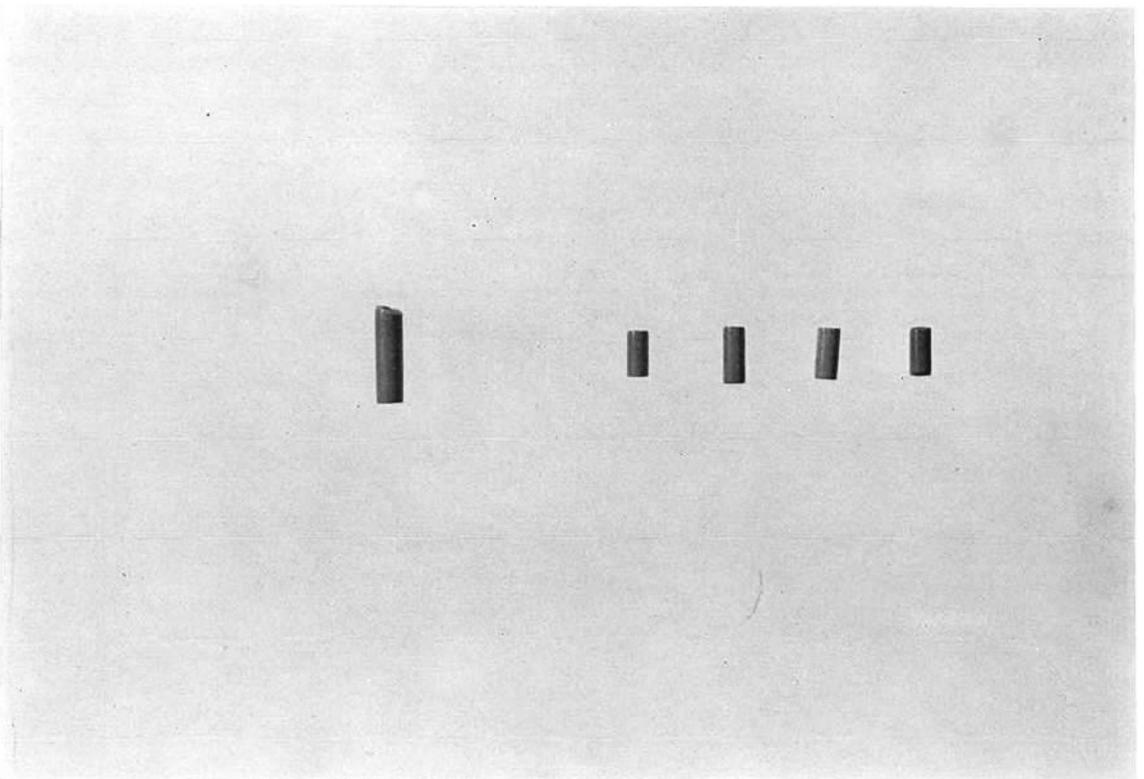
出土遺物石製品(石包丁・紡錘車・扁平片刃石斧・石戈等)

(a) 表面
(b) 裏面



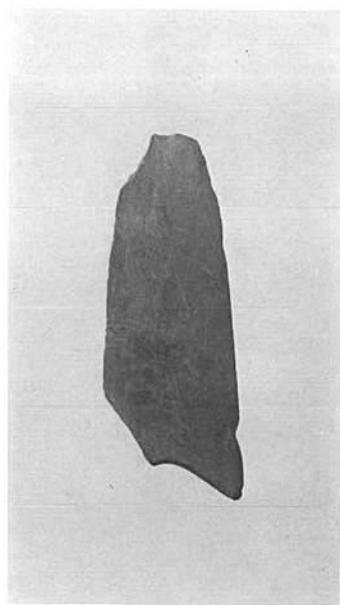
副葬品玉類 (D-7 号土塚墓)

(ガラス玉 8←1)
管 玉 11←1)



副葬品玉類

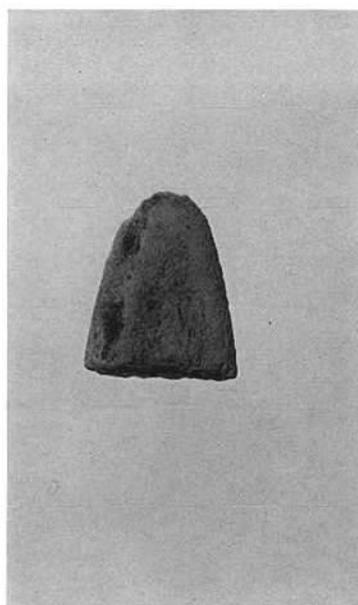
前1点 (D-33号土塚墓)
後4点 (D-30号土塚墓)



磨製石鏃

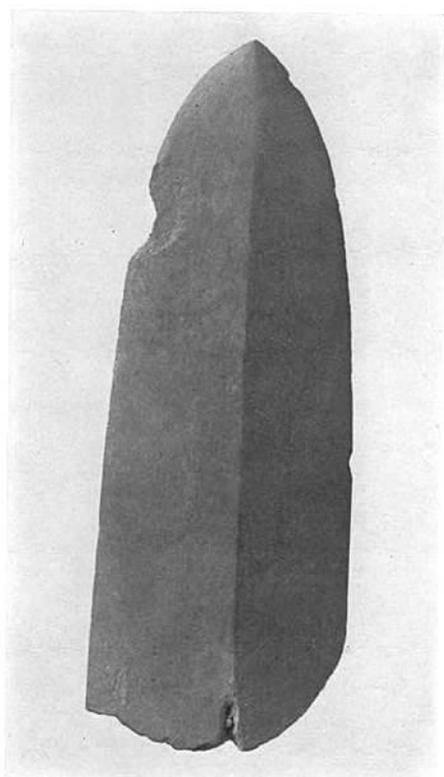


打製石鏃



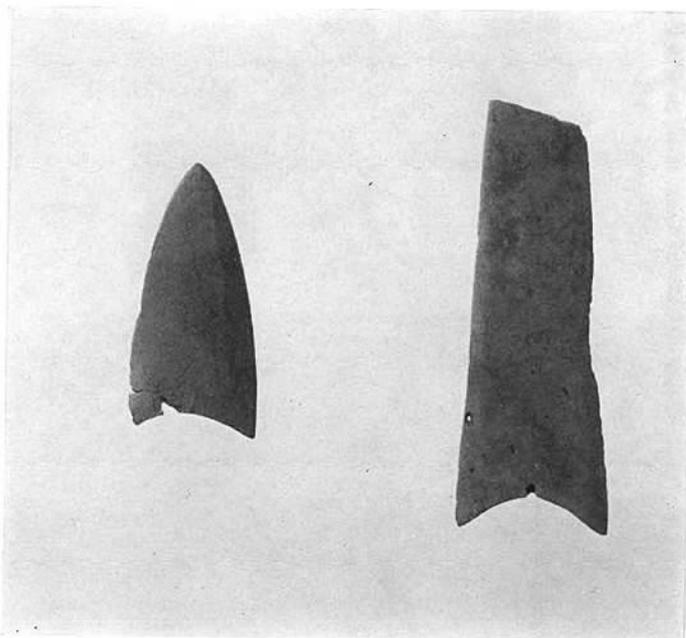
石劍

D-2 号土塚墓出土副葬品



石劍

(D-15号土塚墓)



磨製石鏃

(D-16号土塚墓)



(上) 古墳時代1号住居跡C. D区全景 (東から)

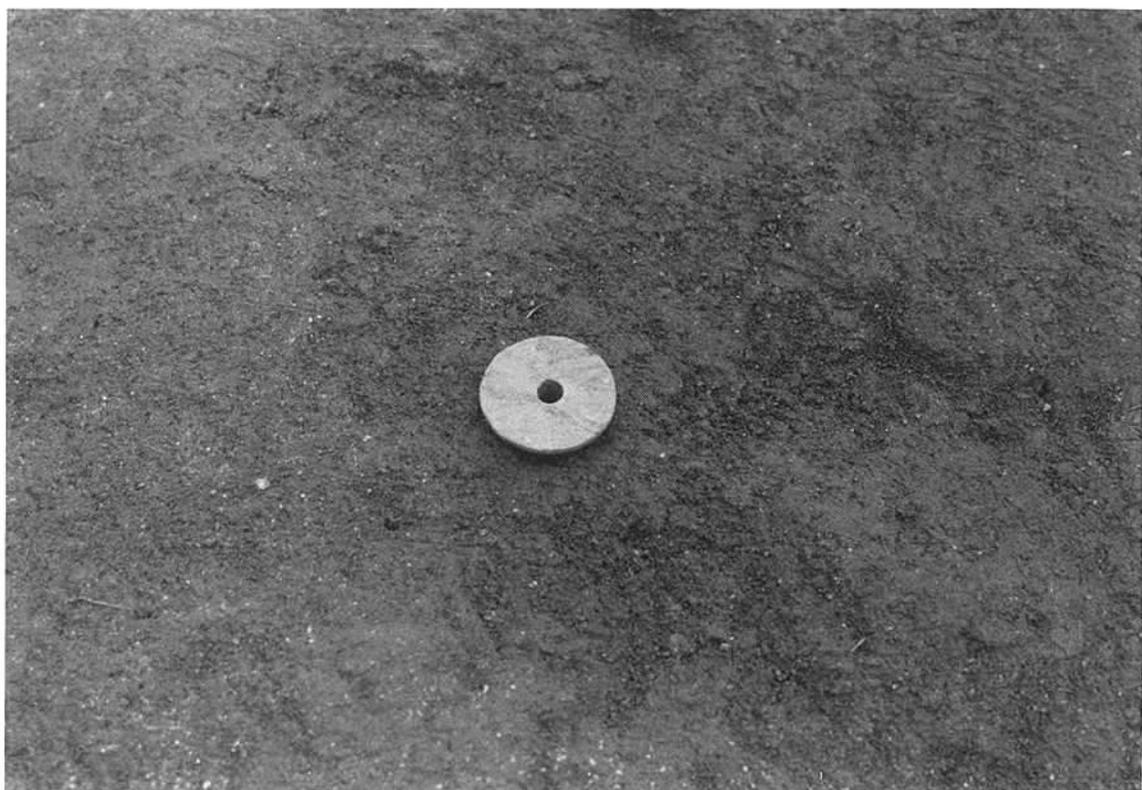
(下) 1号住居跡近景 (東から)



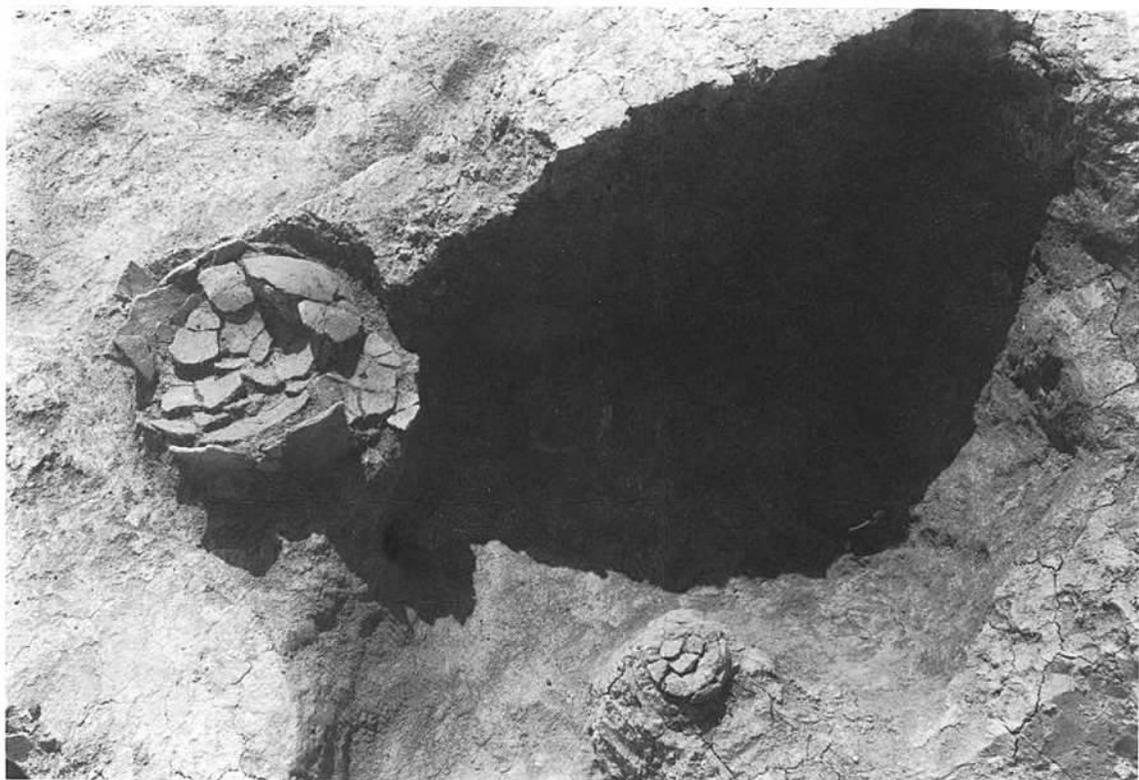
(上) 古墳時代2号住居跡D区全景(南から)
(下) " 2号住居跡近景(南から)



1号住居跡 遺物出土状態



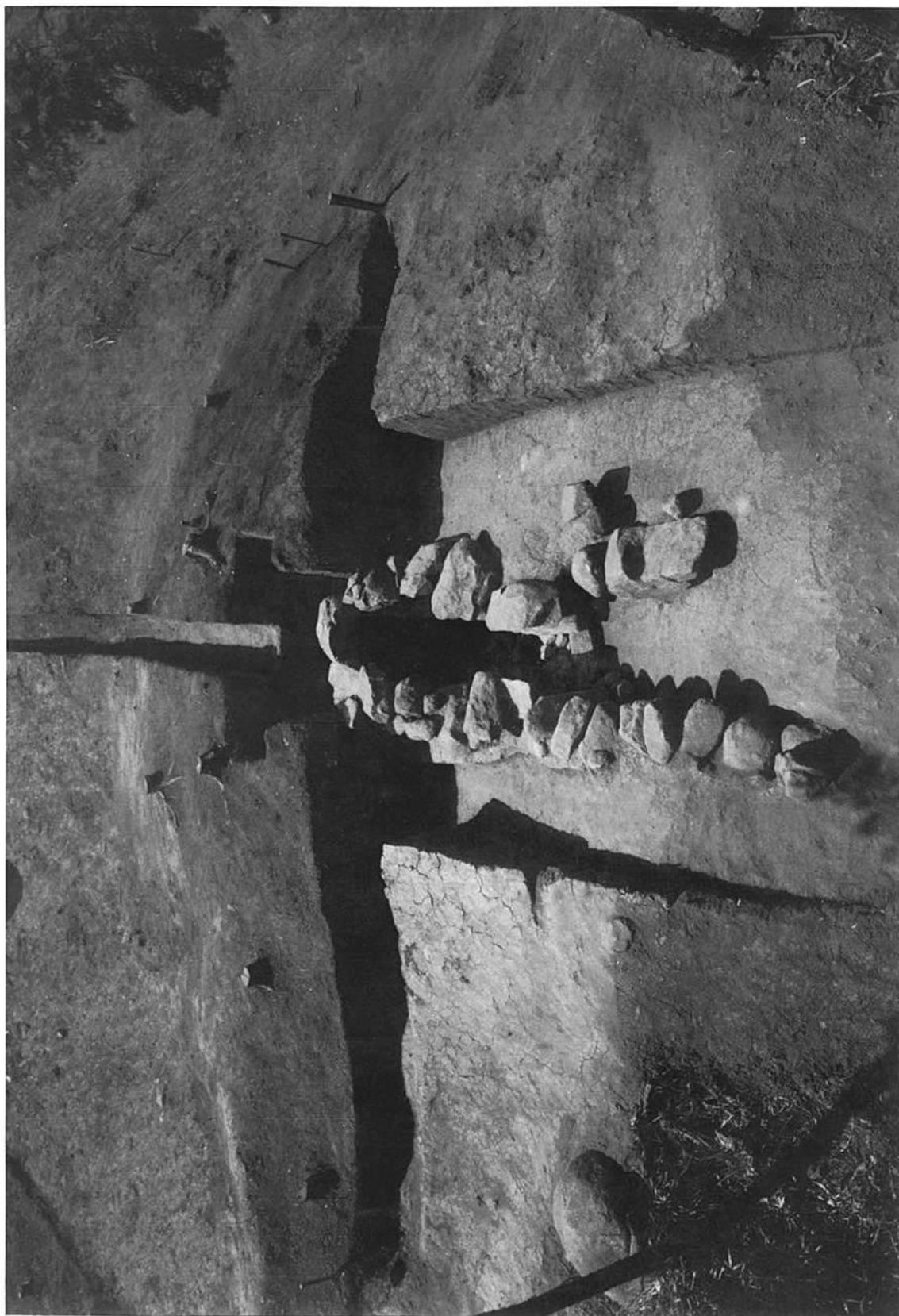
2号住居跡 遺物出土状態



C 区出土土坑状态 (土坑C区)



C 区遗物出土状态 (土坑周边部)



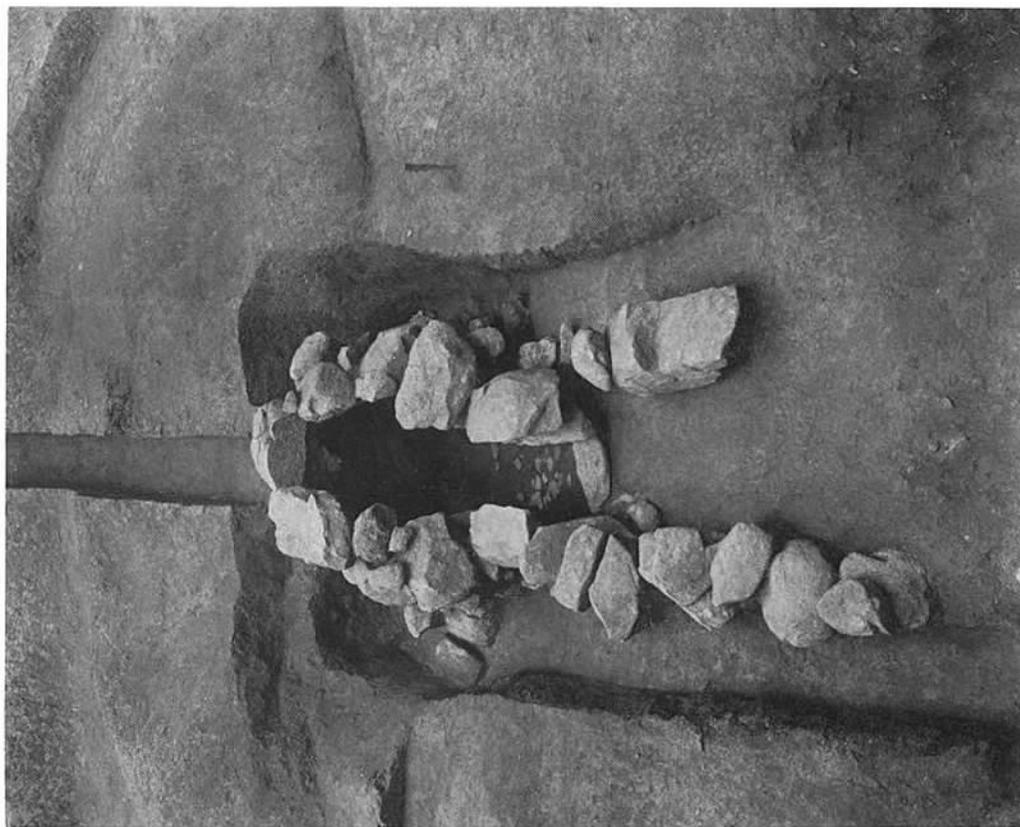
(東から)

A-1号墳全景



(E) A-1号墳裏込め状態

(F) A-1号墳石室正面



A-1号墳 石室全景 (東から)



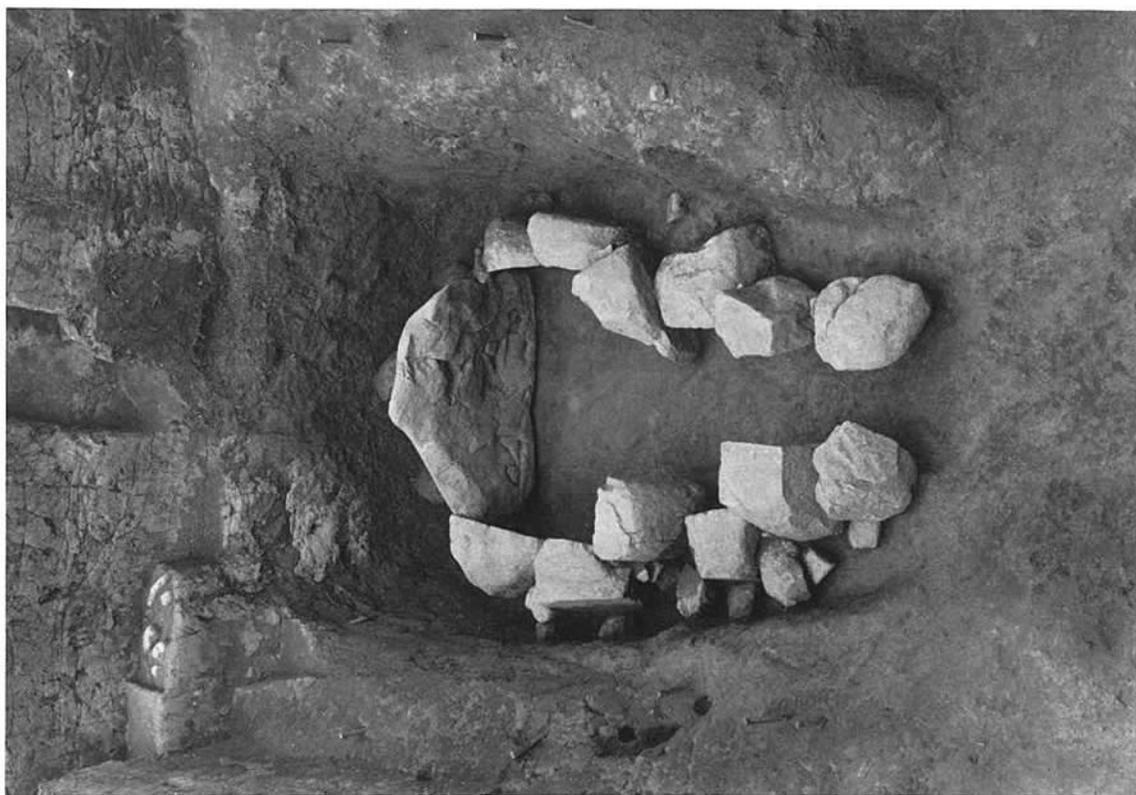
A-1号墳 腰石全景 (西から)



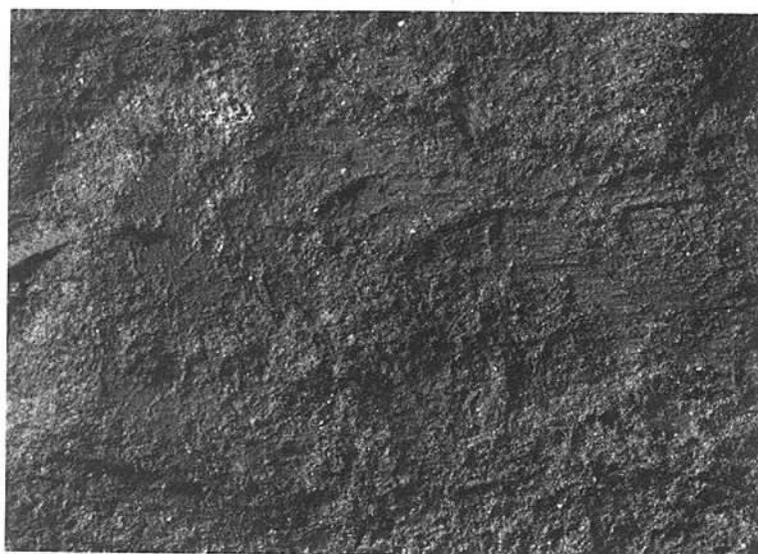
(上) A-2号 墳 墳丘 全景 (北から)
(下) A-2号 墳 石室 全景 (東から)



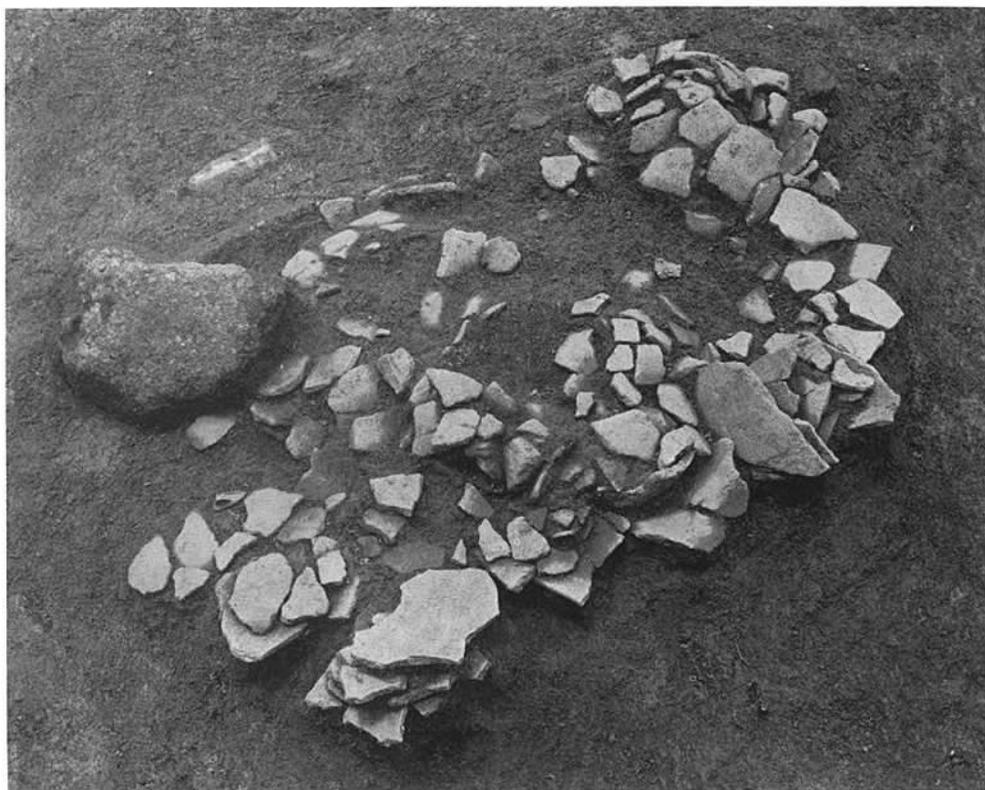
A-2号墳 石室全景



A-2号墳 腰石全景



掘り方の工具痕跡



A-2号墳 周溝横土器溜(上部)



A-2号墳 周溝横土器溜(下部)



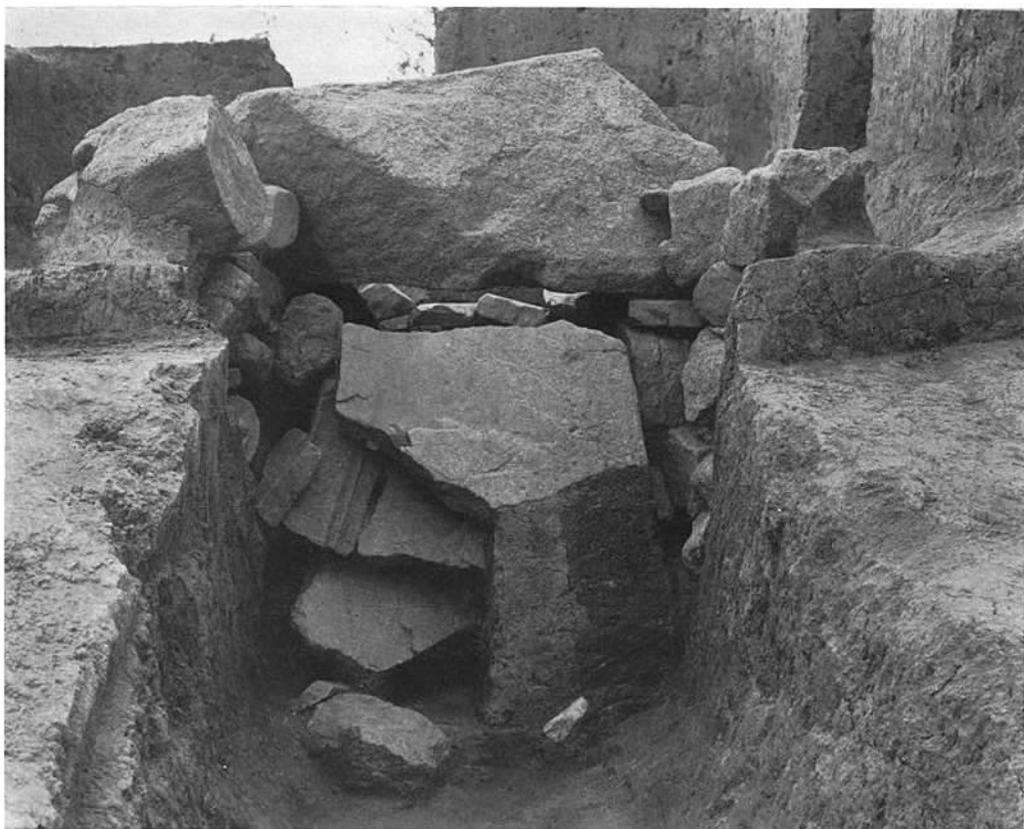
高木遺跡 B 群遠景



高木遺跡 B-1 号墳全景



B-1号墳石室全景（東から）



(上) B-1号 閉塞 (正面)
(下) 閉塞石 (石室内から)



(上) B-1号 墳 石 室 (正面)
(下) B-1号 墳 石 奥 壁



(上) B-1号 墳石室側面(北)
(下) B-1号 墳石室側面(南)



B-1号 填遺物出土状态



(上) B群1・2号墳全景
(下) B-2号墳



B 群 1·2 号 埧 航空 写真



B-2 号 埧 航空 写真



B-2号墳石室全景(西から)



(上) B-2号 墳石室(正面)
(下) B-2号 墳石室後部裏込め



B-2号墳 石室北壁



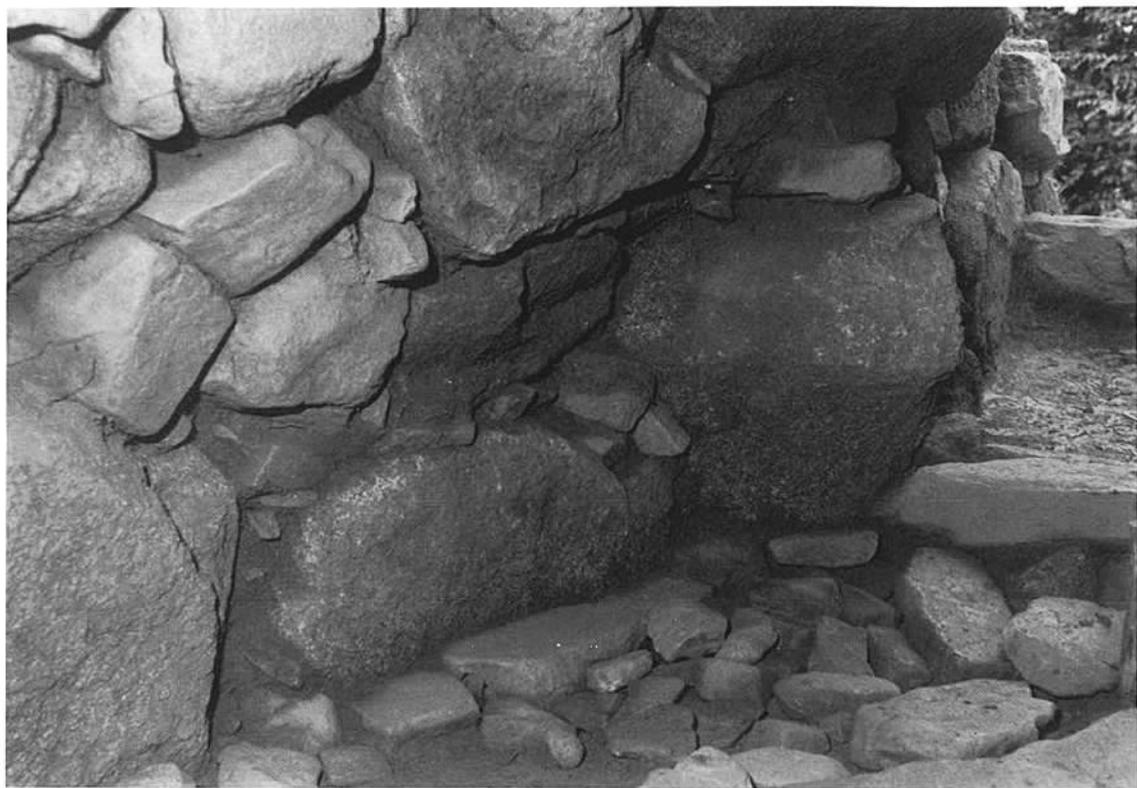
B-2号墳 石室から羨道部



B-2号墳 天井石の状態



B-2号墳 奥壁



B-2 号 坟 石 室 南 壁



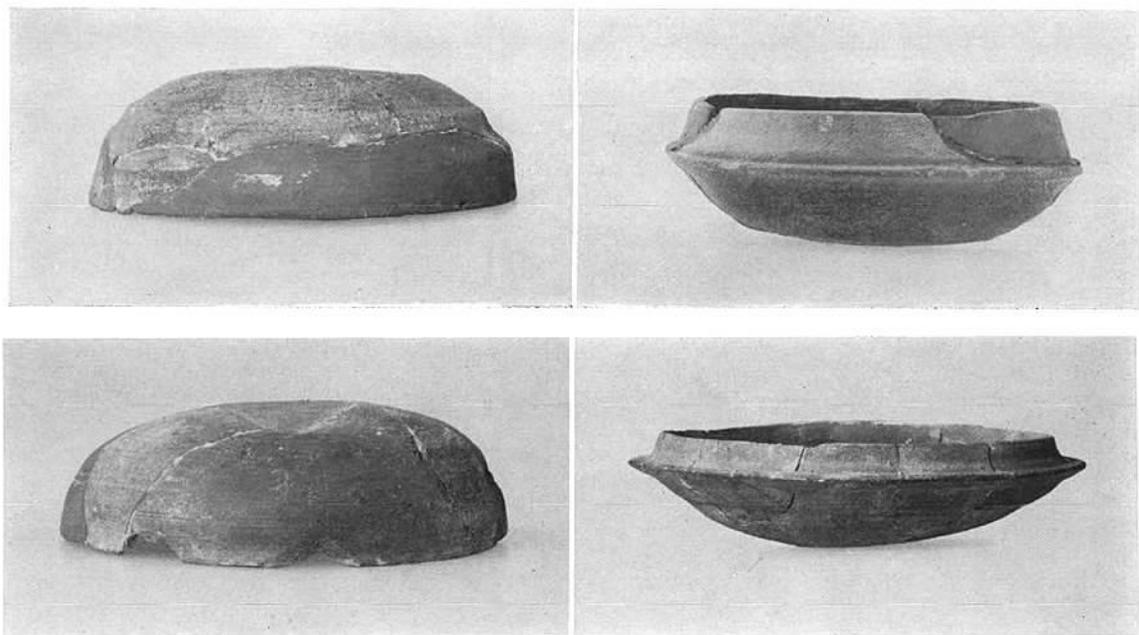
直 刀 出 土 状 态



玉類出土狀態



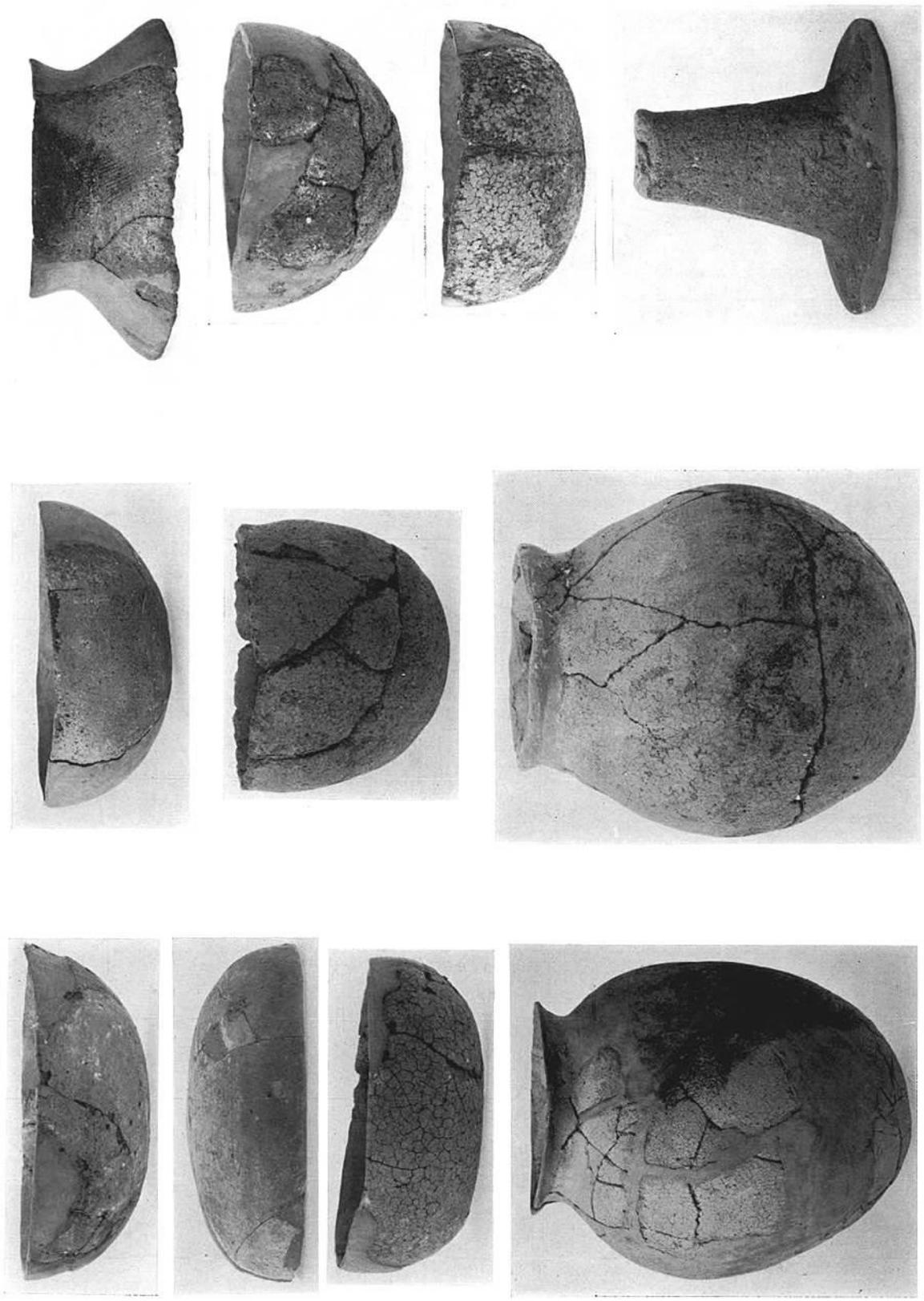
鉄斧、鉄鍬出土狀態



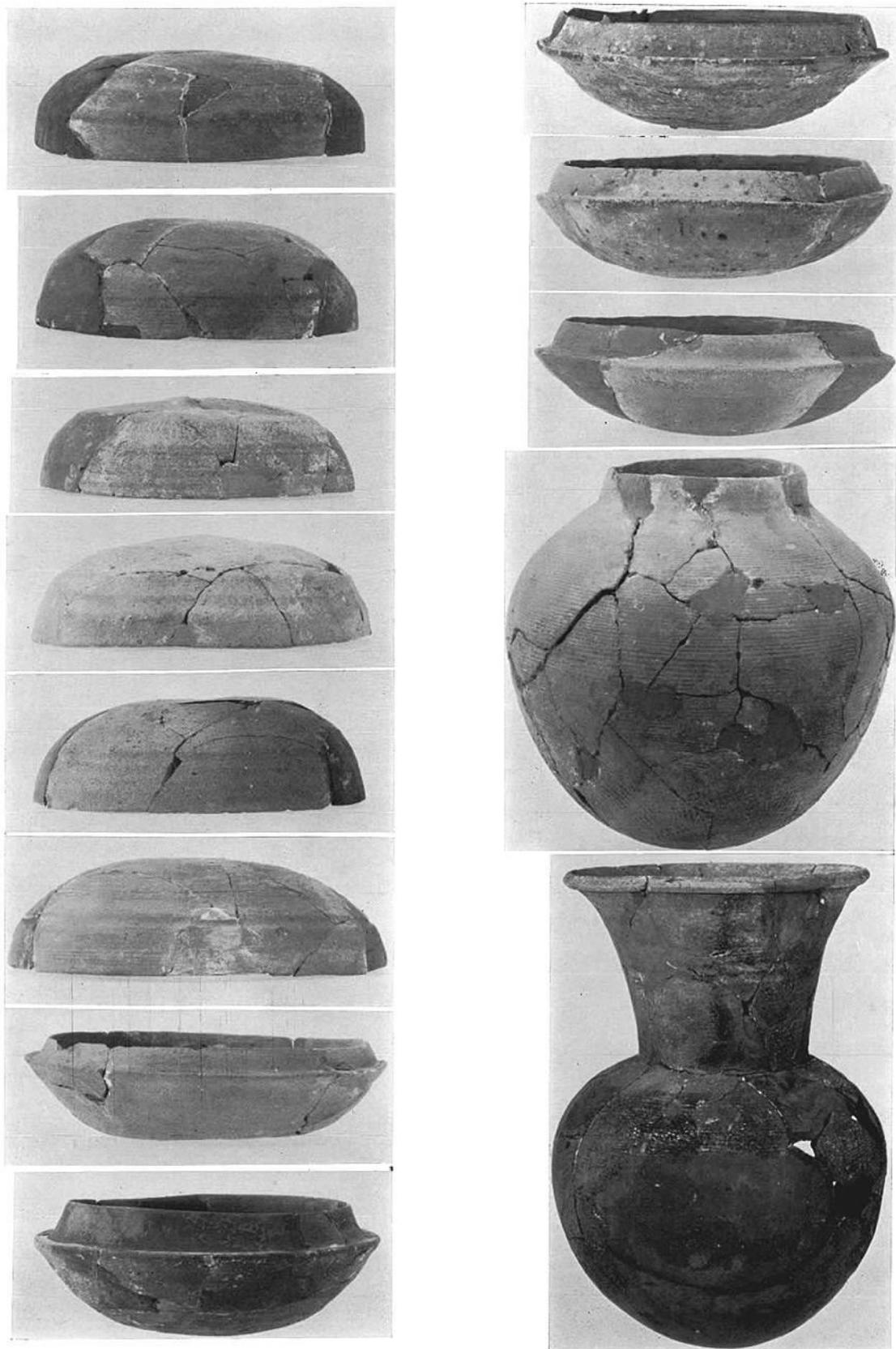
B-2号墳 墳丘出土遺物



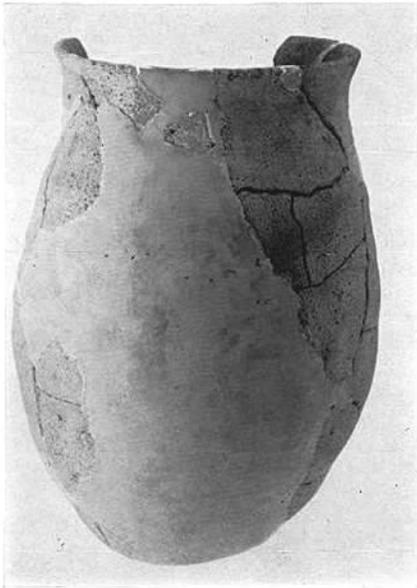
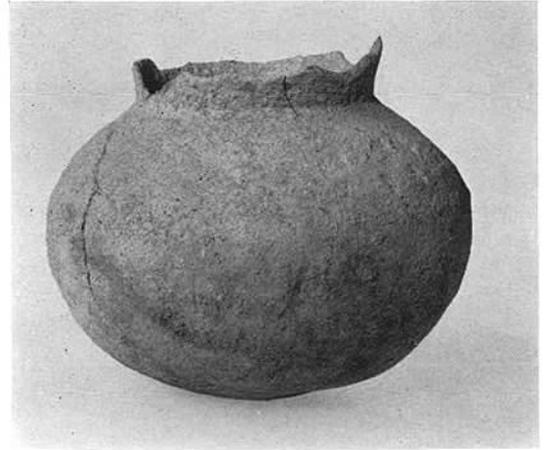
B-2号墳 発掘後現状復旧



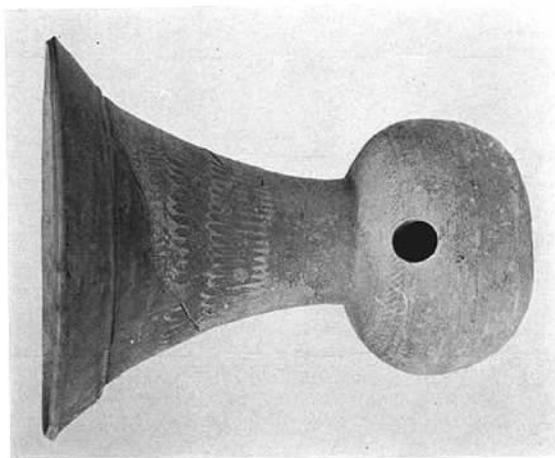
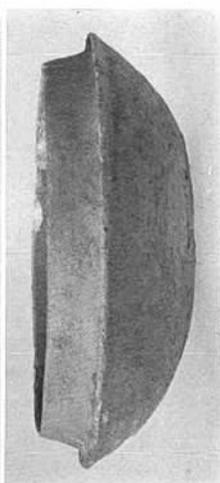
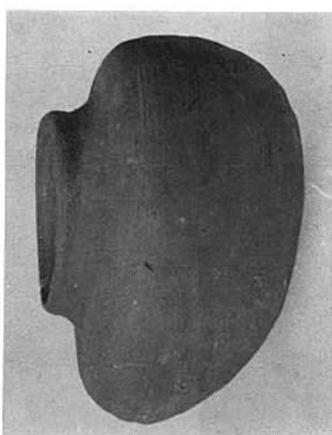
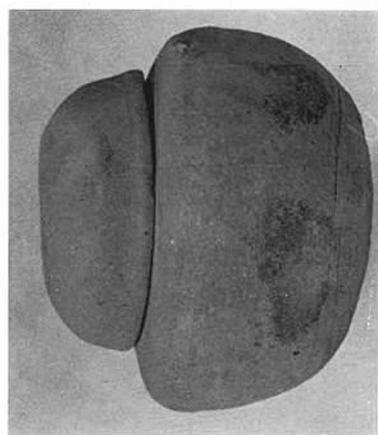
C 区出土遺物



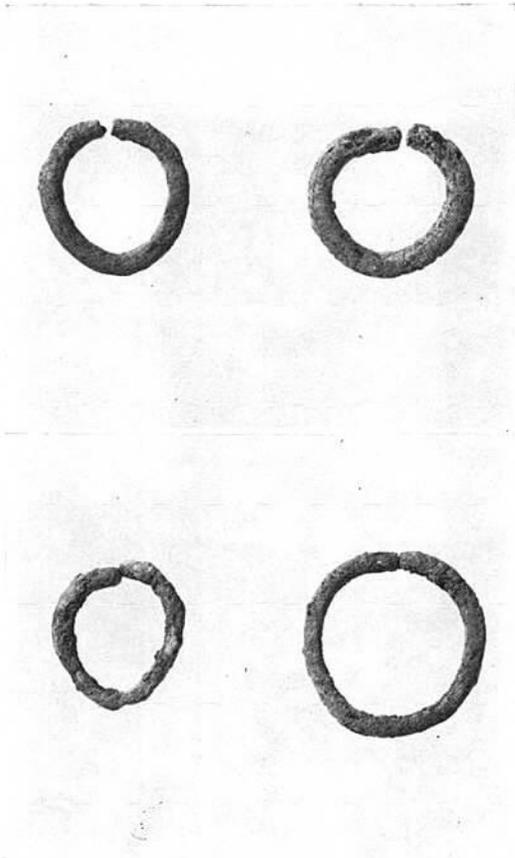
D 区土器溜出土造物



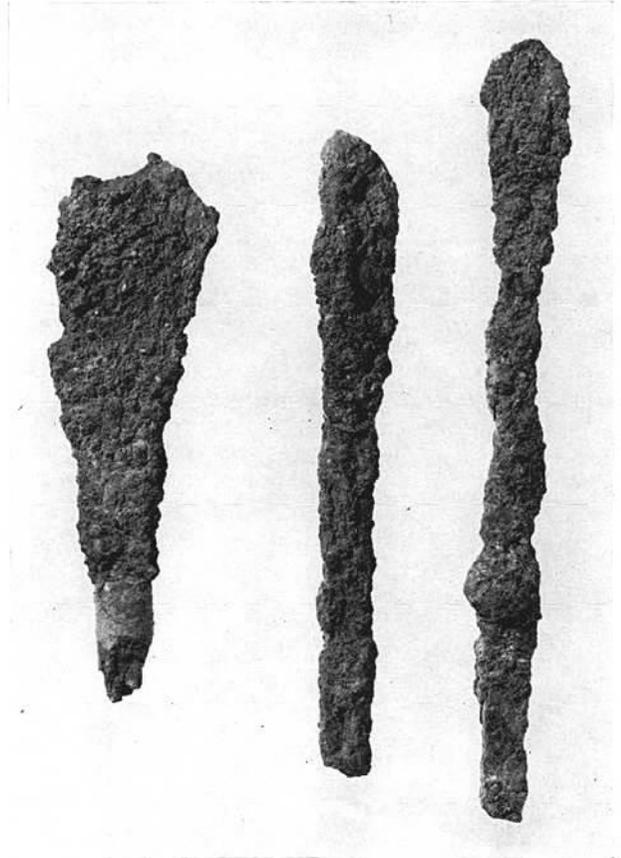
A-2 号 墳 周 溝 横 出 土 遺 物



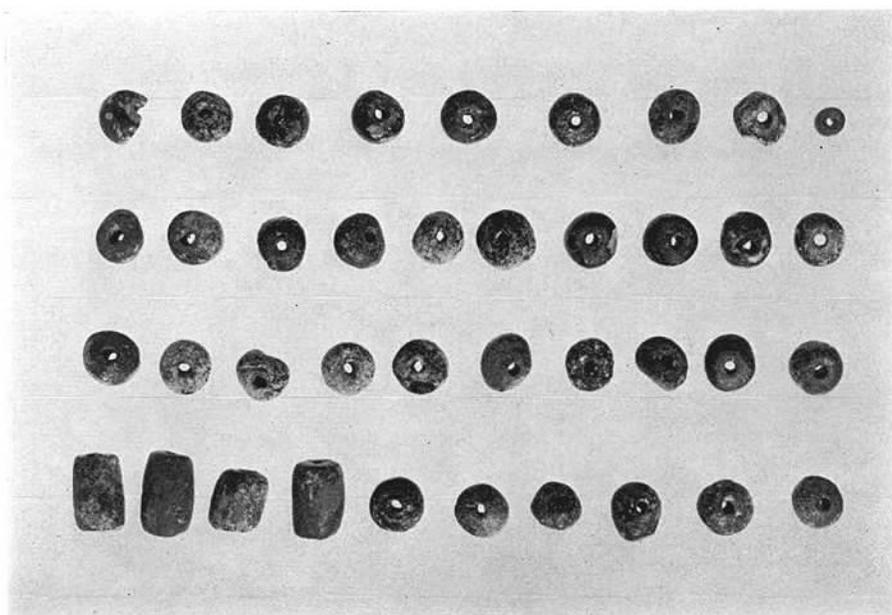
B-1 号 墳 出 土 遺 物



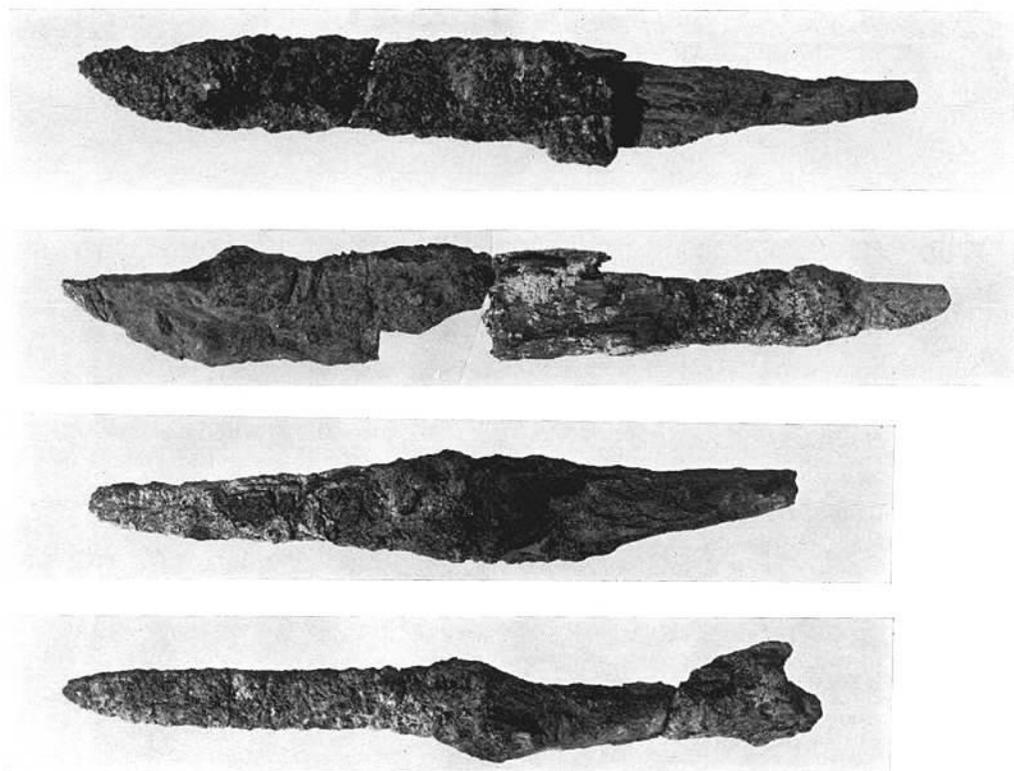
耳環 B-1 (上) 2号墳 (下)



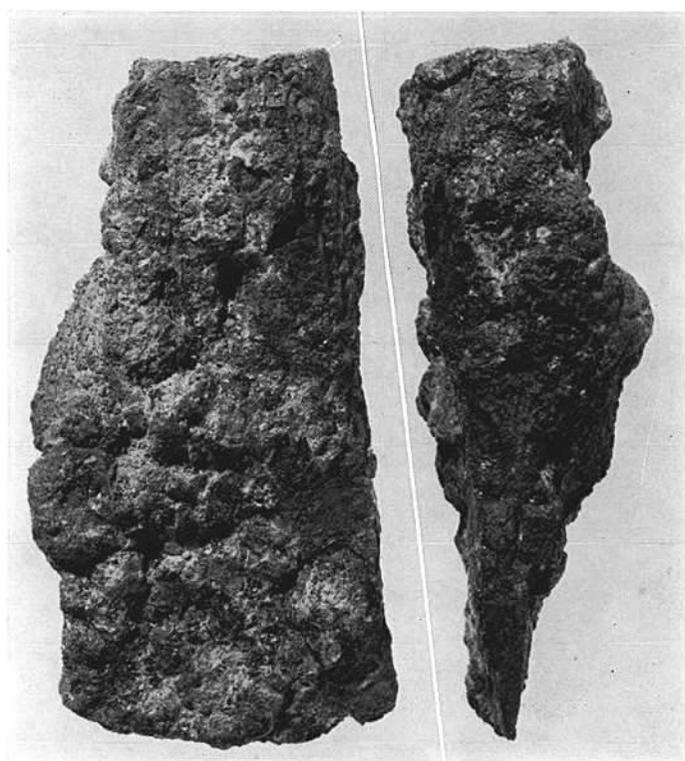
鉄鏃 (B-1号墳)



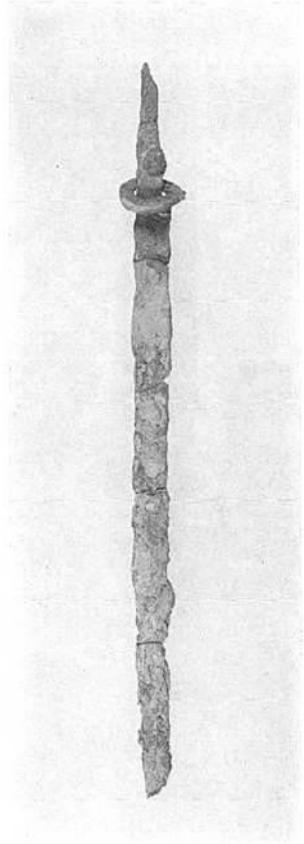
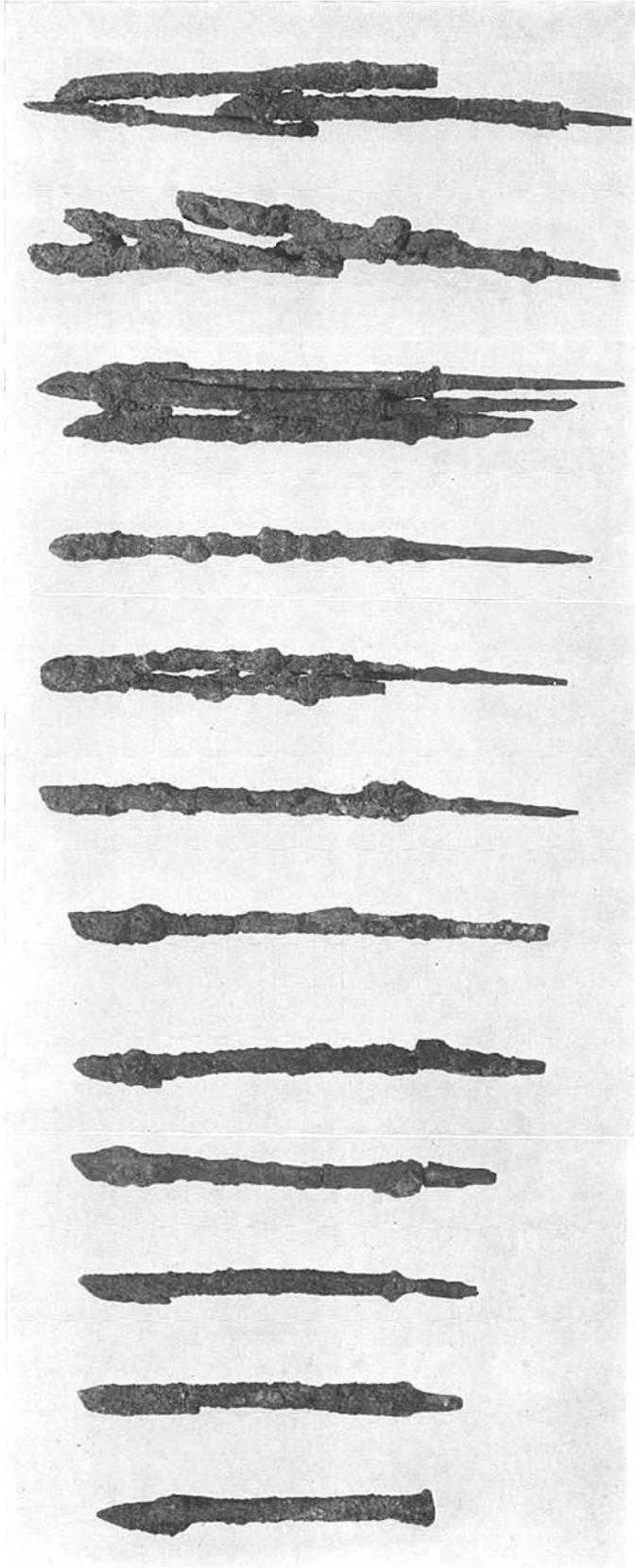
玉類 (B-2号墳)



B-2 号 墳 出土 遺物 (刀子)



B-2 号 墳 出土 遺物 (鉄斧)



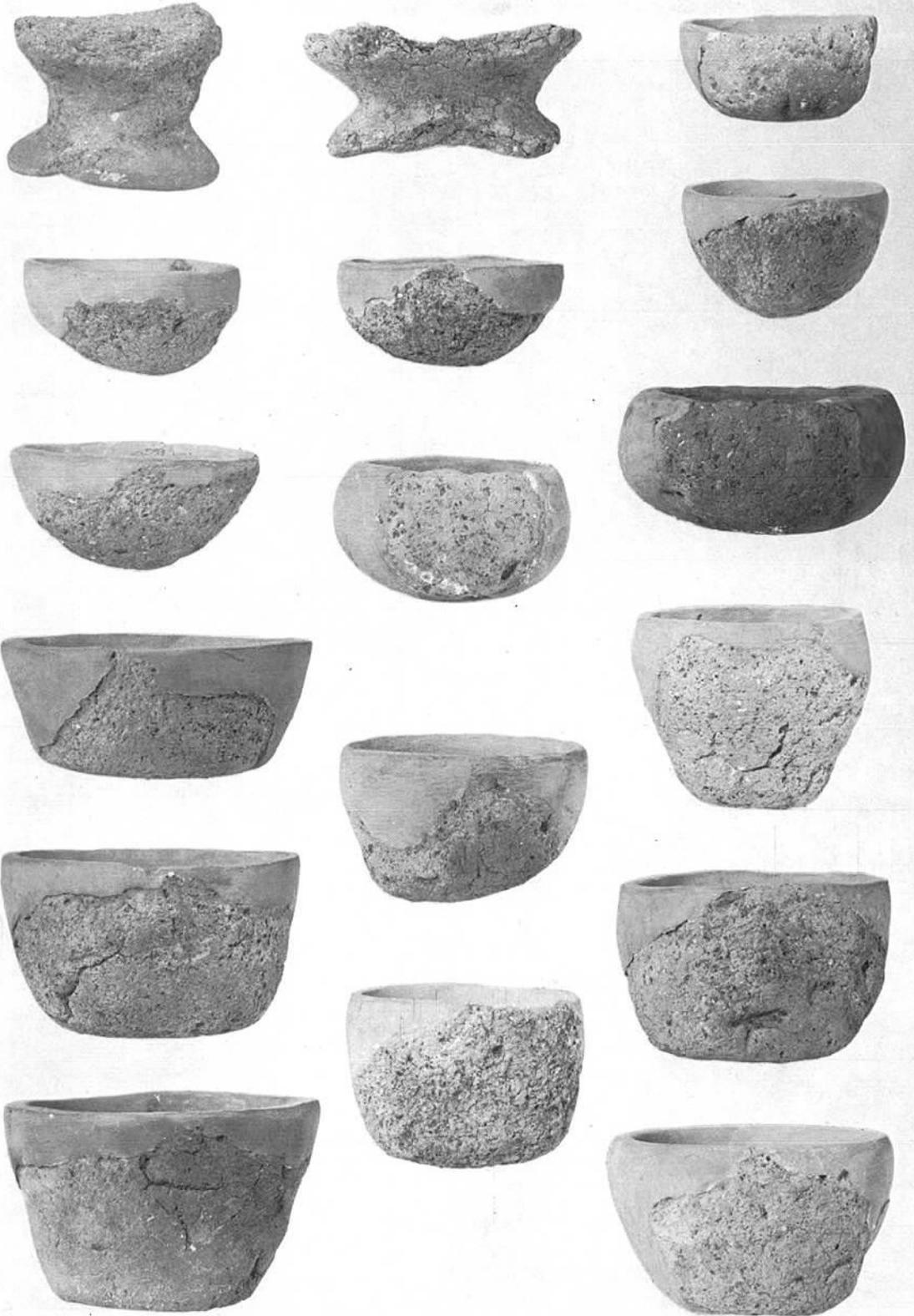
B-2 出土遺物 (鉄鏃・直刀)



炉 跡 出 土 状 態



炉 跡 付 近 出 土 遺 物



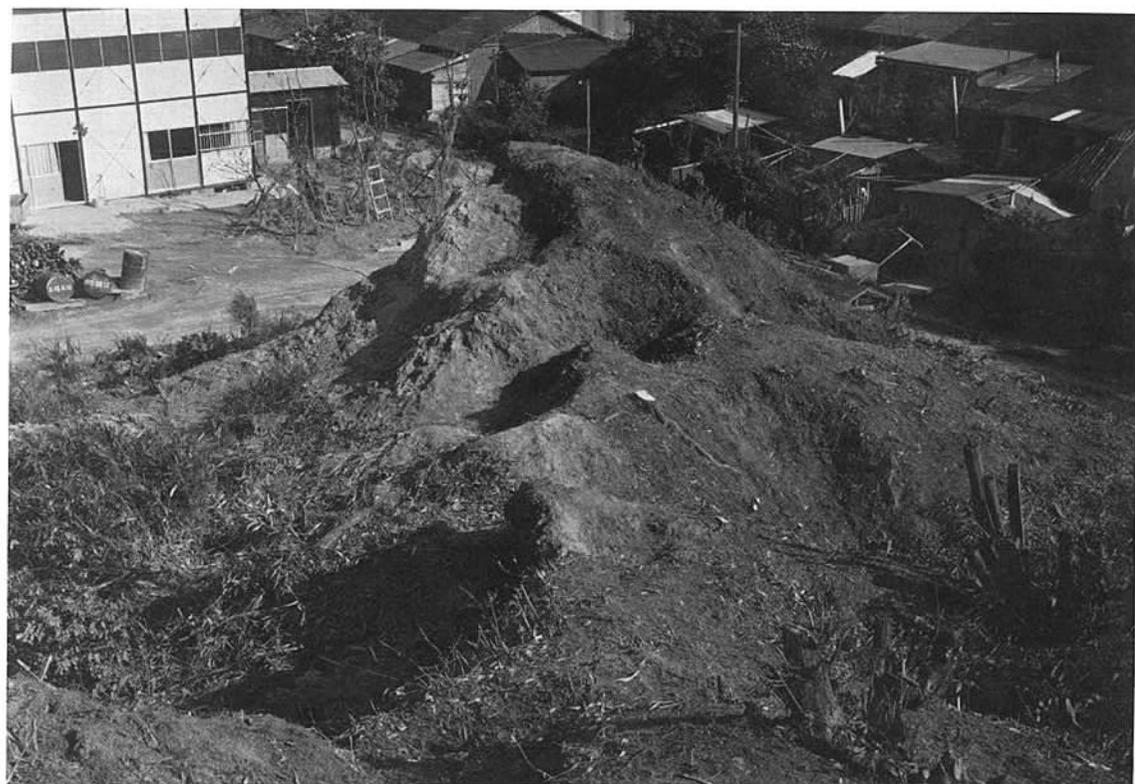
その他の遺物 (手づくね土器)



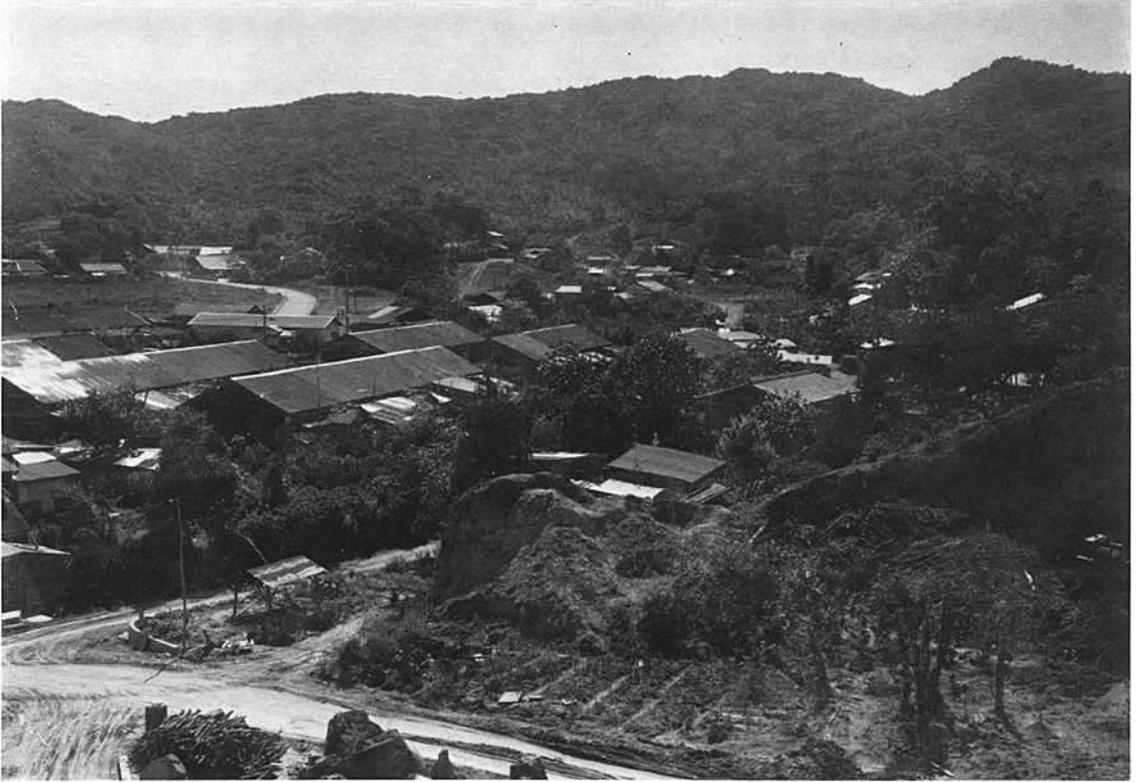
旭古墳群発掘後の状況 番号は1号・2号を表示する



旭 1・2 号墳遠景



旭 1 号墳全景



旭 1 号 墳 遠 景



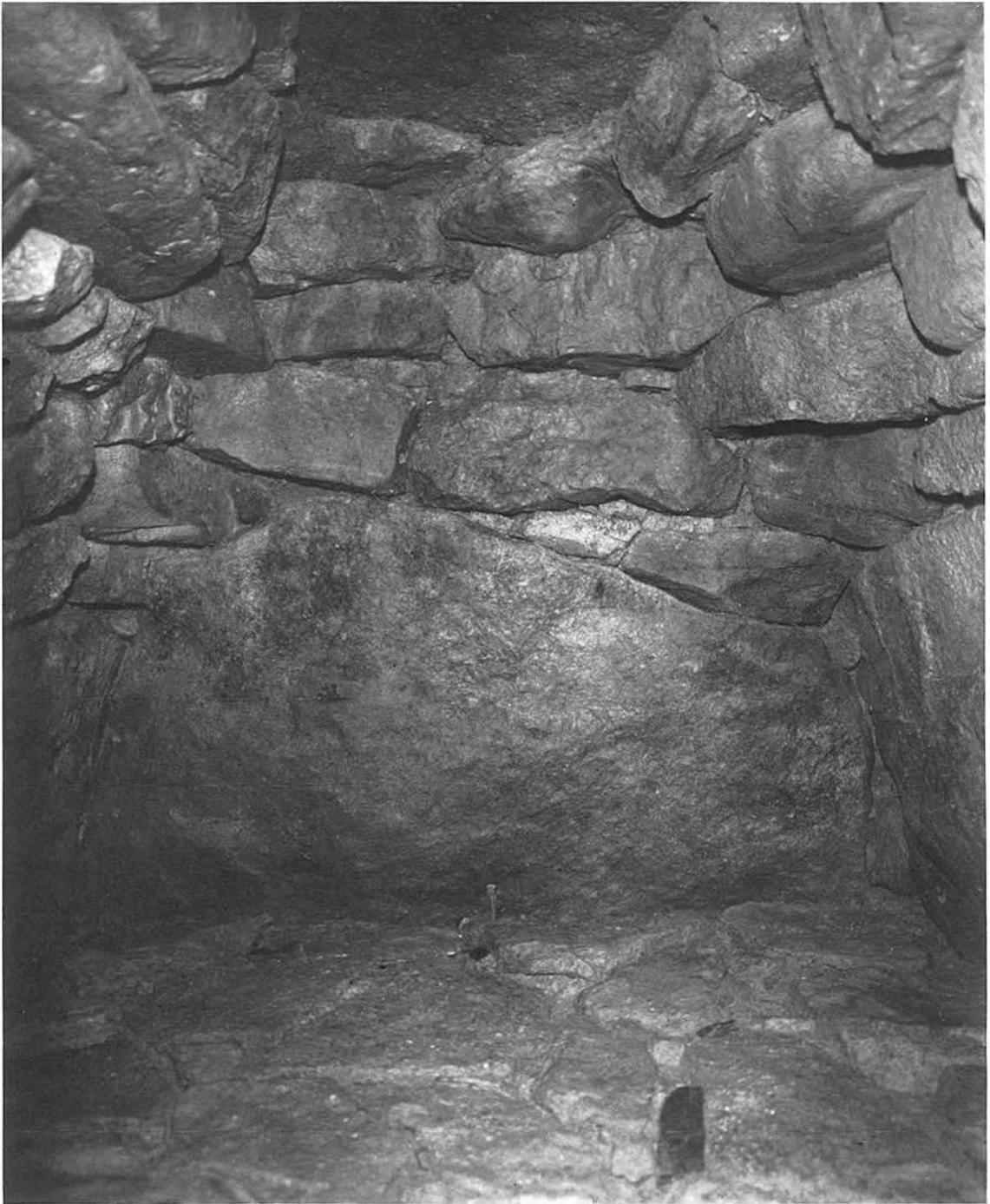
旭 2 号 墳 全 景



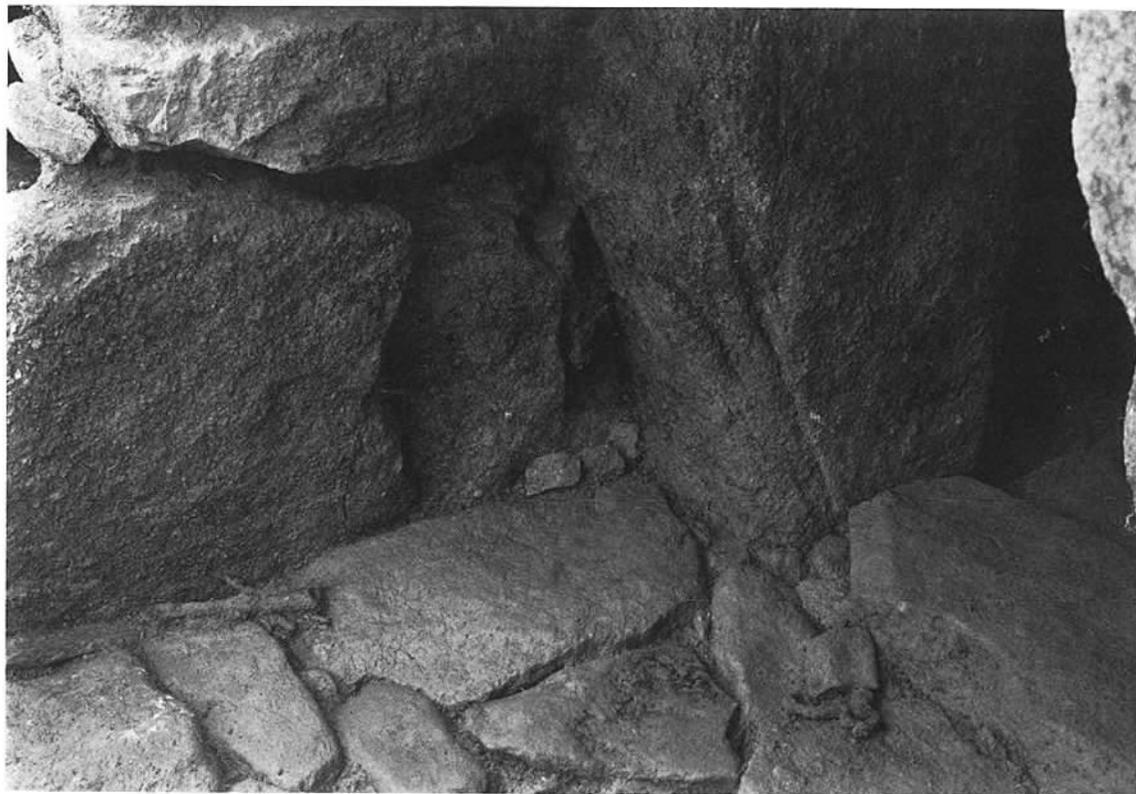
旭1号墳石室入口



旭1号墳石室(東から)



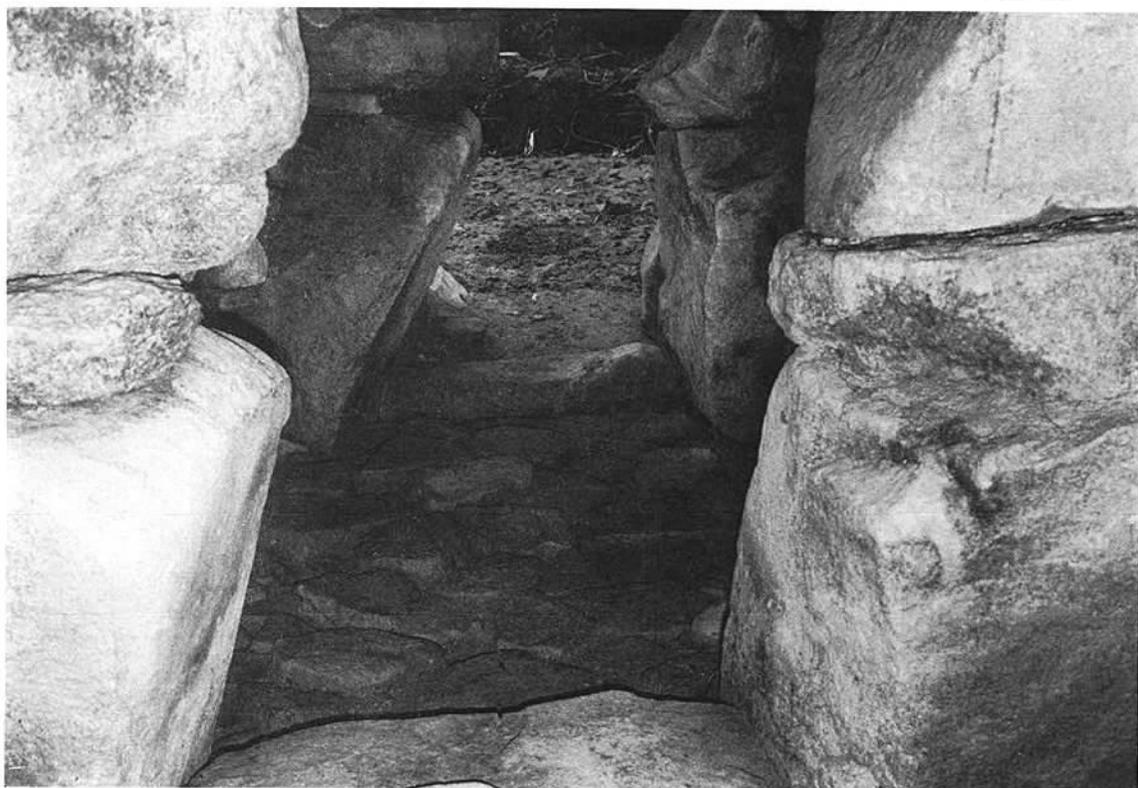
旭 1 号 墳 後 室



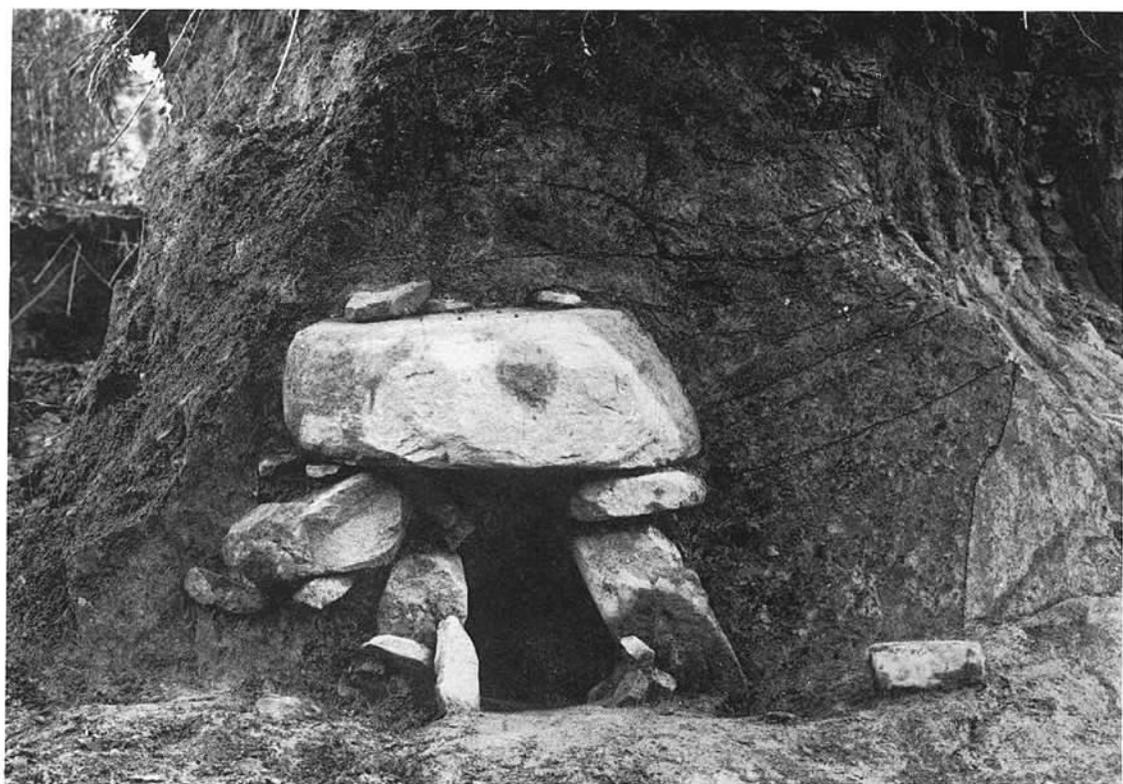
旭 1 号墳遺物出土状況



旭 1 号墳遺物出土状況



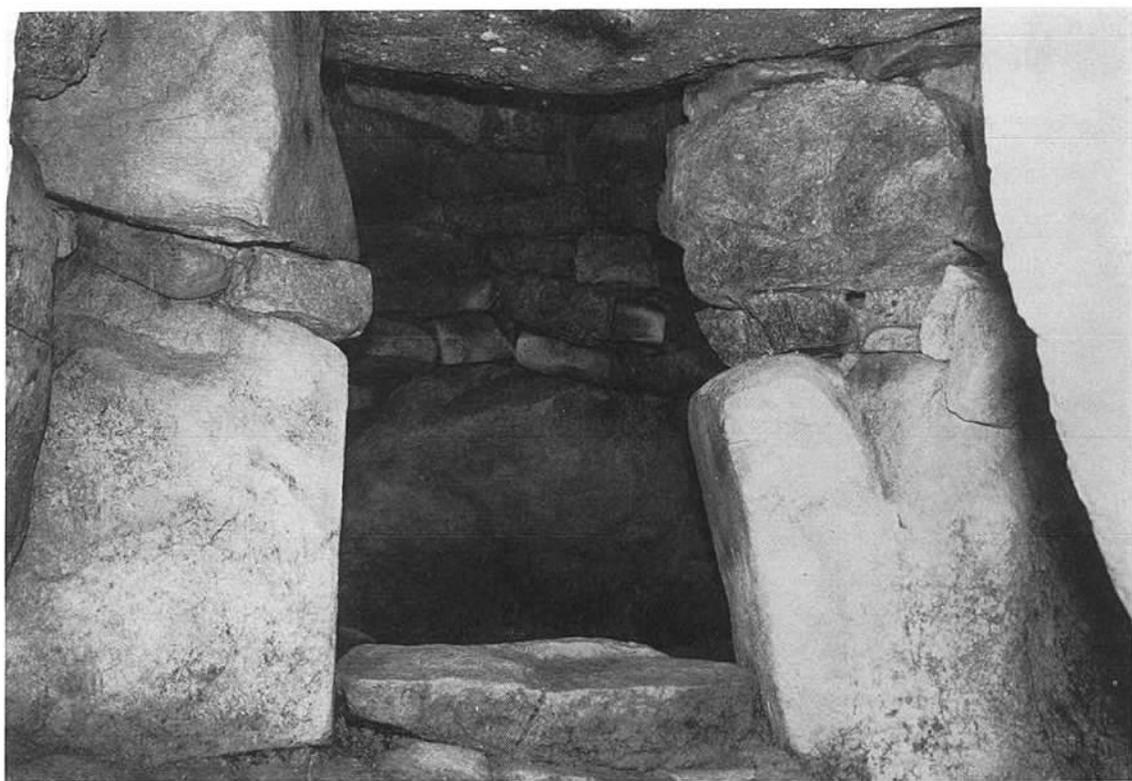
旭2号墳前室入口（後室から）



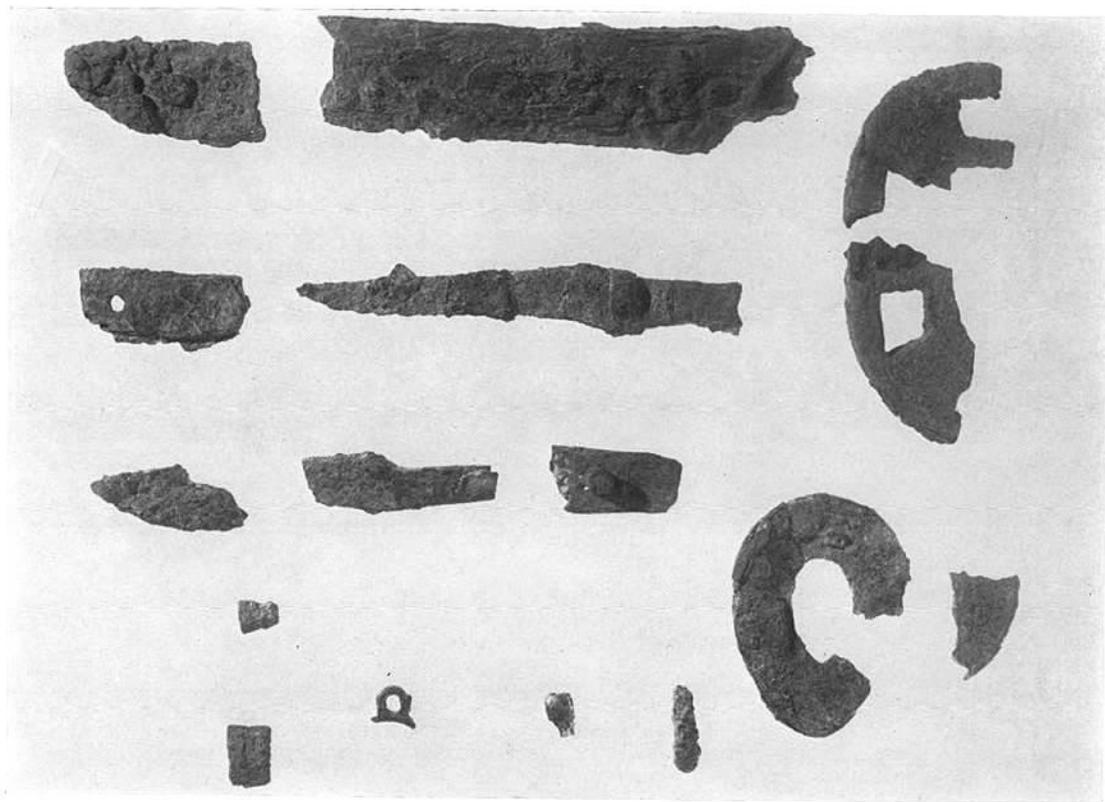
旭2号墳石室入口



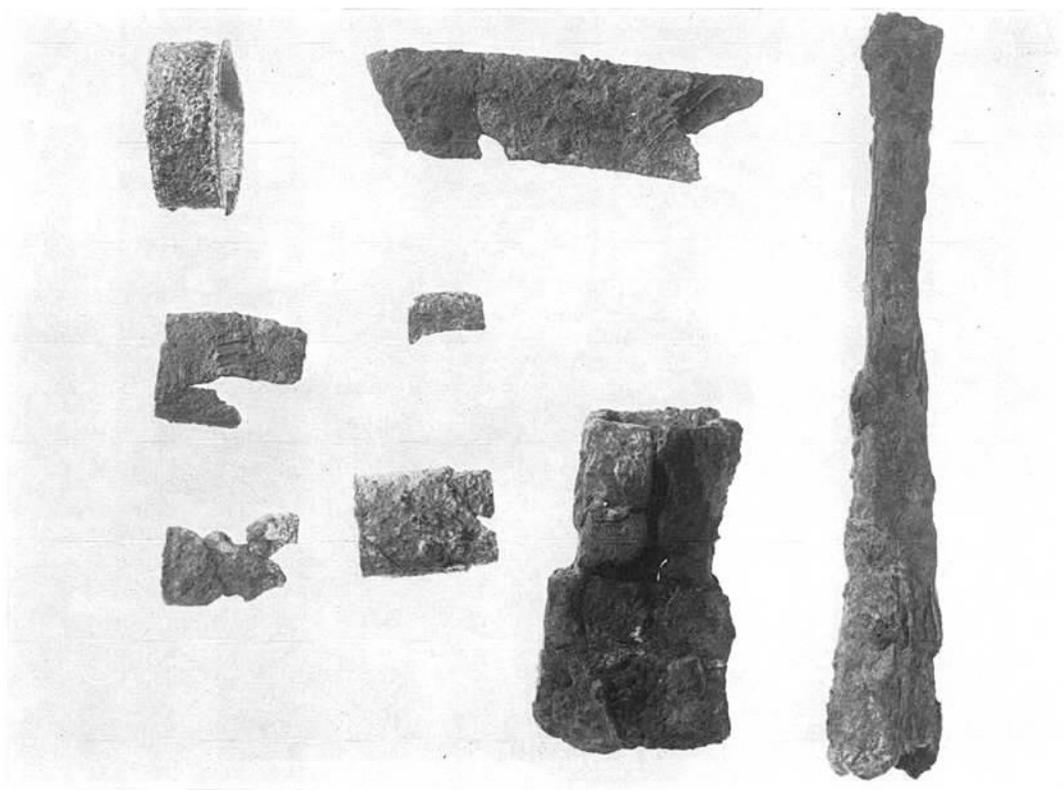
旭 2 号 墳 奥 壁



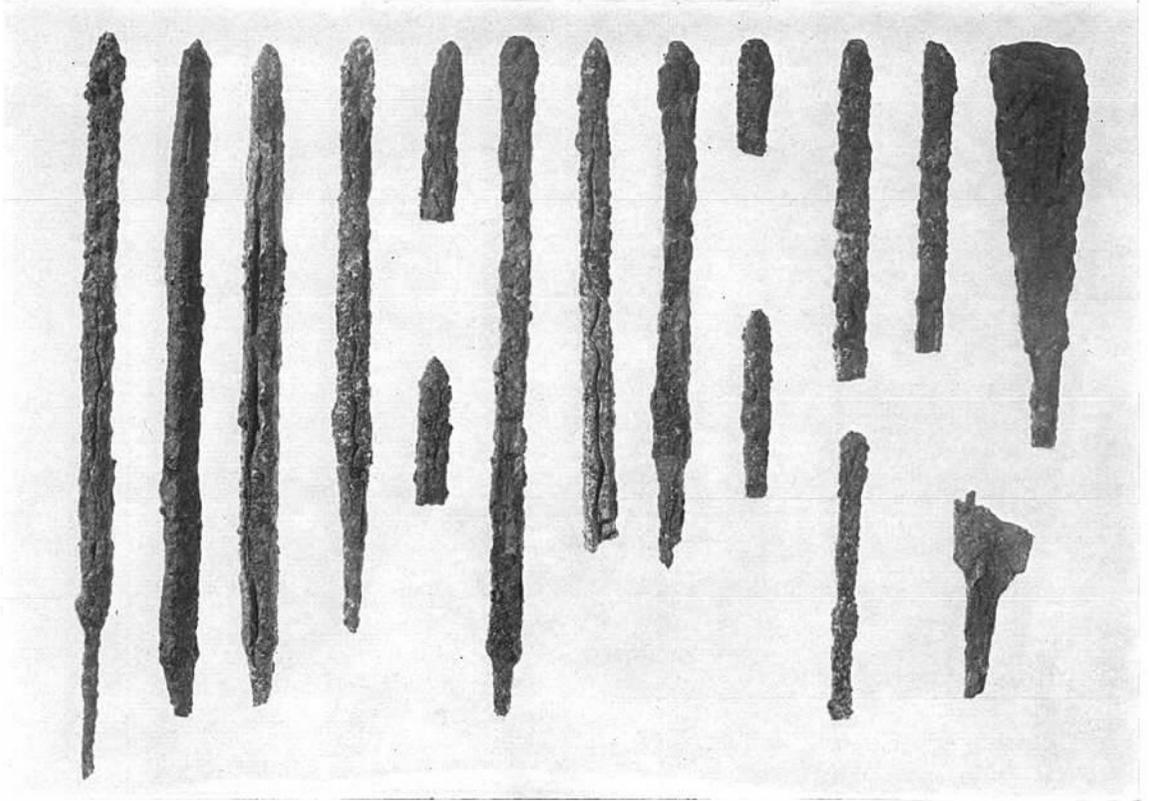
旭 2 号 墳 後 室 入 口



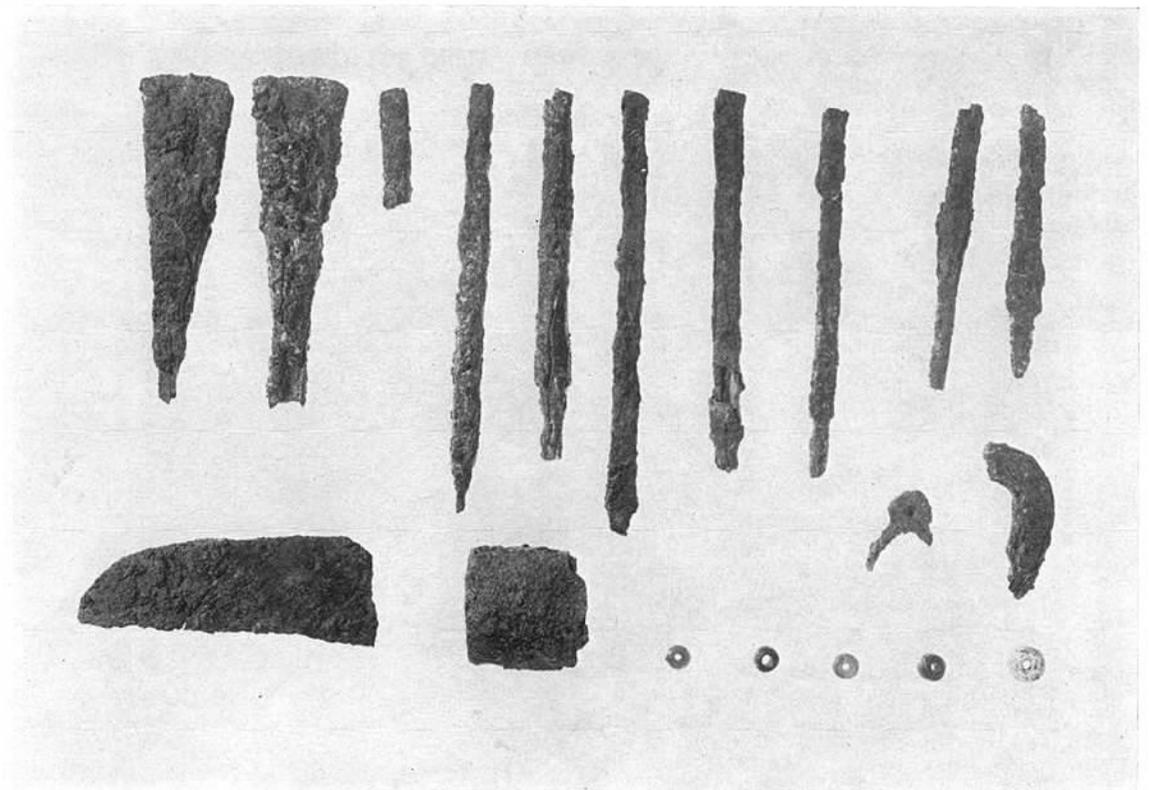
旭 1 号墳出土鉄器



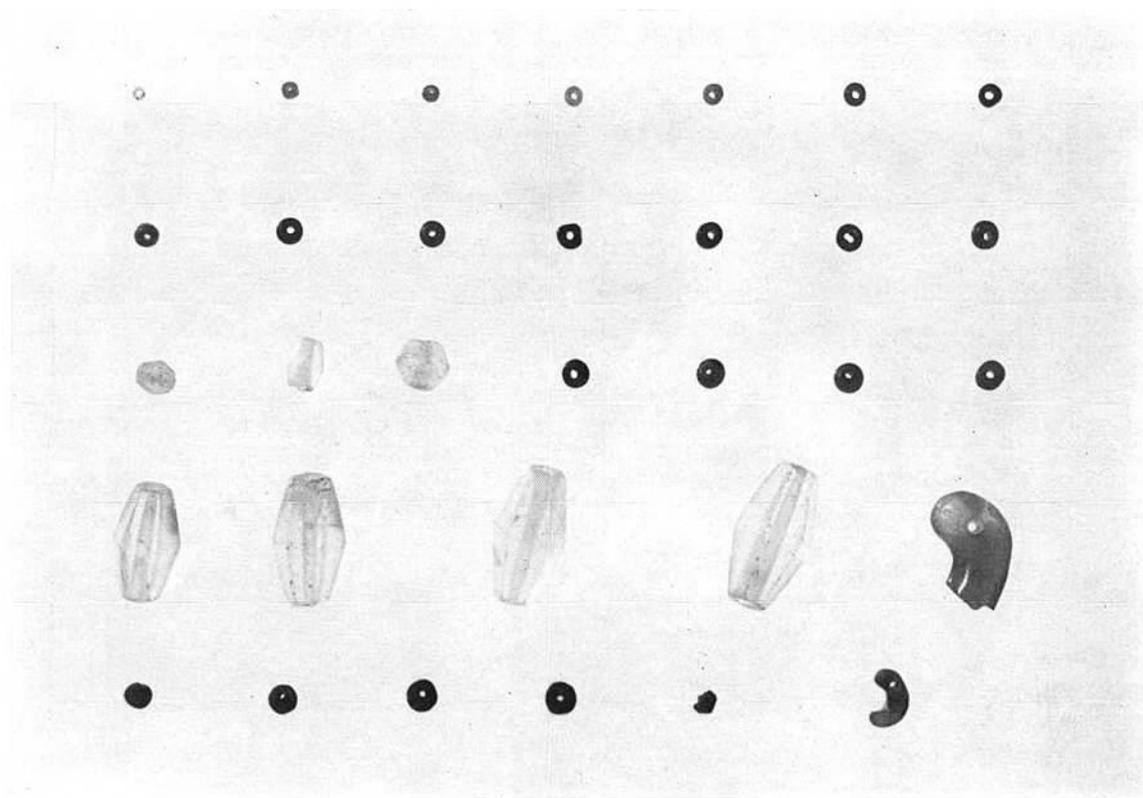
旭 1 号墳出土鉄器



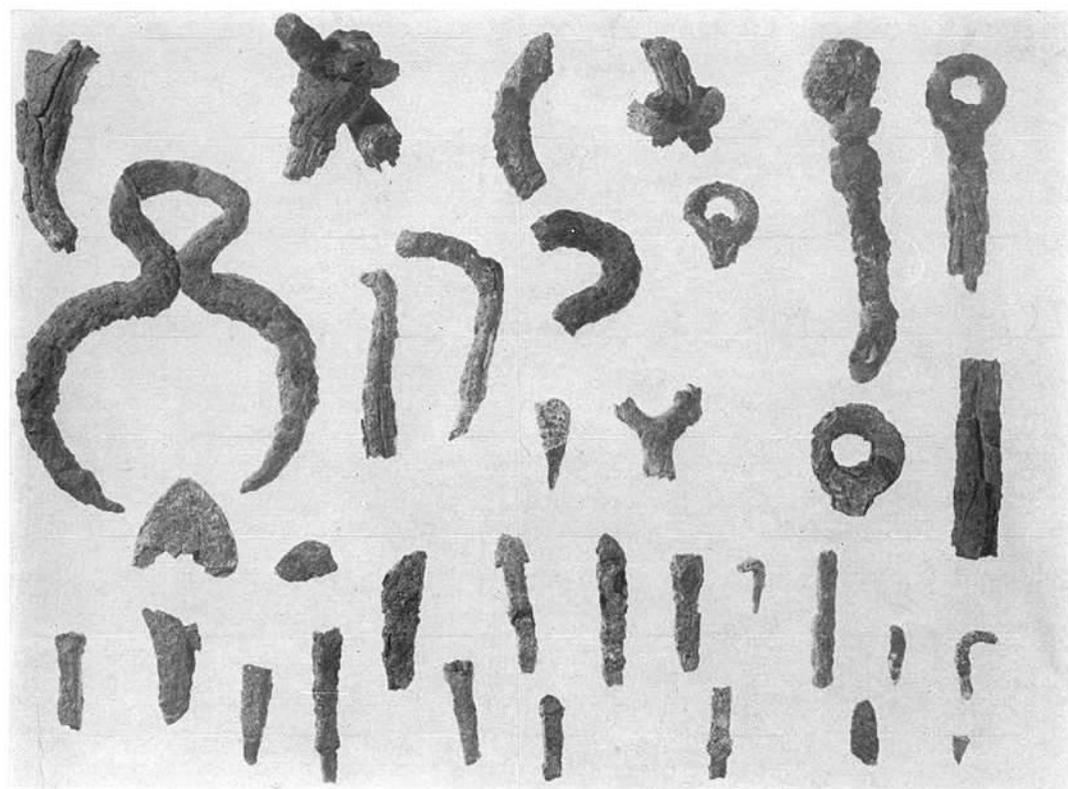
旭 2 号墳出土鉄器



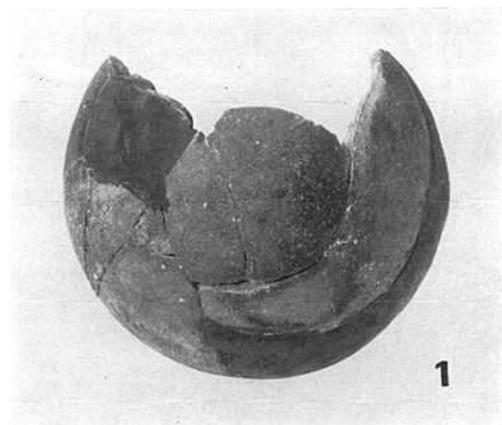
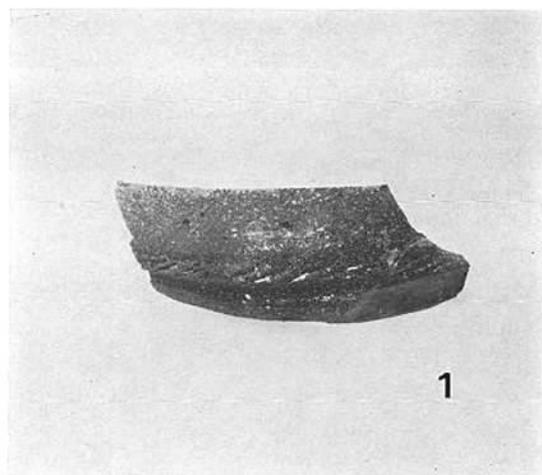
旭 2 号墳出土鉄器・装身具



旭 1 号墳出土装身具



旭 1 号墳出土鉄器



旭1・2号墳出土須恵器（番号は古墳号数）

九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 一XIII一

昭和52年3月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡市中央区西中洲6番29号

印刷 正光印刷株式会社
福岡市中央区赤坂1丁目2の21